歴史群像シリーズ

【決定版】図説・戦国合戦集

復元イラストでつづる詳細クロニクル

Gakken

カバー中央／『川中島合戦図屏風』（ミュージアム中仙道蔵）
左上・右下／伊藤展安画

【決定版】

図説・戦国合戦集

復元イラストでつづる詳細クロニクル

歴史群像シリーズ特別編集

【決定版】図説・戦国合戦集

発行 株式会社 学習研究社

学研

歴史群像シリーズ特別編集

【決定版】図説・戦国合戦集

学研

ISBN4-05-602508-8

C9421 ¥1900E

9784056025088

雑誌69611-72
Ⓗロングセラー
Gコード 49-16231

定価：本体1,900円
※税が別に加算されます。

1929421019004

【決定版】

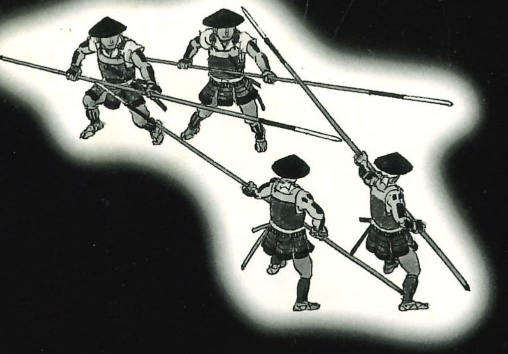
図説・戦国合戦集

歴史群像シリーズ

Gakken

歴史群像シリーズ特別編集

【決定版】図説・戦国合戦集



鳥瞰・大坂冬の陣

監修／跡部信（大阪城天守閣学芸員）　イラスト／黒澤達矢

イラストは慶長19年（1614）12月６日、家康が茶臼山に陣を移して以降の冬の陣の様子を、西方から鳥瞰したものである。大坂城が築かれた上町台地は、天満川畔を北端にして画面右手の天王寺方面へ続いており、町屋が多く築かれた船場のあたりで画面手前に向かって一段下がる形状を示していた。惣構えの周囲をびっしりと取り囲んで林立したであろう徳川方の軍旗を、籠城兵はどのような思いで眺めたのだろうか。

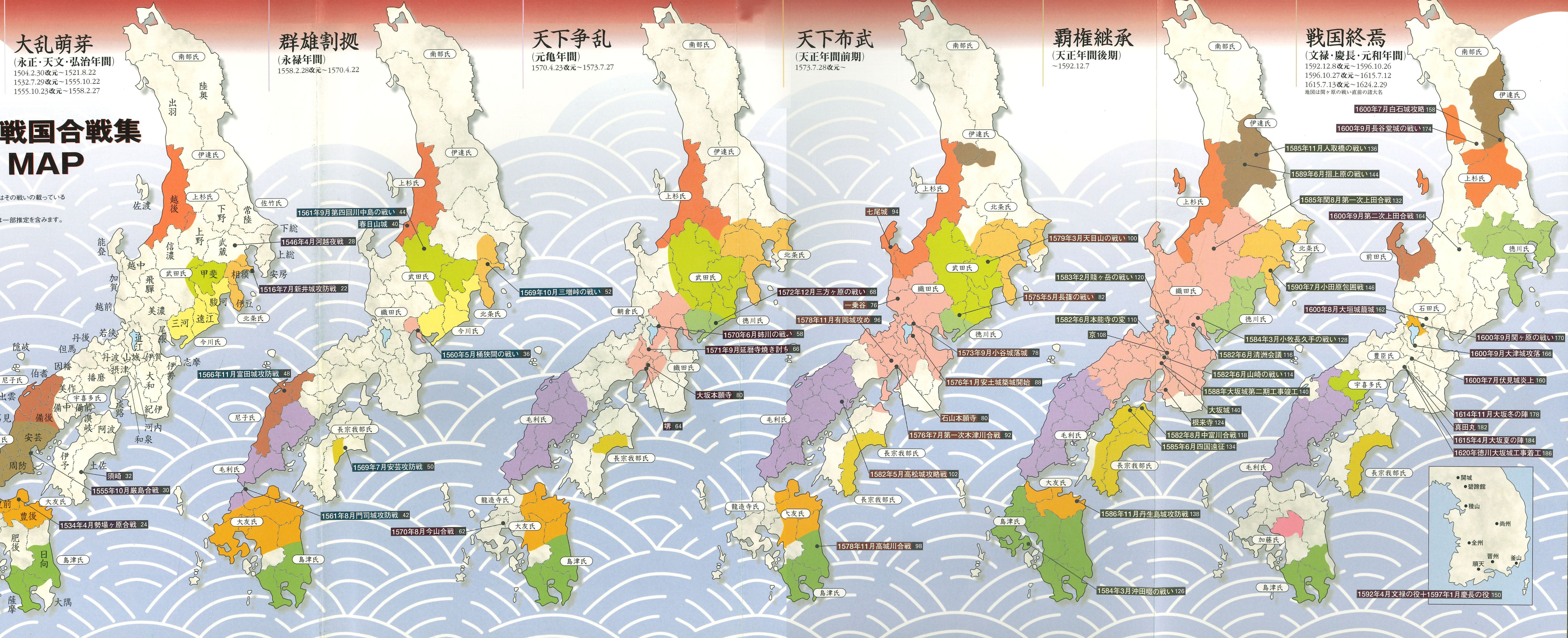
①紀州街道②茶臼山③四天王寺④奈良街道⑤岡山（御勝山）⑥真田丸⑦猫間川⑧平野川⑨大和川⑩生駒山系⑪京街道⑫京橋⑬備前島⑭淀川⑮天満橋⑯天満川⑰天満寺町⑱天満堀川⑲難波橋⑳中之島㉑船場㉒西横堀㉓阿波座堀㉔東横堀㉕高麗橋㉖本町橋

①徳川家康軍②徳川秀忠軍③南部利直隊④前田利常隊⑤井伊直孝隊⑥松平忠直隊⑦藤堂高虎隊⑧伊達政宗隊⑨毛利秀就隊⑩浅野長晟隊⑪山内忠義隊⑫松平忠明隊⑬蜂須賀至鎮隊⑭鍋島勝茂隊⑮池田忠継隊⑯立花宗茂隊⑰本多忠政隊⑱池田利隆隊⑲加藤明成隊⑳松平康重隊㉑木下延俊らの隊㉒竹中重門らの隊㉓真田信吉らの隊㉔上杉景勝隊㉕堀尾忠晴らの隊㉖松平重綱らの隊㉗酒井家次隊（武将の名称は一部省略）

図説戦国合戦集
目次 MAP

*戦いのあとの数字はその戦いの載っているページです。

*また、版図の領域は一部推定を含みます。



鳥瞰・川中島

監修／岡澤由往（長野市史編纂委員）　イラスト／黒澤達矢

イラストは永禄4年（1561）9月10日早朝、信濃・善光寺平において、武田・上杉両軍が激突するさまを描く。信玄の軍に襲いかかる謙信の「車懸りの陣」。さらに千曲川を迂回渡河した武田軍別働隊の突入により、戦いはいっそうの激しさを増した。この戦いは、5度に及んだという川中島の戦いのうち第4回にあたるもので最も激戦とされ、信玄の弟・左馬介信繁は討死、嫡男・義信は戦傷を負うなど、双方おびただしい死傷者を出すほどの文字通りの死闘だったと伝えられる。しかし勝利がいずれに帰したのかは不詳であり、翻っていえば、勝敗の判断がつきかねるほどの乱戦、激闘だったともいえるだろう。戦国史上、最も名高い決戦の一つに挙げられる川中島合戦。だが、謙信の布陣や信玄・謙信両雄の企図など、未だ明らかでない部分も多い。

①岩菅山②東館山③焼額山④竜王山⑤尼厳城⑥海津城⑦妻女山⑧高社山⑨斑尾山⑩善光寺⑪大峰山⑫葛山⑬旭山⑭富士ノ塔山⑮茶臼山⑯飯縄山⑰黒姫山⑱妙高山

①東条②西条③清野④土口⑤雨宮⑥横田⑦岩野⑧東福寺⑨薬師堂⑩八幡原⑪真島⑫牧島⑬牛島⑭綿内⑮須坂⑯中野⑰小布施⑱大豆島⑲長沼⑳飯山㉑大倉㉒丹波島㉓御厨㉔会㉕篠ノ井㉖五明㉗岡田㉘今井㉙今里㉚小松原

鳥瞰・関ヶ原

イラスト＝黒澤達矢

イラストは慶長５年(1600) ９月15日、午前８時頃、開戦直前の関ヶ原主戦場を南方より俯瞰したものである。左上(北西方向)に標高1377mの伊吹山の頂を望み、中央の関ヶ原の地に東西両軍が対峙し、中山道(東山道)が横断している。右下の山塊は南宮山の西半分で、毛利秀元や長宗我部盛親など南宮山東麓に布陣した軍勢はこの絵では見えない。

①伊吹山 ②藤川村 ③岩倉山 ④城山 ⑤池寺池 ⑥北国脇往還(北国街道) ⑦黒血川 ⑧藤川(藤古川) ⑨寺谷川(梨木川) ⑩十九女池 ⑪中山道(東山道) ⑫相川 ⑬鳥頭坂 ⑭伊勢街道(牧田街道) ⑮南宮山 ⑯伊吹 ⑰大石村

①笹尾山・石田三成陣所 ②島津義弘・豊久陣所 ③北天満山・小西行長陣所 ④南天満山・宇喜多秀家陣所 ⑤藤川の台・大谷吉継ほか陣所 ⑥大谷吉勝・木下頼継陣所 ⑦赤座直保・小川祐忠・朽木元綱・脇坂安治陣所 ⑧松尾山城・小早川秀秋陣所

①黒田長政軍 ②細川忠興軍ほか東軍先鋒 ③福島正則軍 ④京極高知・藤堂高虎軍 ⑤井伊直政・松平忠吉軍ほか東軍 ⑥本多忠勝軍 ⑦桃配山・徳川家康本陣 ⑧野上・有馬豊氏軍 ⑨山内一豊軍 ⑩浅野幸長軍

歴史群像シリーズ特別編集

【決定版】図説・戦国合戦集

【決定版】図説・戦国合戦集／目次

[折込1] 川中島の戦い　武田信玄×上杉謙信……監修＝岡澤由往　1
[折込2] 関ヶ原の戦い　東軍×西軍……5
[折込3] 大坂冬の陣　徳川家康・秀忠×豊臣秀頼……監修＝跡部 信　9
[折込4] 地図目次……13

【永正／天文／弘治】

1516 永正十三年七月　新井城攻防戦　北条早雲×三浦義同・義意……文＝小和田哲男　22
1534 天文三年四月　勢場ヶ原合戦　大友義鑑×大内義隆……文＝矢野東鐵雄／イラスト監修＝伊澤昭二　24
1546 天文十五年四月　河越の夜戦　北条氏康×足利晴氏・上杉憲政ほか……監修＝小泉 功　28
1555 天文二十四年十月　厳島合戦　毛利元就×陶晴賢……本文監修＝森本 繁　30
[コラム] 戦国の実相❶　北条軍役の実際……監修・文＝下山治久　26
[コラム] 戦国の風景①　須崎……監修・文＝下村 效　32
[コラム] 戦国の実相❷　弓矢……監修・文＝森 俊男　34

【永禄】

1560 永禄三年五月　桶狭間の戦い　織田信長×今川義元……文＝谷口克広　36
1561 永禄四年八月　門司城攻防戦　毛利元就大友義鎮(宗麟)……本文監修＝森本 繁　42
1561 永禄四年九月　川中島の戦い(第四回)　武田信玄×上杉謙信……文＝谷口克広　44
1566 永禄九年十一月　富田城攻防戦　毛利元就×尼子義久……本文監修＝森本 繁　48
1569 永禄十二年七月　安芸攻防戦　長宗我部元親×安芸国虎……監修＝広谷喜重郎　50
1569 永禄十二年十月　三増峠の戦い　武田信玄×北条氏照・氏邦……52
[コラム] 戦国の風景②　春日山城……監修・文＝水澤幸一　40
[コラム] 戦国の実相❸　兵……54

【元亀】

1570 元亀元年六月　姉川の戦い　織田・徳川連合軍×朝倉・浅井連合軍……文＝谷口克広　58
1570 元亀元年八月　今山合戦　龍造寺隆信×大友宗麟……文＝工藤章興　62
1571 元亀二年九月　延暦寺焼き討ち　織田信長×比叡山僧兵……監修・文＝兼康保明　66
1572 元亀三年十二月　三方ヶ原の戦い　武田信玄×徳川家康……文＝谷口克広　68
[コラム] 戦国の風景③　堺……監修・文＝吉田 豊　64
[コラム] 戦国の実相❹　工兵……文＝大山 格　72

【天正前半】

1573 天正元年八月　浅井父子自刃　織田信長×浅井久政・長政……イラスト監修＝中井 均　78
1575 天正三年五月　長篠の戦い　織田信長・徳川家康×武田勝頼……文＝谷口克広　82
1576 天正四年一月　安土城築城開始　織田信長……監修・文＝秋田裕毅　88
1576 天正四年七月　第一次木津川合戦　毛利水軍×織田水軍……監修・文＝石井謙治　92
1578 天正六年十一月　有岡城攻め　織田信長×荒木村重……監修・文＝小長谷正治　96
1578 天正六年十一月　高城川(耳川)合戦　島津義久×大友軍……98
1582 天正十年三月　天目山の戦い　織田軍×武田勝頼……イラスト監修＝中田正光　100
1582 天正十年四月　高松城攻略戦　羽柴秀吉×清水宗治(毛利臣)……102
[コラム] 戦国の風景④　一乗谷……監修・イラスト内文＝青木豊明／文＝小野正敏　76
[コラム] 戦国の風景⑤　大坂本願寺……監修・文＝仁木 宏　80
[コラム] 戦国の実相❺　鉄炮……86
[コラム] 戦国の風景⑥　安土城天守……監修・文＝宮上茂隆　90
[コラム] 戦国の風景⑦　七尾城……監修・文＝善端 直　94
[コラム] 戦国の実相❻　軍船……監修＝石井謙治　104

【天正後半】

1582 天正十年六月　本能寺の変　明智光秀×織田信長……文＝谷口克広　110
1582 天正十年六月　山崎の戦い　羽柴秀吉×明智光秀……文＝桐野作人　114
1582 天正十年六月　清洲会議　織田家家臣団……イラスト監修＝千田嘉博　116
1582 天正十年八月〜九月　中富川の戦い　長宗我部元親×三好(十河)存保……イラスト監修＝本田 昇　118
1583 天正十一年三月〜四月　賤ヶ岳の戦い　羽柴秀吉×柴田勝家・佐久間盛政……文＝小和田哲男　120
1584 天正十二年三月　沖田畷の戦い　島津家久×龍造寺隆信……126
1584 天正十二年三月　小牧・長久手の戦い　織田信雄・徳川家康×羽柴秀吉……文＝小和田哲男　128
1585 天正十三年閏八月〜十一月　第一次上田合戦　真田昌幸×徳川軍……132
1585 天正十三年六月〜八月　四国遠征　秀吉連合軍×長宗我部元親……134
1585 天正十三年十一月　人取橋の戦い　伊達政宗×佐竹義重ほか……136
1586 天正十四年十月　丹生島城攻防戦　大友軍×島津軍……イラスト監修＝菊田 徹　138

1588 天正十六年 大坂城第二期工事竣工 …… 監修＝宮上茂隆 140
1589 天正十七年六月 摺上原の戦い 伊達政宗×芦名義広 …… 144
1590 天正十八年四月〜七月 小田原包囲戦 豊臣秀吉×北条氏政・氏直 …… 146
［コラム］戦国の風景⑧ 京 …… 監修＝高橋康夫 108
［コラム］戦国の風景⑨ 紀州根来寺 …… 文＝鈴木眞哉／イラスト監修＝辻林 浩 124
［コラム］戦国の風景⑩ 大坂城 …… 監修＝宮上茂隆 142
［コラム］戦国の実相❼ 民衆 …… 説明文監修＝北川 央 148

【文禄／慶長／元和】

1592 天正二十年四月／慶長三年一月 文禄・慶長の役 明・朝鮮軍×日本軍 …… 文＝小和田哲男 150
1600 慶長五年七月 白石城攻略 伊達政宗×甘糟虎氏（上杉臣） …… 文＝工藤章興 158
1600 慶長五年七月 伏見城炎上 東軍（徳川方）×西軍（石田方） …… 監修・文＝中井 均 160
1600 慶長五年八月〜九月 大垣城籠城 東軍（徳川方）×西軍（石田方） …… 監修・文＝中井 均 162
1600 慶長五年九月 第二次上田合戦 真田昌幸・幸村×徳川秀忠 …… 164
1600 慶長五年九月 大津城攻落 東軍（徳川方）×西軍（石田方） …… 監修・文＝中井 均 166
1600 慶長五年九月 関ヶ原の戦い 東軍（徳川方）×西軍（石田方） …… 文＝小和田哲男 170
1600 慶長五年九月〜十月 長谷堂の戦い 直江兼続（上杉臣）×最上・伊達連合軍 …… 監修・文＝誉田慶信 174
1614 慶長十九年十一月〜十二月 大坂冬の陣 徳川家康・秀忠×豊臣秀頼 …… 文＝小和田哲男／イラスト監修＝千田嘉博＋中井 均 178
1615 慶長二十年四月 大坂夏の陣 徳川家康・秀忠×豊臣秀頼 …… 184
1620 元和六年 徳川大坂城工事着工 …… 監修・文＝松岡利郎 186
［コラム］戦国の実相❽ 井伊の赤備え …… 監修・文＝中村達夫 168
［コラム］戦国の実相❾ 大筒 …… 監修・文＝千田嘉博 176
［コラム］戦国の風景⑪ 真田丸 …… 182

年表 …… 188
協力者一覧 …… 191
奥付 …… 192

大乱萌芽

永正（1504.2.30改元〜1521.8.22）
天文（1532.7.29改元〜1555.10.22）
弘治（1555.10.23改元〜1558.2.27）

新井城攻防戦
勢場ヶ原合戦
河越の夜戦
厳島合戦

北条軍役の実際
須崎
弓矢

〈執筆・監修者〉
小和田哲男（本文執筆） 22
矢野東鐵雄（本文執筆） 24
伊澤昭二（イラスト監修） 24
下山治久（本文執筆＋イラスト監修） 26
小泉 功（監修） 28
森本 繁（本文監修） 30
下村 效（本文執筆＋イラスト監修） 32
森 俊男（本文執筆＋イラスト監修） 34

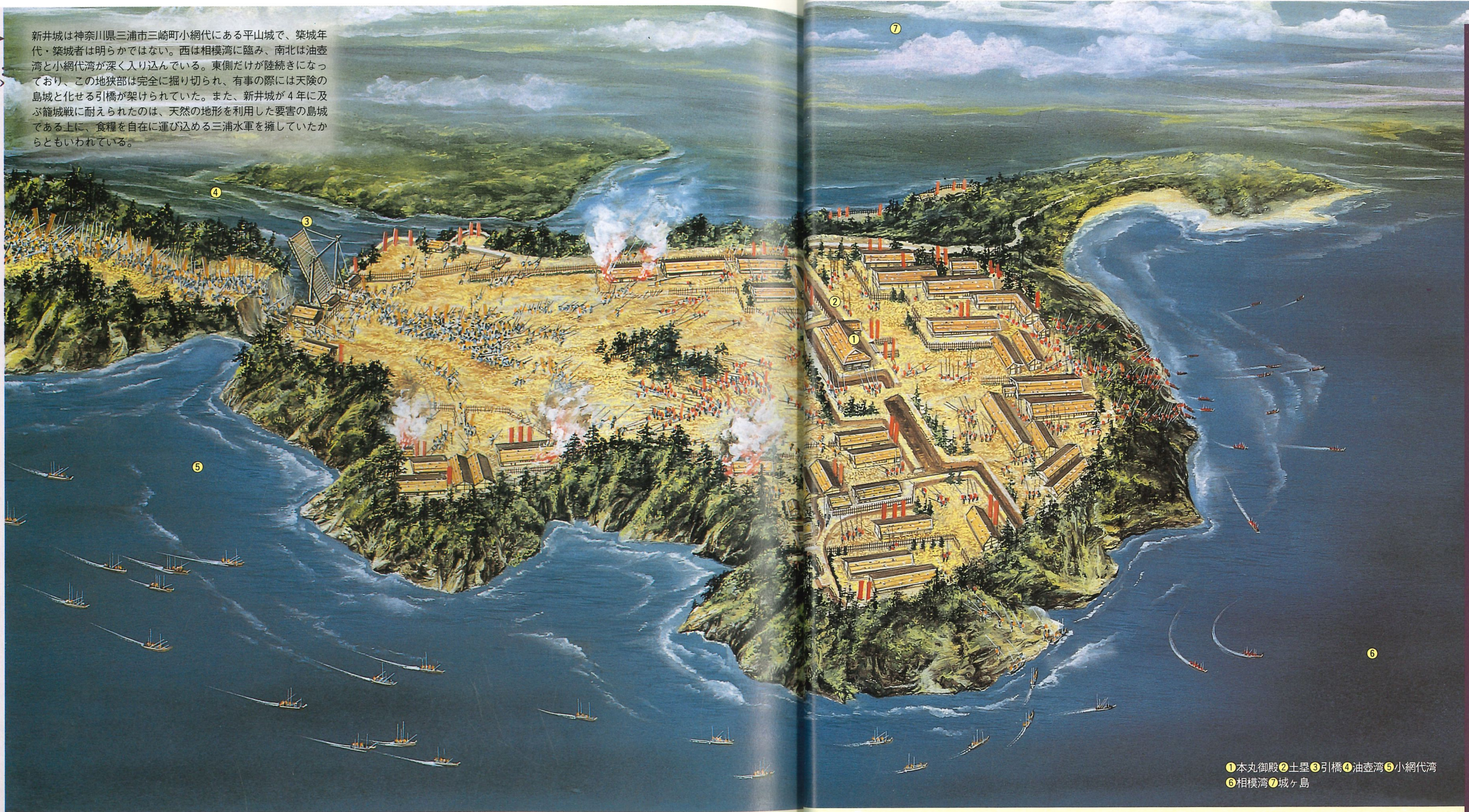
〈イラストレーター〉
大川 明 22
谷井建三 24・30
藤井康文 28
伊藤展安 32
大塚洋一郎 34

新井城攻防戦

永正十三年七月［1516］▽神奈川県

名族・三浦氏を滅ぼした北条早雲最後の戦い

北条早雲 ✕ 三浦義同・義意



新井城は神奈川県三浦市三崎町小網代にある平山城で、築城年代・築城者は明らかではない。西は相模湾に臨み、南北は油壺湾と小網代湾が深く入り込んでいる。東側だけが陸続きになっており、この地狭部は完全に掘り切られ、有事の際には天険の島城と化せる引橋が架けられていた。また、新井城が4年に及ぶ籠城戦に耐えられたのは、天然の地形を利用した要害の島城である上に、食糧を自在に運び込める三浦水軍を擁していたからともいわれている。

①本丸御殿②土塁③引橋④油壺湾⑤小網代湾⑥相模湾⑦城ヶ島

永正九年（一五一二）八月、相模の岡崎城を北条早雲の軍勢に落とされた三浦義同・義意父子は、三浦郡の住吉城に逃れ、さらにそこも支えることができないとわかると、新井城へ逃れて籠城した。

しかし、早雲はこれを無理には攻めていない。新井城が力攻めをしても容易に落ちそうもない要害堅固な城だったからである。

うかつに手を出せないでいた早雲は、足がかりのために玉縄城を築いて多数の軍兵を入れ、新井城への兵糧移入を妨害する作戦に出た。翌永正十年は過ぎ、同十一年も大きな変化はなく、ようやく同十三年になって新井城の兵糧は欠乏しはじめた。

「新井城危うし！」の報に、それまでなりをひそめていた扇谷上杉朝興が早雲の背後を窺うべく、新井城の後詰に出てきた。

早雲はこの動きを見逃さなかった。城への押さえに二〇〇〇の兵を残し、四～五〇〇〇の主力を率いて城外へ出撃したのである。この激戦は早雲の勝利で終わり、上杉軍は江戸城を目指して敗走していった。早雲は間髪を入れず、反転して新井城攻めにかかった。後詰の兵が敗走し、がっくりきているところを攻めるわけで、このあたり、早雲の敵の心理を捉えた作戦は、実に見事である。

攻めかかられた新井城では、上総へ逃れて再起を図ろうとする意見も出た。しかし義同は拒絶した。ここが死に場所と考えたのであろう。城中では永正十三年（一五一六）七月十日の夜半から酒盛が始まった。

翌十一日辰の刻（午前八時）、新井城の城門が開かれ、酒宴が終わった城兵が一斉に打って出た。ここにおいて早雲の軍勢と激しい戦いが繰り広げられることとなった。しかし数に優る早雲の軍勢が断然優勢で、まず義同が追いつめられて自害した。残された義意はこのとき二十一歳。羅刹のごとき戦いぶりだったという。早雲の軍勢もこれには恐れ、誰も相手をしないのを見ると、義意は自ら首をかき落とした。

義同・義意父子の自刃により、新井城は落ち、鎌倉以来の名族三浦氏は滅亡した。新井城が落ちたことにより、相模における早雲の敵対勢力はすべて消えた。その意味においても、新井城の戦いは、北条氏にとって記念すべき、また記憶に残る戦いであった。

（小和田哲男・静岡大学教授）

豊前

天文三年四月 [1534] ▽大分県

勢場ケ原合戦

北九州の覇権を賭けた両雄の激突！

大友義鑑 × 大内義隆

Seibagaharu

豊前と豊後の境界を中心とする大友・大内両氏の勢力争いは、各地において長年にわたり続いた。有名な勢場ヶ原の合戦は、遠征の大内軍と迎え撃つ大友軍の間で天文三年（一五三四）四月、豊後国大村山で華々しく展開されたのである。

中国の雄、大内義隆は、陶美作守興房を将として三千余の軍勢で下関を渡り、豊前京都郡を経て宇佐郡糸口原に兵を進め、豊後侵入を図った。この情報に大友義鑑は吉弘石見守氏直、寒田三河守親将を大将とする二千八百余騎で大村山に邀撃させた。

大友軍は大村山に本陣を置き、一〇〇〇騎を山上に配備、豊前・豊後を結ぶ本道の立石峠に田北鑑生・木付親実の軍勢一〇〇〇騎、側道にあたる地蔵峠に志手加賀守泰久・野原対馬守昌久の軍勢八〇〇を布陣して、敵に備えた。これとは別に、大神鎮氏・林鎮治は三〇〇の手勢で鹿鳴越に砦を構えた。

糸口原に駐屯した大内軍は間者を放って大友軍の動向を調べた上、宇佐郡の地頭佐田氏らの意見を入れ、間道の佐田越をして四月六日の早暁、大友軍の背後にあたる勢場ヶ原に到着、裏からの奇襲作戦に出た。

「敵軍天より降れり」と大友軍は仰天したが、早速、広瀬美濃守裕則は立石・地蔵両峠を守る味方を戻し、全軍で敵にあたるよう主将・吉弘石見守に建言したが、氏直は血気にはやり敢然と山を馳せ下って敵陣に突入した。

一方、大内軍はさっと鶴翼の陣に構えて前後左右より少数の大友勢を攻め、矢戦から白兵戦へと壮絶な死闘が展開されたという。陣頭に立った氏直は馬に矢があたり転落、徒歩で戦ったが弓に倒れた。助けようとした寒田三河守、広瀬美濃守も討死、大内軍は凱歌をあげて一息入れた。

本陣潰滅の急報に地蔵・立石両峠を守っていた、地理に通じた約一八〇〇騎の地元山香郷を中心とする地頭・家人の軍は、「弔い合戦」とばかり、各所より神出鬼没の攻撃をかけた。油断していた大内軍は逆転敗北し、杉長門守以下、三五八名（大友軍死者二七三名）が討ち取られ、主将・陶興房も負傷、佐田郷附近で残余の兵を集め、寄藻川沿いに豊後高田方面に退却して、海路中国（山口県）に帰国したという。

（矢野東鐵雄・山香町文化財調査委員長）

（甲冑考証＝伊澤昭二・歴史研究家）

（イラストは、大友軍が逆襲に転じたところをイメージして描いてあります）

Column 戦国の実相 ①

北条 軍役の実際

御馬廻衆・岡本政秀の行軍を再現

岡本八郎左衛門政秀は、小田原城にいた御馬廻衆の一人であり、正月の松かざり奉行や馬足奉行を務めた中級の武士である。政秀の知行(所領)は相模国東部吉岡郷(神奈川県綾瀬市吉岡)であった。彼は吉岡と小田原両方に屋敷をもっていたと思われる。

元亀二年(一五七一)七月、岡本政秀は北条氏政より虎朱印を捺した着到状を与えられた。着到状とは、戦場に引きつれていく侍や足軽の員数や武器、軍装を書き上げたものである。

戦国大名は知行に軍役を課し、侍の員数をしっかりと掌握しようとした。岡本政秀は吉岡で五九貫文の知行を受けていた。これに対する軍役は騎馬武者一人(岡本自身)、徒歩武者四人、足軽一〇人と定められた。騎馬武者である岡本政秀は、一五貫文の身分として馬に乗り、大立者の飾りのついた甲冑を着て、鉄仮面である面防を顔につけ、鎖で編んだ手甲をつける。一番特徴的なのは馬に馬鎧を着させ、金箔を張った金ぴかの馬に乗っていたことである。

Column 行軍隊形

徒歩侍は四人の姓名のある武士で、五貫文の身分であった。軍装は兜に立物をつけ、甲冑に手甲をつけていた。馬に乗れない身分の侍には面防は禁止されていたものと思われる。ついで一〇人の足軽である。五貫文の約半分の身分の二貫四〇〇文である。甲冑はつけず、陣笠と胴丸をつける。先頭の足軽四郎左衛門が大旗を持ち、二番手の源十郎は背中に指物をさしている。ついで、六人の足軽が鑓をかついでおり、長さ二間(約三・六メートル)の長鑓である。戦国大名が発給した着到状は数多いが、この岡本政秀の着到状には、非常にめずらしいことに、行軍の時の行列順序が書いてあり、しかも構成メンバーの全人名がわかるという、まことに貴重なものである。

ただ、不思議なこともある。それはなにかというと、飛び道具が一つも無いことである。弓や鉄炮の二、三挺はあってもおかしくない。織田信長や徳川家康の軍には、元亀年間には、かなり鉄炮隊が入ってきている。小田原城を守る御馬廻衆の一員である岡本政秀の部隊に鉄炮一挺、弓一張の飛び道具がないというのは実に理解に苦しむところである。

『北条氏所領役帳』にも「五拾九貫八百文、東郡吉岡、岡本八郎左衛門」とあり、『北条氏所領役帳』に見える侍のうち、六〇貫文ぐらいの侍であれば一五人前後の侍、足軽を引率していたことになり、想像するだに楽しい。

(下山治久・戦国史研究家)

天文十五年四月［1546］▽埼玉県

河越の夜戦

夜陰に乗じた氏康会心の奇襲

北条氏康 ✕ 足利晴氏・上杉憲政（ほか）

伸張著しい北条氏を叩く。それ以前、内部抗争を繰り返してきた扇ヶ谷（おうぎがやつ）・山内の両上杉氏の思惑は一致した。古河公方足利晴氏も北条氏には脅威を抱いており、両者と手を結んだ。

天文十四年（一五四五）十月、扇ヶ谷上杉朝定・山内上杉憲政（のりまさ）・足利晴氏らは、八万余騎と呼号する連合軍を組織して、河越（かわごえ）城を囲むに至った。足利晴氏は河越城南の砂久保に陣し、山内上杉憲政は入間川（いるまがわ）の対岸、柏原（現狭山市）へ布陣した。

一方、河越城に拠った北条綱成（つなしげ）の兵はわずか三千余騎にしか過ぎず、野戦での勝利など望むべくもなく、ひたすら小田原からの援軍を待つほかに手だてがなかった。

翌天文十五年（一五四六）四月、北条氏康は馬廻衆八〇〇〇を率い、武蔵府中に着陣した。籠城兵が待ちかねた援軍ではあったが、包囲軍八万の前では、いかにも心許ない兵力である。氏康は間者を敵陣に放って情勢を探らせるとともに、敵を撹乱（かくらん）させるため、出撃しては府中へ逃げ帰るという「作業」を続けた。この結果、やがて包囲軍の陣中は氏康を弱敵と侮る風潮に支配されていった。

「頃はよし」と見た氏康は、あらかじめ全軍を四隊にわけ、以下の戦術を徹底させた。すなわち、一隊は遊軍として動かさず、先陣は敵陣深くまっしぐらに進む。第二陣はそれに呼応して突入し、敵背後で先陣と合流する。第三陣も間髪入れず敵に襲いかかり、それと同時に第一・二陣は「大返しに取って返し」、八方に鬨（とき）を挙げ、縦横に敵を斬るというものだった。また、敵の首は部将クラスを除いて打ち捨てさせ、合い印は白と定めて、たとえ敵であっても白い着衣の者は斬ってはならない、とした（『関八州古戦録』）。

四月二十日子（ね）の刻（午前〇時〜二時頃）、氏康は包囲軍を急襲した。両上杉の旗は瞬く間に崩れ、包囲兵は蜘蛛（くも）の子を散らすように四散した。砂久保の足利晴氏の陣では、これを迎え撃とうとした。だが、そのとき河越城の城門が開き、一切に城兵三千余騎が飛び出してきたため、晴氏の兵も算を乱して逃げ散った。

この日、最も激戦だったのは、城の北、東明寺附近である。扇ヶ谷上杉朝定は乱戦の中で戦死し、山内上杉憲政は上野平井城へ敗走した。足利晴氏も同様、下総古河へ撤退している。この日の戦いで、古河公方と両上杉陣営は一万三千余人の死者を出したという。

これ以後、関東の覇権は、両上杉氏ら旧勢力から、北条氏へと移ってゆくことになる。

①河越城：北条綱成②城下町③東明寺④砂久保：足利晴氏陣⑤柏原：山内上杉憲政陣⑥入間川⑦北条氏康軍

地形及び包囲陣の概要などを示すため、イラストは夜の設定ではなく、あえて昼の設定にしてある。砂久保や柏原には、包囲陣が堀を穿ち、土塁を築くなどしていた遺構が認められる。ただし、柏原の陣は画面内の距離を考え、構築物を描いていない。

（イラスト監修＝小泉功・川越市文化財保護審議会会長）

安芸

厳島合戦

天文二十四年十月 [1555]▷広島県

必勝を期した背水の陣が五倍の大軍を撃破！

毛利元就 × 陶晴賢

天文二十三年（一五五四）五月十二日、毛利元就は陶晴賢との対決を内外に*闡明した。これ以前、陶晴賢は主筋の大内義隆を弑逆しており、もと大内氏の部将だった元就には大義名分がある。同日、元就は麾下の将兵に出陣を命じ、自らも陣頭に立って、翌十二日に佐東郡の銀山城を落とし、ついで佐西郡の己斐城を攻略した。南下した毛利軍は神領郡廿日市で桜尾城を占領し、さらに西進して大野の門山城を乗っ取り、海を渡って厳島を占拠した。

このあと元就は、押し寄せてきた陶軍先鋒隊七千余騎を安芸折敷畑で撃滅し、翌年四月、厳島有ノ浦に宮ノ尾城を築いた。陶軍本隊を厳島におびき寄せるための囮城である。しかもこの城の守将に先日まで敵対していた己斐・新里の両将を任命し、また重臣桂元澄に内通偽装工作をさせ、宮ノ尾城を築いたのは一生の不覚だったなどという偽りの情報を流させた。

それでなくても、陶軍が陸路をとれば途中には毛利軍が屯営する幾多の要害があり、安芸沿海を毛利水軍に封鎖されて、兵站補給が続かなくなる。陶軍の厳島渡海には、軍事的経済的な必然性があった。

この間、元就は決戦を前に尼子氏の新宮党を謀略で内紛をさそい滅ぼし、後顧の憂いを除いて陶軍の厳島渡海を待った。だがせっかく渡海させても、晴賢以下が海上へ逃れては何にもならない。そこで元就は、かねてつながりをもっていた三島（因島・能島・来島）村上水軍に来援を要請した。

このうち能島村上氏は陶晴賢によって厳島の経済的特権を奪われ、周防上関で得ていた海上特権も無視されており、恨み骨髄に達していた。また来島村上氏の通康は、能島村上氏の若き当主武吉の舅である。

天文二十四年（一五五五）九月晦日の夜、毛利軍三千有余は夜陰に乗じて陶軍本陣背後の山に登り、十月一日早暁、その本陣めがけて一気に駆け下りた。二万からなる陶軍の狼狽はその極に達し、われ勝ちに海上へ逃れたが、そこには前夜のうちに配置が完了していた毛利の小早川隆景麾下の水軍部隊が手ぐすねひいて待ちかまえていた。その勢力は村上水軍の来援によって、晴賢麾下の周防大島水軍に匹敵する。退路を断たれた陶軍は、そのため潰滅したのであった。

＊闡明＝それまではっきりしなかったことを明らかにすること。

（イラストは厳島合戦における海上戦闘の推定再現です）

須崎

戦国四国の漁村と小城下町を詳細再現

この鳥瞰図は天正十五年（一五八七）の『津野洲崎地検帳』による復元図であり、四〇〇年前の天正期の小城下町・港町・市町をありありと描き出すことができた。これは全国的にも珍しい例なのである。

この町は、正安三年（一三〇一）の古文書に、池尻・浜際・鴨社・八幡社・海浜などと見えることから、既に鎌倉期にはその原型ができており、さらに遡れば、平安時代の康和二年（一一〇〇）、この湾奥に立荘された京都鴨社領津野荘々頭の港町であったと思われる。

天正期には、町は「浜」「市」「原」に三区分されている。

「原」は③城塞のある城山の麓の津野氏給人屋敷群と、その東の⑩「東町」、②「塩屋町」である。麓の中核は、津野氏の重臣⑥山内右衛門大夫の屋敷であり、近くに⑨弓場や半山城主・⑦津野親忠（長宗我部元親の三男）の御宿屋敷がある。親忠は、この港を半山の外港とし、浦戸の元親と連携を密にしていた。

④山崎端の東には「塩屋町」があり、湾に向って①塩浜（塩田）が開かれている。その南は湾入部、港になっていて、漁船のほか、親忠の御座船や京畿からの廻船も寄港していただろう。その南には「水主」を務める漁師、陰陽師の⑫「算所ヤシキ」がある。

「浜」には、砂洲東端に⑯漁師町があり、四八坪の均等地積の屋敷が密集するが、中には広い屋敷に住む網元のような有姓者もいる。

その北、町の中央を東西に走る街路の東部分には、二〇〇坪前後の不揃いの有姓の津野氏⑮御用商職人（鍛冶・番匠・塗師・魚屋＝納屋・宿屋）の屋敷や⑬・⑭寺院がある。

その西が⑲「市」であり、一〇〇坪の均等地積で二〇軒ばかり、街路に沿って整然と並んでいる。その中央には市の神、⑳エビス屋敷があり、津野氏の下で市を取り締まる有姓の「目代」武正吉左衛門が、一人だけ二〇〇坪の屋敷に住んでいた。

（下村 效・元国学院大学栃木短期大学教授）

本文未出の場所
⑤観音堂
⑧紏鴨神社
⑪高洲
⑰馬場
⑱華蔵坊
㉑大善寺
㉒八幡神社

群雄割拠

永禄
(1558.2.28改元〜1570.4.22)

桶狭間の戦い
門司城攻防戦
川中島の戦い
富田城攻防戦
安芸攻防戦
三増峠の戦い
春日山城
兵

〈執筆・監修者〉
谷口克広(本文執筆) 36・44
水澤幸一(本文執筆＋イラスト監修) 40
森本 繁(本文監修) 42・48
広谷喜重郎(監修) 50

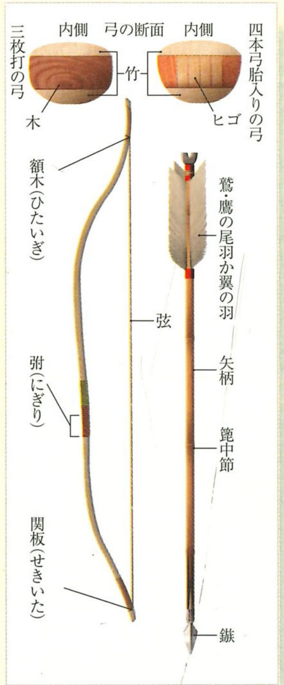
〈イラストレーター〉
藤井康文 36・46・47・50・52
香川元太郎 40
大川 明 42・48
谷井建三 44
伊藤展安 54・55・56

弓矢
戦国期に完成された遠射兵器

武器としての弓矢は、武士の登場とともに発達していった。平安時代末期の十二世紀後半になり、弓の構造に画期的な変革が起こった。以前まで木材(梓・槻・櫨・桑)を材料とした単材の「丸木弓」から、その外側(弦に面する側とは反対側)を削って平らにし、そこに竹片を張り合わせた「伏竹の弓」が考案されたのである。その後、弦側にも竹を張り合わせて、「三枚打の弓」へと発展してゆく。

これら合成弓には、材料の接着に鹿や鰾という魚の膠質が用いられた。また接着時、弦を張ったときの湾曲とは反対方向に弓を反らせて乾燥させたため、発射時の弓の復元力が大きく改良されることとなった。しかし、当時は接着力に不十分な面もあり、籐を巻くことでその補強とした。

この「三枚打の弓」から進歩したものが木の部分の側面に竹を両面に張り合わせた「四方竹の弓」であり、さらに進んだものとして、中心部分に竹を何枚か挟んだ構造を持つ「弓胎入りの弓」も生まれた。通常、弓胎の本数は三〜五本とされる。このような弓の改良が鎌倉時代から盛んに行なわれた結果、戦国時代の弓はすでに現在の弓とまったく同じ構造となっており、その性能は頂点に達したともいえる。

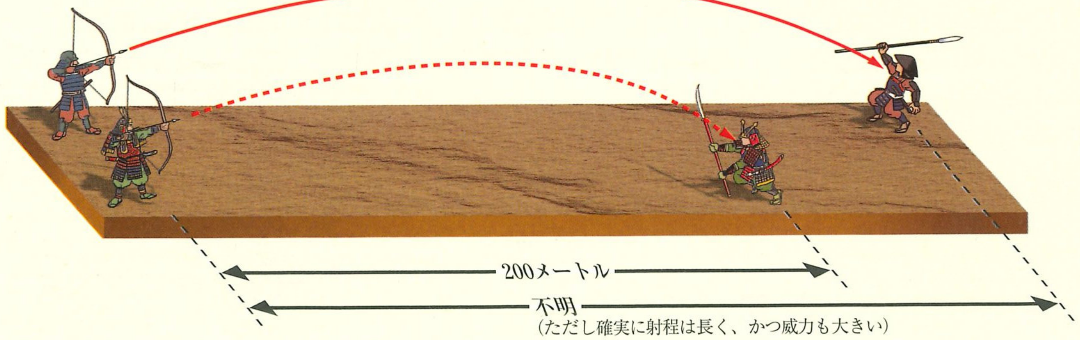


構造上の進歩に加え、この時期、弓は技術面でも著しい進歩を遂げる。弓を握る手の内の独特の働きがそれだが、紙幅の関係でここでは触れない。いずれにしろこの時期、技術の進歩によっても矢の速度は格段に上がり、命中精度もそれ以前よりははるかに向上することとなった。

また戦国期は、鎌倉期の騎馬を主とした戦いから歩兵による集団的戦闘へと、戦いの様相そのものが変化した時期でもある。当然ながら射術もこの影響を受けており、比較的遠くの敵に対して集団的に攻撃を行なう「数矢前射法」*や、近距離の敵に対する「敵前(要前)射法」の技術にも工夫が凝らされるようになった。

最後に、射距離についても触れておく。戦国時代に書かれた弓術伝書によれば「遠矢射様の事 町の準」として、四町(約四三六メートル)を基準にして射る、と記されている。遠矢は軽く作られた矢を用いて射る射術であるが、現代の遠矢の記録が三一四・八メートル(平成七年十一月・琵琶湖遠矢大会)であることから類推すれば、戦国時代の弓は、遠矢より重い、戦場で使用する鏃のついた篦太い征矢も想像以上に遠くまで飛ばせたことであろう。

(森 俊男・筑波大学体育科学系助教授)



◆鎌倉期の弓の射距離(200メートル)は、実際に戦場で届いたと推測できる距離であり、あくまで参考にしか過ぎない。有効射程はこれより短く、恐らく60メートル前後だったのではないか。戦国期の弓はそれ以上の射程だったことは間違いないが、具体的には不明である。

＊数矢前射法＝矢継ぎ早に射かける射法。江戸期薩摩藩の「腰矢組弓」の数矢前射法では１分間に10本の矢を引くことができたという。速射に関しては、江戸時代に「１昼夜24時間で最高１万3053本の総矢数」の記録がある。

永禄三年五月［1560］▷愛知県

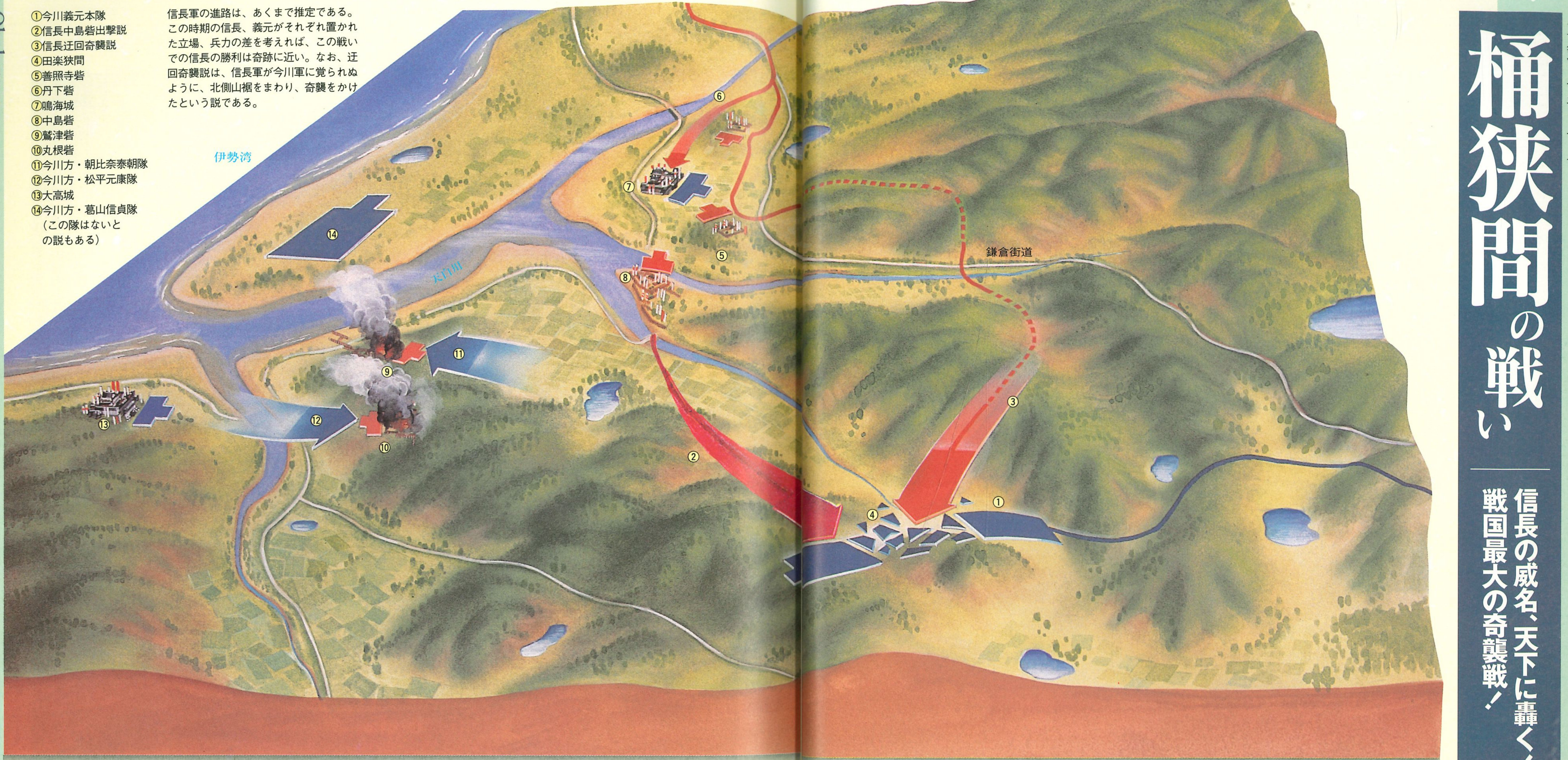
桶狭間の戦い

信長の威名、天下に轟く！ 戦国最大の奇襲戦！

織田信長 × 今川義元

①今川義元本隊
②信長中島砦出撃説
③信長迂回奇襲説
④田楽狭間
⑤善照寺砦
⑥丹下砦
⑦鳴海城
⑧中島砦
⑨鷲津砦
⑩丸根砦
⑪今川方・朝比奈泰朝隊
⑫今川方・松平元康隊
⑬大高城
⑭今川方・葛山信貞隊（この隊はないとの説もある）

信長軍の進路は、あくまで推定である。この時期の信長、義元がそれぞれ置かれた立場、兵力の差を考えれば、この戦いでの信長の勝利は奇跡に近い。なお、迂回奇襲説は、信長軍が今川軍に覚られぬように、北側山裾をまわり、奇襲をかけたという説である。



駿河・遠江を領する今川義元は、永禄三年（一五六〇）五月十二日に駿府を出陣した。せっかく服属していた尾張の鳴海城・大高城が織田信長の築いた付城のため苦境にたたされている、との連絡を受けたからである。

義元は、五月十八日に沓掛城に入った。これから救援しようという鳴海城・大高城までおよそ一〇キロの道のり、ここに諸将を集めた義元は指令を出した。松平元康はこの夜大高城に兵糧を運び入れること、元康および朝比奈泰朝はその後ただちに大高の付城である織田方の鷲津・丸根砦を攻略すること。義元自ら指揮する本隊は鳴海救援に向かい、鳴海に付けられた敵城、中島・善照寺・丹下を陥落させる。もし、信長が救援に出陣してきたら決戦して撃ち破る。

おそらく自身満々の作戦だっただろう。駿河・遠江・三河の三国に併せて尾張の一部を麾下に置いている義元は、この戦いに二万余りの兵を動員した。動員可能兵力がせいぜい五～六〇〇〇の織田がどうあがいても、この作戦を遮ることはできないだろう。この日沓掛城で一夜を過ごした義元は、翌朝早くここを出陣、西方へ向かって軍を進めた。

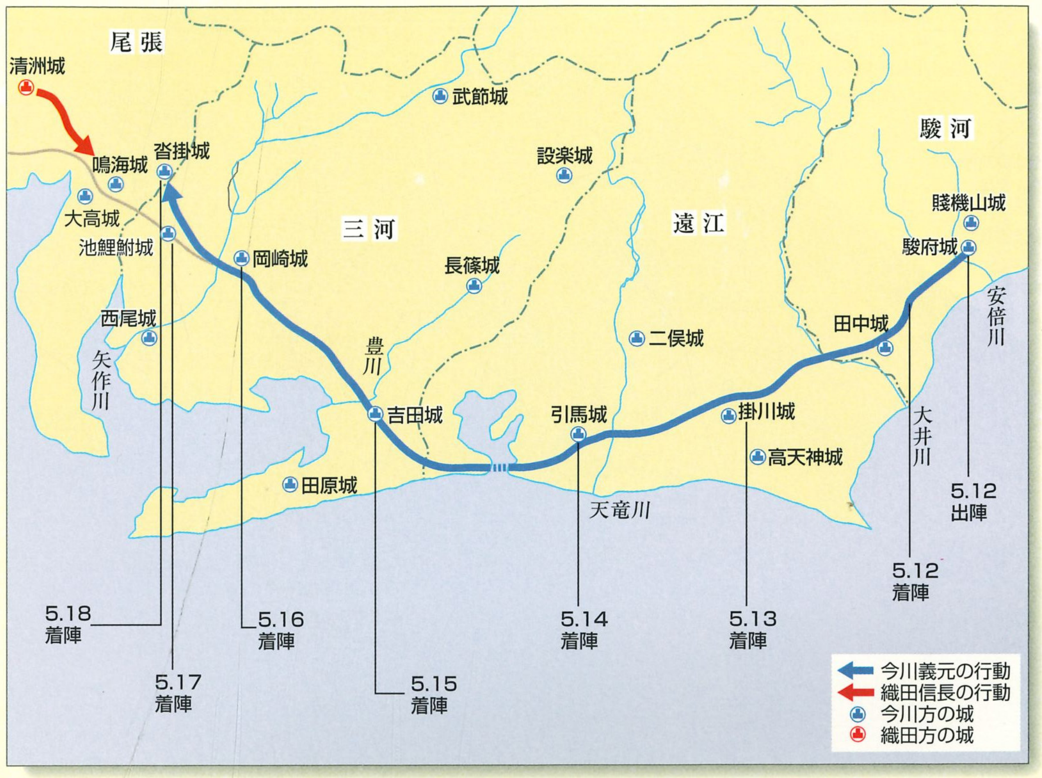
一方の信長は、今川軍沓掛到着、先鋒軍進攻の報を聞き、どのような防衛策を考えたのだろうか。十八日夜、駆け付けた老臣たちを前にしながらも、彼はまったく戦いの話を持ち出さず、さっさと寝所に入った。圧倒的大軍を迎えるにあたって、信長は防衛策など思い浮かばなかったにちがいない。鷲津・丸根の両砦を救うには、総軍を引率して敵の先鋒軍と戦うしかない。そうすると敵は本隊が到着して、こちらは挟み撃ちになってしまう。鷲津・丸根からの注進を受けても、信長は捨てておくしかなかったのである。

翌朝早く、再び鷲津・丸根両砦から、敵軍の攻撃が始まったとの注進があった。ここで信長は出陣を決めた。「人間五十年……」と敦盛の曲を舞うと、すぐに馬を駆って清須城を飛び出した。五人の小姓衆だけがあわてて主君の後を追った。

信長は味方の二砦を救おうとして出陣したわけではない。おそらくこの時には、今川軍の本隊との決戦を覚悟していたのだろう。

劣勢で遭遇戦に臨む時、ねらうは敵の主将の首一つである。敵の先鋒

❶桶狭間に至る今川義元の行動。堂々たる大軍を率い、尾張との国境へ出陣する義元にとって、この遠征は信長への示威行動ほどの意識しかなかったはずである。



軍が鷲津・丸根に張り付いて、大軍が分散している今こそがチャンスである。

信長の出陣のタイミングは、こうした思惑によるものではなかったか。だが、信長が熱田に到着するより早い午前八時ごろ、鷲津・丸根の砦は落ち、守将の佐久間大学・織田秀俊は討ち死にしてしまった。

信長は丹下砦を経てから善照寺砦に入り、ここで兵たちが到着するのを待った。ようやく二〇〇〇ほどの兵が集合し、臨戦態勢が整った。

一方、早朝に沓掛城を出発した義元は、正午ごろに桶狭間の南方、俗に「桶狭間山」と呼ばれる小高い丘陵に着陣した。その前衛部隊は狭間をそのまま西へ進み、織田方の中島砦のほうへ向かった。

今川本隊の前衛部隊が中島砦に近づいた時、織田軍の急襲を受けた。佐々隼人と千秋季忠の率いる三〇〇ほどの軍である。これは、信長が善照寺砦に入ったのを見た上での攻撃と書かれているから、信長の本隊が善照寺から討って出ることを期待しての行動だったのだろう。だが、信長は動かなかった。

前衛部隊だけとはいえ、ここまで出張してきた今川軍は五～六〇〇〇ほどあっただろう。佐々・千秋軍はたちまちにその大軍に飲み込まれ、隼人も秀忠も戦死してしまった。

この後、ようやく信長は動いた。善照寺砦から中島砦に移ったのである。

善照寺砦と中島砦は同じ平地の中にある。つまり信長の動きは、今川軍の少なくとも前衛部隊からはまる見えだった。信長には、自分の軍勢の動きを隠すつもりはまったくなかったのである。

中島砦に移った信長はすぐに総軍に出撃を命じた。総軍とはいっても、ようやく二〇〇〇ほどの兵力である。しかし、その二〇〇〇のほとんどが武士たち、しかも鍛え抜かれた親衛隊たちがずらりと揃っていた。

今川前衛部隊に襲いかかった信長親衛隊は、一気に敵を追い返した。今川軍はなすところなく山際まで後退した。五～六〇〇〇とはいっても、その大部分は非戦闘用員、専業の武士は一〇〇〇もいなかったにちがいない。

前衛部隊の苦戦は、当然桶狭間山に着陣していた義元の知るところとなったはずである。注進が間に合わなくても、数キロ先の騒ぎを義元が知らなかったわけはない。『信長公記』など史料には書かれていないが、義元はこの時、前衛部隊と合流すべく山を下って、桶狭間の低地に移ったのではなかろうか。

❶今川義元本陣跡。

❶桶狭間古戦場跡の碑（有松町）。

❶桶狭間古戦場跡の碑（豊明市南館）。

❶義元最後の宿営地、沓掛城址。

❶桶狭間での戦死者を祀る「戦人塚」。

敵の前衛部隊を追い込んだ信長軍に、幸運が舞い込んできた。天候の急変である。突然石や氷を投げ打つような雨が強い西風にあおられながら落下してきた。敵兵の顔という顔をこの雨がたたき付けた。やや離れた沓掛の峠の巨大な楠木が、この風雨にたたかれて東へ向かって倒れたという。

この風雨に乗じて信長はそのまま突き進んだ。今川前衛軍はちりぢりになり、義元の直接指揮する本隊までが崩れた。信長は自ら槍を取り、大声で叱咤し、義元の首一つを目標に親衛隊とともに突進した。義元の乗った塗輿を守る旗本たちは、退却するうちに次第に数を減らし、ついに五〇騎ほどになった。

馬廻の一人服部一安が義元に肉薄する。次いで毛利良勝が後ろから組み付き、義元の首級を挙げた。時に午後二時。主将を討たれた今川軍は、朝には威風堂々と進軍してきた道を敗走していった。

敵方だった松平元康は、敗戦の中で古巣の岡崎城を回復することができた。

翌年信長は、今川氏を離れた元康と同盟を結んで、東方を押さえさせ、自分は美濃攻略に専念できるようになる。

（谷口克広・港南中学校教諭）

春日山城

越後に睨みをきかせる謙信の居城

上杉謙信の居城として名高い春日山城であるが、意外にその生い立ちは不明である。南北朝の動乱期に山城としてとりたてられたと考えられているが、発掘調査がほとんど行なわれていない現状では、状況証拠の域を出ない。

この城の必要性が痛感され、本格的に手が入れられ始めたのは、十六世紀初めのことと考えられる。その契機となった出来事は、謙信の父長尾為景が関東から進攻した上杉顕定に敗れ、いったん越後府中を追われたことである。それ以前の山城は臨時の施設であり、政治の中心は守護所のある直江津にあった。

しかし春日山城は、謙信の代に領国の中心となる。謙信は、山城に多数の人を住まわせ、山城を本拠とした。

その山城の構造であるが、尾根を一キロ以上にわたって城域としている。城は二〇条の堀切で区切られ、最長一三〇メートルにおよぶ堀切もある。郭群は大規模なものが多く、一〇〇〇平方メートルを超えるものが一二郭もあり、居住性の高さがうかがえる。麓から実城までの↘比高差は約一五〇メートル、直線距離は一キロほどである。ただし、幾重もの厳重な門や郭群があり、多くの兵に守られた実城に攻め手が達することは不可能に近いものがあった。大手口は初期段階では東側と思われ、のちには南側に移されたと考えられる。この再現図については、一部謙信後の景勝の時代の遺構を含んでいる。両者を区別することは現段階では難しい。なお建物や城壁は、『越後国瀬波郡絵図』所載の「村上ようがい」を参照して復元したものである。

さて謙信はなぜ、山城に本拠をおいたのであろうか。第一に戦乱が激化したことがあげられる。戦乱から多くの人員を保護せねばならなかったが、当時の技術では平場での防御は難しかったため、守りやすい立地へ移ったものと思われる。その時期は他の戦国大名に先んじており、永禄年間頃のことと思われる。

そのためには、当然ながら多くの守備兵が必要である。景勝末期の「定納員数目録」には四〇〇名あまりが記されており、まかないなどの非戦闘員を加えれば、さらに数倍の人員が居住していたと考えられる。

では謙信が守らねばならなかった人々とは、具体的に誰を指すのであろうか。私は謙信に従軍している武将の家族、すなわち人質だと思っている。謙信は、彼らを保護することで国主となった。そのため春日山城は、越後で最大最強の城でなくてはならなかったのである。

（水澤幸一・新潟県中条町教育委員会）

①愛宕谷
②御館川
③蓮池堀
④城道
⑤黒金門
⑥千貫門
⑦実城
⑧蔵
⑨但馬谷
⑩沼
⑪対馬谷
⑫城道
⑬城門
⑭城門

豊前

永禄四年八月〜十一月［1561］▽福岡県

門司城攻防戦

火を吹く南蛮砲！押し渡る毛利水軍

毛利元就✖大友義鎮（宗麟）

❶門司城本丸：標高175メートル。明治25年に関門海峡を抑える要塞が築かれたため、現在城の遺構はほとんど残っていない。❷南蛮船：イラストは、インドのゴアから来航した500〜600トン・300人乗り・片舷17〜18砲門のナウ型ポルトガル船。砲の威力は絶大だったが、この南蛮船は砲弾を撃ち尽くすと関門海峡から退去してしまった。❸早鞆の瀬戸：平家滅亡の舞台となった壇之浦の急潮。海峡の幅は650メートル。❹大友軍：関門海峡沿いを避け、山間から門司城に迫った。❺田の浦❻赤間関：毛利水軍はまるで池でも渉るように門司側に押し渉った。❼和布刈神社：海峡通過の守護神。攻防戦初期の激戦地となった。❽甲宗八幡宮：八幡表の決戦に敗れ、大友軍は撤退を決意した。

大友義鎮（宗麟）は毛利氏に奪われた門司城を奪還するため、永禄四年（一五六一）八月、吉弘加兵衛尉に兵一万五〇〇〇を与えて城の西方約一二キロの豊前小倉へ進出させた。この陸上からの攻撃に加え、義鎮は当時豊後府内に停泊中であったポルトガル船数隻に海上から攻撃するよう依頼し、海上からいきなり大砲をぶっ放させたのである。

急報に驚いた元就は、同月二十一日に嫡子・隆元と小早川隆景の両将を派遣して門司城を援護させた。隆元は防府の大専坊に本陣を置き、隆景は先陣となって城の救援に向かう。

対岸の下関から見ると、田の浦一帯は雲霞のごとく大友軍が犇めいている。そこで隆景は、堀立壱岐守の手勢や豊前守護代杉氏の一族を決死隊として関門海峡を渡らせ、大友軍の包囲網を切り崩して門司城に入らせた。これにより、落城寸前だった門司城は、ようやく息を吹き返した。

この間、隆景は児玉就方に命じて安芸河内水軍数十艘で豊筑沿岸を襲撃させ、大友軍の背後を攪乱させた。すると大友軍も門司南方約一二キロの豊前沼に屯営した毛利軍を襲い、十月二日になって門司城の麓に進出、城地の奪回に乗り出したのである。

伊予能島水軍の村上武吉は、このとき麾下の水軍を率いて毛利軍に加わり、児玉就方の安芸河内水軍と協力しながら門司海岸に上陸して敵陣の側背を襲った。毛利軍は多大の戦果をあげたが、大友軍はなおも堅陣を構えて容易に退却しようとしないばかりか、戦備を充実させて同十月十日に門司城への総攻撃を開始した。

大友軍の総攻撃が始まると、隆景は門司城に入って全軍を指揮し、自ら城外に出て防戦につとめた。浦宗勝と児玉就方は毛利隆元の命を受けてそれぞれの水軍を率い、大友軍の側背を衝いて上陸し、明神尾の敵陣を切り崩したあと、大里に敵を追いつめて大勝を博した。

この合戦で浦宗勝は衆人環視の中、敵将と一騎討ちを演じている。宗勝は敵の鑓で鼻のあたりを負傷したがひるまず、とうとう鑓で相手を突き伏せた。合戦は勢いである。敵味方が固唾をのんで見守る一騎討ちで宗勝が勝ったとなると、毛利軍の士気は俄かにあがり、敵を縦横に切り立ててこの勝利を勝ち取ったのである。

大友軍が門司城奪還の不可能を知り、総退却を開始したのは同年十一月五日の夜だった。

川中島の戦い

永禄四年九月（第四回）［1561］▷長野県

龍虎相見えた戦国史上屈指の死闘!!

武田信玄×上杉謙信

武田信玄、上杉謙信、二人とも戦国時代の「顔」である。この二人が五度も対陣し、一度はすさまじい激戦を展開したというのだから、川中島の戦いというのはまさに戦国史を華やかに飾る一ページである。

川中島をめぐる信玄・謙信の五度の戦いは、終始信玄の攻勢、謙信の防御といった形で展開した。信濃の地を侵略したのは、信玄のほうなのである。謙信はそれを防ごうとしただけで、進んで信濃の侵略を企てたことはない。そして、結局は川中島地方は、信玄の占領するところとなるのである。そういう意味では、この戦いの勝者は信玄のほうということになるだろう。

この川中島の戦いの中でも、第四回目の永禄四年（一五六一）の戦いは、絵になるできごとの連続である。軍師山本勘助のきつつき戦法、突然霧の中から姿を現わす謙信の大軍、そして車懸りの陣、極めつきは単騎で切りつける謙信と軍配でそれを防ぐ信玄、総大将同士の攻防の一瞬。どの場面も完全な創作か大袈裟な伝承なのだが、今でもそのまま信じている人が多いのは、強いインパクトをもってそれらの話が語り続けられてきたからだろう。

まず信玄の勢力を北信濃から駆逐しようとした謙信が、武田の前線基地である海津城近くの西条山（妻女山）に着陣した。一方の信玄も、海津城の後巻きとして出陣、西条山と千曲川を隔てた八幡原に布陣する。

長い対陣の中で、信玄は一つの作戦を立てた。軍勢を二分し、別働隊

が西条山を背後から襲って上杉軍をおびき出す。信玄自ら率いる隊は千曲川を渡った八幡原で上杉軍を待ち伏せする。『甲陽軍鑑』ではこの作戦を、山本勘助の献策によるものとしている。

だが、この作戦を謙信は読んでいた。「鞭声粛々」夜のうちに千曲川を渡る。夜明けとともに武田の別働隊が西条山を襲った時、すでにそこはもぬけの殻だったという。

八幡原の朝霧が晴れてゆくとともに、信玄の軍の前に謙信の一万二〇〇〇の大軍がゆっくりと姿を現わした。すぐさま両軍入り乱れての戦闘が開始された。

別働隊の抜けた武田軍は八〇〇〇の小勢、おまけに作戦の裏をかかれた衝撃は大きい。謙信は得意の車懸りの陣で武田軍を攻撃する。武田軍はたちまち混乱に陥った。謙信が信玄の本陣に駆け入り太刀をもって切り付ける、信玄は太刀を抜く余裕さえなく持っていた軍配でそれを防ぐ、といった劇的な場面が伝えられているのはこの時である。

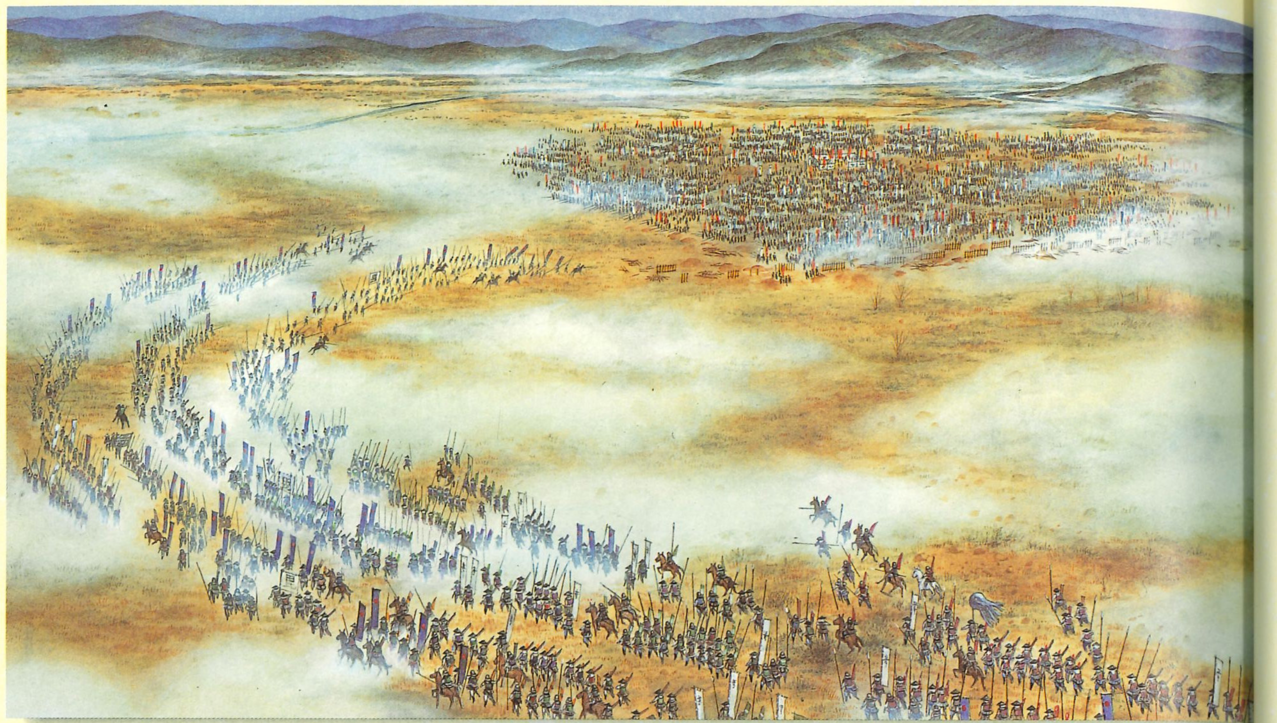
大混戦だったので、たしかに謙信自身太刀を抜いて戦ったようである。また、信玄がこの時、何者かに襲われて傷を負ったこともまちがいない。それが江戸時代に書かれた『甲陽軍鑑』では、両方が結び付いて主将同士の一騎打ちとなったのだろう。実際に信玄に切り付けたのは、謙信の家臣の荒川伊豆守という者だったらしい。

明らかに武田軍が押されていた戦いだったが、そのうち形勢は逆転する。武田の別働隊が西条山から駆け付けてきたのである。最後謙信は、犀川を渡って軍を撤退させた。午後四時ごろだったというから、一〇時間ほども戦いが続いたのである。戦死者は両軍合わせて、数千とも一万以上ともいう。やや大袈裟な数字だと思うが、かなりの死傷者が出たことはまちがいない。

川中島の戦いを、日本史の上に大きな意義づけをすることは難しいだろう。たかが地方の領地争いと片付けられる戦いにすぎない。だが信玄・謙信は戦国の格好のライバルとして、華やかに歴史の中で語られることになる。

謙信は戦いそのものに一種のロマンを感じる男だった。生涯の好敵手の信玄に対して、満々たるファイトをたぎらせていただろう。だが、信玄のほうは現実家である。謙信を、自分の野心を邪魔する厄介者という意識でしか見ていなかったのではないだろうか。

（谷口克広・港南中学校教諭）



↑永禄４年（1561）９月10日早朝、信濃・善光寺平での両軍の激突は、双方とも、再起不能かと思われるほどの死傷者を出す死闘となった。このイラストは第４回とされる川中島合戦において、武田軍の右側面に対し、続々と投入される上杉軍新手の兵という設定で描いている。史上名高い「車懸りの陣」はこのようなものであったろうか（イラスト監修＝大山格）。なお、前ページイラストは川の中での一騎打ちもあったという説により描いている。

→両軍の行動は諸説あって不明な点が多い。両軍の進軍したルートも推定であり、未だ明らかではない。

①犀川
②善光寺
③武田軍本隊
④海津城
⑤上杉軍本隊
⑥上杉軍・甘粕隊
⑦武田軍別働隊
⑧妻女山（西条山）
※妻女山と西条山はまったく別の山という説もある。
⑨茶臼山
⑩塩崎
⑪千曲川

永禄九年十一月［1566］▷島根県

富田城攻防戦

三年有余に及ぶ持久戦 必勝態勢の兵糧攻め

毛利元就✕尼子義久

①富田城本丸：標高192メートルの頂上にあった。現在は勝日高守神社が祀られている。②山中御殿平：壮大な規模の大石垣で囲まれた平坦地域で、広さ約30アール。③御子守口：毛利輝元が先鋒となり、尼子義久らを攻めた。④塩谷口：吉川元春・元長が先鋒となり尼子倫久・山中鹿之介らを攻めた。⑤菅谷口：小早川隆景が先鋒となり尼子秀久らを攻めた。⑥城下町：町並みは飯梨川河口まで10キロに及んだ。⑦飯梨川：当時は月山の対岸、現在の広瀬町の中心街を流れ、中海から富田城下までの水運も盛んであった。また、飯梨川流域は古代から良質の砂鉄を産出し、川は鉄錆色に染まっていたという。

厳島合戦で勝利を得たあと、毛利元就は防長経略をなしとげ、石見・出雲遠征に着手した。しかし元就は、このとき西方では大友氏とも全面的に対立していた。二正面作戦は回避したい。そのため元就は、将軍足利義輝に講和斡旋を依頼したのだが、義輝が提案してきたのは毛利・尼子・大友三氏の三面講和だった。元就はこの講和斡旋を拒否して、大友氏との単独講和に固執した。宿敵尼子氏を撃滅する初志は、どうしても貫徹したかったのである。

永禄六年（一五六三）八月、何とか講和をまとめた元就ではあったが、出雲へ帰陣中の嫡子隆元を安芸高田郡の佐々部で失ったため、すでに六十七歳の高齢ながら、老骨に鞭打ちつつ、出雲戦線の陣頭に立つこととした。

元就は天文十二年（一五四三）に大内義隆の部将として富田城攻めに従軍して敗れた経験から、その難攻不落ぶりを知っていた。まずは城への兵糧搬入を断ち、その上で総攻撃をかけるべく、伯耆南部を制圧し、因幡へも経略の鉾を進めてこれを支配した。

元就が外援を断たれて孤立した富田城下へ進出して総攻撃を開始したのは、永禄八年四月十七日である。だが、なお城兵の士気は旺盛で、容易にこれを落とすことができないと知ると、いったん撤退し、持久包囲作戦に切り替えた。

このあと次第に包囲網を縮めた元就は、同年九月二十日に再び二万五〇〇〇の将兵をもって富田城を完全に包囲した。石原山と瀧山に半永久的な陣地を構築して将兵を駐屯させ、自らは松江に退いて、七十歳の古稀を洗合の陣中で迎えた。

『孫子』の兵法にいう、「内間の計」によって富田城の重臣たちを調略したのはこのときである。このため城中は飢餓と猜疑に苛まれ、ついに永禄九年（一五六六）十一月、城主尼子義久は元就の軍門に降った。

富田城攻略を開始した永禄六年十一月から数えて三年有余に及ぶ持久戦で、我慢強い元就の真骨頂が発揮された攻城戦であった。しかも元就は、降伏した城主三兄弟を助命し、麾下の将兵をすべて解放した。尼子三兄弟は領内に蟄居させたが、ほとぼりが冷めると、給地を与えてそれなりに処遇し、子孫は家臣として存続した。花咲ける武士道と評価できよう。

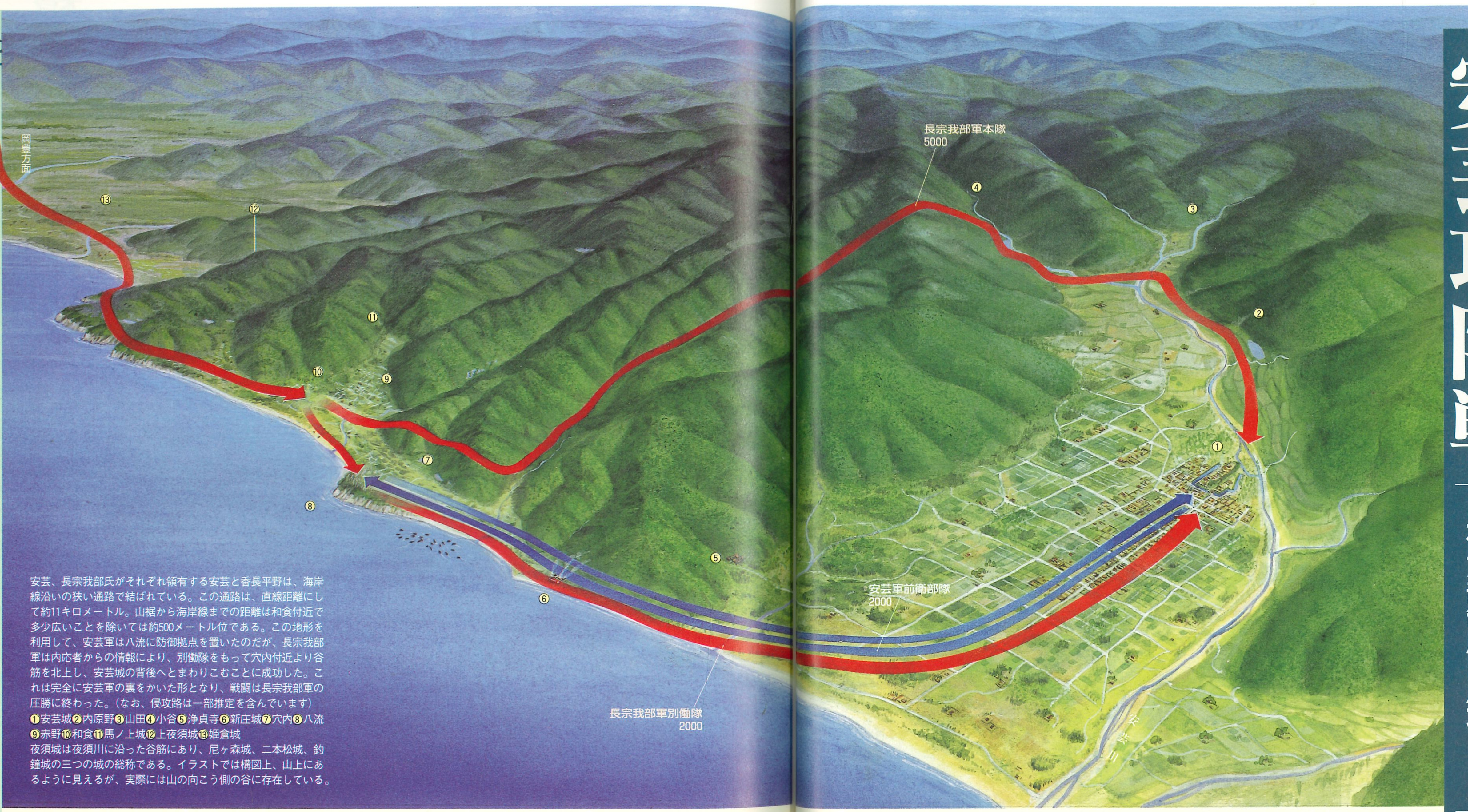
土佐

安芸攻防戦

永禄十二年七月 [1569] ▷高知県

分断作戦で土佐東部制圧に成功

長宗我部元親 ✖ 安芸国虎



安芸、長宗我部氏がそれぞれ領有する安芸と香長平野は、海岸線沿いの狭い通路で結ばれている。この通路は、直線距離にして約11キロメートル。山裾から海岸線までの距離は和食付近で多少広いことを除いては約500メートル位である。この地形を利用して、安芸軍は八流に防御拠点を置いたのだが、長宗我部軍は内応者からの情報により、別働隊をもって穴内付近より谷筋を北上し、安芸城の背後へとまわりこむことに成功した。これは完全に安芸軍の裏をかいた形となり、戦闘は長宗我部軍の圧勝に終わった。（なお、侵攻路は一部推定を含んでいます）

①安芸城②内原野③山田④小谷⑤浄貞寺⑥新庄城⑦穴内⑧八流⑨赤野⑩和食⑪馬ノ上城⑫上夜須城⑬姫倉城

夜須城は夜須川に沿った谷筋にあり、尼ヶ森城、二本松城、釣鐘城の三つの城の総称である。イラストでは構図上、山上にあるように見えるが、実際には山の向こう側の谷に存在している。

強大な敵・本山氏を滅ぼした長宗我部元親の目は、土佐統一への次なる敵、「安喜五千貫」と称された豪族安芸氏へと向けられていた。

永禄十二年（一五六九）七月、元親は七千余の兵を集めると、安芸国虎を討つべく、進軍を開始した。一方、国虎も兵を召集、これを迎撃して殲滅する防戦態勢を固めた。

安芸城周辺の平野の西側は海岸まで山が迫っており、軍馬が通行できる部分はわずかでしかない。その要路を押さえてしまえば安芸領への侵入をくい止めることができる。さらに、この当時元親に圧迫されていた幡多郡を支配する名族・一条氏に出兵を要請、元親の軍の後方撹乱を図り、併せて元親軍を挟撃して殲滅する。国虎はそう考え、前衛部隊を穴内、新庄城へ配して道中の押さえとし、自らは本隊を率いて安芸城周辺に布陣した。

だが旭日の勢いにある元親の大軍勢は、国虎の構想を一挙に打ち砕いてしまった。元親に恐れをなし、安芸軍の中には内応する者が続出し、豪勇を謳われた安芸氏の軍は内部崩壊を起こしてしまったのである。

元親に内応した安芸家譜代の小谷四郎右衛門らは、長宗我部軍の別働隊を山中の間道に先導し、安芸城背後の内原野へと引き入れた。そうとは知らない黒岩越前の率いる安芸氏前衛部隊は、八流の地で長宗我部軍と激突、ここに両者の本格的な戦闘は開始された。

長宗我部軍本隊五〇〇〇、迎える安芸氏前衛部隊二〇〇〇。数では劣るものの、天険の要害に立て籠もる安芸勢には地の利がある。黒岩越前には、簡単には抜かれまい、との読みがあったに違いない。しかしその読みははずれた。安芸勢は惨敗を喫し、黒岩越前は兵をまとめて後方へ退却した。一説に長宗我部軍の「奇策」に引っかかったともいう。

その頃、安芸城の背後へ回った長宗我部の別働隊は安芸城を急襲しており、安芸氏の本隊は大混乱に陥っていた。そこへ穴内、新庄を蹴散らした長宗我部の本隊がなだれ込んできたため、安芸氏は腹背から挟撃されることとなってしまったのである。

国虎はようやく城内に退いて籠城したものの、すぐに兵糧は尽き、城は陥落した。国虎は城兵の助命を懇請し、自らは浄貞寺で自刃した。この戦いで、元親は土佐東部への重要進出拠点を確保することができた。

（イラスト監修＝広谷喜重郎・土佐史研究家）

相模

三増峠の戦い

永禄十二年十月 [1569]▽神奈川県

信玄、若き北条の将を降す
激闘山岳機動戦！

武田信玄 ✕ 北条氏照・氏邦

永禄十二年（一五六九）八月、武田信玄は四万の兵を三手にわけ、相模の北条氏領内へ侵攻した。最終目的は小田原城の覆滅だったはずだが、すでに越後の上杉謙信が同四年に失敗したのと同じく、結局は攻勢を諦め、兵をひいた。

謙信同様、兵站線が伸びすぎたこと、北条氏が各地で籠城して決戦を求めず、武田勢の消耗を強いたことなどがその理由であろう。しかも、苦労して小田原城へたどり着いたとき、武蔵の北条勢がにわかに城を出て退路を扼す動きを見せはじめるという点も似通っていた。

腹背に攻撃を受けてはいかに信玄といえども勝利は危うい。包み込まれて命を落とすことにでもなれば、元も子もなくなってしまう。信玄は小田原からの出撃も考慮しつつ、撤退を急がせた。

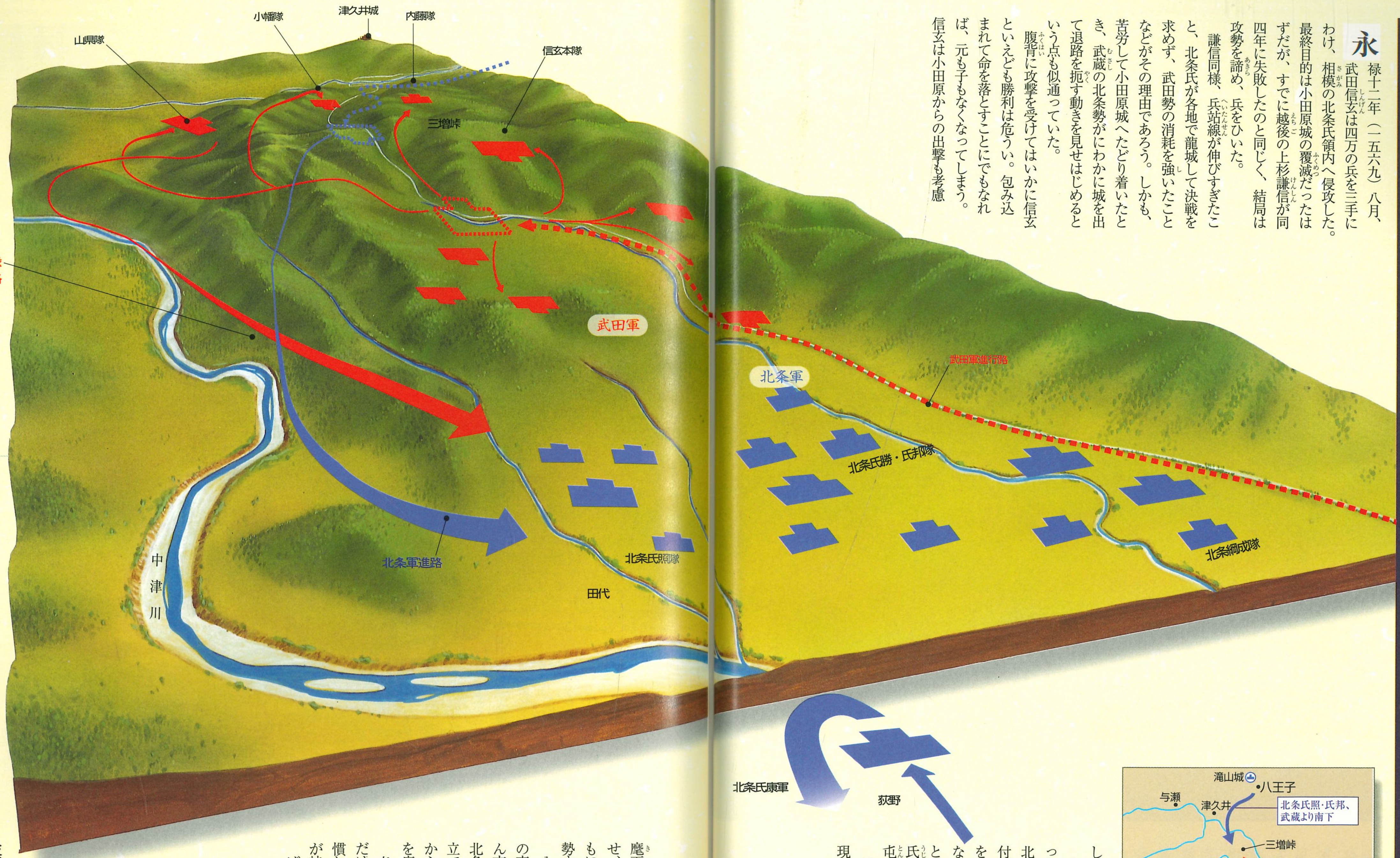
十月六日、武田軍は小田原からいったん東の平塚方面へ向かってから北上するルートを選び、田村・大神付近に達した。そこから先は津久井を目ざし三増峠を抜けなければならない。信玄があらかじめ物見を出すと、八王子城から南下してきた北条氏照・氏邦らの兵約二万が峠付近に屯集しているという。

信玄が恐れていた事態は、すでに現実のものとなっていた。すぐさま麾下の山県昌景を西へ大きく迂回させ、北条勢の背後を脅かさせるとともに、七日夜から三増峠に向けて攻勢する態勢を整えた。

八日未明、信玄はついに北条勢との直接戦闘に及び、氏照らはいったん南西方面半原に転進。そののち、北条勢は田代付近に移動して態勢を立て直し、反撃に転じたが、峠方面から転進南下してきた山県隊に側面を痛撃されて総崩れを起こすに至る。

さすがに甲斐は山に囲まれているだけあり、武田軍は山岳での機動に慣れていた。もしこのとき、氏照らが峠から退かず踏みとどまっていれば、小田原から急行した北条氏康・氏政軍との間で武田軍は挟撃され、殲滅されていたのではないか。もっとも、氏康の軍が田代の手前約六キロの萩野にまで到達したのは同日夕方であるため、それまでに狭い山岳地帯で氏照らは逃げ場を失い、逆に殲滅されていた可能性も高い。

双方が相手に力を再認識させたこの戦いの結果、いったんは破棄されていた甲斐と相模の同盟は、元亀二年（一五七一）に再び結ばれることとなった。



➡一度は武田軍の退路を断った北条軍だったが、信玄の巧みな戦術と山岳戦に手慣れた武田軍の迂回機動によって、逆に潰走するという事態に陥った。だが、氏康が見せた挟撃策は信玄の心胆を大いに寒からしめた。

Mimase

兵

大量動員が生んだ新たな戦闘方法

歩兵の武器として最も一般的な槍は、鎌倉期に一時薙刀に押されて使われなくなったが、南北朝期になると穂先が細身の槍が登場し、再び戦場で使用されるようになる。合戦の様相が個人戦から集団戦へと変化し、扱いの簡便な槍が重視されるようになったためと考えられる。

武器としての槍の重要さは、戦国時代になるとさらに顕著となり、合戦の主力兵器として多く用いられるようになった。この間、集団戦闘の中でより有利な長槍が登場し、中には長さ三間半（約六・三メートル）に達するものもあったという。やがて戦場で鉄炮が使用されるようになっても、白兵戦で威力を発揮する槍は、戦国時代を通じて主力兵器としての地位を守り通すこととなる。

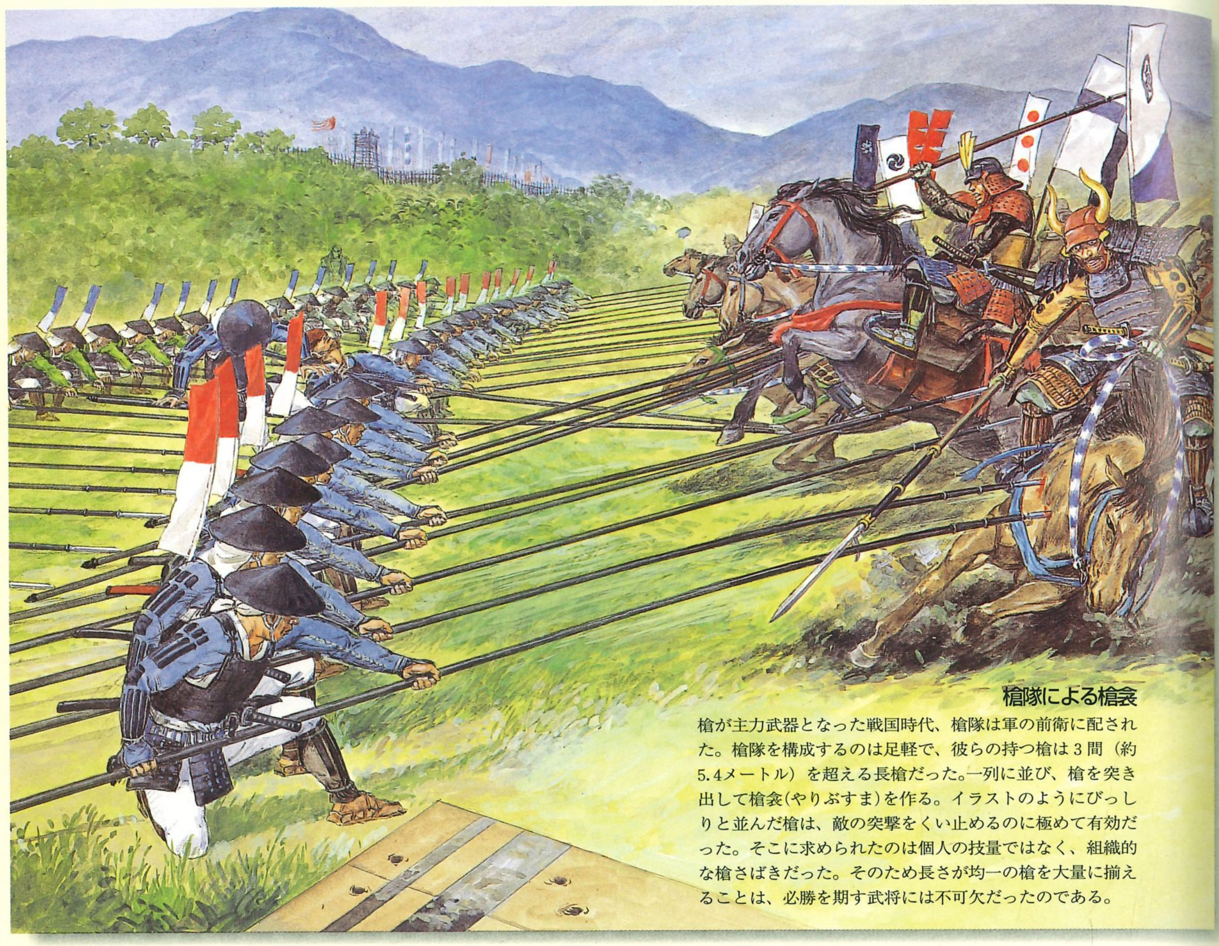
槍が戦場での主力武器になると、武士は必ず所持するものとなり、その一方で足軽にも槍組が編成され、主である武将から貸し与えられるようになった。

では、実際の戦場において槍はどのように使われたのか。

敵味方が相対し、まず弓や鉄炮などの遠射武器で応酬しあい、そののち槍隊を先頭にして進軍が開始される。敵の騎馬が突撃してきた場合には、柄の尾部にある石突を地面に突き刺して槍を固定し、敵の騎馬を迎え撃った（左ページのイラスト参照）。

手に持った状態では馬の勢いに飛ばされてしまうからであり、こうすることで馬に重傷を負わせ、騎馬武者を落馬させることができる。さらに混戦となって槍隊同士の戦いになると、刺すだけでなく、穂や柄の先端の太刀打ちで敵をぶっ叩いたり、相手から突き出される槍を払うなどした。

槍で敵を攻撃する場合には狙い所があった。脇の下か腕の内側あるいは大腿部など、甲冑で覆われていない、隙間の急所を突くのである。



槍隊による槍衾

槍が主力武器となった戦国時代、槍隊は軍の前衛に配された。槍隊を構成するのは足軽で、彼らの持つ槍は３間（約5.4メートル）を超える長槍だった。一列に並び、槍を突き出して槍衾（やりぶすま）を作る。イラストのようにびっしりと並んだ槍は、敵の突撃をくい止めるのに極めて有効だった。そこに求められたのは個人の技量ではなく、組織的な槍さばきだった。そのため長さが均一の槍を大量に揃えることは、必勝を期す武将には不可欠だったのである。

また甲冑の上からでも突いたり叩いたりして、相手に打撲を与えたり、兜を叩いて脳震盪を起こさせたりした。甲冑そのものはかなり防御性に優れていたが、槍で正面から突かれたときには突き破られることもあったという。

このほか槍は、川や堀を飛び越える際に使われたり、柄に目盛りをつけて物の長さを計ることにも使われ、さらに物干し竿や天秤棒にもなった。工夫次第でその用途はさまざまだったのである。

騎馬武者が使う槍は馬上で扱うため、足軽の長槍よりずっと短かった。

馬上では穂を左にして持つのが作法とされ、敵の騎馬と相対する場合、敵が刀なら自分の右側で迎え撃ち、敵が槍なら左側で受けたという。

また、槍を持った騎馬武者が突撃してきたときには、すれ違いざまに刺しても引き抜く余裕がないため、もっぱら叩いたり払ったりして、相手を落馬させることが多かった。

このように槍が武士にとってなくてはならない武器になると、その扱い方は「槍術」として洗練されてゆき、やがて宝蔵院流、佐分利流、香取神道流、貫流など独自の流派が生まれた。

長槍と短槍 戦国期には、一人前の武士と認められた者は槍を所持することが必須とされた。槍はその使い勝手のよさから、多くの足軽も使用するようになり、やがて戦場での主力兵器となっていった。『信長記』には、イラストのような長さ３間半（約6.3メートル）の槍が使われたと記されている。一般的に騎馬武者の槍は操作性を考慮して、１間半～２間（約2.7～3.6メートル）の槍が用いられた。柄の材質は竹や木で、木製のものは主として樫だった。

天下争乱

元亀（1570.4.23改元～1573.7.27）

姉川の戦い
今山合戦
延暦寺焼き討ち
三方ヶ原の戦い
堺
工兵

〈執筆・監修者〉
谷口克広（本文執筆） 58・68
工藤章興 62
吉田 豊（本文執筆＋イラスト監修） 64
兼康保明（本文執筆＋イラスト監修） 66
大山 格（本文執筆） 72

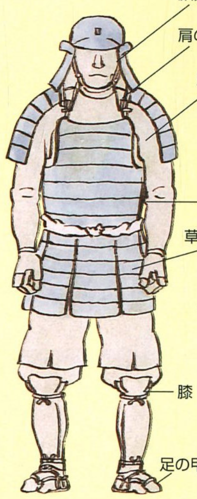
〈イラストレーター〉
谷井建三 58・64
藤井康文 60・68
伊藤展安 62・72・74
香川元太郎 66
大川 明 70

Column 騎馬武者と足軽

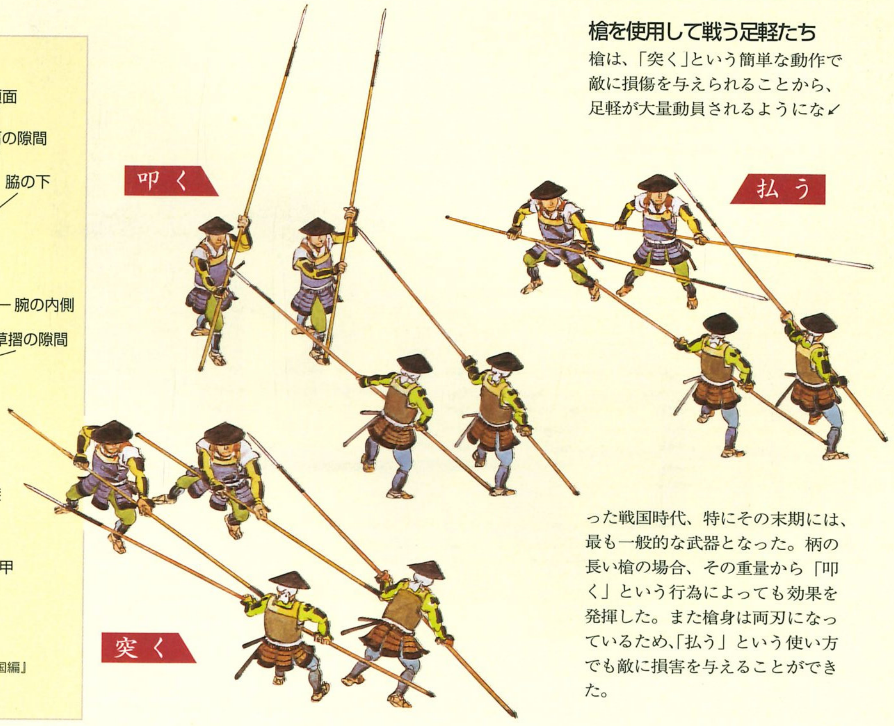
母衣武者

背中の母衣（保侶・ほろ）は当初骨組みがなく、風をはらまなければ膨らまずに格好悪かったため、武者姿が凛々しく見えるように、鯨の髭で籠状の骨組みを作って、つねに膨らんで見えるように工夫された。もともとは流れ矢を防ぐために用いられたが、その後はより装飾化し、いつの頃からか竹で骨組みされるようになった。また、戦国期には多くの騎馬武者は扱いやすい槍を携行したが、「大坂夏の陣図屛風」に見えるように、薙刀を持った者もいたらしい。
（説明文監修＝北川 央・大阪城天守閣主任学芸員）

槍の有効攻撃箇所



参考資料：岡本良一著
『図説 大坂の陣』（創元社）
『戦略戦術兵器事典②・日本戦国編』
（小社刊）



槍を使用して戦う足軽たち

槍は、「突く」という簡単な動作で敵に損傷を与えられることから、足軽が大量動員されるようになった戦国時代、特にその末期には、最も一般的な武器となった。柄の長い槍の場合、その重量から「叩く」という行為によっても効果を発揮した。また槍身は両刃になっているため、「払う」という使い方でも敵に損害を与えることができた。

元亀元年六月［1570］▷滋賀県

姉川の戦い

戦国最大級の野戦！ 総勢四万の軍が激突!!

（イラストは姉川で激突する両軍をイメージして描いています）

織田・徳川連合軍 ✕ 朝倉・浅井連合軍

元亀年間は、織田信長にとって苦悩の期間であった。その苦悩は、元亀元年（一五七〇）四月の越前遠征の失敗からはじまる。越前敦賀郡に攻め込んだ信長の軍は金ケ崎城などを次々と落とし、いざ木芽峠を越えて朝倉氏の本拠に襲いかかろうとした。だが、この時、盟友浅井長政の裏切りの報せが入り、信長は朽木越えで辛うじて京都へ退却するという事態となった。

長政は信長の妹お市の夫、つまり義弟である。しかし、この時以来彼は、信長にとって敵の中でも最も憎い存在になってしまった。

この年六月、信長のもとに朗報が届いた。近江坂田郡全域に勢力を張っている堀秀村が誼を通じてきたのである。信長はすぐに江北出陣の命令を出した。

信長は六月十九日、部将たちの参陣も待たずに出陣した。そして、その日のうちに堀の持ち城の長比城に入り、軍勢が揃うのを待った。軍勢を整えた信長は二十一日、一気に進軍し、小谷城の南方約二キロの虎御前山に着陣した。そして、小谷の城下町を放火させた。浅井軍を誘い出す作戦である。だが長政は、圧倒的に優勢な敵の作戦には乗らず、城内に籠もったままだった。

小谷城は、琵琶湖からの比高三〇〇メートルあまりの山頂に築かれた要害である。力攻めするにはかなりの犠牲を覚悟しなければならない。それどころか大軍をもってしても一気に攻め切るのは難しいかも知れない。信長は初めて小谷城を見てそう感じたのだろう。ここで彼は長期戦を覚悟せざるを得なかった。

長期戦のためには、近辺の城を奪って前線基地を作るのが先決である。信長は小谷城南方一〇キロほどの地点にある横山城にねらいを付けた。

二十二日、信長は小谷城下から退却した。そして、軍を横山城近辺の龍ケ鼻まで移動させた。

二十四日から横山城攻めが開始された。そのさなかに徳川家康が五千余りの兵を率いて合流した。

一方の浅井方にも援軍が到着した。いうまでもなく朝倉軍である。朝倉景健を大将とする約八〇〇〇の軍勢が、二十六日に小谷城下に入ったのである。

長政は強力な援軍を得て、横山城後巻きを決意する。浅井軍は小谷城を出て朝倉軍と合流、南西に向かって動いて大依山にまで進んだ。両陣

営を隔てる距離は五キロほど、中間に姉川が流れている。

二十七日夜、闇にまぎれて朝倉・浅井軍が動いた。浅井軍は野村まで進み、それに引きずられるように朝倉軍も三田村まで進出したのである。ここに両軍は、姉川を挟んで向かい合う形となった。

ここまでの朝倉・浅井軍の動きを見ると、常に浅井が主導している。敵陣営の信長・家康も含め、この時点で最も決戦を望んだのは浅井長政だった。信長を裏切った以上、彼を倒さなければ滅亡あるのみ。長政はいちかばちかの戦いを挑もうとしたのだろう。

六月二十八日の朝を迎えた。川を挟んで陣を敷いた両軍には、もう遭遇戦以外の選択肢はなかった。

午前十時、徳川軍が真向かいに布陣している朝倉軍に襲いかかったところから戦いは始まった。その東方の位置では浅井軍が織田軍とぶつかり合った。

朝倉軍八〇〇〇、浅井軍六〇〇〇。それに対する織田軍は二万ほど、徳川軍は五〇〇〇という。合計四万近い兵が、絵に描いたような遭遇戦を展開した。このような戦いの場合、兵力に勝るほうが有利なのは常識である。

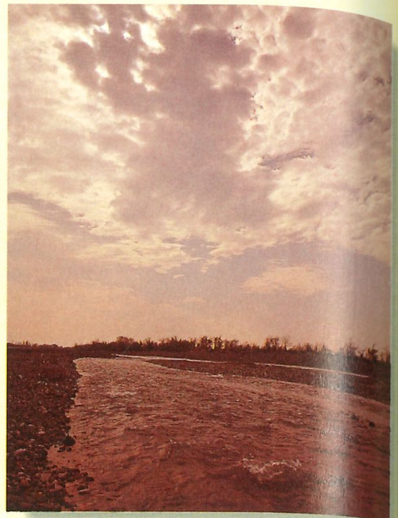
ところが、劣勢にもかかわらず浅井軍は、織田軍の備えを次々と打ち破り、信長の本陣に肉薄したという。それはやや大袈裟だと思うが、この戦いに向けた意気込みを考えると、浅井軍がかなり善戦したことは想像がつく。

戦いはそれほどの時間を要しなかった。おそらく正午過ぎには決着したのではなかろうか。崩された朝倉・浅井軍は、小谷城へ向かって逃げた。それを織田・徳川軍は追撃した。この追撃戦も含めて、朝倉・浅井軍の戦死者は八〇〇〇人あるいは九〇〇〇人余りという。戦いの後に信長が発給した文書にも、「野も田畠も死骸ばかりに候」「首数の事、さらに校量（較量＝比べ量ること）を知らず」とある。どれも大袈裟な数字、大袈裟な表現だが、追撃戦の時に朝倉・浅井軍にかなり大きな被害が出たことは確かだろう。

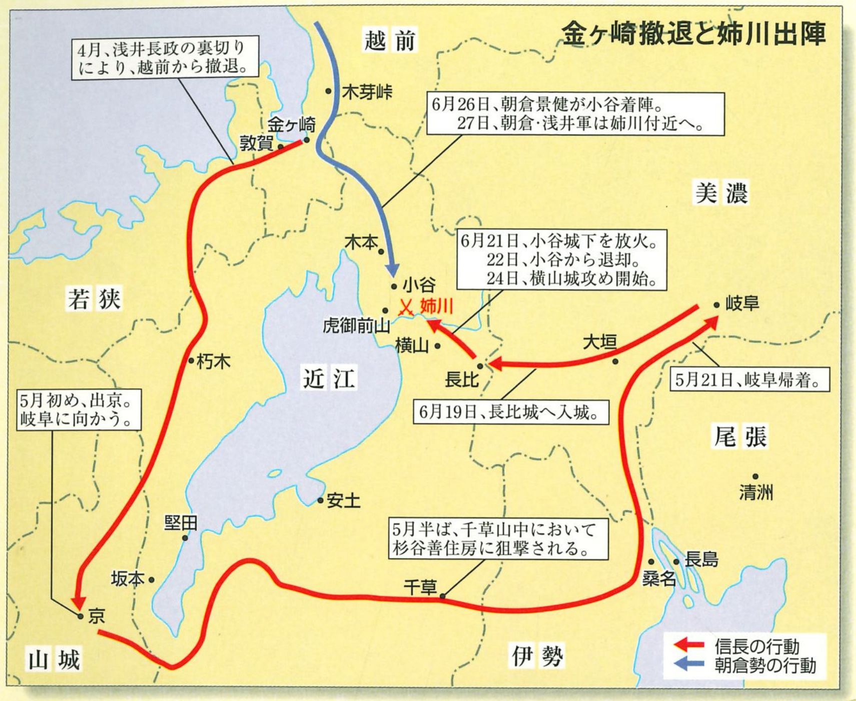
この戦いに勝った信長は、横山城を落として木下秀吉を置き、江北に対する前線基地とする。さらに南方に孤立した佐和山城を囲み、翌年二月に開城させた。

姉川の戦いは、信長と朝倉・浅井の決戦ではあったが、負けた朝倉・浅井に決定的なダメージを与えたわけではない。だが、信長にとって一時ピンチに陥っていた近江の経略を回復させる大きなステップになったことは確かである。

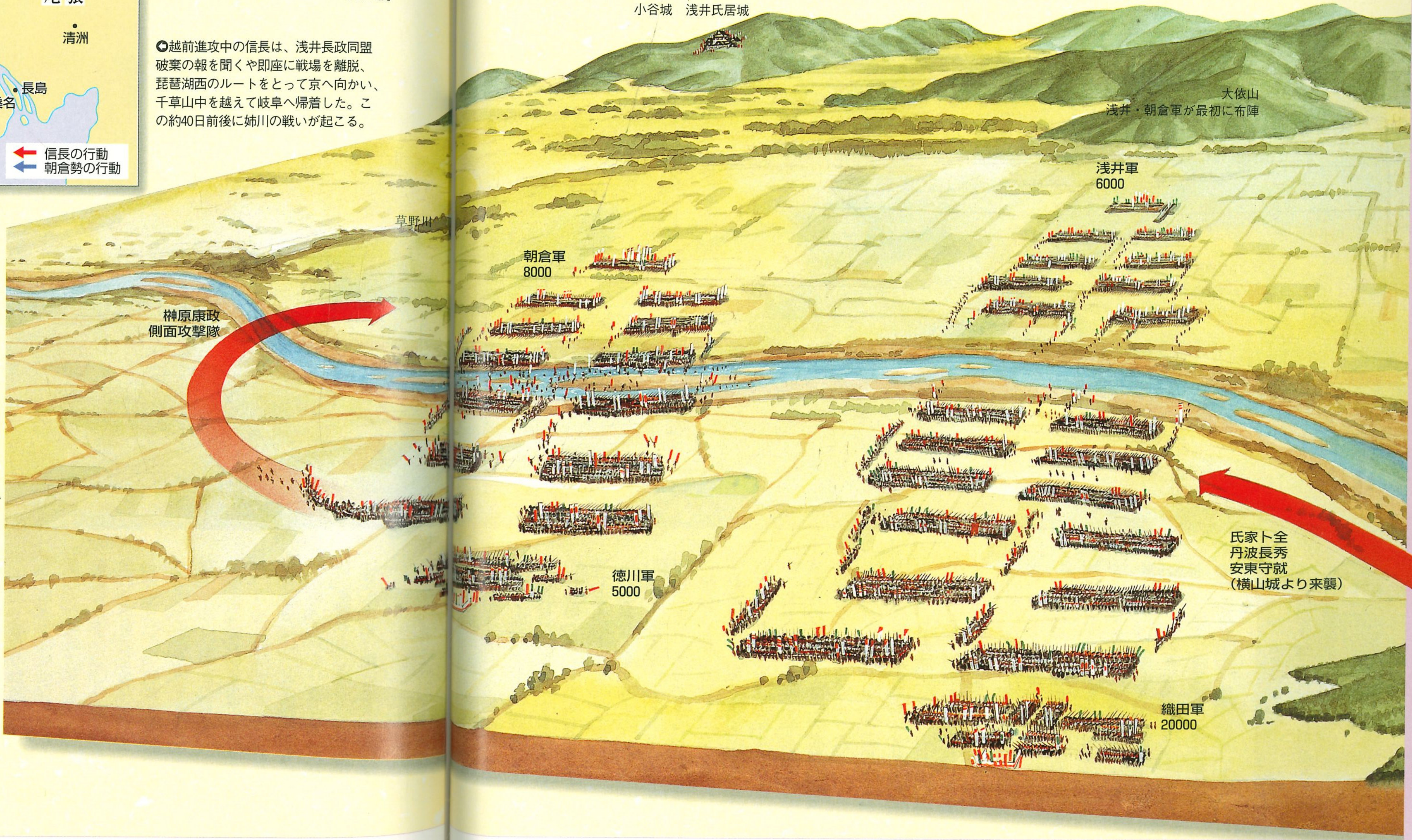
（谷口克広・港南中学校教諭）



⬆戦国最大級の激戦となった姉川古戦場。



⬆越前進攻中の信長は、浅井長政同盟破棄の報を聞くや即座に戦場を離脱、琵琶湖西のルートをとって京へ向かい、千草山中を越えて岐阜へ帰着した。この約40日前後に姉川の戦いが起こる。



今山合戦

元亀元年八月［1570］▷佐賀県

"肥前の熊"勇躍！大友軍の包囲網を撃破！

龍造寺隆信✖大友宗麟

降伏か徹底抗戦か——。

元亀元年（一五七〇）八月十九日。佐嘉城内では、重苦しい雰囲気の中、最終軍議が開かれていた。

豊後の大友宗麟が龍造寺隆信討滅の大軍を催して佐嘉平野になだれ込んだのは、五か月前の三月末。以来、佐嘉城は大友軍の完全包囲下にある。

大友軍は戸次鑑連（立花道雪）をはじめ、神代長良、有馬義純、大村純忠ら六万余（一説に八万余）を呼号する大軍団がびっしりと城を囲む。一方の龍造寺軍は総兵力約五〇〇〇。

だが、城兵の士気は高く、大友軍も積極攻勢には出られない。宗麟は長引く攻城戦に業を煮やし、弟の大友親貞に三〇〇〇の兵を与えて佐嘉城の一挙殲滅を命じた。

八月十七日、親貞は城の西北約六キロの今山に本陣を設営し、総攻撃を三日後の二十日とした。

憂色漂う龍造寺軍の軍議のさなか、「今夜、今山の本陣で酒宴が開かれるらしい」との情報が飛び込んできた。これを好機と見た鍋島信生は、夜襲を申し出る。だが危険な賭けとあって、隆信以下の諸将は同意しない。見かねた隆信の母・慶誾尼が叱咤するに及び、ようやく夜襲決行に一決した。

佐嘉城を発した奇襲部隊は、声を殺して今山の背後によじ登る。夜襲の警戒などまるでせず、大友勢は酒宴に興じていた。敵が酔いつぶれて寝込んだ午前六時、ついに信生の下知が飛んだ。開戦前の無気味な静寂は一瞬のうちに突き破られ、凄まじい銃声が轟きわたる。奇襲部隊は一気に坂を駆け下り、餓狼のごとく親貞の本陣へ襲いかかった。

不意の急襲に大友軍は状況も把握できないばかりか、神代長良が裏切った、などの偽情報が混乱に拍車をかける。前夜の酒宴の場は修羅の巷と化し、悲鳴や絶叫、怒号が飛び交う中、大友軍の将兵は防戦らしい防戦もできず次々と討たれ、死体の山が築かれていった。

親貞はこの混乱の中で討死し、大友軍は総崩れを起こして潰走した。時に午前八時頃という。大友勢の死者は二千余。龍造寺軍の圧勝だった。

『歴代鎮西誌』にいう。

「隆信の猛威ここに始まる」

と。今山合戦は龍造寺隆信にとって起死回生の一戦であり、この勝利を契機に猛烈な勢いで版図を拡大、五州二島の太守へとのしあがるのである。

（工藤章興・作家）

堺

日本の最も富める港 信長垂涎の大交易地

永禄十一年（一五六八）九月、上洛を果たし畿内を一応平定した信長を、将軍義昭は副将軍か管領につけようとした。信長はこれを断わったが、ただ堺と大津・草津に代官を置くことを望んだという（『足利季世記』）。

確実な資料ではないものの、堺と信長との関係を象徴する逸話であろう。

信長は、本願寺など富裕な寺社のほか、堺にも矢銭二万貫を課すが、堺の会合衆は三好三人衆を頼ってこれを拒否した。

一方で、この永禄十一年の十月には芥川城（高槻市）に進軍していた義昭と信長のもとに、今井宗久がいち早く参上している。

宗久の行動には、舅である武野紹鷗の遺産をめぐる、紹鷗の実子との紛争を有利に進めたい個人的なおもわくも含まれていたようであるが、伝統的な豪商を主とする会合衆と新興商人である今井氏との利害の相違によるものと考えられる。

これよりほぼ一〇年前の永禄二年（一五五九）の上洛時に、信長は堺見物をしている（『信長公記』）。直轄地とすることで信長が手に入れたかったのは、このとき目の当たりにした、堺が持っている鉄炮製造などの技術力と堺商人の情報力であった。

永禄十二年、堺は信長に屈し、自由都市は敗北したとされている。しかし「日本の最も富める港で、国内の金銀の大部分が集まる」国際的な貿易都市と、宣教師のザビエルさえ注目したほどの堺である。当然、東国にも進出していた堺商人の情報力が、今川義元を破り美濃を平定した信長の力を、それほど過小評価し、判断を誤ったとは考えにくい。

今井宗久の行動に端的に見ることができるように、リスクを分散することで戦国時代を生き抜いてきた「自由都市」の、したたかな多角外交の一環とみることができるのではないだろうか。室町幕府が衰退した後、堺商人は細川氏、そして三好氏と、変転する政権の盛衰に常に対応しつつ、平和を維持してきたのである。

中世自由都市は住民自治によって成立するが、それは通俗的な住民の自由・平等を主眼としたものであるより、商業・貿易活動の自由を目的としたものであったと思われる。たとえば西欧自由都市は、国王によって保護された直轄都市であった。

堺も同様に、天下を統一する織豊政権のもとで一層の商業活動の安全を保障され、自由商業都市として繁栄の絶頂を迎えるのである。

（吉田 豊・堺市博物館学芸員）

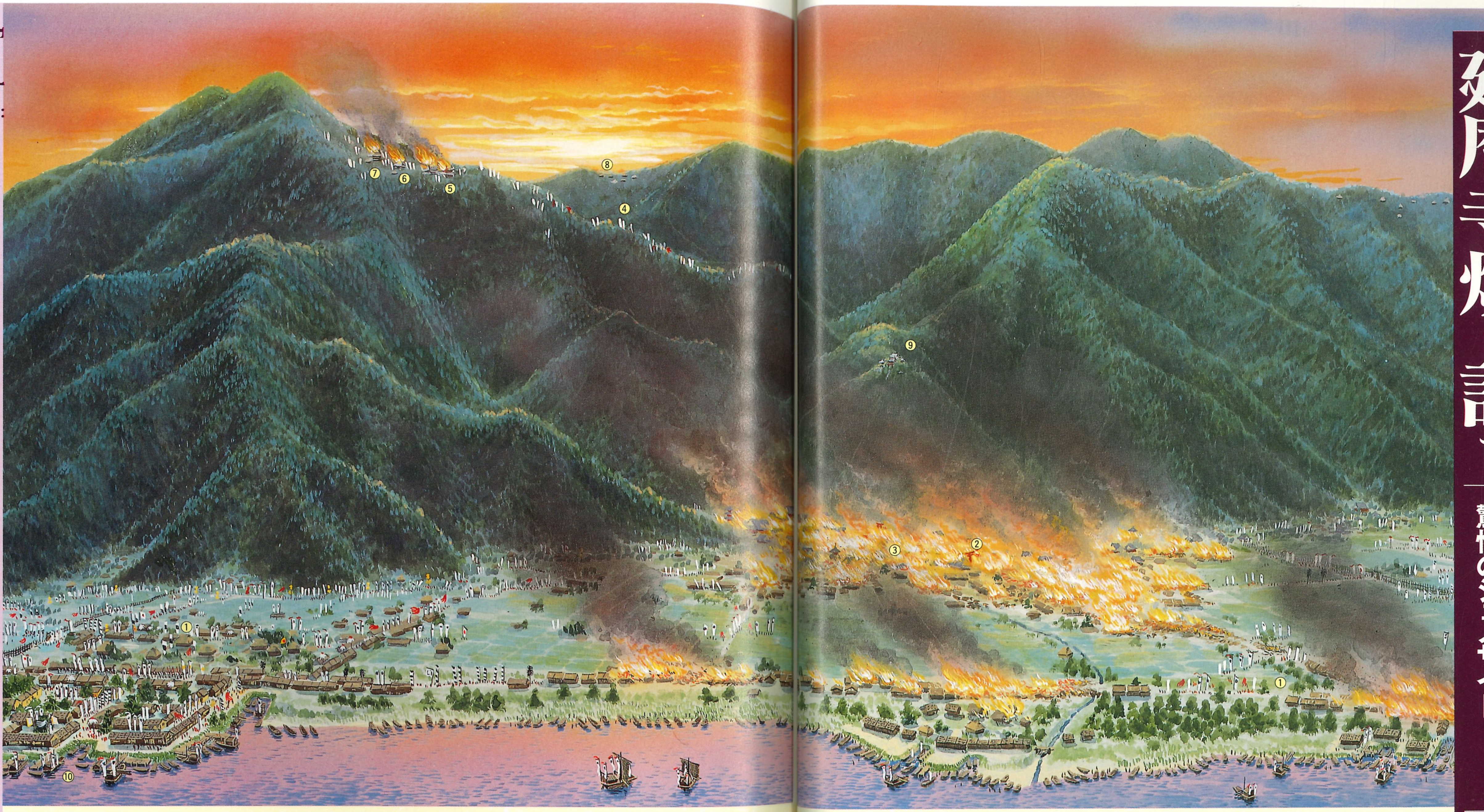
イラストは海から見た中世の堺を推定復元して描いてある。海岸線には砂浜の部分が多く、港（湊）といっても現在のイメージとは異なる。本船（弁財船）は浜や河口、運河などに荷を揚げる伝馬船を曳くが、荷の少ないときは甲板に積んだ。本船が大きいため小さく見えるが、現代の釣船などよりよほど大きなものであった。安土桃山時代以降、石造りの築港も行なわれるようになるが、絵のころはテトラポッドのように石を放りこんで堤防を作る「波よけ」であった。画面右奥に古墳群や生駒の山なみ、最左手に堀が見えていた。

延暦寺焼き討ち

元亀二年九月［1571］▷滋賀県

信長の脅威を知らしめた驚愕のジェノサイド

織田信長×比叡山僧兵



元亀二年（一五七一）九月十二日のことである。南近江の守山・金ヶ森を攻めた信長の軍は、突如湖水を渡り、対岸の坂本を攻撃した。延暦寺の不意をついた信長の軍は、山上山下に次々と火を放ち、日吉社の山王二十一社や延暦寺の根本中堂、大講堂をはじめとする堂舎を、一宇も余すことなく焼き払った。この焼き討ちで、四～五〇〇の堂舎が灰燼に帰し、犠牲者の数は三〇〇〇人にものぼったという。

ところが、三〇〇〇坊と例えられる比叡山の堂坊跡も、近年の発掘調査の結果からみると、その大半は戦国時代以前に廃絶したもので、記録にみられる根本中堂や大講堂の存在はうかがうことはできるが、他の山上の建物は盛期に比べると実に少なく、閑散たる様相を示していた。

また、『信長公記』の記事は、よく注意して読むと、比叡山も攻めてはいるが、具体的な戦いの描写は、実は山麓にある坂本のできごとである。有名な虐殺については、日吉社の神体山で標高三八〇メートル程の八王子山でのできごとで、比叡山の標高六～七〇〇メートル程の山腹にある講堂でのことではない。

しかし、比叡山にある建物の放火は、たとえ建物の数は少なくとも、夜間には山全体が赤く燃え上がって火芒を放ち、昼間であれば黒煙があがり、かなり遠くからでも眺められたことであろう。当時の人々にとって、比叡山より上る煙は、何にもまさる衝撃であったにちがいない。

信長の真のねらいは、弱体化しながらも伝統的な権威を保持していた延暦寺を焼き討ちすることにより、労せずして天下に自らの力を誇示することにあった。

（兼康保明・滋賀県民俗学会理事）

①主力が琵琶湖を渡り、一部は陸路を来た織田軍は、麓の坂本にある②日吉社の山王二十一社や③延暦寺の里坊を次々と焼き払った。また④織田軍の一隊は山道を駆け上がり、⑤山門や⑥根本中堂、⑦大講堂などの建物にも火を放った。また一部は⑧西塔にも向かった。延焼により延暦寺の山々は山火事の状態となり、京方面からも火災がみうけられたという。日吉社や坂本などから逃走した人々は⑨八王子山に籠もったが、翌9月13日にも攻撃を受け、その多くが虐殺された。⑩琵琶湖の水運で栄えた坂本の港町の一つ（イラストは発掘調査などにより推定復元したものです）。

元亀三年十二月［1572］▷静岡県

三方ヶ原の戦い

家康軍を粉砕！巨星が放つ最後の光芒

武田信玄 ✖ 徳川家康

元亀三年（一五七二）十月三日、武田信玄は躑躅ヶ崎の館を出陣した。三万近い大軍だった。信濃から遠江へと南下した武田軍は、徳川家康の居城浜松の北方約二〇キロに位置する二俣城を攻撃し占領した。その後、二俣城から浜松城に向かう。

しかし武田軍は十二月二十二日、浜松までわずか三キロの欠下まで進みながらも、浜松城を攻めようとせず、北西に進路を変えて三方ヶ原に転進した。敵が浜松城を囲んだならば籠城、と考えていた家康は面食らった。目の前を通り過ぎてゆく敵軍にどう対応したらよいのか。だが結局家康は、出陣して武田軍と野戦をする決意を固める。

この時の家康の決意は、江戸時代に書かれた本では、「敵が我が庭を蹂躙して通って行くのを、黙って見逃すわけにはいかない」と言って出陣に踏み切ったことになっている。だが、当時三十一歳の血気盛んな家康だとて、そんな意地だけで命を賭けた決戦を決意したわけではないだろう。出陣せねばならない、切羽詰まった事情があったはずである。

事情の一つは、織田信長からの援軍が来ていたこと。これは家康の監視役も務めている。ここでおとなしく武田軍を通過させたならば、信長がどんな態度に出るかわからない。

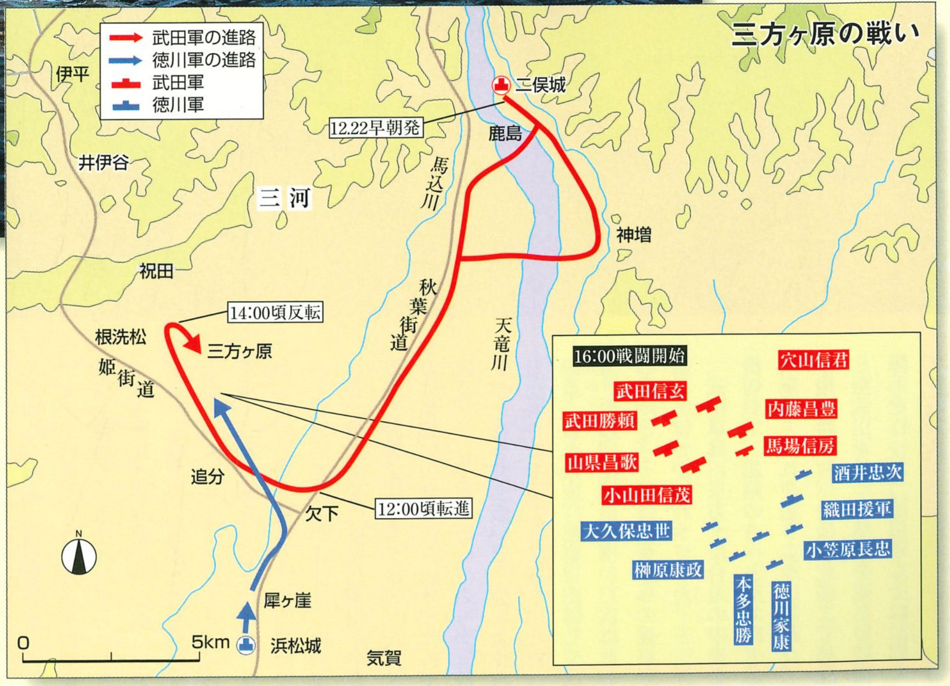
事情のもう一つは、遠江・三河の地侍のことである。彼らは当然、強い大将の庇護を期待している。だから、武田氏の勢力が遠江・三河の北部まで進出してくると、徳川から武田へと鞍替えする者が続出した。すでに家康は、丸裸に近い状態なのである。ここでともかく、いちかばちかの一戦を交えないと、彼ら地侍たちが戻ってくることはありえない。

こう考えた末、家康は出陣して三方ヶ原に向かった。率いた兵は八〇〇〇ほど、それに信長からの援軍三〇〇〇ほどが加わっていた。

武田軍は、三方ヶ原台地の中央を横切って、北端の方へと動いた。徳川軍は、それを追うように進んだ。午後四時ころ、台地の北端まで移動した武田軍は、突然踵を返して戦闘隊形を作った。徳川軍もそれに応じて左右に広がって臨戦態勢をとった。武田軍がわざわざ移動して徳川軍を追蹤させたのは、できるだけ敵を居城から遠ざけ、追撃の効果を上げようという作戦だったのである。

日がすっかり西に傾いた中で、戦闘が繰り広げられた。徳川軍一万一

⬆二俣城は今川氏時代、天竜川と二俣川の合流する丘陵の上に築城された。現在、天守台などの石積み遺構はあるが、これらは天正期の徳川家家臣、大久保忠世時代のものと考えられている。三方ヶ原の前哨戦として、信玄はこの城を落とした。そのおり、城の水の手である井戸櫓を、急流に流したいかだでこわし、城を落としたという。①本丸②井戸櫓③二の丸④西曲輪⑤天竜川⑥二俣川⬉イラスト内写真は復元された井戸櫓。



〇〇〇に対して、武田軍はその二倍を超えた兵力だった。

戦いは、小勢ながらも徳川軍がよく敢闘したといわれている。しかし、そのように書いている本は、やはり江戸時代に成ったものばかりである。結果は負け戦だったけれど、できるだけ大神君の威光に疵がつかないよう配慮したのだろう。午後四時ごろに始まった戦いがその日のうちに決着がついたのだから、徳川軍の完敗だったことはまちがいない。結局は兵力の差がそのまま結果として現れた戦いであった。それに織田の援軍が闘志不足だったことも、敗因の一つだったようである。

この時の織田援軍とは、佐久間信盛・平手汎秀・水野信元の三将である。佐久間は織田軍の最有力部将、平手は織田家代々の家老の家、水野は尾張から三河にかけて大きな勢力を持つ一族の惣領である。そのような三人が集まって三〇〇〇の兵とは、あまりにも少なすぎる。しかも、佐久間も水野もさっさと戦場を離れたようだし、戦死した平手にしても、逃げたところを討たれたものらしい。援軍とは名ばかり、はじめから家康を監視するためだけに派遣された者たちだったのかもしれない。

さて、三方ヶ原での戦いに勝った後、信玄は三方ヶ原台地の麓の刑部で越年し、一月に三河の野田城を囲んだ。二月中旬に野田城を攻略するものの、彼の進軍はここで止まってしまう。病が重くなったのである。そして四月十二日、退却途中の信濃駒場で死ぬ。

思えば、十月三日に甲府を出陣して以来の信玄の進軍は、じれったくなるほどゆっくりである。占領した二俣城に約一か月も滞在したり、刑部をしばらく動かなかったり。おそらく病に蝕まれた身体をだましだましの進軍だったのだろう。

信玄が上洛の夢を持っていたことはまちがいない。しかし、果たしてこの元亀三年の遠江・三河への出陣がそのまま上洛を意図したものかどうかについては、意見の分かれるところである。

おそらく信玄の頭には、一気に上洛するという青写真はなかったであろう。確かに将軍義昭をはじめ朝倉・浅井、松永久秀、それに本願寺とも連絡をとって、信長を牽制させていた。だが、信長の本拠尾張・美濃を突っ切って近江まで進軍するのは至難の業である。第一長く伸びた兵站線をどうするのか。

遠江・三河を確保し、チャンスがあれば信長と一戦を交える、このあたりがこの時の信玄の目標だったのではなかろうか。

（谷口克広・港南中学校教諭）

工兵

戦場及び行軍における特技集団の「仕事」

疾きこと風の如し。武田信玄が旗に掲げた『孫子』一四字の冒頭には、迅速さを重視すべき旨が記されている。

山深い甲斐や信濃を策源地としながらも、武田勢は何度となく山を越えて他国へ進出している。なかでも信玄が上洛を目指して進撃したといわれる西上作戦においては戦略的奇襲を成功させるために谷間の街道を避け、南アルプスの山間部の難路を進み、いくつもの峠を越えて遠江へ侵入した。

武田勢の神出鬼没な戦略機動を可能にしたのは、山々に設けられた城砦群に兵糧、弾薬など戦略物資を備蓄していたこともあろうが、現代でいう工兵的な作業に長けていたことも併せて考えるべきであろう。

武田氏の金掘衆はその名のとおり金山の坑道を掘る専門職の集団である。彼らの土木技術が攻城戦に用いられたことはよく知られている。城の地下に向けて坑道を掘り、井戸の水脈を断つなどは朝飯前のことであったろう。これは、いわば戦闘工兵といった用いられ方である。

こうした土木技術は、もっと地味な部分でも用いられていたに違いない。一度大雨が降ればたちまち川と化すような山道を応急的に通行可能にするようなことも、金掘衆の手に掛かればたやすいことである。むしろ、こうした作業の方が工兵本来の用いられ方というべきである。

山鹿流の伝承者、山鹿素水が著した『練兵実備』によれば、猟師を狙撃手として採用するなど、専門分野の人材を登用することは、武田、上杉の二氏から起こったことであるという。

近江には石積みの専門技術を有した穴太衆がいて、各方面の大名が競って召し抱えたのは、武田氏の金掘衆の活躍から少し遅れた天正年間以後のこと。

武田氏の軍制を模倣した徳川氏にも黒鍬組という工兵集団があり、また、小普請組という名の組織も有していた。黒鍬組は高度に専門的な技術集団であり、武田氏の金掘衆と同時に戦闘工兵として用いられるべき部隊であったようだが、一方の小普請組は組織が大きく、野戦築城のように大規模な任務に用いられるべき部隊であったろう。

幕末に至って、幕府が新たに

（イラストは山間の道を行軍する武田軍と金掘衆の様子をイメージして描いてあります）

天下布武

天正

前半（1573.7.28改元〜）

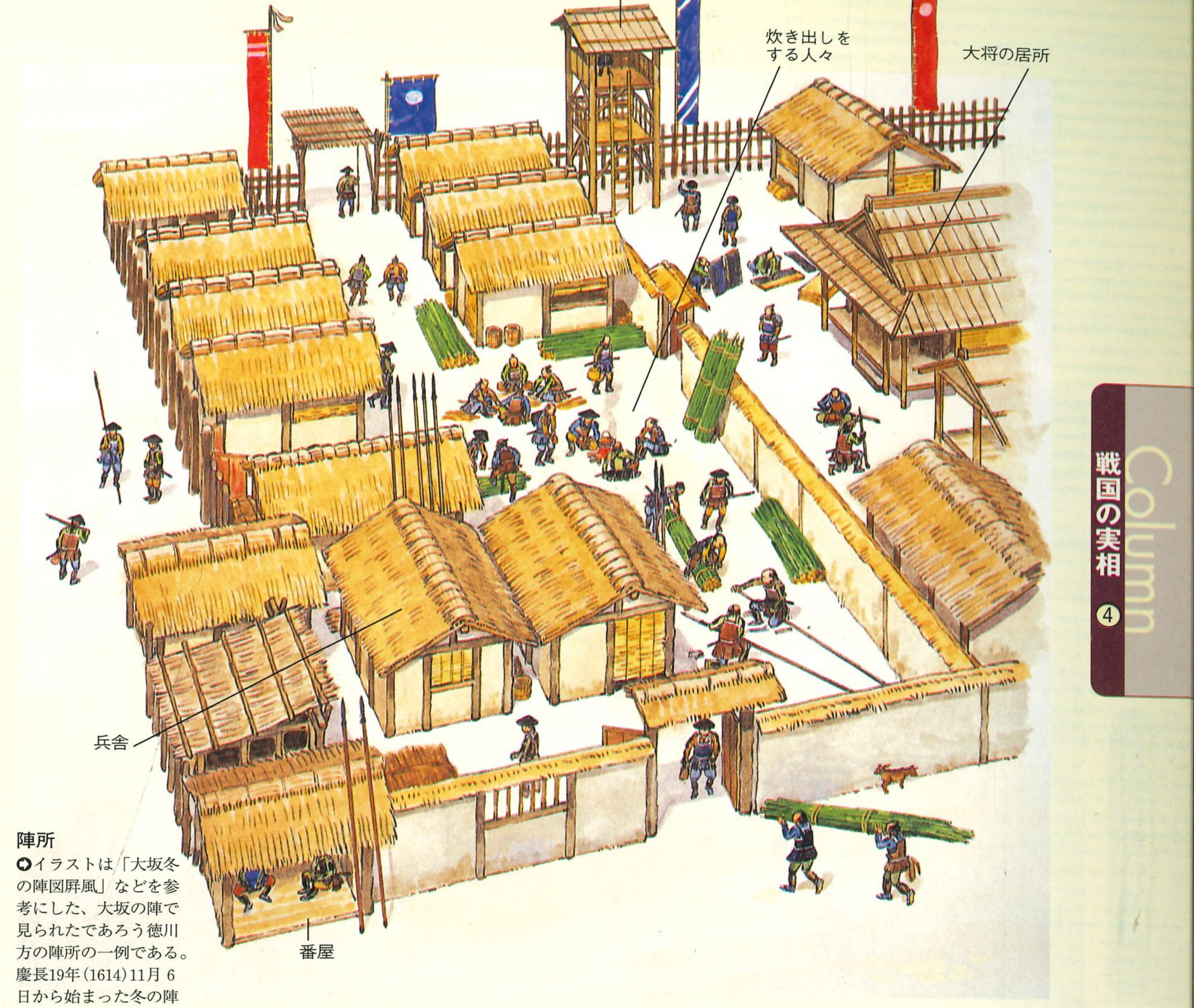
浅井父子自刃
長篠の戦い
安土城築城開始
第一次木津川合戦
有岡城攻め
高城川（耳川）合戦
天目山の戦い
高松城攻略戦

一乗谷
大坂本願寺
鉄炮
安土城天守
七尾城
軍船

〈執筆・監修者〉
青木豊明（イラスト監修＋説明文執筆）　76
小野正敏（本文執筆）　76
中井　均（イラスト監修）　78
仁木　宏（本文執筆＋イラスト監修）　80
谷口克広（本文執筆）　82
秋田裕毅（本文執筆＋イラスト監修）　88
宮上茂隆（本文執筆＋イラスト監修）　90
石井謙治（本文執筆＋イラスト監修）　92／（監修）　104
善端　直（本文執筆＋イラスト監修）　94
小長谷正治（本文執筆＋イラスト監修）　96
中田正光（イラスト監修）　100

〈イラストレーター〉
香川元太郎　76・78・88・102
伊藤展安　80・86・96・100
藤井康文　82・84・85
板垣直誠　87・90・94・98
谷井建三　92・104・106

大坂の陣における工兵の「仕事」



陣所

➡イラストは「大坂冬の陣図屏風」などを参考にした、大坂の陣で見られたであろう徳川方の陣所の一例である。慶長19年（1614）11月 6 日から始まった冬の陣は、12月20日に両軍の和議が成立するまでの約１か月半にわたった。大坂城に籠城する豊臣方の兵はまだしも、大坂城周辺に滞陣した徳川勢兵士は、大坂城の監視・攻撃のためにその期間中、緊張を強いられた。このため陣所には多くの兵舎が設けられ、また炊き出しなどもおこなわれていた。

築山と仕寄道

⬇難攻不落を謳われた大坂城を包囲するにあたり、家康は自軍の損害を最小限に抑えるため、城外にイラストに見られるように盛り土した「築山」を築かせた。築山の上には土の入った俵を積み上げた↘

↘り、竹束を立てて城内からの射撃に備えた。また築山を作るための土は、画面手前に見える「仕寄道」を掘った際の土が使用された。仕寄道は現在でいう塹壕で、城方の射撃を避ける上でも有効な手段であったろう。『高山公実録』には、真田丸の南方に陣した藤堂高虎隊の築山の大きさが「高さ三間余り、東西へ二、三十間ばかり」と記されている。この記述通りなら、藤堂隊の築山は、高さ約5.4×東西36〜54メートルという、巨大なものだったことになる。

創設した陸軍ではフランス式の三兵戦術が採用された。三兵は即ち歩兵、騎兵、砲兵であるが、幕府はこれに土工兵と築造兵を加えている。この土工兵は黒鍬組以来の伝統であろうか、前線に出て弾丸飛び来る中で胸壁（きょうへき）を築くなど、戦闘工兵として活動しているのである。彼らこそは武田氏が誇った金掘衆の末裔（まつえい）というべきである。

（大山格・歴史研究家）

一乗谷

名族・朝倉氏の築いた優雅なる要害

「一乗ハ、山ノ間ノ谷也」

奈良興福寺の僧尋尊が『大乗院寺社雑事記』に記したこの言葉が一乗谷を象徴している。

一乗谷は、南北に長く、北の足羽川に開き、とりわけ高い東の山稜には山城が築かれ、南・西も尾根が囲む閉鎖的な世界である。

谷は、上下の城戸で仕切られ、城戸の内と外の世界に分けられる。

城戸の内には、ほぼ中央の朝倉館を核に、馬場や一族の屋敷が集まる地区、武家屋敷、寺院が集まる地区、道路沿いの町屋などにより構成された計画的な町割があった。

また、景観的にも、館や同名衆の筆頭朝倉景鏡に限られた堀・土塁を持つ屋敷、土塁で仕切られた武家屋敷、直接通りに面した鰻の寝床のような町屋など地区毎に異なる空間があった。

城戸の外は、上城戸側の東新町、西新町、下城戸外の阿波賀、中島などには町屋が広がり、山裾には寺院が点在していた。

特に阿波賀は「一乗の入り江」、「唐人の在所」と記され、三国湊からの川湊と美濃街道によるこの町の流通センターである。文献からは、ここに京都など首都圏とも取引をする倉をもつ商人が確認され、また月を単位とする米や麦、綿などの相場も決められる市もたった。

一方、街道のはずれ、武者野には火葬場が確認され、都を追われた足利義材を庇護した「公界所含蔵寺」や一向一揆の加賀の人質、杉浦春学がおかれるなど、そこはまた無縁・公界といった中世都市に特徴的な周縁的様相の空間が広がる場でもあった。

文明のはじめ、孝景が越前をとった時、旧勢力の残る府中の守護所には入れず、加賀に近く、白山衆徒豊原寺の勢力のある坂井平野、平泉寺の勢力の九頭竜川一帯にも入れず、結局、早くより自分の勢力下にあった足羽川地域で拠点を作らねばならなかった。

そんな中、阿波賀のもつ経済拠点としての権益と、すでに一族の屋敷もあり、城塞を作りやすい閉鎖的な地形をもつ一乗谷が選ばれるのは成り行きであった。

（小野正敏・国立歴史民俗博物館助教授）

（イラスト監修＝青木豊昭・福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館館長）

浅井父子自刃

天正元年八月［1573］▷滋賀県

信長の逆鱗に触れた“裏切り”の代償

織田信長 ✖ 浅井久政・長政

浅井長政の裏切りによる、信長対朝倉・浅井氏の戦いも、ついに決着をみようとしていた。天正元年（一五七三）八月二十四日、朝倉義景の首級が届けられ、残るは浅井久政・長政親子の首だけとなった。同月二十六日、信長は近江に戻り、小谷城の付城、虎御前山の砦に入った。そして二十七日の夜より、いよいよ小谷城攻撃は始められた。

小谷城は標高三〇〇～四〇〇メートルの稜線上、約六〇〇メートルの間に、北から南へ山王丸、小丸、京極丸、中丸、本丸と、郭が連なっている。そして、本丸に長政が、久政が小丸にいた。

この城を横から攻めるのは容易ではない。どうしても、稜線上の南北からということになるが、そうすると、展開兵力の数から考えて多大な損害が予想される。

そんなおり、浅井側に内応が出た。中丸、京極丸にいた武将たちだったことから、ここに小丸と本丸の連絡線が遮断されてしまったのである。任にあたったのは羽柴秀吉だった。

小丸にあった久政はそれでも八〇〇ばかりで奮戦したが、衆寡敵せず、ついに自刃して果てた。それが二十八日、そして翌二十九日（九月一日ともいう）、信長による開城勧告に従うことなく、長政も討って出たのち、本丸に戻って同じく自害した。

『浅井三代記』というあまり史料性のよくない本によると、信長は、妹のお市を助けるために、開城勧告では「信実」つまり「誠実な心で」と長政に打診したが、いったんお市とお茶々、お初、お江の三人の子が戻されると、一挙に総攻撃を命じたという。翌年正月、有名な浅井父子、朝倉義景の首の箔濃（漆塗りにして金粉をかけたもの）を肴に酒宴を催したとあるが（『信長公記』）、信長にとっては、浅井父子だけは、どうしても許せない存在だったのであろうことは想像に難くない。

そして、ここに上洛の年より数えて六年、ついに信長は近江平定をなしとげたのである。

❶山王丸❷小丸❸京極丸❹中丸❺本丸❻大広間❼金吾丸。
イラストは南西から見た小谷城。❸❹が破られ城は落ちた。

（イラスト監修＝中井 均・米原市教育委員会）

大坂本願寺

信長を苦しめた一向衆の最大拠点

Column 戦国の風景 ⑤

大坂石山本願寺・寺内町は、明応五年（一四九六）、蓮如が「摂州 東成郡生玉之庄 内大坂」の地に坊舎（御坊）を築いたことにはじまる。

坊舎が置かれた上町台地上は当時、「虎狼ノスミカ」であったという。しかし眼下には古代以来の要港・渡辺津が位置しており、この地が交通の要衝であったことを蓮如が見逃していたはずはない。この渡辺津から台地へあがっていく一本の坂道、これこそが「大坂」（あるいは「小坂」）であった。

寺内町は御坊（本願寺）を中心とし、その周囲に宗主（法主）一族や下間氏ら有力家臣の屋敷を配置していたが、道場、有力坊主らの屋敷の一部は町内に散在していた。

寺内町の住民の多くは商人・職人であったが、芸能民や周辺の田畠を耕作する農民も少なくない。これらの住民の町屋は、必ずしも計画的な町割にもとづいて展開していたわけではなかった。これは、都市域が町民の経済活動の進展にともなって拡大していったためで、特に渡辺津に面したり、京都・河内・天王寺方面への陸路の基点となった部分は、戦国末期にかけて急速な発展を遂げつつあったと推定される。

天文一揆（一五三二～三五年）に際し、法華衆や武士の激しい攻撃をうけた経験をもつ大坂は、防衛施設としての「構」（総構）を発展させる。町の周囲には土塁と堀をめぐらせ、町外に通じる出入り口はくぐり戸をともなう立派な門で守られた。また警戒・攻撃用の櫓が町内に林立していた。

しかし、都市・大坂はむしろその開放性にこそ特徴をもつ。寺内の港には、「唐船」（渡明船）が入港し、大坂を出発した物・人は淀川水運や「河内路」（陸路）を経て京都へ向う。一向宗の盛んな摂津・河内の村々を結ぶ、川と街道のネットワークも発達していた。国際貿易都市、瀬戸内・西国流通の中継ターミナルであり、かつ肥沃で豊かな大阪平野の中心に位置する大坂。そこはまさに「日本一の境地」（『信長公記』）であり、織田信長垂涎の地だったのである。

（仁木 宏・大阪市立大学助教授）

①天満神社とその門前②渡辺津③鎌倉時代、東大寺の俊乗坊重源が建立した浄土堂④「大坂」の地名の由来となった坂道⑤阿弥陀堂と御影堂を中心とする御坊（本願寺）⑥上町台地南方の四天王寺⑦寺内町⑧櫓⑨180°のパノラマ景観が楽しめた「日本一鼻」の道場⑩「唐船」入港中の「寺内之浦」⑪「構」（土塁と堀）の拡張によって都市域を広げる⑫旧大和川を下ってきた物資の陸揚げ地である大沢橋⑬京都への陸路「河内路」⑭淀川⑮大坂本願寺・寺内町を支えた豊かな大阪平野。なお、近年の研究成果により、⑦台地上の寺内町の領域はもう少し画面左寄り（東寄り）に限定されること、②渡辺津の集落は道路よりむしろ、淀川から画面向こう側（南側）に入り込んだ沼沢（湾）の両岸に展開することなどが明らかになっている。

※「石山本願寺」の呼称は、秀吉時代以降に天満の本願寺と区別するためおこなわれたものであるため、ここでは筆者のご教示に基づき、「大坂本願寺」としています。

天正三年五月［1575］▷愛知県

長篠の戦い

織田・徳川軍圧勝！ 火力で最強軍団を撃破！

織田信長・徳川家康 × 武田勝頼

（イラストは織田・徳川軍に突撃する武田軍をイメージして描いています）

遠江・三河まで進軍し、信長をも脅かした武田信玄が死んだ後、武田軍は弱体化しただろうか。戦いに関してはそんなことはない。跡を継いだ勝頼は、美濃・三河・遠江に軍を進めて織田方の明智城、徳川方の足助城・高天神城を攻め落とした。特に高天神城は、かつて父信玄ですら攻略に失敗した敵城である。

三河・遠江を領有している徳川家康は、信玄に蹂躙された旧領をほとんど回復できずにいる。すなわち、三河も遠江も北方の山手にいる豪族たちは、ほとんど武田方のままであり、しかも度重なる勝頼の侵略に居城の浜松近辺まで脅かされるような状態だった。

そうした中で、家康が回復できた唯一といってもよい城が、奥三河の長篠城である。家康はここに、作手城主だった奥平貞能の子信昌を入れて守将とした。

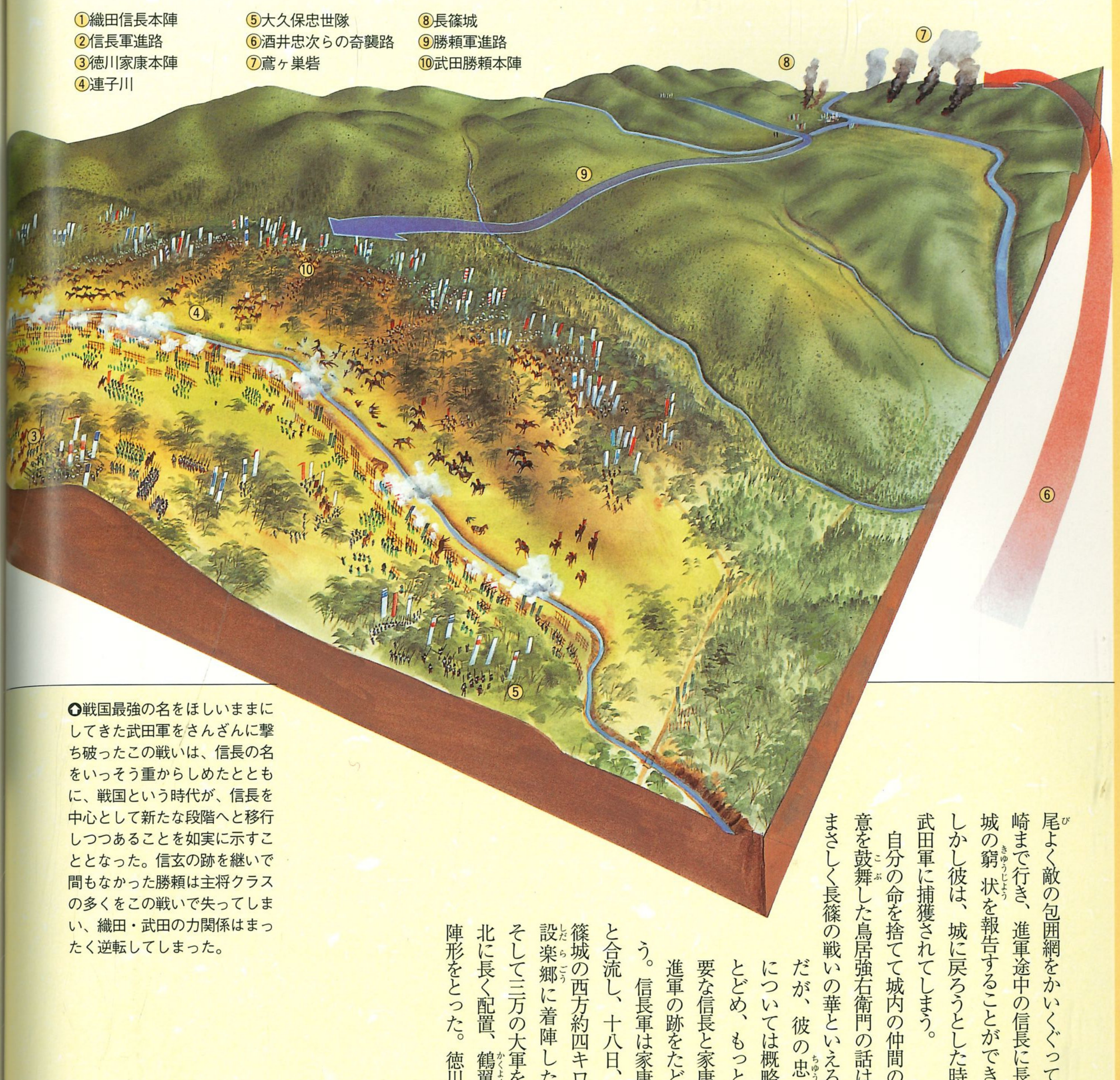
天正三年四月、またも三河に出陣した武田勝頼は、二十一日に長篠城を囲んだ。一万五〇〇〇の大軍である。それに対して城を守備する奥平信昌の兵はわずか五〇〇。勝頼は余裕をもって長篠城を囲みながら、さらに南方の二連木城・牛久保城をも攻めて、一気に三河を掌中に収めようとの気勢を示した。

五月一日、勝頼は軍を引き返し再び長篠城包囲作戦に出た。ここを押さえて、三河攻略の拠点にしようという構えだったのだろう。武田軍の攻撃は執拗に繰り返されたが、城将奥平信昌は懸命に防ぎ止めたのである。

信昌は、つい二年前には武田氏に従っていた。それが信玄の死後、作手城を捨てて家康に降ったのである。この時、武田氏に渡していた人質の弟や許婚が無残に殺されたという。降参は許されないという意識よりも、憎い武田に絶対に降るまいという意地が信昌にはあったのではないだろうか。

意地はあっても、一万を超す大軍に囲まれて、いつまでも籠城を続けられるものではない。主君となっている家康とても、その兵力は五～六〇〇〇、いいように領国を武田軍に蹂躙されている有様である。ここは織田軍が後巻きに駆け付けてくれなければ、攻め破られるのは時間の問題である。

信昌は城が囲まれてまもなく、家臣の鳥居強右衛門を伝令として城から脱出させていた。強右衛門は、首



⬆戦国最強の名をほしいままにしてきた武田軍をさんざんに撃ち破ったこの戦いは、信長の名をいっそう重からしめたとともに、戦国という時代が、信長を中心として新たな段階へと移行しつつあることを如実に示すこととなった。信玄の跡を継いで間もなかった勝頼は主将クラスの多くをこの戦いで失ってしまい、織田・武田の力関係はまったく逆転してしまった。

尾よく敵の包囲網をかいくぐって岡崎まで行き、進軍途中の信長に長篠城の窮状を報告することができた。しかし彼は、城に戻ろうとした時、武田軍に捕獲されてしまう。自分の命を捨てて城内の仲間の戦意を鼓舞した鳥居強右衛門の話は、まさしく長篠の戦いの華といえる。だが、彼の忠節については概略にとどめ、もっと重要な信長と家康の進軍の跡をたどろう。信長軍は家康軍と合流し、十八日、長篠城の西方約四キロの設楽郷に着陣した。そして三万の大軍を南北に長く配置、鶴翼の陣形をとった。徳川軍約六〇〇〇は、その南方高松山に陣を張った。陣の前には塁壁が築かれ、馬防柵が立てられた。

織田・徳川連合軍のこの陣形と設備は、これから一気に武田軍を攻撃しようというものではない。むしろ守備の態勢である。そのままの位置で二日間敵の様子を見ていた。

動いたのは武田軍のほうだった。長篠城の付城である鳶ヶ巣砦にいた勝頼は、二十日に一部の軍だけを残して東へと移動、設楽原まで出て連合軍に向かい合う陣形をとった。両軍の距離は五〇〇メートルもなかっただろう。一触即発の形となったのである。

ここで信長は作戦を立てた。徳川軍の最有力家臣である酒井忠次に鉄砲五〇〇挺を装備した自分の馬廻を添えて、鳶ヶ巣砦を急襲させようとしたのである。午後八時、酒井隊は味方の陣を出発、夜陰に乗じて設楽原の南を迂回し、鳶ヶ巣砦を目指した。

二十一日、設楽原では日の出とともに武田軍のほうから攻撃が始まった。一番山県昌景、二番武田信廉、三番小幡一党、有海原東の丘から次次と武田の部隊が下って連合軍に向かってまっしぐらに進んだ。四番武田信豊、五番馬場信房、武田軍の波状攻撃が絶え間なくくり返された。

東方の鳶ヶ巣砦は、すでに陥落していた。そのため武田軍は腹背に敵を控える形になってしまった。戦い途中でそれを知った勝頼には、このまま突撃を続行して敵を撃ち破るしか選択肢はなくなっていたのである。

武田軍の攻撃を受けながら、連合軍は将も兵卒もほとんど動かなかった。間近に迫る敵をねらって、横に広がっていた一〇〇〇挺の鉄砲が絶え間なく火をふき続けたのである。武田軍の兵も将も、敵に肉薄する前に設楽原の野に転がった。幸運な何人かは、何とか馬防柵までたどり着いただろう。だがそれは、もう軍と呼べるまとまりにはなっていなかった。わけもなく連合軍の兵に討ち倒された。わずかな隙を突いて勝頼が逃れた時には、武田の誇る歴戦の部将たちの大勢が死んでいた。

この長篠の戦いに勝った信長は、以後はっきりと「天下人」の道を踏み出す。七月の家臣たちへの除目、八月から九月の越前一向一揆殲滅、十一月の右大将昇進、同じく家督譲渡、そして翌年の安土城建設に至るまで、その端緒は長篠の戦いの勝利によって東方の脅威を取り除いたことに帰するのである。

長篠の戦いを、中世的騎馬軍団と近世的鉄砲隊の決戦と位置付ける説がある。しかし、織田軍は鉄砲攻撃にあたって三段撃ちなどという組織的な方法を用いたわけではないし、武田軍は騎馬だけで攻撃を繰り返したわけではない。だから、この戦いをそのように解釈するのは正しい見方とはいえない。三〇〇〇挺三段撃ちという通説については、鉄砲数は不確かだし、方法に関しても疑問があり、信じないほうがよい。

だが、この戦いによる勝利は信長にとって、天下人への大きな飛躍の契機となったと意義付けることができるだろう。

（谷口克広・港南中学校教諭）

⬆長篠古戦場跡の復元馬防柵。

復元長篠城
①医王寺山の勝頼本陣
②瓢丸（ふくべまる）
③追手門
④三の丸（巴曲輪）
⑤弾正曲輪
⑥本丸
⑦二の丸（帯曲輪）
⑧野牛曲輪
精強武田軍はなぜ敗れたのか。鉄砲の問題はさておき、武田側に慢心があった、あるいは決定的な敵情誤認があった、などとされるがどうであろう。いずれにしろ、勝頼はこの大敗で致命的な痛手を受けたことは間違いない。（イラスト監修＝高橋延年・三河城郭史談会会長）

Column 戦国の実相 ⑤

鉄炮

戦闘の形態を変容させた新兵器

天文十二年（一五四三）、種子島に来航したポルトガル船員から、領主種子島時堯が二挺の火縄銃を購入したことが、鉄炮伝来の最初とされている（天文十一年説や、もっと早い伝来とする史料もある）。

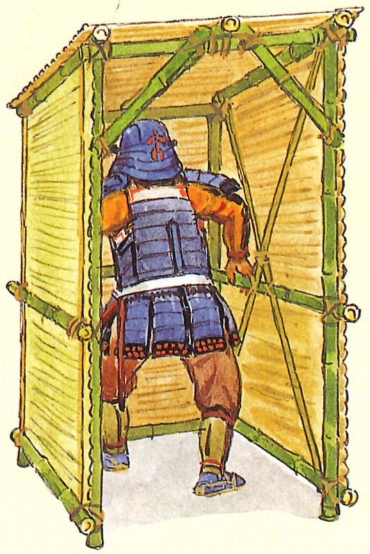
このときの火縄銃は、当時ヨーロッパで普及していたものと異なり、東南アジアで使用されていた、加圧式火鋏を持った銃床が短い頰付けの狩猟用銃（鳥銃）だったといわれる。

いずれにせよ、種子島で刀鍛冶の八板金兵衛が模作に成功したことから出発した和製火縄銃が、ヨーロッパ製のものとは形態も方式も異なる独自の発展を遂げたのは、必然だったといえよう。

種子島での製銃法はいち早く、大別して二つのルートで本土に伝播した。その一つは、伝来の翌年、津田監物が紀州根来に持ち帰った銃を鍛冶師・芝辻清右衛門が研究の末に作り、のち清右衛門が堺に移り住んだとも、堺の商人・橘又三郎が持ち帰って（時期は不明だが）伝わったともいう。もう一つのルートは、やはり伝来の翌年、国友鍛冶として有名な国友村の鍛冶職人らが足利幕府の意向を受け、製造したものとされる。

前者を堺筒といい、後者を国友筒と呼ぶが、堺・国友を中心に各地で始まった火縄銃の生産は、戦国大名らによって大量生産の販路を保証され、さまざまな系統を生み出していった。

◐火縄銃の射撃の瞬間。



我屈の洞

◐1人用の屋外テントともいうべきもので、竹で骨組みした周囲は草や布で覆われており、弓矢や投石による攻撃に備えた。もっとも、鉄炮が広く普及してからは、あまり実用に供したとは考えにくい。天蓋があることから雨天時に夜営する際に使用されたくらいではないだろうか。

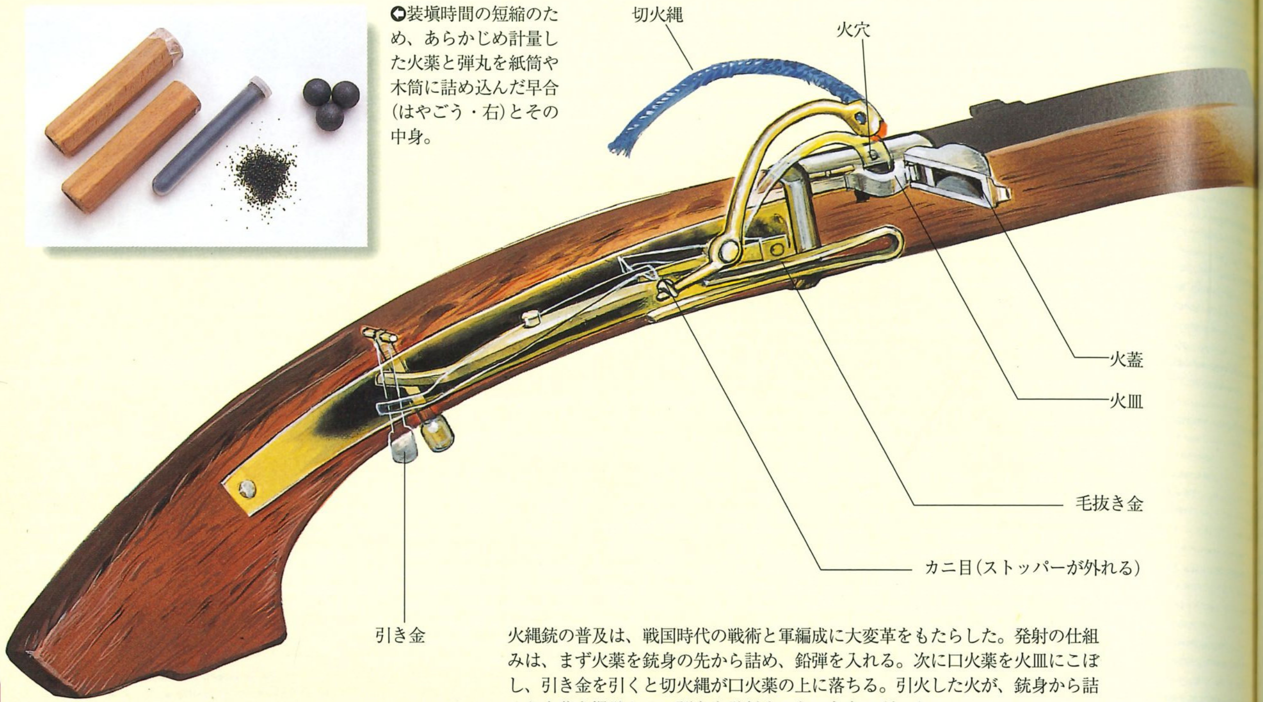
繋仕掛の竹束と鉄楯

◐鉄炮の出現後、板製の楯に比べて弾丸を通しにくく、材料の竹を現地で調達でき、簡単に作ることができたことから、戦場では竹束が多く用いられた。戦国末期の大坂の陣では、『大坂記』に記されるように、幅4尺高さ5尺（約1.1×1.5メートル）、厚さ5寸（約15センチ）の板に厚さ1寸（約3センチ）の鉄板を張り付けた鉄楯が使用されたとあり、これには移動のため下に車がつけられた。なお、イラストは車のない薄手の鉄楯を描いたものである。

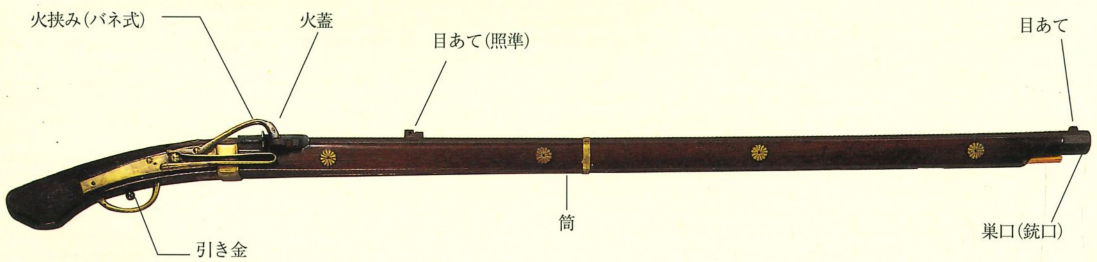
（説明文監修＝北川央・大阪城天守閣主任学芸員）

Column 兵器

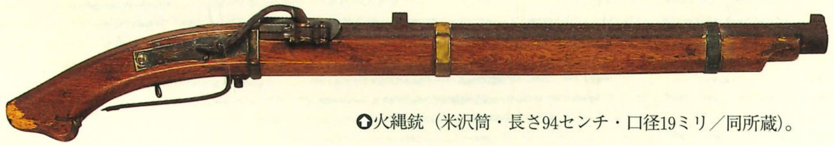
◐装塡時間の短縮のため、あらかじめ計量した火薬と弾丸を紙筒や木筒に詰め込んだ早合（はやごう・右）とその中身。



火縄銃の普及は、戦国時代の戦術と軍編成に大変革をもたらした。発射の仕組みは、まず火薬を銃身の先から詰め、鉛弾を入れる。次に口火薬を火皿にこぼし、引き金を引くと切火縄が口火薬の上に落ちる。引火した火が、銃身から詰めた火薬を爆発させて弾丸を発射するというものだった。



◐火縄銃（作者不明・長さ128センチ・口径18ミリ／鳳来町立長篠城址史跡保存館蔵）。



◐火縄銃（米沢筒・長さ94センチ・口径19ミリ／同所蔵）。

◐長篠城址から出土した弾丸（同所蔵）。

右は長篠城址から出土した弾丸で、天正3年（1575）5月、織田信長・徳川家康の連合軍と武田勝頼が戦った長篠合戦で使用された弾丸とされている。それぞれの弾丸は、①が銅製、②は鉄製、③が鉛製である。当然ながら椎の実形ではなく、球状を示している。

天正四年一月 [1576] ▽滋賀県

安土城築城開始

信長の覇業を支えた大城下町

織田信長

安土城下町の規模に関する記録は、フロイス『日本史』に、

「すでに市は一里の長さにおよび、住民の数は、話によれば六千を数えるという」

とあるように、城下町が四キロほどの長さで、噂では町人や職人などが六〇〇〇人ほど住んでいるという記述だけである。

近年、安土城下町想定地も頻繁に発掘調査されているが、現在までのところ、城下町の実態を窺い知る良好な遺構は発見されていない。それは、城下町が形成されていた台地を削って、周囲の低湿地を埋め立てたり、大規模な耕地整備が行われたりして、遺構が破壊されたためと考えられる。

現在の地割が、信長当時のものかどうかは、道路遺構が検出されていないので何ともいえないが、現時点では、多少の改変はあるものの、基本的には信長当時のものとみてよいであろう。

城下町というと、規格性に富んだ整然とした街路というイメージが強いが、安土城下町は、整然というほどの規格性はない。

それは、城下町建設当初の地形が、現在みるよりもはるかに起伏に富んでいたため、城下町建設を急ぐ信長は、大規模な造成工事をあきらめ、地形にあわせて街路を整備したためと考えられる。

現在、安土地区内に残された地名を、城下町と関係づけて解釈する人が多い。

しかし、そのほとんどは地形などにもとづく自然地名で、確実に城下町と関連すると考えられるのは、相撲取りであった安居眼左衛門の居住地とみられる「眼左衛門」、安土宗論の功労者聖誉貞安が住持した西光寺の所在地たる「貞安」、牛馬の売買を行っていた「博労町」、セミナリヨが所在した「ダイウス」、妻子を尾張に置いて安土に単身赴任していた弓衆・馬廻衆に築かせた「新道」、藍染業者が居住していた「青屋」など、ごくわずかである。

発掘成果があまり望めない現状では、地名の研究は、城下町の実態を明らかにする上で重要な課題であり、今後の成果が待たれる。

（秋田裕毅・郷土史家）

①安土城②摠見寺③セミナリヨ④貞安（西光寺旧地）⑤景清道（中道）⑥御陵道⑦甲賀道⑧惣構どて
信長家臣団の屋敷は、須田地区、岩神・山田地区、出町地区、大須田地区、上豊浦・宮津地区（図の右方向）の五つに区分される。ちなみに出町地区には、織田信忠・信雄、羽柴秀吉などの屋敷があったと想定される。

（イラスト監修＝秋田裕毅・郷土史家）

安土城天守

四海を威圧する五重の塔

日本建築には、古代から寺院建築の系統と住宅建築の系統がある。

寺院建築は、大陸からその技術が導入されてから二〇〇年後の天平年間（七二九〜七四九）には東大寺の巨大な大仏殿と、一〇〇メートル近い七重塔とを生んだ。その後も仏教建築は各時代のシンボルであった。

安土城天守は、城の櫓の系統とともに、足利将軍が造った庭園建築、金閣・銀閣の系統をも引く建築である。金閣・銀閣は下の階は住宅建築で、上の階は禅宗建築であった。

安土城天守も同じ構成であるが、上の階には仏像を安置せず壁画に神仏を描く、下の階には信長自身が住む、そしてそれが塔のようにそびえる、という点において異なっている。

戦国時代は神仏の権威が揺らぎ、人間が前面に出てきた時代である。

安土城では城郭の中に、戦国期の城と同様に祈願所として摠見寺が建立されたが、その三重塔は移築で小規模なものであるのに対して、信長の住まいとしての塔、天守は天守台石垣を含めると大仏殿に匹敵する高さがあり、金閣とは比較にならないほど巨大であった。

かつその機能は多様で、華麗な外観を呈し、内部は優れた絵画に飾られた複雑な間取りを構成していたのである。

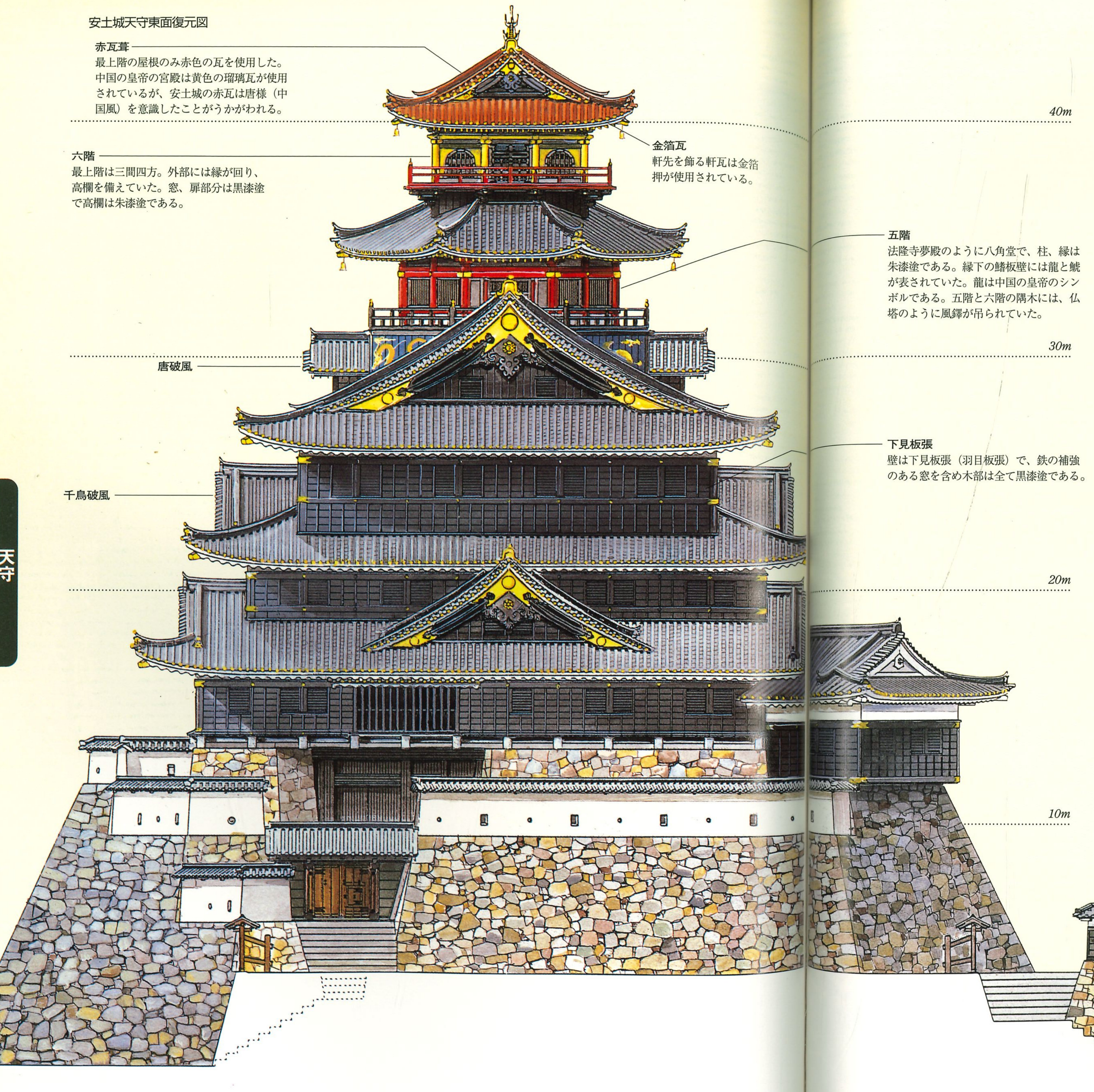
こうした複雑・精密な意匠・↘

安土城址に残る石垣。

↘構造・機能の建築は、日本建築史上において空前かつ絶後であり、その発想はただの建築専門家（大工）によるものではあり得ず、信長という優れて個性的な素人・数寄者のものであることは明らかである。

それにしても、信長の難しい注文に対し、これほど見事な解答を出した大工棟梁、岡部又右衛門父子（尾張熱田大工）の技量には、復元設計者としてただ敬服する他はない。

（宮上茂隆・建築史家／建築家）



天正四年七月〔1576〕▶大阪府

第一次木津川合戦

激突する大船団！快勝！毛利水軍

毛利水軍✕織田水軍

天正四年（一五七六）、織田水軍は本格的に一向宗門徒の弾圧に乗り出し、その拠点——顕如上人光佐が籠もる石山城に総攻撃をかけた。これに対して、兵糧乏しくなった顕如上人側は、その救いを毛利氏に求め、これに応じた毛利氏は警固船三百余艘、兵糧船六百余艘の団員を急遽、大坂木津川口に向かわせたのである。迎え撃つ織田軍は難波・熊野水軍三百余艘。いまや遅しと待ちうけた。

だが、当時戦国水軍の極みに達していた毛利軍は、織田水軍をとり込めて圧倒。船を引き寄せ、敵船になだれ込む従来の戦法でも圧するかと思えば、〝投げ焙烙〟という一種の手榴弾で、敵船を焼失させるという戦法を駆使し、織田水軍に壊滅的打撃を与えた。毛利水軍最後の華にして壮大な海戦が行われたのである。

毛利水軍はこの後、天正六年に同じ木津川口において、織田水軍の鉄板船の前に敗れ去るが、この時点では日本海戦史上、最大の組織力と最高水準の戦術を天下に示したのであった。

（石井謙治・日本海事史学会会長）

七尾城

軍神・謙信が渇望した天険の要害

七尾城は管領家畠山氏の有力庶流能登畠山氏が、大永年間（十六世紀前半）までに越中と能登の境をなす石動山系の要害に新たな領国支配の拠点として築いた城郭で、その麓には城下町も形成された。

七尾城の縄張りは、東側の木落川、西側から南側の大谷川を外堀に見立て、北側には堀と土塁による総構えを築いて守備を固め、山上・山下を一体とした一元的な大名支配を具現化している。

七尾城を拠点とした能登畠山氏による治世が最も安定したのは、第七代畠山義総（守護任官一五一五～四五年）の頃で、京都の文化人らも多く下向し、七尾城を舞台とした文芸活動も繰り広げられた。

この頃に訪れた京都の禅僧彭叔守仙は七尾城の主郭を「天宮」、城下町を「山市晴嵐」と称しているが、近年の調査でその一端が垣間見られてきている。

義総の没後、内乱が繰り返されて能登畠山氏の大名権力は失墜し、遊佐氏・温井氏らの重臣に実権を握られる。こうした内乱の過程で、七尾城の縄張りは強化され、堅固な備えと広大な規模を有したと見られる。

天正二年（一五七四）、第十代義慶が毒殺されたことにより、親上杉方の遊佐続光と反上杉方の長続連・綱連父子と重臣間の確執が強まった。天正四年（一五七六）には擁立された弟の義隆も病死し、情勢は一層混迷する。

同年十一月、領国拡大の機を窺っていた上杉謙信は、人質として越後に送られていた第九代義綱の弟上条義春を送りとどけることを大義名分として能登侵攻を開始した。

上杉勢は能登の全ての城郭を陥落させ、翌天正五年三月まで七尾城を包囲するが、堅固な七尾城は容易に攻略出来なかった。謙信は一旦、春日山城に帰城したのち、同年閏七月十七日に再び天神川原に布陣、七尾城方と対峙する。そして、九月十五日謙信に降った遊佐続光の内応により、やっと七尾城を掌中に収めたのである。

（善端 直・七尾市教育委員会）

①本丸②桜馬場③二の丸
④三の丸⑤惣構え
⑥木落川⑦大谷川⑧七尾湾

●上空から望む七尾城本丸。
（写真提供／七尾市教育委員会）

天正六年十一月 [1578] ▷兵庫県

有岡城攻め

信長の覇業を頓挫させた重臣・村重の謀叛

織田信長 × 荒木村重

天正6年(1578)10月、荒木村重謀叛の報に接した信長は、容易にその事態を認めなかったという。難敵・毛利氏及び本願寺勢力との連携をも視野に入れている村重を何とか翻意させようと慰留の使者を3度も送った信長ではあったが、それがかなわないと知ると5万を超える大軍を摂津に派遣、村重に呼応する摂津の諸城を蹂躙した。だが、有岡城の堅牢さは織田の大軍勢をもってしても簡単には落ちず、攻城戦は1年以上に及んだ。結局村重は落城以前に有岡を抜け、尼崎城から花隈城へと逃走し、ついには毛利氏に保護を求めて西へ落ちのびるのだが、この間、村重とそれに同調した諸将の信長への抵抗は、尼崎城外での人質大量処刑という悲惨な事態を招いた。

この城は元々伊丹城と呼ばれていたが、荒木村重が城主となった天正二年(一五七四)、信長の命により有岡城と改名された。伊丹城の歴史は古く、南北朝時代の文和二年(一三五三)には南朝方が伊丹城まで押し寄せたという記録が残っている。これが古文書による初見で、この頃既に城としての防御施設が整えられていたことがわかる。この南朝方の攻撃では伊丹城は落ちず、敵を追い返したとあるから、相当の構えが備わっていたと考えられよう。

城主の伊丹氏は、鎌倉幕府創設の当初からの御家人で、初めは加藤姓を名乗っていた。「森本氏系図」(北河原森本文書所収森本文書、水戸顕考館所蔵)によれば、初代は加藤右馬允親俊で、二代後の親元から伊丹の地名を取って伊丹氏となる。親元の二代後の親盛は、六波羅探題の命で守護御代官と共に守護使として兵庫関などを検分しているが、当時の守護使は守護の職責を代行する重要な仕事であるので、親盛の地位は国中の御家人の中で相当なものであったことがわかる。おそらく、この親盛が活躍した鎌倉時代末には伊丹城が築かれていたものと想像される。

伊丹城は、その後細川家の内紛に巻き込まれ、度々敵の攻撃を受けることになるが、天文十六年(一五四九)には摂津国でただ一人、三好長慶の勢力に抗し、「伊丹城ばかり堅固なり」(『細川両家記』)と、難攻不落の名声を得るようになる。また、これより前の永正十七年(一五二〇)、三好之長の攻撃を受け落城しているが、『細川両家記』によれば、その時伊丹但馬守らは四方の城戸(木戸)を閉じて、天守にて切腹したとあり、当時天守が存在していたと解釈されている。

伊丹氏を破って入城した荒木村重は、早速城造りに着手している。天正五年にこの地を訪ねた宣教師ルイス・フロイスが「甚だ壮大にして見事な城」「新たに築城せる彼の壮麗な城」と評している。有岡城の惣構えもこの頃完成したものとみられる。村重が謀叛を起こした天正六年(一五七八)から同七年、有岡城を攻めた信長の軍勢もこの惣構えには手こずり、攻城戦は一年余りに及んだ。攻囲軍を指揮した滝川一益の調略が功を奏し、ようやく内通者が出て「上臈塚砦」が開かれるに至り、有岡城は城としての防御機能を失い開城した。

(小長谷正治・伊丹市教育委員会)

Ariokajô

天正六年十一月 [1578]▷宮崎県

高城川(耳川)合戦

大友の威望失墜！ 勇躍！ 島津軍団！

島津義久 ✖ 大友軍

九州戦国時代――豊前・豊後など六か国を手中にし、九州の覇者を目指す大友宗麟と、薩摩を中心に力をつけ、着々と進出を図る島津義久は、いずれは決着をつける運命にあった。

天正六年（一五七八）八月十二日、宗麟は三万五〇〇〇の兵を率いて日向に入り無鹿に着陣、一挙に島津軍を討滅せんとの勢いを見せた。平定も順調に進んで、その数五万の大軍となっている。

こうした中で、宗麟は島津方の拠点高城を攻めるべく、自らは坐したまま将兵を向かわせた。高城は、高城川（現小丸川）と切原川が交わる辺りの台地上にあり、両川に挟まれた天然の要害で、豊後街道とも接する軍事上の要衝である。守る城将は島津義久の信任篤い山田有信、兵は僅か五〇〇を数える程だったが、気力を振り絞って城を死守する。そこへ義久の弟家久の援軍一〇〇〇人が入り、大友勢の攻めによく耐えた。だが次第に守りは心許なくなる。

義久はこれを助けるべく十一月一日、城より高城川・一ツ瀬川を挟んで南方の佐土原に陣を構えた。この周到かつ迅速な動きは見事で、十一日には切原坂の伏兵を使い、大友勢五〇〇人余りを討ち取っている。決戦は目前に迫っていた。

ところがこのような差し迫った状況であるにも拘わらず、何と大友陣営では即戦派と待機派に意見が分かれていた。そのうちの即戦派は翌十二日早朝、勝手に兵を動かすと、高城川を渡って攻撃を仕掛けた。

おそらく義久は、こうした大友内部の実情を探らせ十分心得ていたにちがいない。すぐに軍を分けて川岸近くまで陣を移しており、迷うことなく、これを迎え撃った。遂に激戦の幕が切って落とされた。

こうなっては大友軍の諸将も動かざるを得ない。足並みは揃わなかったが決死の大友軍の攻撃は凄まじく、島津の前軍を破って突き進んだ。

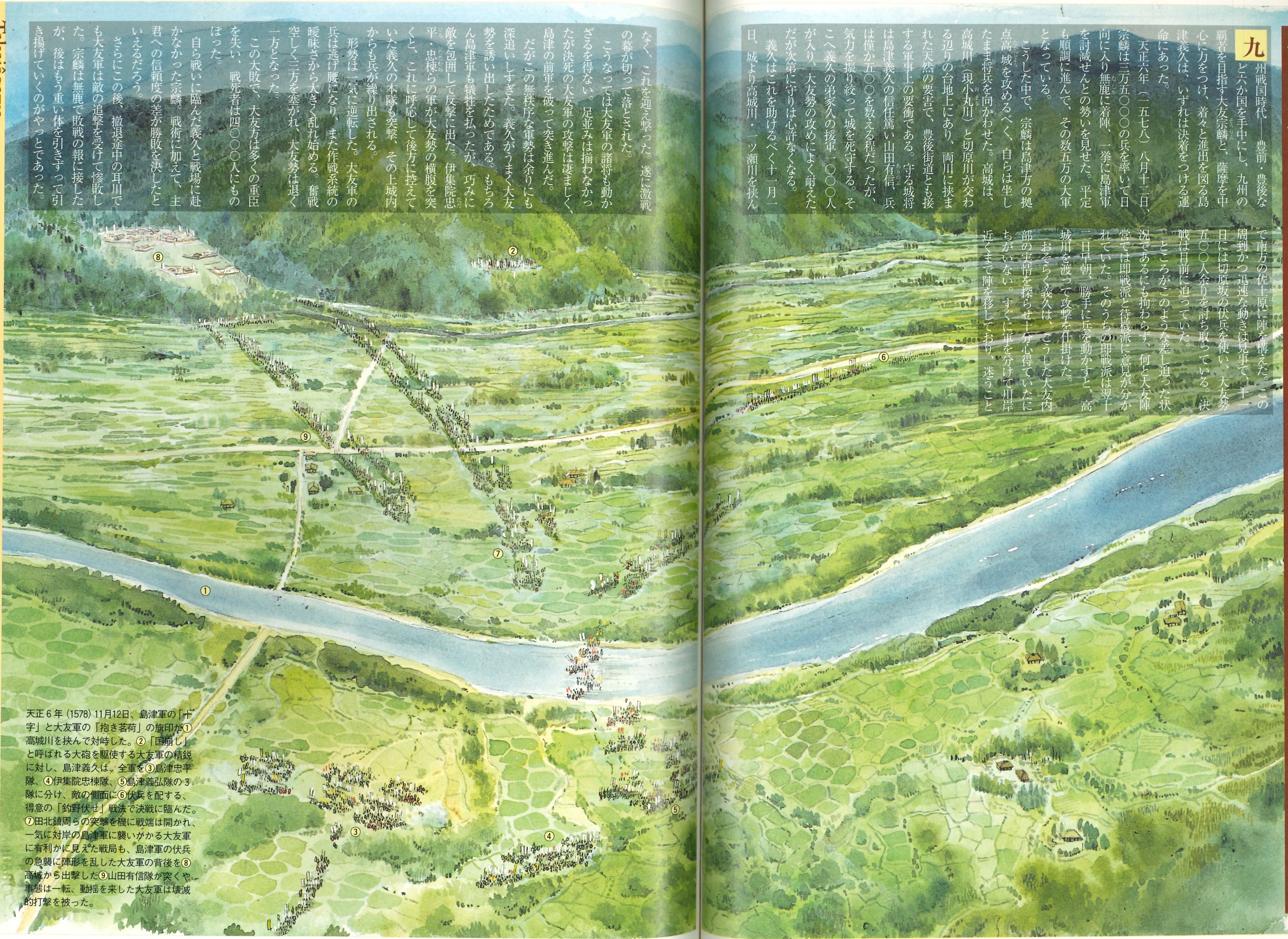
だがこの無秩序な軍勢は余りにも深追いしすぎた。義久がうまく大友勢を誘い出したためである。もちろん島津軍も犠牲を払ったが、巧みに敵を包囲して反撃に出た。伊集院忠平・忠棟らの軍が大友勢の横腹を突くと、これに呼応して後方に控えていた義久の本隊も突撃、その上城内からも兵が繰り出される。

形勢は一気に逆転した。大友軍の兵は逃げ腰になり、また作戦系統の曖昧さから大きく乱れ始める。奮戦空しく三方を塞がれ、大友勢は退く一方となった。

この大敗で、大友方は多くの重臣を失い、戦死者は四〇〇〇人にものぼった。

自ら戦いに臨んだ義久と戦場に赴かなかった宗麟。戦術に加えて、主君への信頼度の差が勝敗を決したといえるだろう。

さらにこの後、撤退途中の耳川でも大友軍は敵の追撃を受けて惨敗した。宗麟は無鹿で敗戦の報に接したが、後はもう重い体を引きずって引き揚げていくのがやっとであった。



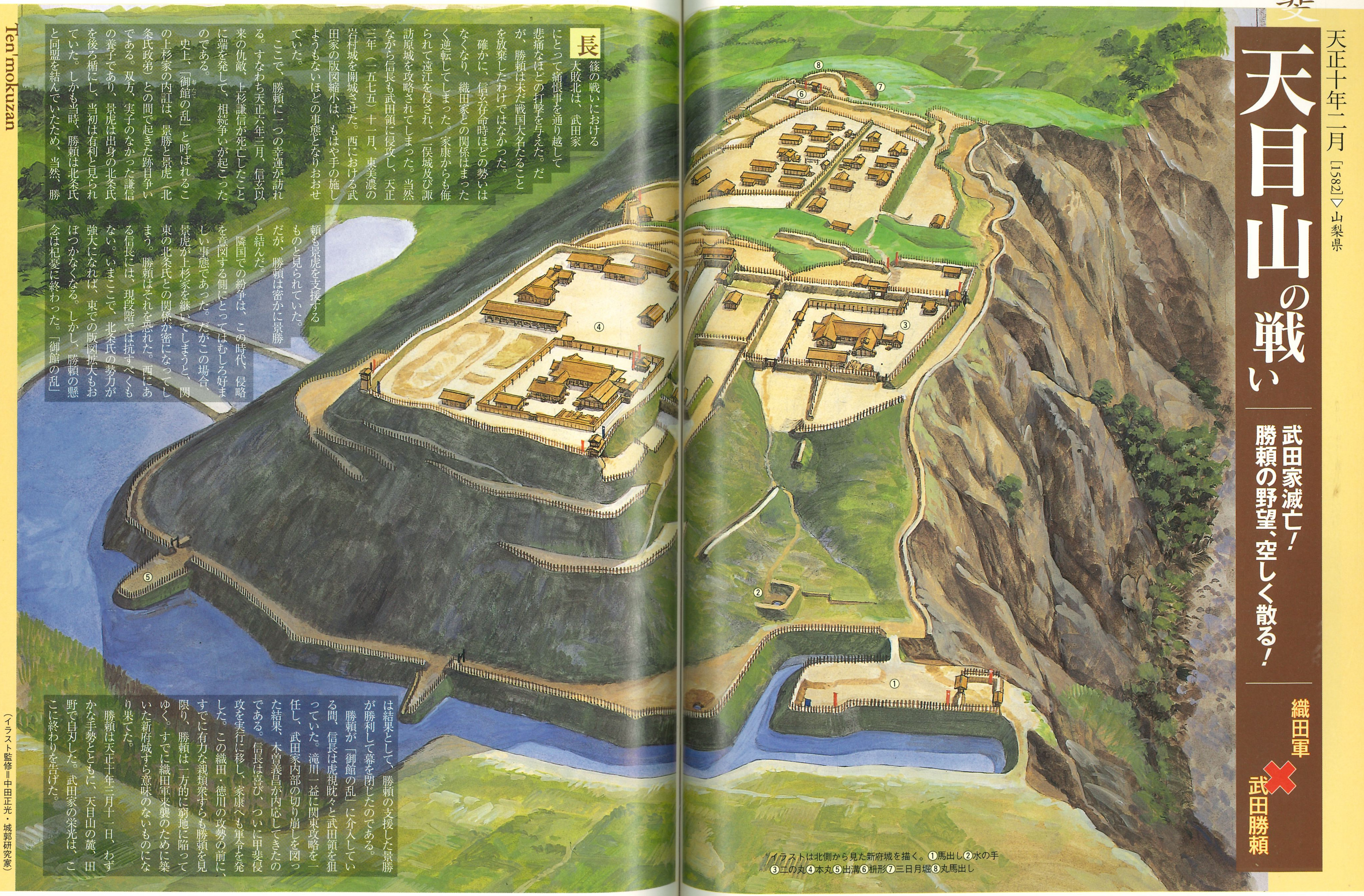
天正６年（1578）11月12日、島津軍の「十字」と大友軍の「抱き茗荷」の旗印が①高城川を挟んで対峙した。②「国崩し」と呼ばれる大砲を駆使する大友軍の精鋭に対し、島津義久は、全軍を③島津忠平隊、④伊集院忠棟隊、⑤島津義弘隊の３隊に分け、敵の側面に⑥伏兵を配する、得意の「釣野伏せ」戦法で決戦に臨んだ。⑦田北鎮周らの突撃を機に戦端は開かれ、一気に対岸の島津軍に襲いかかる大友軍に有利かに見えた戦局も、島津軍の伏兵の急襲に陣形を乱した大友軍の背後を⑧高城から出撃した⑨山田有信隊が突くや事態は一転、動揺を来した大友軍は壊滅的打撃を被った。

天目山の戦い

天正十年三月［1582］▽山梨県

武田家滅亡！勝頼の野望、空しく散る！

織田軍 ✕ 武田勝頼



イラストは北側から見た新府城を描く。①馬出し②水の手③二の丸④本丸⑤出溝⑥枡形⑦三日月堀⑧丸馬出し

長篠の戦いにおける大敗北は、武田家にとって痛恨事を通り越して悲痛なほどの打撃を与えた。だが、勝頼は未だ戦国大名たることを放棄したわけではなかった。

確かに、信玄存命時ほどの勢いはなくなり、織田家との関係はまったく逆転してしまった。家康からも侮られて遠江を侵され、二俣城及び諏訪原城を攻略されてしまった。当然ながら信長も武田領に侵攻し、天正三年（一五七五）十一月、東美濃の岩村城を開城させた。西における武田家の版図縮小は、もはや手の施しようもないほどの事態となりおおせていた。

ここで、勝頼に一つの幸運が訪れる。すなわち天正六年三月、信玄以来の仇敵、上杉謙信が死亡したことに端を発して、相続争いが起こったのである。

史上、「御館（おたて）の乱」と呼ばれるこの上杉家の内訌は、景勝と景虎（北条氏政弟）との間で起きた跡目争いである。双方、実子のなかった謙信の養子であり、景虎は出身の北条氏を後ろ楯にし、当初は有利と見られていた。しかも当時、勝頼は北条氏と同盟を結んでいたため、当然、勝頼も景虎を支援するものと見られていた。

だが、勝頼は密かに景勝と結んだ。

隣国での紛争は、この時代、侵略を意図する側にとってはむしろ好ましい事態であった。だがこの場合、景虎が上杉家を継いでしまうと、関東の北条氏との関係が密になってしまう。勝頼はそれを恐れた。西にある信長には、現段階では抗すべくもない。いまここで、北条氏の勢力が強大になれば、東での版図拡大もおぼつかなくなる。しかし、勝頼の懸念は杞憂に終わった。「御館の乱」は結果として、勝頼の支援した景勝が勝利して幕を閉じたのである。

勝頼が「御館の乱」に介入している間、信長は虎視眈々と武田領を狙っていた。滝川一益に関東攻略を一任し、武田家内部の切り崩しを図った結果、木曽義昌が内応してきたのである。信長は喜び、ついに甲斐侵攻を実行に移し、家康へも軍令を発した。この織田・徳川の攻勢の前に、すでに有力な親類衆すらも勝頼を見限り、勝頼は一方的に窮地に陥ってゆく。すでに織田軍来襲のために築いた新府城すら意味のないものになり果てた。

勝頼は天正十年三月十一日、わずかな手勢とともに、天目山の麓、田野で自刃した。武田家の栄光は、ここに終わりを告げた。

（イラスト監修＝中田正光・城郭研究家）

高松城攻略戦

天正十年五月～六月 [1582] ▷岡山県

城攻めの概念を超越する驚天動地の大戦略！

羽柴秀吉 ✕ 清水宗治（毛利臣）

元亀年間の苦境を乗り切った信長の覇業は、いまや完成間近となっていた。畿内のほぼ全域を押さえ、東では難敵・武田氏を滅ぼしていた天正十年（一五八二）、西での信長の最大の敵は中国地方に覇を唱えていた毛利家だった。

配下の部将が担当方面を受け持つ織田家にあって、中国地方を任されたのは羽柴秀吉である。この年までに播磨・但馬を攻略し、因幡の鳥取城を陥落させていた秀吉の下には、制圧した地域の兵が加わっており、山陽へ攻め入るにあたっては二万五〇〇〇の兵が従っていたという。

高松城攻略前、秀吉は冠山・宮路山・河屋の諸城を落としており、すでに高松城は敵中に浮かぶ孤塁となりおおせていた。城将・清水宗治は事前に投降を勧められたがこれを一蹴し、毛利氏のために死ぬ覚悟をもって秀吉軍を迎えた。

高松城の包囲は四月二十七日には完了したが、宗治ら高松城に籠城した兵が見たものは、合戦とはほど遠い、大土木工事だった。

五月七日、本陣を石井山に移した秀吉は、大崎山・立田山・鼓山・吉備中山などに各部将を配置し、その上で全長三キロ弱に及ぶ長大な堤を構築したのである。八日から始められたこの「工事」は、土俵一俵につき米一升と銭一〇〇文を支払うと触れを出し、近在の農民たちも動員してわずか一二日間で完成させるという突貫ぶりだった。

秀吉はあらかじめ足守川及び付近の川水をせき止めさせており、堤防の完成を待って堰を切って落とした。折しも梅雨時である。しかも高松城の周囲には湿地が多い。城の周囲は見る見るうちに水に浸され、城内の各所も浸水したという。

この奇策の前に城兵の戦意は次第に挫かれていった。救援に駆けつけた毛利の部将、吉川元春や小早川隆景も包囲軍に手を出しかねている。宗治はもはや抗すべき手段を失った。

一方秀吉は、この戦いののち繰り広げられるはずの毛利氏との決戦にあたり、信長に出馬を要請していた。その信長が死んだ。討ったのは明智光秀という。六月二日の変事を知らせる光秀の密書は毛利氏に届かず、三日夜、秀吉陣営に捕らえられた。

秀吉は前日に申し出のあった開城を認め、四日、宗治の自決を見届けたのち、主君信長の仇、光秀を討つべく、堤を切って撤兵を開始した。

Column 戦国の実相 ⑥

軍船

覇業推進に不可欠だった水軍の充実

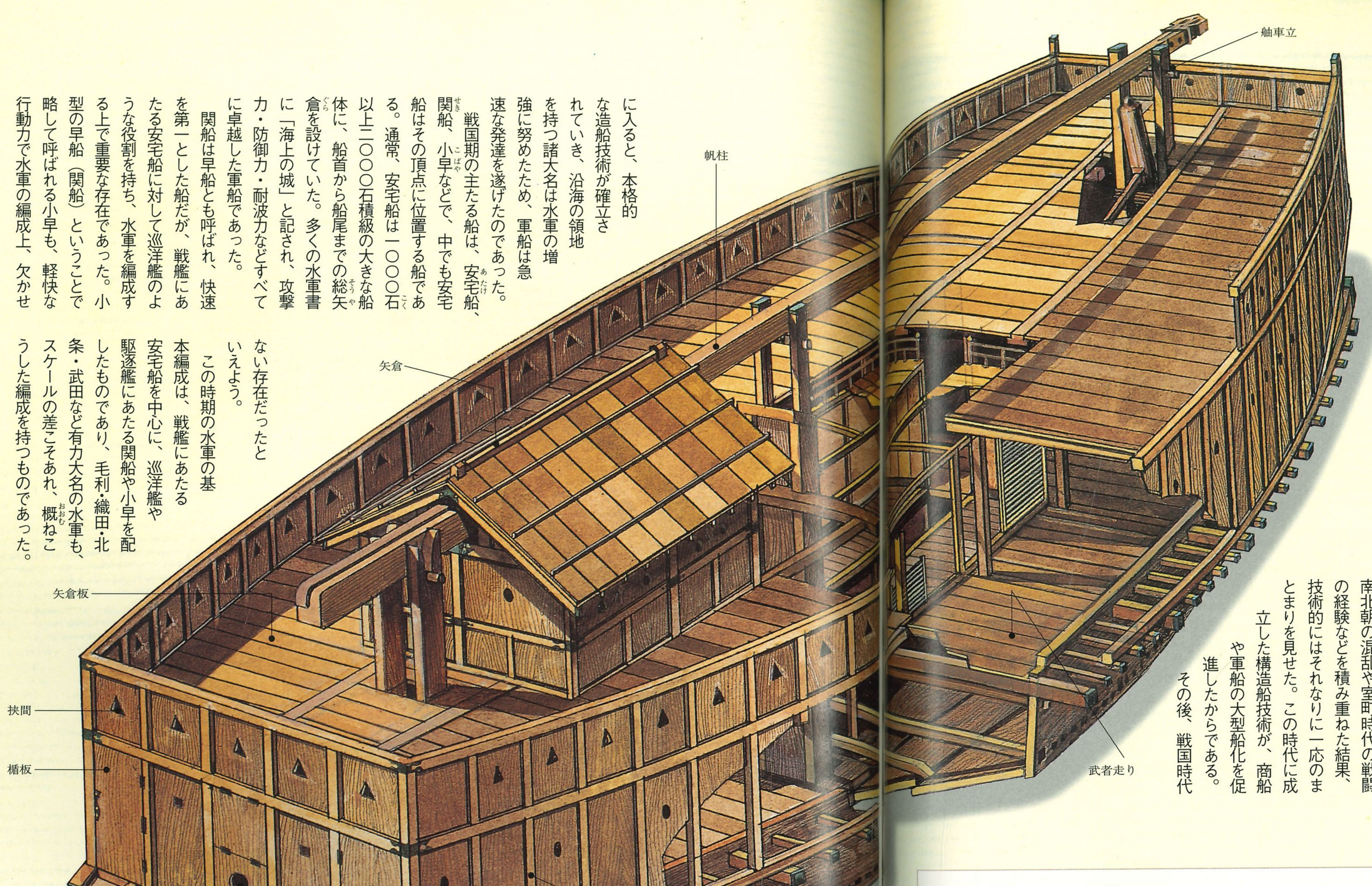
戦国時代の軍船については、いわゆる水軍書に、かなり詳しく説かれている。今日伝えられている水軍書には、毛利水軍の三島流系（能島・因島・来島のほか、一品流を含むいわゆる村上水軍）をはじめ、和泉流・盤尹流・管流・九鬼流・全流・当流・合武三島流などの十数流があるが、その成立や内容は、かつて荻生徂徠が喝破したように、大半が江戸時代になって増補したり編集したりしたもので、戦国の水軍書をそのまま伝えたものは極めて少ない。とりわけ軍船のこととなるとその感が深く、造船技術の面まで説いてあるものは、ほとんどがのちに船大工資料を入手して挿入したものであって、うっかりしていると一杯食う恐れがある。

では実際の軍船はどうだったのか。鎌倉時代には軍船と呼べるものは未だ造られておらず、南北朝の混乱や室町時代の戦闘の経験などを積み重ねた結果、技術的にはそれなりに一応のまとまりを見せた。この時代に成立した構造船技術が、商船や軍船の大型船化を促進したからである。その後、戦国時代に入ると、本格的な造船技術が確立されていき、沿海の領地を持つ諸大名は水軍の増強に努めたため、軍船は急速な発達を遂げたのであった。

戦国期の主たる船は、安宅船、関船、小早などで、中でも安宅船はその頂点に位置する船である。通常、安宅船は一〇〇〇石以上二〇〇〇石積級の大きな船体に、船首から船尾までの総矢倉を設けていた。多くの水軍書に「海上の城」と記され、攻撃力・防御力・耐波力などすべてに卓越した軍船であった。

関船は早船とも呼ばれ、快速を第一とした船だが、戦艦にあたる安宅船に対して巡洋艦のような役割を持ち、水軍を編成する上で重要な存在であった。小型の早船（関船）ということで略して呼ばれる小早も、軽快な行動力で水軍の編成上、欠かせない存在だったといえよう。

この時期の水軍の基本編成は、戦艦にあたる安宅船を中心に、巡洋艦や駆逐艦にあたる関船や小早を配したものであり、毛利・織田・北条・武田など有力大名の水軍も、スケールの差こそあれ、概ねこうした編成を持つものであった。



イラストは安宅船を描く。楯板で覆われた船体は防御性に優れており、また『管流船軍秘伝書』は「安宅ほど重宝で自由で要害もよく、風波にも強いものはない」と記している。その大きさは小さいもので500石積級、通常1000石以上2000石積級のものが用いられ、櫓（ろ）は小櫓（ころ＝1人漕ぎ用の櫓）ならば50〜160挺までを船の大きさに応じて立てた。大櫓（おおろ＝2人漕ぎ用の櫓）では小櫓の6割程度とされる。船首は箱造りで、ここに亀甲型の装甲を施して中に大筒を置き、正面から砲撃が行なえた。船首から船尾を総矢倉とし、楯板で全面的な装甲がなされていた。楯板の木材は樟（くすのき）または椋（むく）の木が最適で、厚さは2寸〜3寸（約6〜9センチ）程度、高さは5尺余（約151センチ以上）。この楯板には弓や鉄炮を撃つための狭間（さま＝銃眼）が空けてあり、前後左右に死角がなかった。

（監修＝石井謙治・日本海事史学会会長）

各種軍船の兵力比較

●安宅船 図は伊勢船型式。箱造りの船首が特徴。

●関船 長く突き出した船首材（一本水押）が特徴。

●小早 装甲は貧弱で、矢倉の代りに援幕を張るなどした。

	安宅船	関船	小早
兵士	60	30	10
水夫	80	40	20
大砲	3	1	0
鉄砲	30	20	8

※当時の各種軍船兵力の平均的な数値。各船により一定性はない。参照『図説 和船史話』（石井謙治著）

Column 船

覇権継承

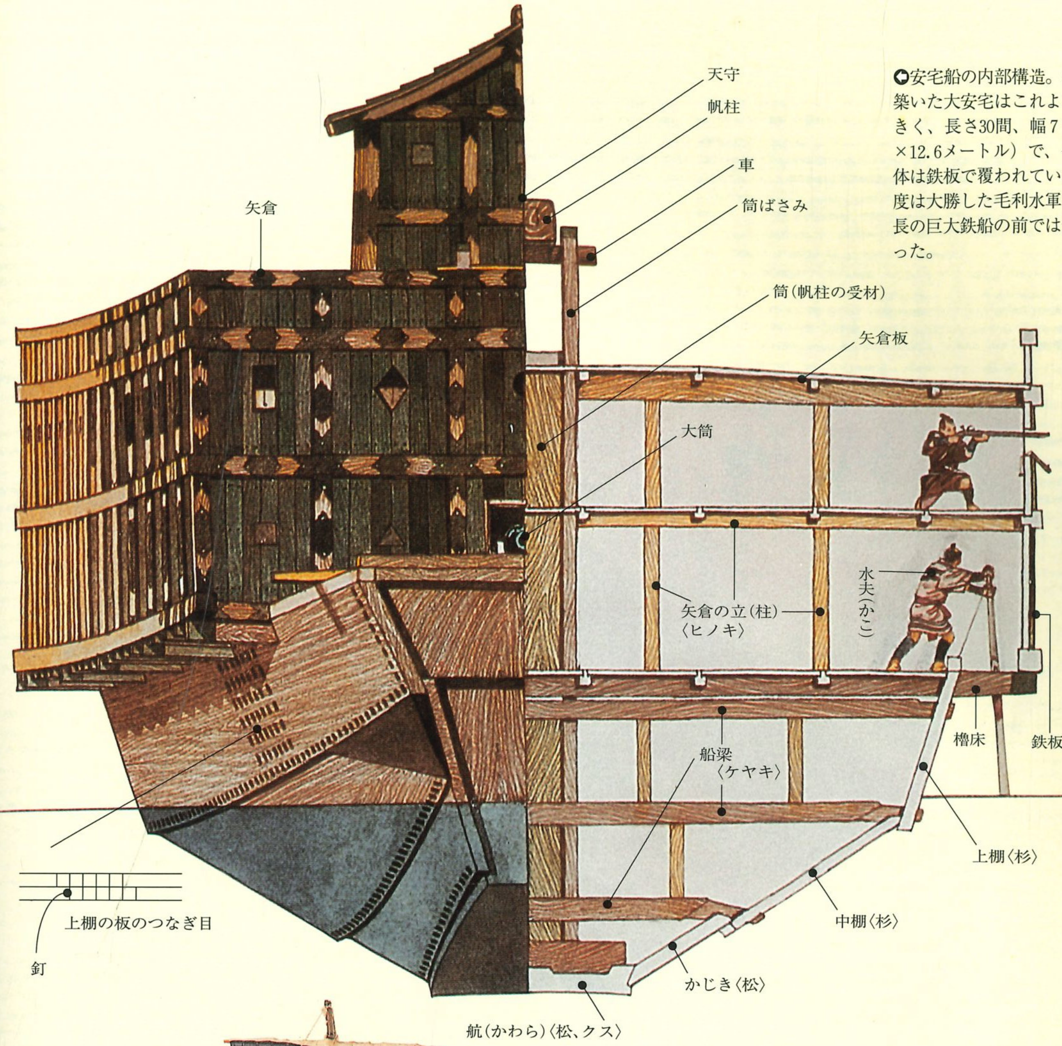
天正

後半（〜1592.12.7）

本能寺の変
山崎の戦い
清州会議
中富川の戦い
賤ヶ岳の戦い
沖田畷の戦い
小牧・長久手の戦い
第一次上田合戦
四国遠征
人取橋の戦い
丹生島城攻防戦
大坂城第二期工事竣工
摺上原の戦い
小田原包囲戦
京
紀州根来寺
大坂城
民衆

〈執筆・監修者〉
高橋康夫（監修） 108
谷口克広（本文執筆） 110
桐野作人（本文執筆） 114
千田嘉博（イラスト監修） 116・128・130
本田 昇（イラスト監修） 118
小和田哲男（本文執筆） 120・128
鈴木眞哉（本文執筆） 124
辻林 浩（イラスト監修） 124
菊田 徹（イラスト監修） 138
宮上茂隆（イラスト監修） 140
（本文執筆＋イラスト監修） 142
竹林舎建築研究所（監修） 140
北川 央（説明文監修） 148

〈イラストレーター〉
香川元太郎 108・114・118
藤井康文 110・120・138・144
大川 明 116・131
伊藤展安 122下・124・128・130・148
板垣直誠 122上・126・132・140
谷井建三 134・136・146



⬆安宅船の内部構造。信長の築いた大安宅はこれよりも大きく、長さ30間、幅７間（54×12.6メートル）で、その巨体は鉄板で覆われていた。一度は大勝した毛利水軍も、信長の巨大鉄船の前では無力だった。

⬆信松院に伝わる安宅船の模型。大櫓40挺立、800石積の小型安宅船で縮尺は１/25。船型は伊勢船型で、文禄慶長の役の際、武田勝頼の遺臣が小早川秀秋に仕えていて習得した軍船の雛形であるという。戦国時代の安宅船の姿を知る上で貴重な史料だが、船体に比して総矢倉が過大にすぎるようでもある。この船は『北条五代記』にある「小櫓50挺立」の安宅船とほぼ等しく、かなり小さい安宅船といえよう。武装は大筒１門、鉄炮20挺程度と見ればよいだろう。安宅船は家康の禁止令によってそのほとんどが姿を消したが、その威力は、まさしく戦国水軍の頂点ともいうべき船だった。

⬇八王子市にある武田家ゆかりの信松院に伝えられた小櫓42挺立関船の模型。関船は安宅船に次ぐ有力な軍船として、水軍に不可欠な船だった。快速を得るために尖鋭で細長い船型をしており、長く突き出た船首材が特徴的である。また重量軽減のために装甲を薄くしており、防御力を犠牲にせざるを得なかった。関船の多くは50挺立前後のものだったのだが、安宅の威力を恐れた家康によって西国大名の安宅保有が禁止されたため、諸大名の御召船として大型の関船も造られるようになり、70挺立級の大型船も出現した。

京

雅なる千年の都 戦国期の京を推定復元

（監修＝高橋康夫・京都大学教授）

戦乱が常態となっていた戦国時代には、日常の生活空間を戦火から守ることに、かつてない努力が注がれた。京都も、そうした情勢の中の例外ではない。庶民の家は壁で囲まれ、町そのものも塀や壁がめぐらされ、堀や土塁が築かれた。

イラストは、京都市史編さん所による『京都の歴史』を参考資料とし、京都大学教授・高橋康夫氏のご教示を仰いで作成したもので、永禄十二年（一五六九）四月、信長によって二条城（のちの二条城とは異なる）が造営されたのちの京の町を描いたものである。

度重なる戦乱により、京の町も荒廃した。この頃の京は、大きくわけて上京と下京の二つの地域が中心となっており、かろうじて室町通り周辺に連なる町屋が南北を結んで存在していたに過ぎなかった。もちろん、これらのほかにも農家や町屋が存在していたであろうが、それらがどの程度存在していたか、あるいはどのあたりに存在していたのかを示す史料はない。

これより前、永禄十一年九月二十六日、信長は尾張・美濃など諸国の兵五万を率い、足利義昭を奉じて入京した。この信長の軍事力を後ろ楯として、義昭は同年十月十八日、すでに弑殺されていた義輝の跡を襲い、正式に征夷大将軍に任ぜられた。

だが、世は戦乱のさなかにある。将軍といえども安全ではない。むしろ特異な権威によって、その身はつねに危険にさらされていたともいえる。それは、かつて畿内の支配者だった三好三人衆が、同十二年正月五日、将軍義昭のいた六条の本圀寺（画面には見えない）を急襲したことでも明らかである。信長が残した留守部隊が三好勢を退けて事なきを得たものの、信長はこの報に驚き、義昭のために二条城築城を決め、「七〇日間に悉く仕上げ」るという、信じられないほどの早さで工事を完了させてしまった。

その立地は上京と下京の中ほどに位置し、もともと先の将軍義輝が築いた「御城」（武衛邸）が中核となっている。義輝は上京と下京を等分に押さえるべく、政治や都市支配などの現実的な意味からこの地を選んだのであろう。信長も同様にその地を選んだ。↘

↘だが、信長と義昭の蜜月は長くは続かなかった。義昭が武田信玄や朝倉義景らに親書を送って信長包囲網を形成し出すに及び、その関係は悪化の一途をたどった。そしてついに元亀四年（一五七三）、信長は将軍義昭に対して軍事行動を起こす。すなわち同年三月、上洛して知恩院に陣を張り、京を遠巻きにして洛外の民家に火を放ったのである（四月三日）。

信長は将軍の面子を考え、義昭に和平を申し入れたが、義昭が聞き入れなかったため二条城を囲み、上京に火を放った。いわゆる「上京焼き打ち」である。

この間の事情につき、高尾一彦氏は『京都の歴史』の中で、下京が焼かれなかったのは、信長に服して従う姿勢を示していたこと、食料品・軍需品の市場であったことなどが考慮されたためとしておられる。これに対し、幕府家臣や公家、富裕な商人が多く居住していた上京は、義昭を支持して信長に反する対応を示していたことから「信長が最後の鉄槌を加えた」と推察されてもおられる。

復興途上にあった上京は、これによって灰燼に帰した。義昭は信長と和睦したものの、二条城を抜け、室町幕府は事実上、終息した。その九年後、信長自身、炎の中で自刃して果てるとは、このときはまだ予見できていなかった。

山城

天正十年六月

本能寺の変

[1582]▷京都府

光秀謀叛！ 信長の野望、灰燼に帰す

明智光秀 ✕ 織田信長

天正10年６月２日早暁、光秀は１万3000の兵を率い、信長の宿所①本能寺を襲撃した。本能寺は下京の②油小路通りにあり、③堀と土塀を持ち、周囲に④竹薮がめぐらせてあった。⑤妙顕寺や⑥妙覚寺なども同様の城郭的形態を持っていたようである。妙覚寺に宿泊していた信忠は、変報を受け、手勢を率いてより堅固な⑦二条御所へ移動し奮戦したが、明智軍に制圧された。当時、京は⑧上京と下京に分かれており、それぞれ⑨構（かまえ）と呼ばれる塀で囲まれ、町の入口には⑩木戸が設けられていた。町屋はたいてい板葺きの平屋で、瓦屋根の寺院と対比をなしていた。⑪新町通には三層の⑫南蛮寺が建っていた。司祭フランシスコ・カリオンはここで事変を目撃し、のちにフロイスに報告した。

天正十年（一五八二）六月一日の本能寺は、まるで内裏が一時的に移ったかのような賑わいだった。前太政大臣近衛前久とその子内大臣信基、前関白九条兼孝、関白一条内基、右大臣二条昭実、それに勅使として来訪した権大納言甘露寺経元、同じく勧修寺晴豊。

この前日の五月二十九日、信長は安土から上洛した。だが、「御迎え無用」との信長の意向が伝えられたので、公家たちはこの日は遠慮して宿所の本能寺に出向かなかった。そして翌日、彼らは争うように本能寺に押しかけたのである。見舞いの勅使も本能寺に派遣された。

この当時の信長は、関白・太政大臣をはじめ、公家衆などは手玉にとっていた。正親町天皇にしても、信長の意思には唯々諾々と従うばかりだった。

信長は並み居る公家衆に向かい、四日に西国に出陣することを語っている。中国の毛利氏、四国の長宗我部氏は、信長自らが出向けば、他愛なく降参するにちがいない。着々と天下の平定に突き進んでいるという自信を、彼は自然の成り行きのように披瀝したのだろう。その翌朝には自分の命が尽き、天下一統の計画も夢に終わることなど、彼はまったく予測するはずもなかった。

公家衆が退去した後、妙覚寺に泊まっていた嫡男の信忠が訪ねてきた。京都所司代の村井貞勝や京都町内に宿をとっている馬廻たちも次々とやってきた。昼間の公家衆たちの接待とちがって気楽な場である。信長は夜遅くまでくつろいだ時を過ごした。

翌朝、空が白んできたというのに、信長は熟睡していた。ところが、外から聞こえるただならぬざわめきに、彼は眠りを破られた。彼に従う森乱（蘭丸）たち小姓衆も仮眠から覚めた。信長も小姓たちも、この京都の町中でいくさが起こるなど夢にも思ってはいない。町衆たちの喧嘩か、と思っているうちに、ときの声が聞こえ、鉄砲が打ち込まれた。信長は森乱に聞く。

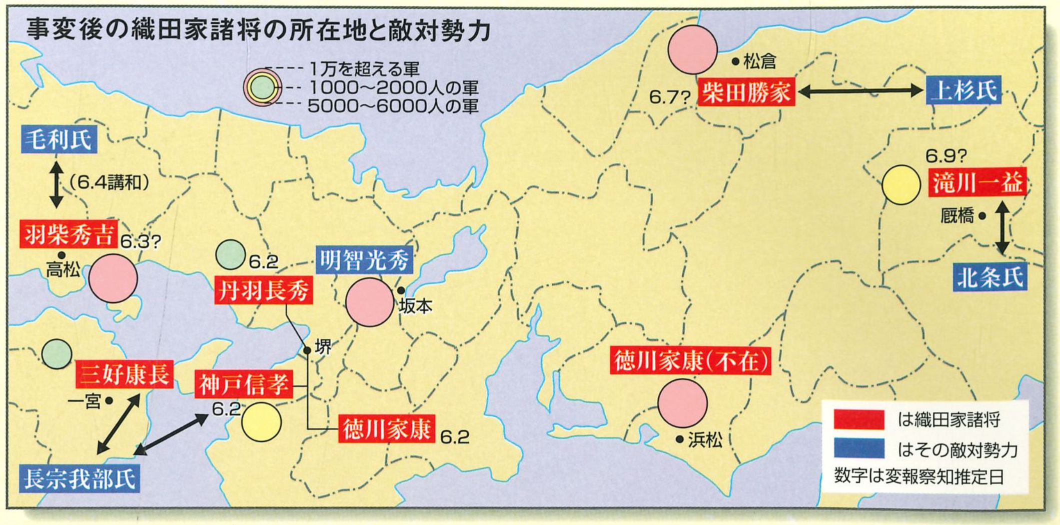
「これは謀叛か、いかなる者の企てぞ」

「明智が者と見え申し候」

信長が本能寺に伴った者はわずか五～六〇人、明智光秀が謀叛を起こしたならば、防ぎようはない。信長はここでもう覚悟を決めた。

光秀に従って本能寺を攻めた本庄惣右衛門という武士が覚書を残して

Hon'nōji



いる。それによると、この時、本能寺の中は無人に近い状態で静まり返っていたという。

当時、本能寺の広い寺内には、女性も入れて一〇〇人足らずしか泊まっていない。手ぐすね引いて攻め込んだ光秀の家臣たちが呆気に取られたという記述はうなずける。

ここで信長自身が弓を取り、槍を持って光秀の兵と戦ったというのは信じられない。一万余りの軍勢に攻められ、それと一戦を交えてから、やおら奥に引き込んで切腹し、遺骸を隠すなどという余裕があったはずはない。信長は覚悟を決めた後、速やかに自害したものと思う。いずれにしても、午前七時過ぎには本能寺は焼け落ちて戦いの決着はついていた。

光秀の軍は、続いて信忠の宿所妙覚寺に向かう。信忠は、妙覚寺より堅固な隣の二条御所に移って光秀の軍と戦った。こちらには京都町内に泊まっていた馬廻衆らも駆けつけており、一五〇〇ほどの軍勢を抱えていた。

だが、多勢に無勢なのは本能寺と変わらない。隣接する近衛邸の屋根に上って弓と鉄砲で攻撃する光秀軍のため兵は次々と討たれ、ついに観念した信忠も切腹して果てた。村井貞勝たち信長・信忠の側近・馬廻たちもことごとくここで戦死した。

この本能寺の変からわずか一一日後の山崎の戦いで光秀は敗れ、非業の最期を遂げる。この戦いの勝者羽柴秀吉は急速に抬頭し、ついに実質上の信長後継者の地位を獲得する。

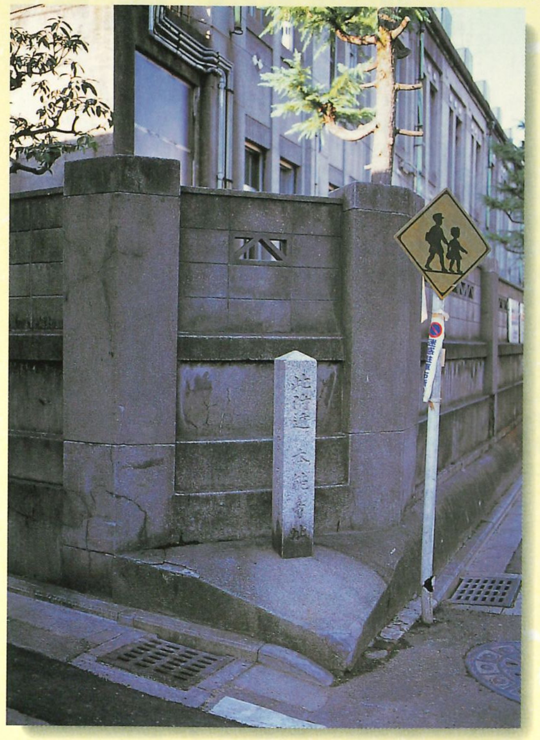
このあたりの経緯については、特に触れまい。江戸時代よりずっと議論の続いている本能寺の変の原因、つまり光秀の信長襲殺の意図はどこにあったか、という点を追ってみたい。

むかしから色々な説が語られてきたが、それらを整理すると二つにまとめられる。一つは光秀の信長に対する怨恨によるという説、もう一つは光秀の野望の結果だという説である。だが最近の一〇年間ほど、それらの説とは別に、光秀を動かした者がいるという「黒幕」説がさかんに主張されるようになった。

一口に黒幕というけれど、それは朝廷黒幕説・足利義昭黒幕説・羽柴秀吉黒幕説・徳川家康黒幕説などに分かれ、混沌としている。中には、読者の興味ばかりを目当てにしたいいかげんなものもある。その中で検討に値する説は、朝廷黒幕説と足利義昭黒幕説の二つだけだろう。この二つの説の中には、当時の一次史料（文書・日記など最も史料価値の高い文献）をつぶさに読み解いた堂々たる論文もある。

現在の本能寺にある信長の墓。

京都市街。旧本能寺の位置は、現二条城の画面右斜め下あたりである。旧本能寺址の石碑（中京区六角油小路）。



だが、いずれの説もまだ弱点を抱え、定説となるにはほど遠い。例えば、朝廷黒幕説では、なぜ皇太子誠仁親王が危険な二条御所から事前に離れていなかったのだろうかという疑問、そして、果たして信長と朝廷との間はそんなにも緊迫していたのだろうか、という疑問。足利義昭黒幕説では、現実主義者である光秀がなぜ零落している義昭などに動かされたのだろうかという疑問、また、当時義昭を庇護していた毛利氏がなぜ蚊帳の外に置かれていたのだろうかという疑問。このような素朴な疑問を克服しない限り、これらの説は説得力を持たないだろう。

まだまだ本能寺の変の真相をめぐっての論議は続くだろうが、これからはむしろ、光秀単独の企てという従来からの説に戻って考え直すことも必要なのではないだろうか。

（谷口克広・港南中学校教諭）

天正十年六月 [1582] ▶京都府

山崎の戦い

光秀の夢、露と消ゆ 秀吉、神速の大返し!

羽柴秀吉 × 明智光秀

天王山　標高270m。京都盆地の出口を押さえる軍事上の要衝。山崎の戦いに因み勝負の分かれ目を「天王山」と言うが、実際の戦闘は平野部を中心に行われた。

円明寺川　この川の前面には沼地が多く、羽柴軍の進撃を阻むには格好のポイントであった。ましてや隘路での大軍の通過は困難なため、数で劣る光秀は川筋に沿って前線を形成し羽柴軍の襲来に備えた。

勝龍寺城　明智軍の前線基地。この城の南西約600メートルの御坊塚が光秀本陣。勝龍寺城は元亀2年（1571）に細川藤孝によって大増築が施され、当時東西2町、南北50間の規模で五角形をなしていた。光秀は12日、白川・浄土寺・聖護院の郷民を人夫として徴発し、城の南側の外堀などの普請を行った。

石清水八幡宮　標高148mの男山山頂にあることから、別名男山八幡宮とも呼ばれる。光秀は合戦前にここに兵を入れていたが、筒井順慶を味方に引き込むことに失敗するや、山崎の兵とともに撤退させた。あてにしていた諸大名の離反により予定よりも兵力が不足したため、隘路出口での迎撃戦に戦略を切り替えたためであろう。

淀古城　明智軍の左翼側の備え。木津・淀・桂川の合流点に築かれた城で、河川を天然の堀とした要害。槙島城と並ぶ洛南の重要軍事拠点。光秀は合戦に先立って勝龍寺城とともに当城を修築している。

ときおり鉄炮の音がこだまするなか、京と摂津の境である山崎口では、南北で相対する軍勢が布陣を終わり、決戦の火蓋が切られようとしていた。ときに天正十年六月十三日昼過ぎ、雨が降りしきり、視界は相当悪い。

北側の明智軍は天王山と淀川に挟まれた西国街道の隘路のすぐ北を扼する円明寺川（小泉川）を盾にして展開している。街道沿いの先鋒は斎藤利三・柴田勝定率いる二〇〇〇、その後ろに阿閉貞征・明智茂朝（しげとも）など三〇〇〇が二陣として控える。

対する羽柴軍は、先陣の高山重友の二〇〇〇。そこへ、天王山から駆け下った中川清秀の率いる二五〇〇が高山隊の左翼から明智軍の前を横切るように進出してきた。

その中川隊に、斎藤隊の右備えだった伊勢貞興・諏訪盛直・御牧兼顕（みまきかねあき）らの二〇〇〇が襲いかかる形で、戦端が開かれた。おそらくほとんど同時に、斎藤隊も渡河して高山隊と激突したと思われる。

たちまち混戦となったが、兵力で劣る羽柴軍がやや押され気味。それを見て取った秀吉は二番手の堀秀政の兵を投入し、また中川隊に代わり天王山を占めていた羽柴秀長・黒田孝高も、北麓の松田政近と並河掃部の丹波衆二〇〇〇余りと交戦した。

両軍の激戦が小一時間ほど続いた頃だろうか。羽柴軍の右翼、つまり川の手の池田恒興・加藤光泰ら五〇〇〇が葦の生い茂るなかを進軍し、円明寺川を渡河して、明智軍左翼の津田信春ら二〇〇〇に襲いかかった。この兵は寡勢のうえに、本能寺の変後光秀に属した、近江や山城の小豪族が多い雑軍だったようだ。

かさにかかって攻めたてる池田・加藤の両隊。この池田・加藤隊の大攻勢が、羽柴軍勝利の決め手となった。両隊は明智軍左翼を突き破ったうえに、光秀本陣の左側背に迫る形となった。それに、参陣が遅れていた織田信孝・丹羽長秀の軍も戦闘に加わったことで、羽柴軍は全線にわたって攻勢・包囲の態勢となった。

光秀は旗本五〇〇〇で、勝龍寺城の南、御坊塚に陣取っていたが、全軍総崩れとなり、旗本からも逃亡が相次ぎ、たまらず勝龍寺城に引き揚げた。勝龍寺城に籠ったのはわずか一〇〇〇足らず。光秀はその夜のうちにわずかの供廻りだけで坂本をめざしたが、途中、小栗栖（おぐるす）の竹藪で落ち武者狩りの槍に突かれて落命した。

①明智光秀本隊
約5000人。予備隊として御坊塚に布陣していたが、自軍が全線にわたって崩壊したため、やむなく勝龍寺城へと撤退した。
②津田信春隊
約2000人。池田恒興隊と交戦したが、兵力差をいかんともしがたく瞬く間に蹂躙される。
③斎藤利三隊
明智軍の山崎表先鋒。近江衆。柴田隊と併せて約2000人。
④柴田勝定隊
⑤阿閉貞征隊
もと浅井長政の臣。山崎の戦いでは明智軍の第二陣を担当。明智茂朝隊と併せて約3000人。
⑥明智茂朝隊
⑦溝尾庄兵衛隊
⑧伊勢貞興隊
斎藤隊の右備え。諏訪・御牧隊と併せて約2000人。
⑨諏訪盛直隊
⑩御牧兼顕隊
⑪松田政近隊
丹波衆。並河隊と併せて約2000人。
⑫並河掃部隊
右翼の先鋒。申の刻（午後4時頃）、松田隊とともに天王山東麓に布陣する羽柴軍に烈しい攻撃を仕掛けるが、これが山崎の戦いにおける開戦の契機となった。

①羽柴秀吉本隊
馬廻り・織田信孝旗本・丹羽長秀旗本の軍勢と併せて約2万7000人。
②加藤光泰隊
③木村重茲隊
④高山重友隊
高槻城主。光秀組下だったが、この合戦では秀吉に味方し先鋒を務めた。約2000人。
⑤中川清秀隊
摂津衆。茨木城主でもとは光秀の組下。高山隊の後陣を嫌い、開戦後天王山から平野部へ進出し、斎藤隊と交戦した。約2500人。
⑥池田恒興隊
摂津有岡城主、もと光秀の組下。加藤・木村・中村隊とともに右翼を受け持った。
⑦中村一氏隊
⑧黒田孝高隊
天王山に羽柴秀長・神子田正治隊とともに布陣。
⑨羽柴秀長隊
秀吉の異父弟、但馬出石城主。この戦いでの軍功により播磨・但馬の領主として姫路城に居住。
⑩神子田正治隊
⑪堀秀政隊

清洲会議

天正十年六月［1582］▼愛知県

三法師を推戴した秀吉、織田家の覇権を掌握

復元清洲城。天正14年（1586）から織田信雄が大規模に改修したが、イラストはその時代のものを描く。清洲会議ごろの清洲城は残念ながら不明である。
①本丸：天守閣は犬山・丸岡城型のもので、付櫓があった。②北の丸：何棟かの御殿があった。③五条川：経済の中心・清洲に物資を運ぶ。多くの舟が行き交っていた。④惣構え⑤内堀⑥山王社：町屋が道の両側に立ち並び、市が開かれていた。この一帯が清洲の城下で一番賑わっていた。⑦御園神明社：小牧城築城に伴い、この地区の住民が小牧に移住し、小牧・御園町を形成した。⑧武家屋敷⑨集中して寺が建てられた寺町一帯⑩信長が生まれた那古屋城方面⑪東美濃攻略戦のため、信長が清洲から居城を移した小牧山⑫那古野・熱田へ続く道

（イラスト監修＝千田嘉博・国立歴史民俗博物館考古研究部）

織田家家臣団

本能寺の変で信長が死んだ二五日後の天正十年（一五八二）六月二十七日に、尾張清洲城で、織田家の宿老たちが集まって信長の後継を決める会議が催された。

出席者は、羽柴秀吉、柴田勝家、丹羽長秀、池田恒興の面々。この中で、当然ながら有利に立っていたのは、明智光秀の首をあげた秀吉だ。

その秀吉は、信長後継者として、本能寺の変で信長と同じく討たれた嫡男信忠の子三法師を推薦した。まだ三歳。その裏に、後見人たる秀吉の野望がかくされていることは、誰の目にも明らかだった。

一方、宿老中の宿老として織田家の中で一目置かれていたのは、柴田勝家だ。秀吉がその姓を、丹羽の羽と、柴田の柴からつけたことで明らかなように、キャリアからいえば、秀吉など足もとにも及ばない。

その勝家が推すのは、信長の三男信孝である。

だが、勝家の弱みは、何といっても上杉勢との攻防を繰り広げていたとはいえ、主人信長のとむらい合戦に参加していないことだった。

しかも秀吉はこの会議に先だち、丹羽にも池田にも手を回し、得意の「人たらし」で、彼らを味方にすることに成功している。勝負はあっけなくついたといっていい。わざわざ三法師を抱いての登場など、なくもがなの演出だったかもしれない。

宿老勝家、そして、二男信雄、三男信孝のいずれもが、織田という遺産を引き継ぐ権利はもっていたとはいえる。だが、二人の息子は他家を継いでいる（信雄は北畠氏、信孝は神戸氏）弱みがあるし、勝家は前述したとおりだ。実力以外の論理性でも、彼らには勝目はなかったのだ。

ちなみに遺領配分でみてみると、長秀が旧領若狭に近江高島・滋賀の二郡を加え、池田恒興や堀秀政は、畿内に所領をふやした。秀吉本人といえば、勝家に長浜を譲ったものの山城・河内・丹波、そして京を押さえた。それは当然、これからの天下を治めていく証でもあった。

対し、勝家は結局は長浜以外にはたいした利益もなく終わった。

以後、秀吉は信長の法要などを通して、しだいに勝家、ならびに反秀吉武将を追い込んでいく。そして、ついにその堪忍袋の緒が切れたとき、賤ヶ岳の合戦へと事態は推移してゆく。結果論ながら、秀吉の見事なるまでの戦略の勝利であった。

天正十年八月～九月 [1582]▷徳島県

中富川の戦い

阿波の覇権を賭け長宗我部と三好が激突！

長宗我部元親 ✕ 三好(十河)存保

吉野川は別名四国三郎とも呼ばれ、全国的にも有数の暴れ川であった。その流路も戦国時代と現代とでは大きく異なっていた。本図は、長宗我部元親と三好（十河）存保が衝突した中富川（原）の戦いでの両軍の動向を、地形や諸資料などから往時の流路や古戦場の位置を推定して復元したものである。

天正十年（一五八二）六月、本能寺で信長が横死したため、元親は間一髪のところで信長の四国征討を免れた。ひとまず危機を脱した元親はそれまでと同様、四国平定を推し進めるべく、総力をあげて三好氏に決戦を挑んだ。対する三好方は勝瑞城主三好存保を大将に、中富川原北岸で待ち受けた。ここに四国最大の合戦が繰り広げられたが、信長の後楯を失った三好方は、もはや元親の敵ではなかった。

同年八月、元親は弟・香宗我部親泰や長男・信親をはじめとする二万三〇〇〇の兵を率いて岡豊城を出発し、阿波に侵入して三好方の城を次々に落としていった。このときの元親の狙いは三好勢の総帥・三好存保の拠る勝瑞城であり、同城を攻略することで、阿波から三好勢を一掃しようとしていたのである。

同月二十八日、両軍は中富川畔で対峙した。大方の予想では、兵力で劣る三好勢は籠城すると見られていたが、存保は野戦を選んだ。だが、数に優る元親の軍は三好勢を圧倒、存保は勝瑞城に籠城した。

しかし城は長くは保たなかった。九月二十一日、存保はそれ以上の籠城を断念、讃岐へ落ちのびた。元親は勝瑞城を落城させ、阿波の平定を成し遂げた。

元親はこの勢いのまま、十月、讃岐に侵攻した。この間、東伊予と西讃岐の諸将が元親の陣触れに応じて参戦してきており、総勢は三万五〇〇〇を超えていたという。元親が存保の本拠・十河城を囲んだのは十月二十日頃。だが、十河城は容易には落ちなかった。

元親は長期戦を覚悟し、付城を築いていったん兵を土佐へ戻した。この結果、讃岐の制圧は先送りされることとなった。

元親が讃岐を平定して四国を統一できたのは、これから二年半後のことである。しかし、統一は遅きに失していた。すでに群雄割拠の時代は終わりを告げ、天下は秀吉による統一段階に入りつつあったのである。

（本田昇・鳴門市教育委員会）

天正十一年二月～四月 [1583]▷滋賀県

賤ケ岳の戦い

大返し再び！ 猛将・勝家、よもやの敗走

羽柴秀吉 × 柴田勝家・佐久間盛政

Shizugatake

天正十年（一五八二）六月二日の本能寺の変で、織田信長と嫡男信忠が明智光秀によって討たれたため、織田家重臣たちが同月二十七日、尾張の清洲城に集まり、後継者問題を議論した。有名な清洲会議である。

結論として、信忠の子三法師が家督をつぐことになり、その後見に、明智光秀討伐の第一人の功労者である羽柴秀吉がなった。しかし、この決定に不満をもっている人物もいた。一人は、織田家の筆頭家老を自認していた柴田勝家であり、もう一人は、信長の三男信孝である。信孝は、もと浅井長政の正室で、長政自刃後、織田信包に身柄を預けられていた信長妹お市の方を柴田勝家に再嫁させ、連携を強め、秀吉の抬頭を阻止する動きにでた。

こうして、賤ヶ岳の戦いへのカウント・ダウンがはじまったわけであるが、秀吉にとって大きな意味をもったのが、同年十二月七日の近江長浜城の奪取であった。長浜城はもともと秀吉の城で、清洲会議のあと勝家の手に渡り、勝家の甥柴田勝豊が入城していたのである。

秀吉は、五万の大軍で長浜城を包囲するとともに、勝豊に無血開城を勧告し、結局、勝豊が降服し、長浜城は再び秀吉の手に帰した。賤ヶ岳の戦いを考えるとき、このことの意味は決して小さくない。

信孝・勝家陣営に属していた武将がもう一人いる。伊勢の滝川一益である。一益が伊勢で、信孝が美濃で挙兵し、秀吉がその討伐に向かったところを、勝家自身が越前から近江に攻め入るという作戦を考え、それを実行している。

一益が伊勢で挙兵したのが、翌天正十一年（一五八三）正月であった。ところが、ここに一つの誤算が生じた。この年、越前は、例年にない大雪で、出馬が全くできなかったのである。

ようやく、三月十日になって勝家軍の先鋒佐久間盛政が北近江の柳ヶ瀬に着陣し、勝家軍の動きを知った秀吉も、伊勢・美濃の攻略をあとまわしにして、三月十七日には木之本に布陣した。

『太閤記』などでは、このときの秀吉軍を一〇万としているが、せいぜいその半分の五万ではなかったかと思われる。一方の勝家軍もふつう三万といわれるが、実際は二万ほどだったらしい。しかし、それにしても、琵琶湖の北から越前国境にかけての狭い山岳地帯に七万もの大軍がひしめいたことになる。

勝家の先鋒佐久間盛政が行市山に陣を構え、内中尾山に勝家の本陣が置かれていた。秀吉の方は、木之本に秀吉の本陣が置かれ、左禰山に堀秀政、田上山に羽柴秀長、大岩山に中川清秀、賤ヶ岳に桑山近晴が布陣し、両軍にらみあう形となった。

このとき、さきに秀吉に降った岐阜城の信孝が再び反旗をひるがえしたという情報が秀吉のもとに入った。勝家からの指示があったためかもしれない。

戦線が膠着状態になっていたこともあって、秀吉は、急遽、大軍を率いて岐阜城攻めに向かった。当然、賤ヶ岳周辺の秀吉側の守りは手薄になる。それを好機とみた佐久間盛政が、四月二十日、余呉湖の西を大きく迂回して、まず大岩山に攻撃をしかけた。そこを守っていたのは中川清秀隊であるが、死闘四時間、結局、多勢に無勢で、中川清秀はそこで討死し、配下の兵たちもほとんど討たれてしまった。

佐久間盛政は、「岐阜までいった秀吉が簡単にもどってこれるはずはない」と考えていた。そこで、ついで岩崎山も攻め、占拠に成功している。

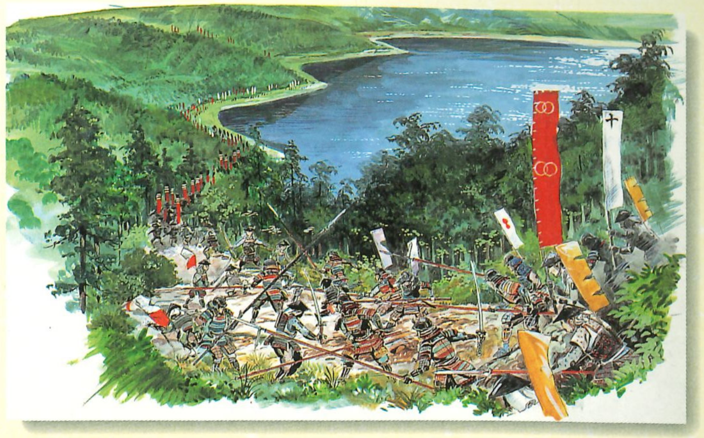
大岩山・岩崎山陥落のしらせが秀吉のもとに届けられたのは、その日の午後であった。秀吉は、そのとき大垣付近に布陣していたが、一万五〇〇〇の兵に、木之本までもどることを命じた。各種史料を総合すると、出発が午後四時、そして、木之本到着は午後九時ごろである。大垣〜木之本間は約五二キロで、秀吉軍は五時間で五二キロを駆けぬけた計算になる。

街道（北国脇往還）の要所〱には松明がたかれ、にぎりめしが用意されていたという。それを準備したのが石田三成であった。

ふつうならば、兵の疲れをとってから、翌日の夜明けを待って合戦ということになるが、ここでも秀吉は敵の意表をついて、五二キロを駆けもどった一万五〇〇〇の軍勢にそのまま出撃を命じている。

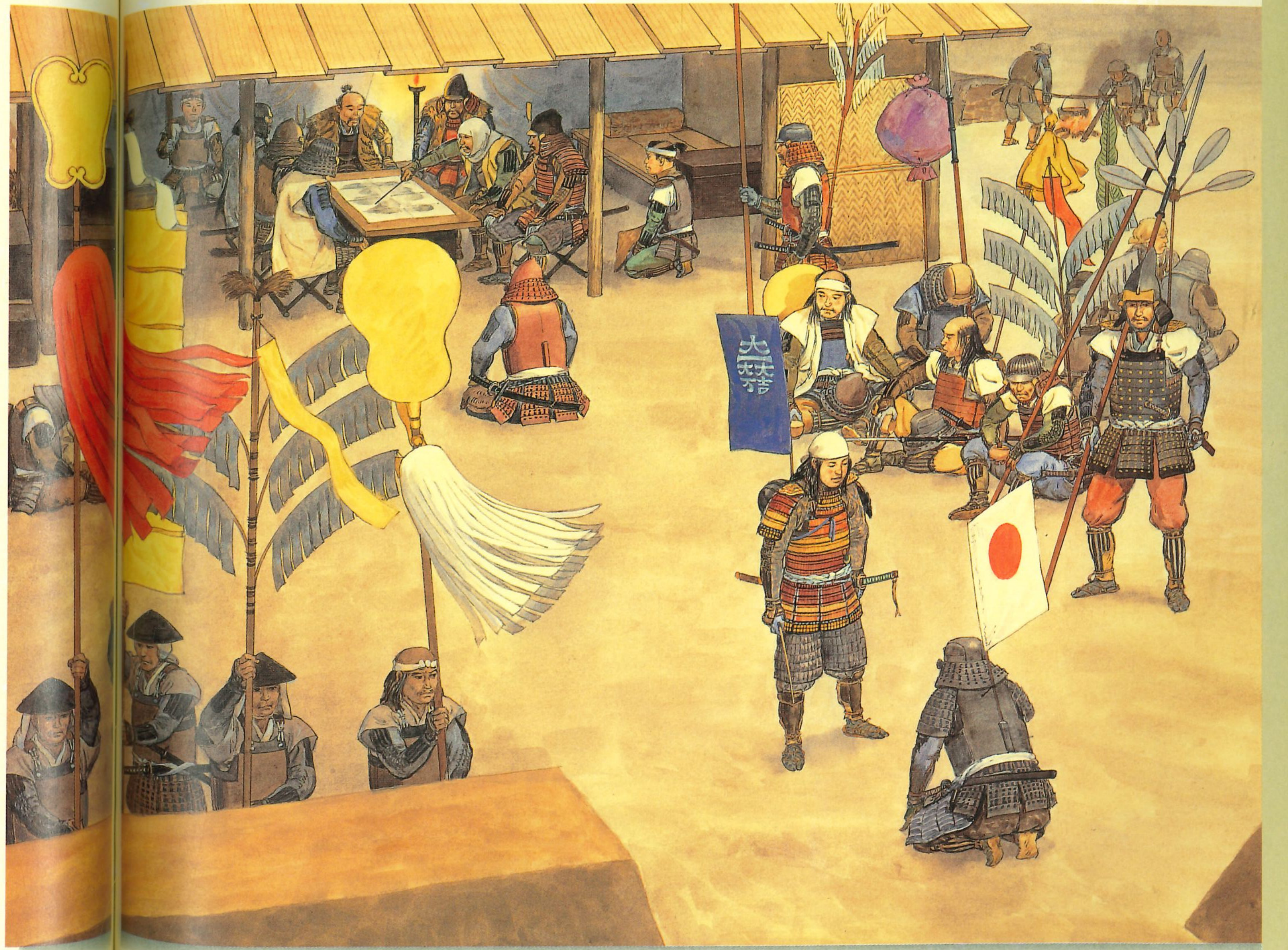
戦いは四月二十一日の午前二時ごろはじまった。両軍衝突の舞台となったのが賤ヶ岳付近であった。ここで、福島正則・加藤清正らいわゆる「賤ヶ岳七本槍」とよばれる秀吉近習たちの奮戦によって、佐久間盛政隊が崩れ、それをみた前田利家・金森長近・不破勝光ら勝家の与力大名たちも撤退をはじめたため、勝家軍の大敗北で終わったのである。

（小和田哲男・静岡大学教授）



➡浮足立った柴田勝政隊に突撃する秀吉馬廻衆。いわゆる「賤ヶ岳七本槍」である。

⬇イラストは賤ヶ岳合戦における秀吉本陣を描く。日の丸の旗指をした伝令から報告を受けるのは、このとき24歳の若武者だった石田三成である。その背後で諸将から作戦案を聞くのが秀吉。この賤ヶ岳合戦でも、秀吉は敵の目算を大幅に狂わせるほどのスピードで軍を移動させる「大返し」を行っている。秀吉の軍勢など鎧袖一触に蹴散らすつもりだった勝家にとって、この敗戦は軍事的な打撃だけでなく、精神的なダメージも大きかったに違いない。実際、逃げ帰った北ノ庄でも勝家は態勢を整えられず、秀吉軍に囲まれて自害した。



紀州根来寺

反秀吉陣営の一翼、武装集団・根来衆の拠点

根来寺は、紀ノ川中流域の和歌山県那賀郡岩出町に所在する。旧和泉国と紀伊国を分ける和泉山脈の南側の小盆地にあって、昔は、定めし自然の要害と見られていたに違いないと思われるような環境である。

保延六年（一一四〇）、覚鑁上人がこの地に一乗山円明寺を創建したのが根来の始まりである。

覚鑁は、真言宗の教義に新説を立て、高野山に大伝法院を創始したため、高野山の中心となる金剛峰寺と対立し、大伝法院領だったこの地に逃れてきたのである。

その後も金剛峰寺との衝突が続き、最終的には正応元年（一二八八）に高野山から独立し、やがて根来派の教義は、新義真言宗と呼ばれるようになる。

中世以降、根来は隆盛をきわめ、大伝法院を中心に杉ノ坊、泉識坊、岩室坊、閼伽井坊などを初めとする多くの子院が構えられ、坊舎は二千七百余に達したといわれている。それらの総称が「根来寺」である。

当然、寺内にはたくさんの僧徒も居住していたが、彼らのうち堂塔の管理や寺の防衛に当たる「行人」層が武装集団化した。それが「根来寺衆」で、鉄砲集団として有名である。

この人びとのバックや周辺には地域の土豪たちも付いていたから、紀伊・和泉・河内の三か国にまたがる大きな勢力となり、しばしば諸侯の抗争にも関わっている。

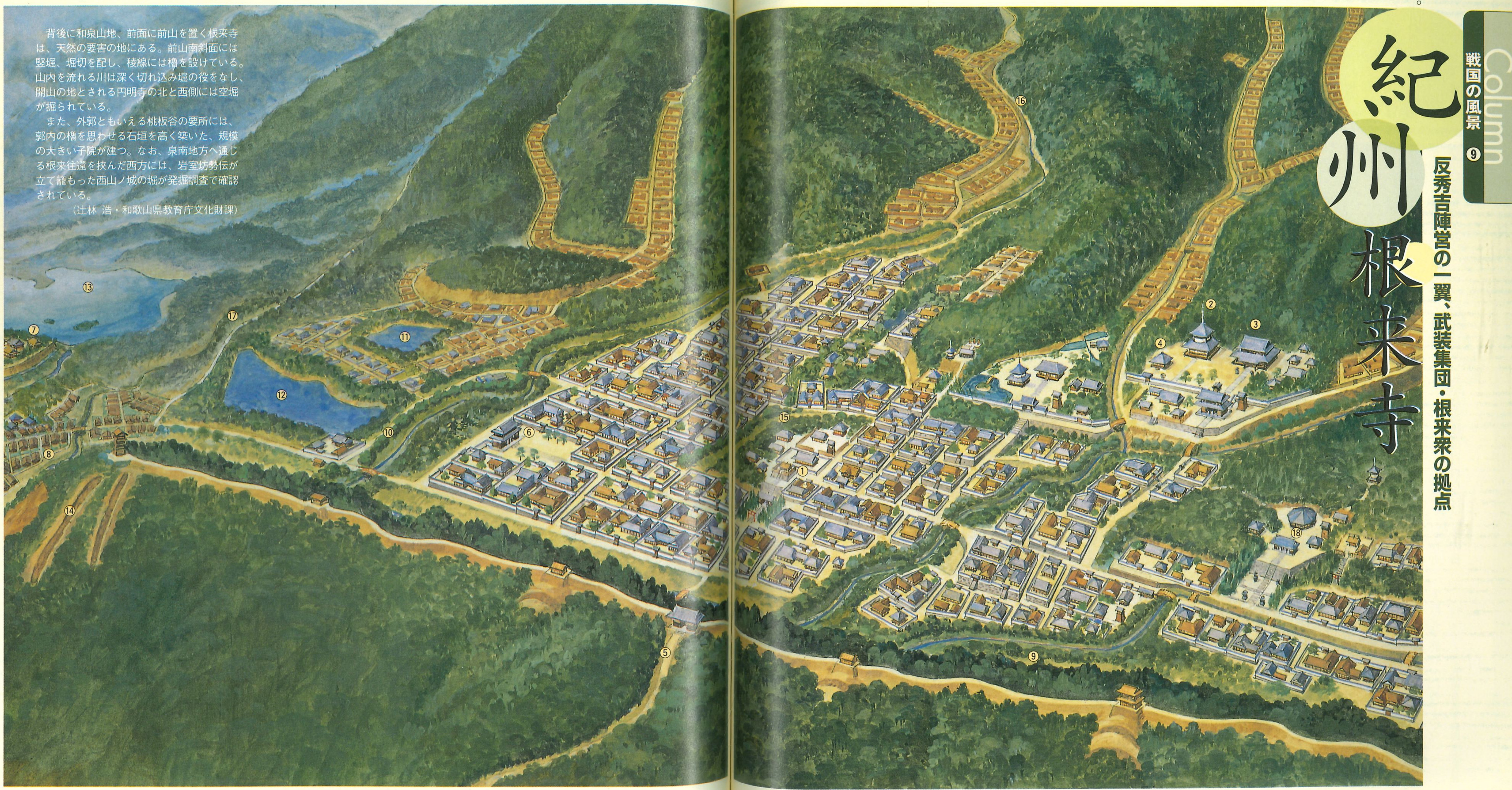
最終的には、根来寺は天正十三年（一五八五）の羽柴秀吉の紀州攻めによって壊滅的な打撃を受ける。

根来寺衆の主力が和泉の戦線に出払っているうちに、秀吉自ら率いる大軍に襲われて無血占領された直後、失火によって一山焼失してしまったのである。

わずかに寺の中心である大伝法堂と大塔（多宝塔）だけがまぬかれたが、前者は、その後、手違いがあって解体されてしまったため、今日まで残されている遺構は、大塔だけである。

（鈴木眞哉・歴史研究家）

①円明寺
②多宝塔
③大伝法堂
④大子堂
⑤南大門
⑥西大門
⑦西山ノ城
⑧町屋
⑨菩提院川
⑩蓮華谷川
⑪新池
⑫大門池
⑬住持池
⑭竪堀
⑮空堀
⑯桃坂谷
⑰根来往還
⑱不動堂



背後に和泉山地、前面に前山を置く根来寺は、天然の要害の地にある。前山南斜面には竪堀、堀切を配し、稜線には櫓を設けている。山内を流れる川は深く切れ込み堀の役をなし、開山の地とされる円明寺の北と西側には空堀が掘られている。

また、外郭ともいえる桃板谷の要所には、郭内の櫓を思わせる石垣を高く築いた、規模の大きい子院が建つ。なお、泉南地方へ通じる根来往還を挟んだ西方には、岩室坊勢伝が立て籠もった西山ノ城の堀が発掘調査で確認されている。

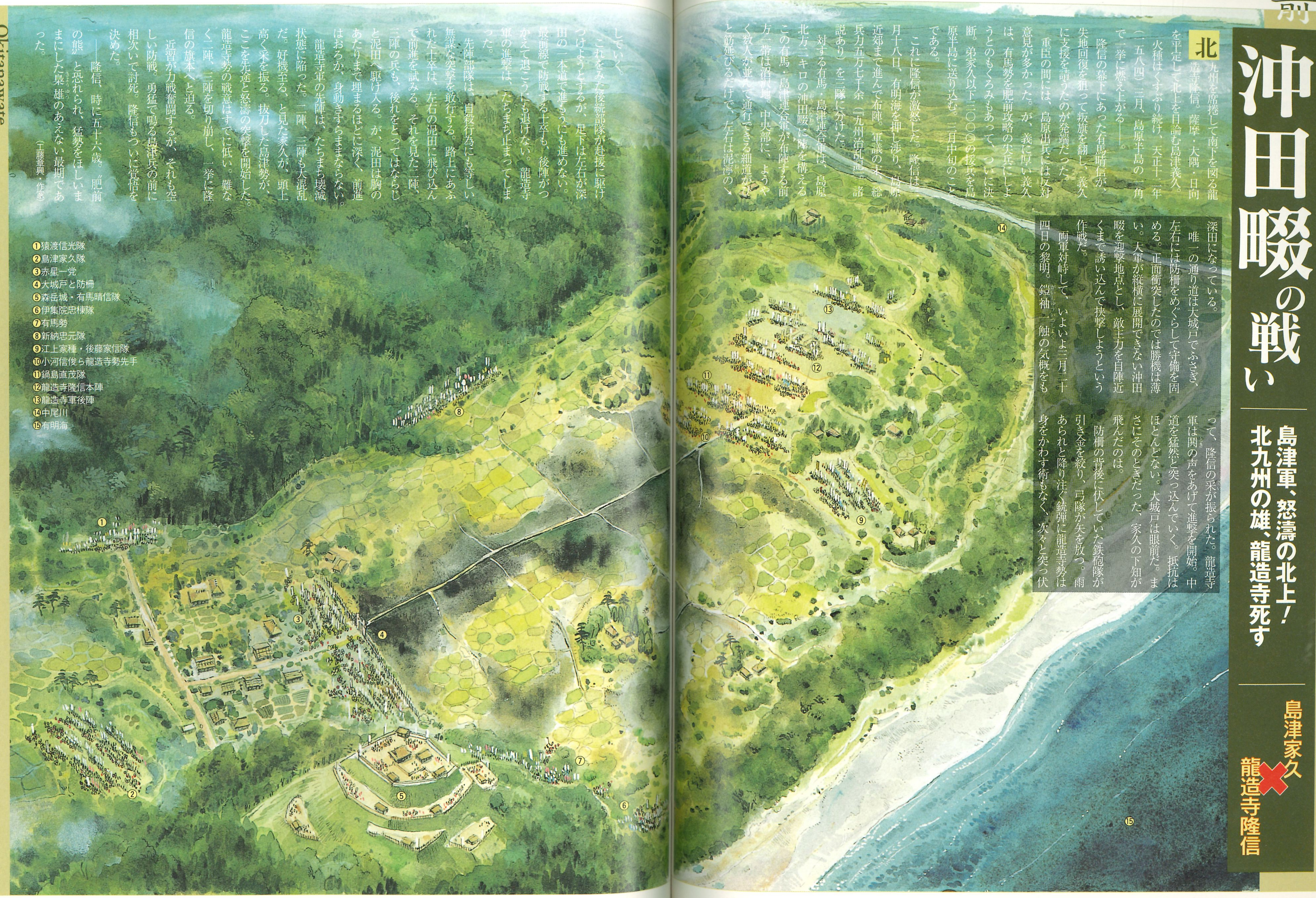
（辻林 浩・和歌山県教育庁文化財課）

天正十二年三月［1584］▽長崎県

沖田畷の戦い

島津軍、怒濤の北上！北九州の雄、龍造寺死す

島津家久 ✖ 龍造寺隆信



北九州を席捲して南下を図る龍造寺隆信。薩摩・大隅・日向を平定して北上を目論む島津義久。

火種はくすぶり続け、天正十二年（一五八四）三月、島原半島の一角で一挙に燃え上がる——。

隆信の幕下にあった有馬晴信が、失地回復を狙って叛旗を翻し、義久に支援を請うたのが発端だった。

重臣の間には、島原出兵には反対意見が多かった。が、義に厚い義久は、有馬勢を肥前攻略の尖兵にしようとのもくろみもあって、ついに決断。弟家久以下三〇〇〇の援兵を島原半島に送り込む。三月中旬のことである。

これに隆信が激怒した。隆信は三月十八日、有明海を押し渉り、島原近郊まで進んで布陣。軍議の末、総兵力五万七千余（『九州治乱記』。諸説あり）を三隊に分けた。

対する有馬・島津連合軍は、島原北方二キロの沖田畷に陣を構える。

この有馬・島津連合軍が布陣する前方一帯は沼沢地。中央部に、ようやく数人が並んで通行できる細道がひと筋延びるだけで、左右は泥濘の↘深田になっている。

唯一の通り道は大城戸でふさぎ、左右には防柵をめぐらして守備を固める。正面衝突したのでは勝機は薄い。大軍が縦横に展開できない沖田畷を迎撃地点とし、敵主力を自陣近くまで誘い込んで挟撃しようという作戦だ。

両軍対峙して、いよいよ三月二十四日の黎明。鎧袖一触の気概をもって、隆信の采が振られた。龍造寺軍は鬨の声をあげて進撃を開始。中道を猛然と突っ込んでいく。抵抗はほとんどない。大城戸は眼前だ。まさにそのときだった、家久の下知が飛んだのは。

防柵の背後に伏していた鉄砲隊が引き金を絞り、弓隊が矢を放つ。雨あられと降り注ぐ銃弾に龍造寺勢は身をかわす術もなく、次々と突っ伏していく。

これをみた後続部隊が赴援に駆けつけようとするが、足下は左右が深田の一本道で進もうにも進めない。最前線で防戦する士卒も、後陣がつかえて退こうにも退けない。龍造寺軍の進撃は、たちまち止まってしまった。

先陣部隊は、自殺行為にも等しい無謀な突撃を敢行する。路上にあふれた士卒は、左右の泥田に飛び込んで前進を試みる。それを見た二陣、三陣の兵も、後れをとってはならじと泥田へ駆け入る。が、泥田は胸のあたりまで埋まるほどに深く、前進はおろか、身動きすらままならない。

龍造寺軍の先陣は、たちまち壊滅状態に陥った。二陣、三陣も大混乱だ。好機至る、と見た家久が、頭上高く采を振る。抜刀した島津勢が、ここを先途と怒濤の突撃を開始した。龍造寺勢の戦意はすでに低い。難なく二陣、三陣を切り崩し、一挙に隆信の旗本へと迫る。

近習が力戦奮闘するが、それも空しい防戦。勇猛で鳴る島津兵の前に相次いで討死。隆信もついに覚悟を決めた。

——隆信、時に五十六歳。〝肥前の熊〟と恐れられ、猛勢をほしいままにした梟雄のあえない最期であった。

（工藤章興・作家）

①猿渡信光隊
②島津家久隊
③赤星一党
④大城戸と防柵
⑤森岳城・有馬晴信隊
⑥伊集院忠棟隊
⑦有馬勢
⑧新納忠元隊
⑨江上家種・後藤家信隊
⑩小河信俊ら龍造寺勢先手
⑪鍋島直茂隊
⑫龍造寺隆信本陣
⑬龍造寺軍後陣
⑭中尾川
⑮有明海

天正十二年三月～十二月［1584］▶愛知県

小牧・長久手の戦い

次世代を狙う両雄が衝突！ 秀吉、天下を手中にす！

織田信雄・徳川家康 × 羽柴秀吉

賤ヶ岳の戦いで羽柴秀吉が勝利したため、秀吉は、織田信長の後継者としての立場をほぼ不動のものにした。しかし、それに不満をもったのが、信長の同盟者だった徳川家康である。信長の二男織田信雄と、

天正十二年（一五八四）三月、信雄が、秀吉に内通していたという理由で三人の家老を誅伐するという事件がおこったのを契機に、信雄と家康が連絡をとりつつ、秀吉との戦いにふみきっている。家康としては、信雄の不満を利用し、秀吉がこれ以上強大化しないように何らかの手をうつ必要があると考えていたからである。

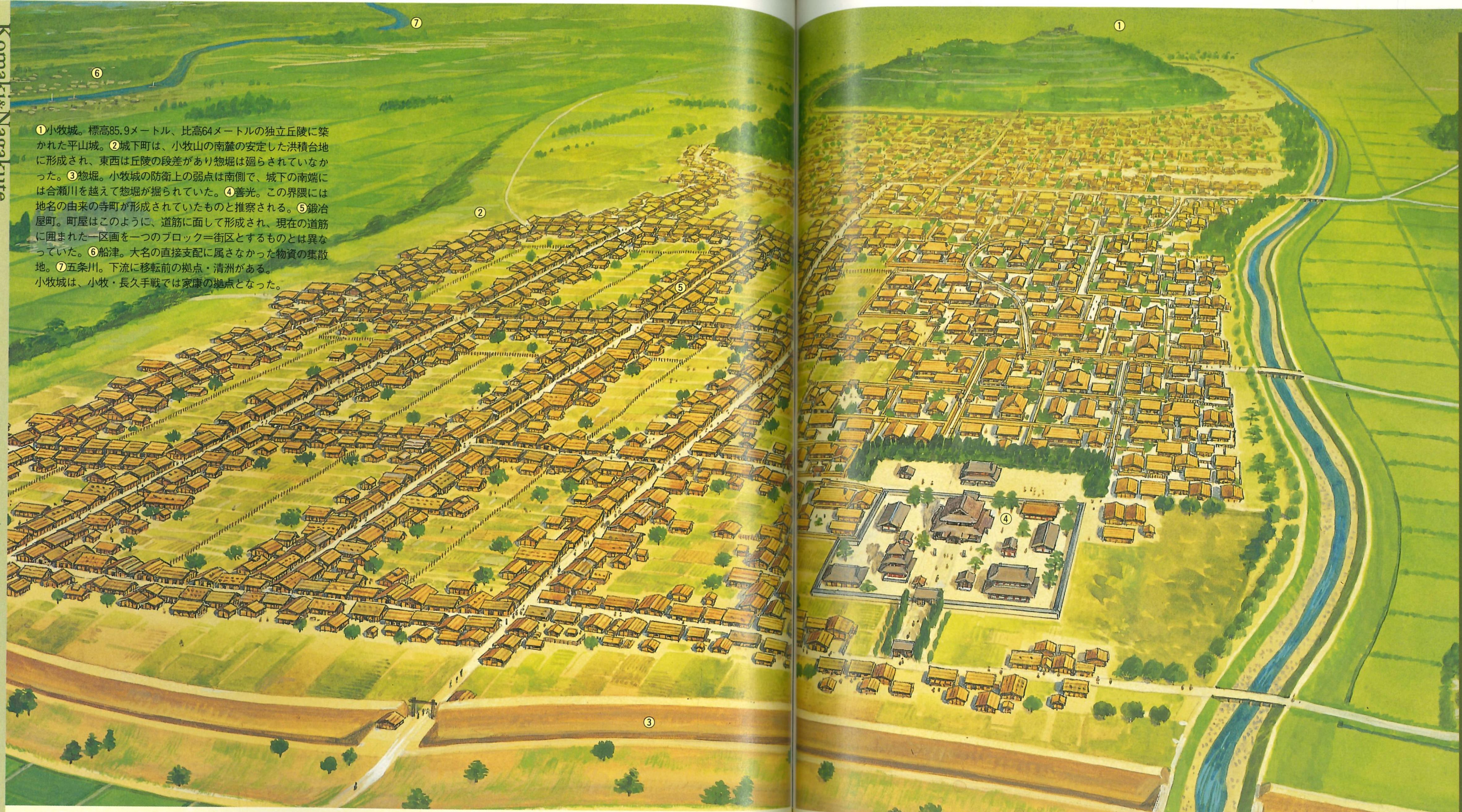
家康は、秀吉に不満を抱く大名や勢力の合従連衡で秀吉を倒すことが可能と考えており、大規模な外交戦略も展開していた。成果として、四国の長宗我部元親や、紀州の根来・雑賀の僧兵や鉄砲集団を味方とすることに成功している。しかし、美濃の池田恒興は家康の誘いを蹴り、秀吉方についてしまった。これは、家康としても誤算であった。

結局、このとき、秀吉陣営におよそ一〇万の兵が集まったのに対し、家康・信雄連合軍側には三万の兵しか集まらなかった。もっとも、一説には、秀吉側が八万で、家康・信雄連合軍側には一万六〇〇〇ないし一万七〇〇〇ほどしか集まらなかったともいう。いずれにしても、兵力の点では圧倒的に秀吉側が有利であった。

家康は、かつて信長が居城としたことのある小牧山を修復し、そこに本陣を置き、秀吉方の出方を待った。戦いがはじまったのは三月十七日である。秀吉本人はまだ出陣していなかったが、先鋒隊の一人森長可が功を焦って、羽黒まで陣を進め、そこで家康の部将酒井忠次と戦い、森長可が敗れている。

これを羽黒の戦いといっているが、この敗報を聞いた秀吉は、自ら大軍を率いて犬山城に入り、同月二十八日には、小牧山のすぐ近く楽田に布陣し、両軍にらみあいの状態となった。

しばらく膠着状態が続いたが、大軍を率いてきているということもあり、次第に焦りの色をみせはじめたのは秀吉方であった。特に、羽黒の戦いで面目を失った女婿森長可の名誉挽回を考えた池田恒興は、「家康を小牧山に釘づけしている間に、別働隊が三河を攻め、家康の本領を



①小牧城。標高85.9メートル、比高64メートルの独立丘陵に築かれた平山城。②城下町は、小牧山の南麓の安定した洪積台地に形成され、東西は丘陵の段差があり惣堀は廻らされていなかった。③惣堀。小牧城の防衛上の弱点は南側で、城下の南端には合瀬川を越えて惣堀が掘られていた。④善光。この界隈には地名の由来の寺町が形成されていたものと推察される。⑤鍛冶屋町。町屋はこのように、道筋に面して形成され、現在の道筋に囲まれた一区画を一つのブロック＝街区とするものとは異なっていた。⑥船津。大名の直接支配に属さなかった物資の集散地。⑦五条川。下流に移転前の拠点・清洲がある。
小牧城は、小牧・長久手戦では家康の拠点となった。

（イラスト監修＝千田嘉博・国立歴史民俗博物館考古研究部）

⬆イラストは天正12年(1584) 4月8日～9日、長久手方面での各軍の動向を描く。徳川四天王の一人、榊原康政は大須賀康高と連携し、白山林附近に駐屯する秀吉軍別働隊の大将・秀次隊を急襲した。その後の戦闘でも徳川軍の猛攻は続き、このため秀吉方の池田恒興父子や森長可らが一連の戦闘の中で戦死した。
❶池田恒興隊前衛❷池田隊本隊❸森長可隊❹堀秀政隊❺羽柴(三好)秀次隊
❶丹羽氏重隊❷大須賀康高隊❸榊原康政隊❹徳川家康・織田信雄本隊
①岩崎城②御嶽山③生牛原④金萩原⑤岐阜嶽⑥仏ヶ根⑦富士ヶ根⑧細ヶ根⑨白山林⑩岩作⑪色ヶ根⑫高根⑬城ヶ根

⬇イラストは天正12年(1584)当時の小牧城の推定復元である。現在残された遺構は、地表面から観察する限りでは、小牧・長久手戦時に構築された陣城と判断できる。
①本丸②虎口③大手口④搦手口⑤城下町の一部

攪乱すれば勝てる」と、秀吉に進言した。

秀吉は、家康のいくさ巧者ぶりは百も承知だったので、「そんなに簡単にいくわけはない」と思っていたが、甥の秀次までも、「自分がその大将になりたい」と、別働隊の大将になることをかって出たため、秀吉もそれを許している。

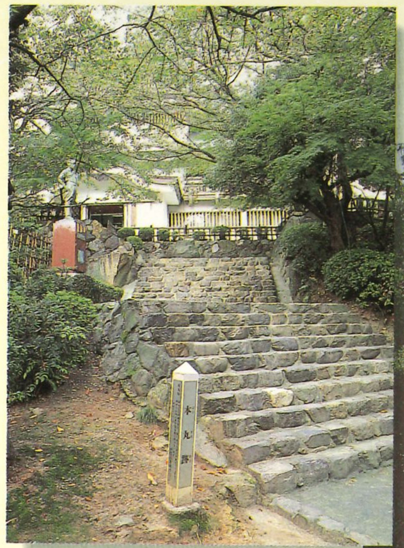
四月七日、羽柴秀次を大将とし、池田恒興・同元助父子、森長可、堀秀政らが一万六〇〇〇の軍勢を率いてひそかに南下し、三河に向かって出陣した。

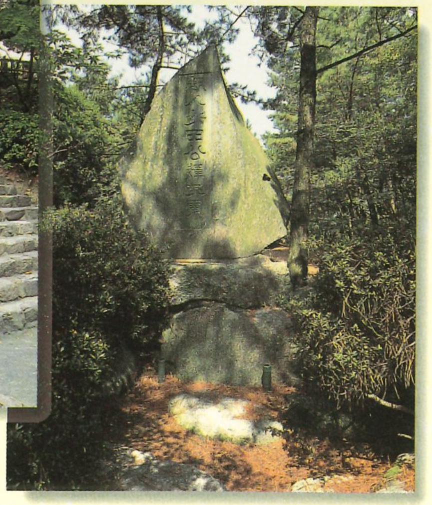
しかし、その隠密行動は、すでに家康によって察知されてしまっていたのである。家康は、榊原康政らに兵をつけて先まわりさせるとともに、八日の夜半、家康自らもひそかに小牧山を出、翌九日、三河へ向かう秀次らの軍を長久手あたりで挟み撃ちにしているのである。

秀次軍は、全く予期していなかった家康先鋒榊原康政らの待ち伏せによって崩れ、激しい戦いの中、池田恒興・元助父子をはじめ、森長可も戦死し、大将の秀次は命からがら秀吉のもとに逃げ帰るありさまであった。このときの戦いで秀次軍に二千五百余の犠牲者が出たといわれている。

こうして、局地戦では家康方が勝っている。秀吉は、力で家康・信雄をねじふせるのは無理と判断し、勧降工作に切りかえている。ターゲットになったのが信雄で、秀吉は信雄と単独講和を結んでいる。結局、信雄が秀吉と講和してしまった以上、秀吉と戦いを続ける名分をなくした感じの家康も、秀吉との講和に応じているのである。

（小和田哲男・静岡大学教授）


⬆小牧城本丸跡。


⬅勝入塚碑(池田恒興の戦死跡)。

天正十三年閏八月～十一月 [1585] ▷長野県

第一次上田合戦

真田の武名燦然！ 昌幸、徳川の大軍を撃破

真田昌幸 × 徳川軍

天正十二年（一五八四）、家康は信長の跡を継いだ秀吉と小牧長久手で対峙するに伴い、その後背を脅かす北条氏と和睦する必要から、二年前にかわした和睦条件の履行を迫られた。条件の一つが、当時家康に臣従していた昌幸の真田氏が有する沼田領を、上州での勢力拡大を図る北条氏へ引き渡すことだった。

だが昌幸は、沼田を差し出せとする家康の命を拒絶した。徳川氏と断交した昌幸は、すでに秀吉との講和を果たしていた上杉景勝を頼り、二男信繁（幸村）と重臣矢沢頼綱の嫡子頼幸を人質として送った。さらに秀吉その人にも窮状を訴えて助力を懇請、秀吉から「心易かるべく候」との言質を得た。

家康はこの昌幸の動向に激怒し、天正十三年八月、大久保忠世・忠教ら麾下の精鋭と信濃の徳川諸勢力からなる総勢七千余人をもって上田城に向かわせた。

昌幸はこれを迎え撃つべく、自身は上田城を守り、長男信幸を砥石城へ入れ、矢沢城や丸子城にも兵を配した。しかし七千余りの徳川勢に対し、昌幸の総兵力は二千余りに過ぎない。このため昌幸は上杉氏に救援を要請、景勝はすぐ援軍を仕立て、真田郷の曲尾へ急行させている。

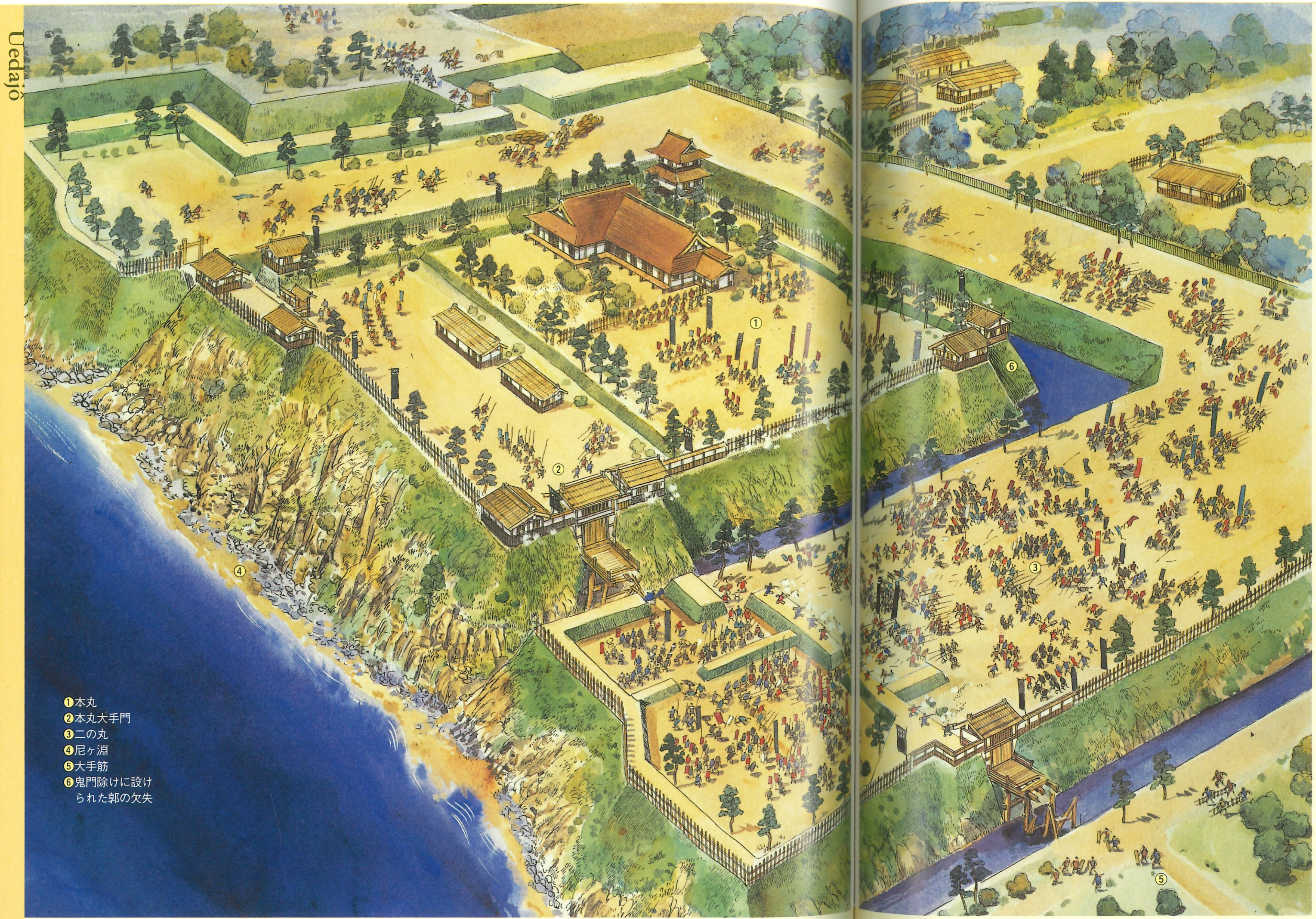
戦闘は翌閏八月二日、上田城正面で開始された。城外に布陣した真田の小勢を見た徳川勢が力押しに押す。退く真田兵を追って城内にまで深追いしたところが、徳川勢にとっての地獄となった。あらかじめ巧みに配された真田の伏兵が、追撃する徳川軍の側面を横撃したのである。驚いた徳川勢は退却を焦り、城下の町筋に設けられた「千鳥掛柵*」に退路を妨げられ、大混乱に陥った。

戦勢は一気に逆転した。昌幸は追撃の手を緩めず、城外東に流れる神川にまで徳川の大軍を追いつめる。折からの雨で増水した神川に飛び込むか、真田勢の追撃をまともに受けるか——。

文字通り背水の陣となった徳川軍の兵はその多くが討たれ、あるいは溺死した。その数、徳川方の資料によれば三百五十余、信幸の書状によれば千三百余という。

この後、千曲川南岸の丸子城周辺で大規模な衝突があったが、十一月に入り、三河で生じた大事件によって徳川の全軍は退却した。

徳川家の重臣石川数正が秀吉の許に走ったことで、家康が上田城攻略を諦めたという事情を昌幸が知ったのは、同月十九日付の秀吉書状によってである。当面の最大の敵である秀吉に自家の機密が洩れてしまうという事態の前に、家康はいつまでも真田に拘わっているわけにはいかなくなった。石川数正の出奔という思いもよらなかった状況があったとはいえ、寡兵を以て徳川の大軍に大打撃を与えたこの大勝で、昌幸は真田の威名を天下に轟かせた。



＊千鳥掛柵＝城外に向けて八の字に開いた柵。城内から進むと狭くて通りにくい工夫がされていたという。

天正十三年六月～八月［1585］▷四国

四国遠征

圧倒的な秀吉軍、長宗我部軍を一蹴！

秀吉連合軍 × 長宗我部元親

当面の最大の敵、家康と講和を果たした秀吉は、天正十三年（一五八五）三月、和泉を平定したのち、雑賀・根来衆を攻めてこれを降した。

同じ頃、四国では讃岐を制圧した長宗我部元親が伊予進攻を開始し、同年春、伊予を手中に収めて四国統一をほぼ完成させた。土佐を統一してからすでに一〇年が経過していた。念願の四国統一を果たした元親ではあったが、その余韻に浸る暇はなかった。秀吉が讃岐と伊予を返還するよう求めてきたのである。

元親にとってはやっと手に入れた讃岐と伊予であり、簡単に手放せるものではなかった。だが秀吉の軍事力も侮りがたい。元親は伊予一国を返還することで折り合いをつけようとしたが秀吉は許さず、交渉は平行線をたどった。

一方、秀吉は端から元親との交渉などあてにしていなかった。六月、早々に四国征討令を発し、大軍をもって三方面から四国への進攻を開始した。堺から出陣した実弟・羽柴秀長軍三万と明石を発った甥の秀次軍三万は淡路島の福良で合流、阿波の土佐泊へ上陸した。同時に宇喜多秀家の二万三〇〇〇は讃岐の屋島を攻略し、さらに毛利輝元は小早川隆景・吉川元長らと三万の軍を率いて伊予の東に攻め入った。

津波のような秀吉軍の前では、元親の軍勢などひとたまりもない。配下の部将の多くは討たれ、諸城は瞬く間に落とされていった。八月、元親は降伏し、土佐一国のみを安堵された。元親の一〇年の努力は、わずか半年でもろくも崩れ去った。

（イラストは秀吉軍が四国へ上陸した場面をイメージして描いてあります）

天正十三年十一月 [1585] ▷福島県

人取橋の戦い

奥州の風雲児・政宗、領土拡大へ動く！

伊達政宗 ✕ 佐竹義重ほか

天正十三年（一五八五）十月十五日、伊達政宗は一万三〇〇〇の兵を率いて畠山国王丸の拠る二本松城を囲んだ。

この一週間前、政宗の留守中、服属を願い出た畠山義継主従に一瞬の隙を突かれ、父・輝宗が拉致されて刺殺されるという変事があった。畠山領に逃げ込む直前、伊達勢に追いつかれた義継主従は輝宗を刺殺したあと、その場で全員討ち死にした。

父の初七日が済むと同時に、政宗は弔い合戦として二本松城を囲んだのだが、一方、わずか十二歳の国王丸が跡を継いだ畠山氏にとっても、弔い合戦という意味では同じことであり、城は容易に落ちなかった。

その間、政宗の許に驚くべき報がもたらされた。佐竹義重を盟主として、伊達に敵対する勢力（芦名・岩城・石川・白川・二階堂・相馬の諸氏）が三万からなる連合軍を組織、二本松城救援のため、北上を開始したというのである。

このままでは腹背に敵を受けて挟撃されてしまう。政宗は三万の連合軍を迎撃することに決め、二本松城への押さえとして数千の兵を残し、自身は七千余の兵とともに十一月十六日、本宮城に入城した。

翌十七日早朝、政宗は本宮から古観音堂の丘に本陣を進め、左翼の拠点・瀬戸川館に兵一〇〇〇をもたせた伊達成実を入れた。このほか荒井・五百川付近、あるいは青田原にも兵をわけて布陣させたため、古観音堂の本陣には四〇〇〇ほどの兵力しかなかったのではないか。

すでに奥州街道と会津街道が交わる手前の前田沢の南に陣を構えていた連合軍は、この伊達軍の動きに対し、豊富な兵力をもって各所で圧倒、ついに政宗の本陣間際にまで迫った。

この政宗の危機に伊達の老将・鬼庭左月は人取橋を越えて奮戦し、壮絶な戦死を遂げた。政宗はこの間に何とか本宮城に退いたものの、この日、終始守勢を余儀なくされた伊達勢は、連合軍が日没で引き上げたために救われたようなものだった。

翌日はまさしく、政宗の命運が尽きるはずだった。だが、夜が明けると連合軍の姿はかき消えていた。前夜、佐竹義政が下僕に刺殺されるという突発事件があって陣営に動揺があったこと、また佐竹の本国常陸で水戸氏と里見氏がその留守を窺う動きが伝えられたことが原因らしい。

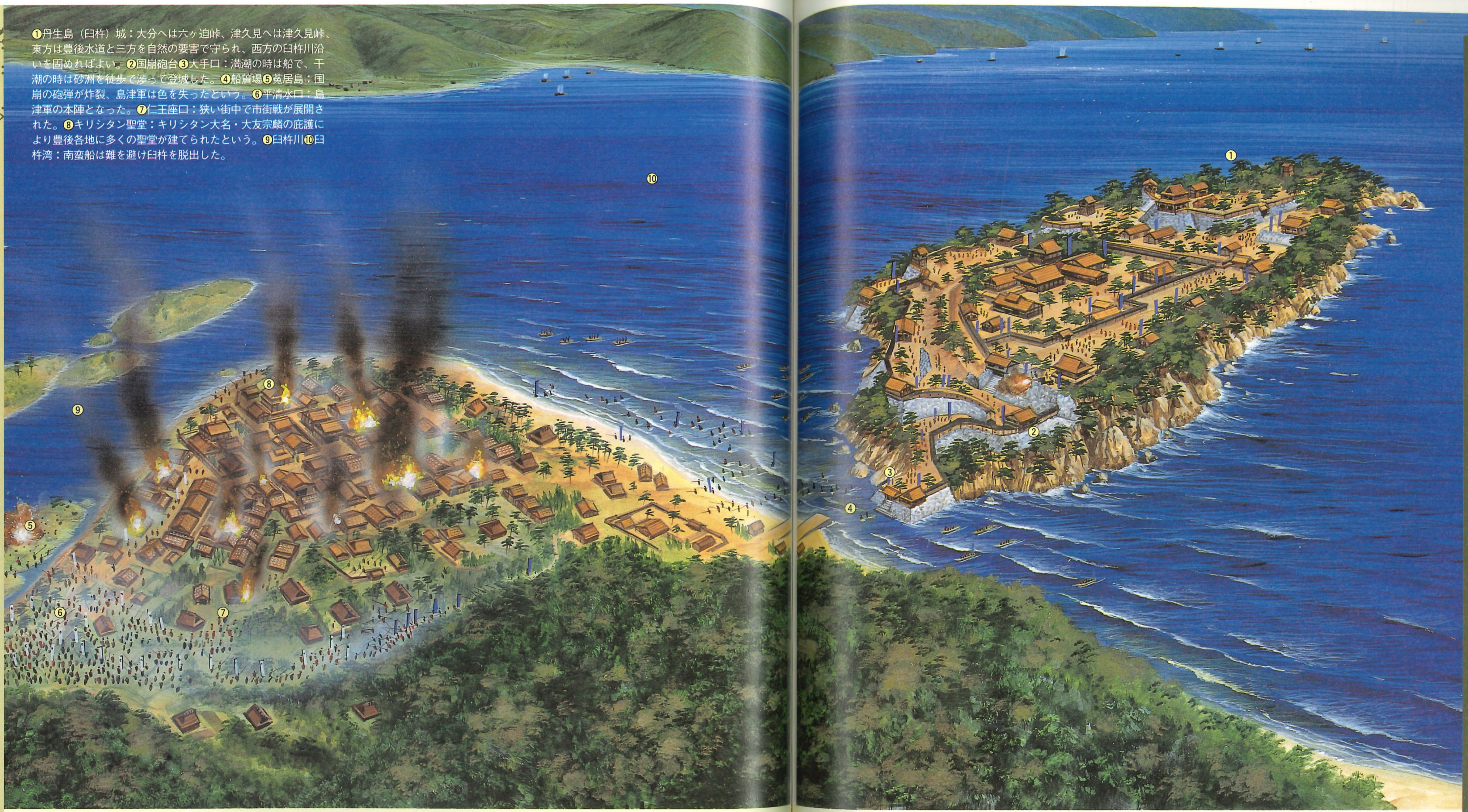
この戦いで伊達軍は死傷者四二六、連合軍は九六一名の死傷者を出したという。政宗の幸運は、結果的に不戦勝となっただけでなく、寡兵ながら大軍に対して一歩も引かなかったために、その武名が喧伝されたことにある。十九歳の若武者、政宗の東北での覇業は、まさにここから始まったのである。

丹生島城攻防戦

天正十四年十月［1586］▽大分県

吠える「国崩し」! 宗麟、最後の砦を死守

大友軍 × 島津軍



①丹生島（臼杵）城：大分へは六ヶ迫峠、津久見へは津久見峠、東方は豊後水道と三方を自然の要害で守られ、西方の臼杵川沿いを固めればよい。②国崩砲台③大手口：満潮の時は船で、干潮の時は砂洲を徒歩で渉って登城した。④船着場⑤菟居島：国崩の砲弾が炸裂、島津軍は色を失ったという。⑥平清水口：島津軍の本陣となった。⑦仁王座口：狭い街中で市街戦が展開された。⑧キリシタン聖堂：キリシタン大名・大友宗麟の庇護により豊後各地に多くの聖堂が建てられたという。⑨臼杵川⑩臼杵湾：南蛮船は難を避け臼杵を脱出した。

Niujimajō

（イラスト監修＝菊田 徹・臼杵市教育委員会社会教育課文化係主査）

天正六年の日向敗戦後、大友宗麟は丹生島（臼杵）城に戻り、領内の反乱鎮圧などは、この城から出陣した。丹生島城は、海に浮かぶ島上に築かれており、築城は永禄五年（一五六二）から同六年にかけておこなわれている。城は、東西約四二〇メートル、南北約一〇〇メートルと小さなものではあったが、周囲を海に囲まれ、島の四周は、切り立った断崖が連なる天然の要塞だった。

天正十四年、豊後侵攻を開始した島津軍は、義久が総大将、義弘が率いる軍勢は肥後口から、また、家久の軍勢は日向口から豊後へ侵入してきた。そして家久は、宗麟が守る丹生島城を攻め落とすべく、諸勢を臼杵に入れ、平清水口に陣取らせた。

城方は宗麟を中心に、臼杵鎮順、古庄丹後入道、吉岡甚吉、吉田一祐など、さらに薬師寺、若林などの海部衆（水軍）も加わって、守りを固めた。そして、先年入手したばかりの「国崩し」と呼ばれる大砲を持ち出し、武宮武蔵守に命じて島津陣営に撃たせることにした。武蔵守は、砲筒に火薬を一貫目ほど詰め込み、さらに鉛の大玉のほかに小玉をも計って詰め、城の大手口から、島津軍の平清水に向けて発射した。

大音響を残して飛んでいった大玉は、島津軍の屯集する地に立つ柳の大木に見事命中した。大木は音をたてて倒れ、下敷きとなって島津軍に多くの死傷者を出したという。

この大友軍の「新兵器」に、一時は動揺した島津軍だったが、すぐに態勢を立て直し、城から打って出た諸勢と一戦を交え、平清水口では臼杵勢を若干討ち取っている。

一方、城の南西側の仁王座口では、吉岡甚吉、利光彦兵衛尉、吉田一祐などの猛者が、島津軍と互角以上の働きをし、数十人を討ち取るなど、敵を撃退させる手柄をあげている。

その後、戦況は膠着し、家久は、徐々に平清水口から兵を引き、最終的には城に押し寄せることもなく、全軍を撤退させた。

丹生島城を落とせなかったのは、九州制覇を目指す島津氏にとって、致命的ともいえる失敗だった。大友氏救援のため、秀吉の軍勢十万余騎が、豊後に到着したのである。島津軍は、豊後からの完全撤退を始めた。その後、日向根白坂おいて羽柴秀長の軍に大敗を喫し、のち秀吉の軍門に降った。島津氏の野望はここに潰えたのである。

摂津

天正十六年 [1588]▽大阪府

大坂城第二期工事竣工

天下人にふさわしい空前の巨城完成！

秀吉の大坂城は、四次にわたる建築工事を経て完成した。天正十一年（一五八三）に起工して以来、実に一五年以上の歳月が費やされ、ようやく天下人の居城にふさわしい、空前の大城郭となった。

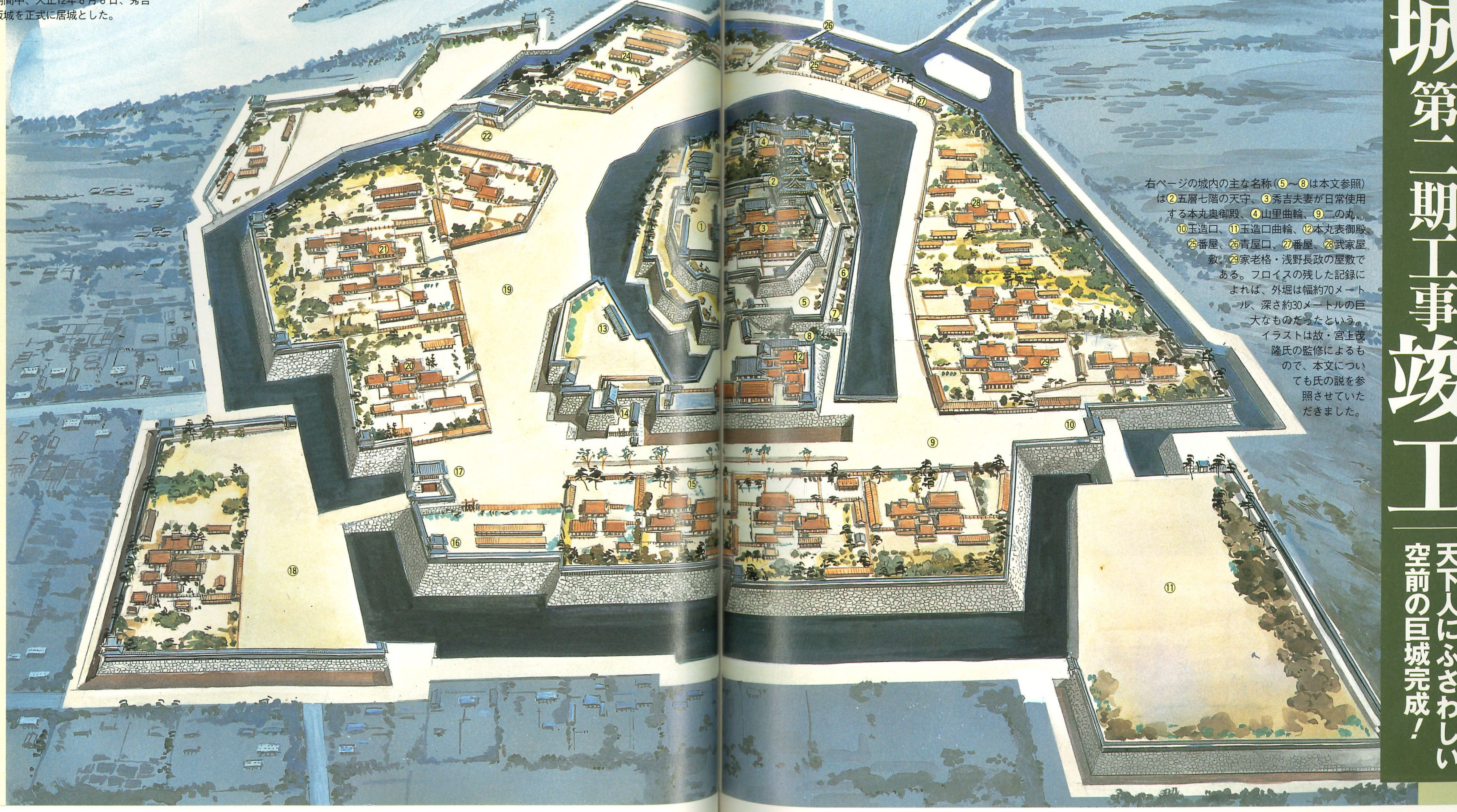
そもそも大坂城は、信長と一〇年に及ぶ死闘を繰り広げた石山本願寺の跡地に築かれたもので、すでに本願寺時代、「摂州第一の名城」と謳われており、『信長公記』には「日本一の境地」と記されたほどの要害であった。

信長配下の部将として本願寺攻略戦に参加した秀吉が、この要害の地に目をつけなかったはずはなく、信長死後、大坂の地を手に入れたのち、天下平定を急速に進める中、石垣を積み堀をうがち、近世的城郭へと変貌させたのである。

イラストは、二年の工期（第二期工事）を経て二の丸と外堀の完成した天正十六年段階（一五八八・関ヶ原合戦の一二年前）の大坂城である。本丸の縄張は秀吉の謀将・黒田官兵衛（如水）の手によるものと伝えられ、複雑で緻密な構造となっている。万が一、敵の侵入を許した場合でも、②天守もしくは③本丸奥御殿から①本丸北側の④山里曲輪を経て、⑤東中の段帯曲輪の右⑥東下の段帯曲輪を通って⑦埋門（イラストでは見えない）を抜け、⑧井戸曲輪から⑨二の丸、さらには⑩玉造口へ向かい、通常閉鎖されている⑪玉造曲輪（算用曲輪）へと至る、という非常脱出経路も想定されていた。

ちなみに秀吉死後のことになるが、天下への野望をあらわにして専横の限りを尽くす家康を見かねた豊臣家奉行らが発した弾劾文「内府ちかひ（違い）の条々」の中では、家康が北政所を追い出してその屋敷に住んだこと、西の丸に天守を建てたことを指弾している。

この「西の丸天守」が実際に存在したのか、建てられたとすればその位置はどこなのか。残念ながらその詳細は不明である。



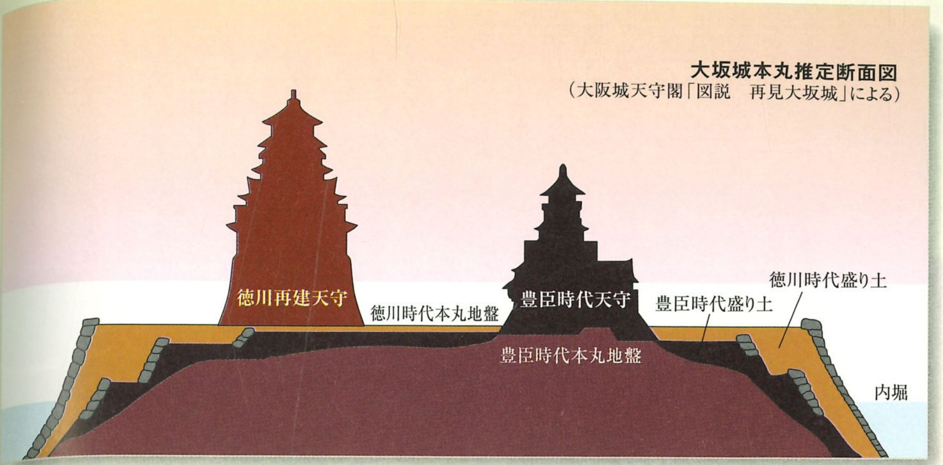
右ページの城内の主な名称（⑤～⑧は本文参照）は②五層七階の天守、③秀吉夫妻が日常使用する本丸奥御殿、④山里曲輪、⑨二の丸、⑩玉造口、⑪玉造口曲輪、⑫本丸表御殿、㉕番屋、㉖青屋口、㉗番屋、㉘武家屋敷、㉙家老格・浅野長政の屋敷である。フロイスの残した記録によれば、外堀は幅約70メートル、深さ約30メートルの巨大なものだったという。イラストは故・宮上茂隆氏の監修によるもので、本文についても氏の説を参照させていただきました。

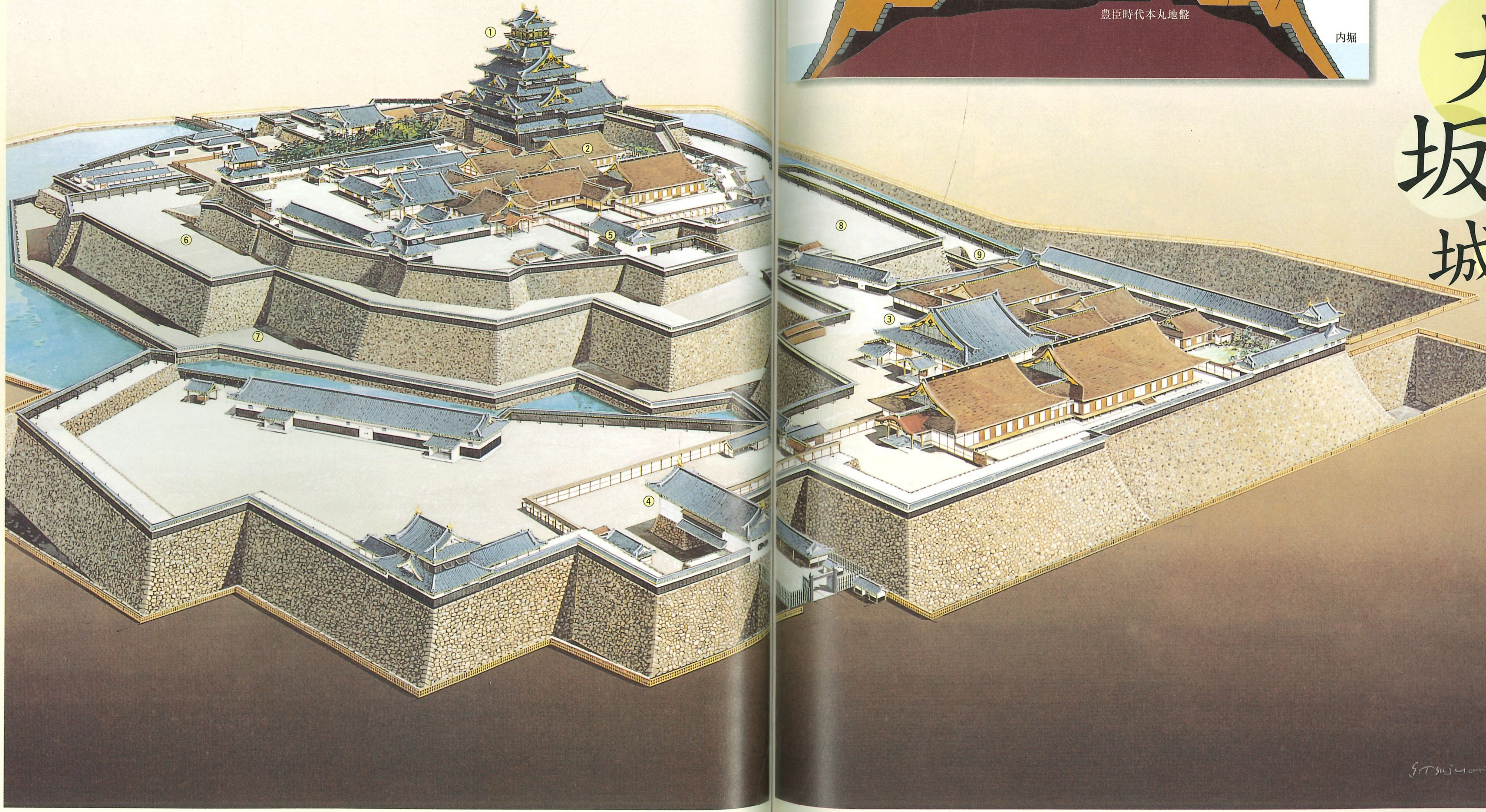
左ページの城内各名称は①本丸、⑬米蔵、⑭本丸大手門、⑮淀殿など豊臣一族の屋敷、⑯千貫櫓、⑰生玉口、⑱生玉口曲輪⑲西の丸、⑳秀長の屋敷、㉑政庁にあたる西の丸御殿、㉒京橋口、㉓京橋口曲輪（篠の丸）、㉔馬屋・米蔵となっている。ちなみに第１期工事中、天正11年（1583）のイエズス会年報で、宣教師フロイスは「工事に従事するものは約５万人。大坂城周辺に移住することを求められた諸国の領主は、いずれも命令に背かず、秀吉を喜ばそうとしたため約40日間で7000の家屋が建った」と記している。この第１期工事の期間中、天正12年８月８日、秀吉は大坂城を正式に居城とした。

（イラスト監修＝宮上茂隆・建築史家／建築家）

大坂城

無類の堅牢さを誇った天下の大要塞





（イラスト監修＝宮上茂隆・建築史家／建築家）

イラストは、中井家「本丸図」および「大坂夏の陣図屏風」に基づいて、天正十三年（一五八五）の第一期工事により完成した大坂城本丸を復元したものである。

安土城の数倍の規模をもつ本丸は、城域の北東にそびえる豪壮・華麗な五重天守を中心に、秀吉の日常生活の場である奥御殿、南には儀式・対面用の表御殿が殿舎を連ねていた。西南の桜門を本丸大手として、さらに天守の建つ曲輪の大手に鉄御門を構え、数棟の櫓が本丸周囲を取り囲んでいた。

縄張としては、天守の建つ本丸最頂部の西辺と東辺を二段の帯曲輪が巡り、さらに井戸曲輪や山里曲輪などの小曲輪をいくつも設けるなど、複雑な構成をとっている点が特徴である。

①天守
②奥御殿
③表御殿
④桜門
⑤鉄御門
⑥西中の段帯曲輪
⑦西下の段帯曲輪
⑧東中の段帯曲輪
⑨東下の段帯曲輪

摺上原の戦い

天正十七年六月〔1589〕▽福島県

磐梯山麓の死闘！独眼竜、芦名氏を屠る！

天正17年（1589）、政宗は宿敵芦名氏と雌雄を決すべく、猪苗代城（亀ヶ城）を進発した。戦闘に先立ち、政宗は自軍を❶猪苗代盛国隊、❷片倉景綱隊、❸伊達成実隊、❹白石宗実隊、旗本、❺浜田景隆、❻大内定綱、❼片平親綱の8軍編成とし、自身は❽八ヶ森に本陣を構えた。一方芦名氏は❶富田将監隊を先陣に、❷佐瀬河内、❸富田美作、❹平田左京、❺松本源兵衛、❻平田周防を中心に扇状に展開、❼義広は高森山より着陣し伊達軍迎撃態勢を布いた。戦闘は、伊達軍の勢いに押された芦名軍が、後方の日橋川に退路を遮断され、壊滅的な打撃を喫し、摺上原の戦いは伊達軍の圧倒的勝利に終わった。

伊達政宗×芦名義広

人取橋合戦での奇跡的な「勝利」により、奥州での政宗の名はいっそう重きをなしていった。仙道制覇に向け、恒常的に南下を図る政宗に対し、その南に威を張る芦名義広はつねに脅威を感じており、逆にこれを討つべく機会を窺っていた。

天正十七年（一五八九）四月二十二日、米沢城を進発した政宗は、本宮を経て安子ヶ島・高玉の両城を落とすや、軍を北進させて相馬領へ進攻、駒ヶ嶺・箕頸の両城を五月二十日頃までに落城させた。しかし、このときの政宗の本命はあくまで芦名領である。だが、素直に猪苗代方面へ軍を向けた場合、その背後を相馬氏に衝かれる危険がある。相馬領進攻は、そのための布石だった。一方の芦名義広も事態を傍観していたわけではない。父・佐竹義重と協同し、政宗と対峙すべく北上の構えを見せているのである。

ところが、芦名氏配下の猪苗代盛国が政宗に寝返るに及び、事態は急変する。会津への道が確保できたことで、政宗は決意した。義広が留守の間、手薄になっているはずの会津へ一挙に進入、敵の本拠を覆す、と。

この戦略には、芦名・佐竹氏の連合軍が政宗のあとを追うように軍を進めてきた場合、会津の芦名勢と連合軍との間で挟撃される危険が伴う。だが、政宗の外交手腕はやはり並ではない。政宗と友好関係にある関東の北条氏の存在が、常陸の佐竹氏にとっては十分な脅威となっており、長く領国を空けるわけにはいかない状況を生んでいたからである。

六月四日夜半、政宗は猪苗代城へ入り、会津方面を窺う。義広も軍を返して黒川城へ戻った。この間、案の定佐竹氏は領国へ引き返していた。

翌五日早朝、義広は一万六〇〇〇の兵を率いて城から出陣、猪苗代湖畔の高森山に陣した。この報を受け政宗も進発、兵約二万三〇〇〇をもって磐梯山麓の摺上原に陣を構えた。

この日、西風が強かったという。その砂塵を背に、数で劣る芦名勢は意外な奮戦を見せていた。だが、政宗には天運がついているらしい。戦闘中、突如風向きが東風へと変わったのである。戦勢は一挙に逆転した。「士卒一人トシテ刃ニ血ヌラザル者ナシ」（『伊達治家記録』）というほどの伊達勢の反撃に、義広はわずか三〇騎に守られて黒川城に逃走、さらにそこをも脱出、父・佐竹義重を頼って常陸へ落ちた。

相模

天正十八年四月～七月 [1590] ▷神奈川県

小田原包囲戦

圧倒的物量戦を展開！秀吉、天下を統一す！

豊臣秀吉 × 北条氏政・氏直

秀吉が関白宣下を受けて従一位となったのは、天正十三年（一五八五）七月のことである。さらにその翌年には太政大臣に任じられ、秀吉は位階を極めた。この間、関白就任にあたり、秀吉は近衛前久の猶子となって藤原姓を名乗り、「羽柴」から「豊臣」へ改姓している（時期については、同十三年九月九日説と同十四年十二月十九日とする説があり、判然としていない）。

天正十五年三月には、秀吉自ら豊前小倉に乗り込み、島津氏の野望を打ち砕いて九州を平定した。その翌天正十六年四月には、完成なった聚楽第に後陽成天皇を迎え、行幸の儀を執りおこなった。もはや統一の半ば以上は成し遂げられたという示威であり、行幸は盛大を極めた。禁裏から聚楽第までは一五～六町（約一・六～一・七キロ）だったが、先頭が聚楽第の門をくぐったとき、行列の後尾は未だ宮中にあったと伝わる。

この聚楽行幸中、秀吉は重要な行事をおこなっている。すなわち、後陽成天皇が見守る中、家康ら有力諸侯に、朝廷及び関白秀吉への絶対的服従を誓わせたのである。ここに至り、秀吉の権威は不動のものとなり、その政権は「法的」正当性を得た。だが、なお臣従の礼をとらない者もいた。小田原の北条氏政・氏直父子である。

このとき北条氏は、第四代氏政が存命中ながらその子氏直が家督を継いでいた。天正八年に北条氏当主となって以降、氏直は上野の大部分を平定し、信濃小県・佐久地方を押さえて甲斐に進むなどしており、決して凡将ではなかった。この甲斐出兵の折には、家康と対峙してのち同盟し、同十一年には家康の二女督姫を迎え、姻戚関係を結んでいる。

秀吉からの上洛要請を拒否し続けてきた氏政・氏直父子には、一つの目算があったのかもしれない。先年まで秀吉と対立していた家康とは姻戚関係にある。また、奥州には未だ旗幟を鮮明にしていない伊達政宗がいる。これらと協同できれば、秀吉に十分対抗しうる。地の利もある。西から大軍を率いてくる限りは、天険とされる箱根・碓氷を越えなければならない。いかに秀吉といえども、そうやすやすとは東征できないのではないか。

だが、そのもくろみは外れた。家康は秀吉麾下の一部将として逆に氏政・氏直に上洛を促し、政宗は自身が秀吉から追討令を発せられ、その弁明に奔走していると聞く。しかも、天正十七年末に決した秀吉軍の動員兵力は、氏政・氏直の想像をはるかに超えていた。総兵力二十余万。これらが津波のように、一斉に北条領へとなだれ込んできたのである。

天正十八年（一五九〇）三月一日、京都を発った秀吉軍本隊は、ひと月後の四月一日には箱根山に陣を張った。この間、家康は先鋒として東海道を進み、山中・韮山城を攻略した。前田利家・上杉景勝らは北陸から南下して松井田・箕輪・鉢形などの諸城を陥落させ、さらに小田原の海上は中国・四国の諸大名が兵船を廻航させて封鎖した。

秀吉自身は四月六日に湯本に着陣、笠懸山に対の城を築かせた。史上、「石垣山一夜城」と呼ばれるものだが、実際の工期はふた月ほどかかり、六月二十六日に完成をみている。

城の周囲を隙間なく覆う秀吉軍。小田原を見おろす笠懸山の対の城。海上を埋め尽くす兵船群。籠城する北条勢の戦意を奪うには十分だった。

七月五日、氏直はついに降伏した。秀吉は、氏政と氏直の叔父氏照を自刃させ、氏直は高野山へ蟄居させた。この小田原滞陣中、政宗も遅ればせながら参陣しており、秀吉は名実ともに天下を統一した。

○現小田原城模擬天守

（イラストは、海上より見た小田原包囲戦の推定復元。右手に小田原城、左手に笠懸山を描く。）

戦国終焉

文禄（1592.12.8改元～1596.10.26）
慶長（1596.10.27改元～1615.7.12）
元和（1615.7.13改元～1624.2.29）

文禄・慶長の役
白石城攻略
伏見城炎上
大垣城籠城
第二次上田合戦
大津城攻落
関ヶ原の戦い
長谷堂の戦い
大坂冬の陣
大坂夏の陣
徳川大坂城工事着工
大筒
真田丸
井伊の赤備え

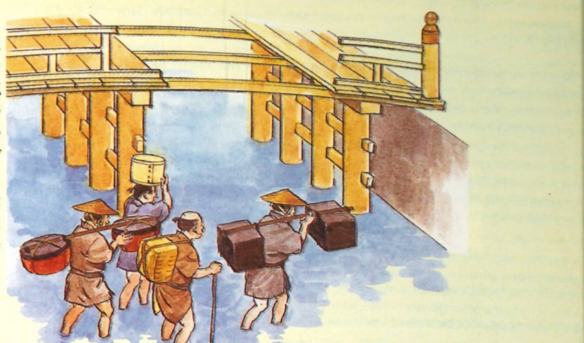
〈執筆・監修者〉
小和田哲男（本文執筆） 150・170・178
工藤章興（本文執筆） 158
中井 均（本文執筆＋イラスト監修） 160・162・166／（イラスト監修） 178
中村達夫（本文執筆＋イラスト監修） 168
誉田慶信（本文執筆＋イラスト監修） 174
千田嘉博（本文執筆＋イラスト監修） 176／（イラスト監修） 178
松岡利郎（本文執筆＋イラスト監修） 186

〈イラストレーター〉
谷井建三 150
伊藤展安 152・168・172
香川元太郎 154・160・164・174・177・178・180
板垣直誠 156・186
安久津和巳 158・166
藤井康文 162・170・181・182・183・184

Column 戦国の実相 ⑦

民衆

戦乱に巻き込まれた無辜（むこ）の民



水をせき止められた天満川

⬇大坂城北の天満川は、ふだんは歩いて渡れない水量で流れていたが、大坂の陣の折、東軍は川の流れをせき止め、この天然の要害の効果を半減させてしまった。このため、天満橋などに見られるような、橋板を取り払った籠城側の努力はまったくの徒労となってしまった。

雑兵たちの乱妨狼藉

⬇戦場を稼ぎ場とする雑兵たちは、人をかどわかしたり襲うことなど、平気でおこなっていた。もっとも、こうした掠奪行為は敵地でおこなわれることが多く、それ自体が敵に対する戦略として用いられることもあったという。

野党の追い剥ぎ

⬇戦国という苛酷な時代にあって、戦場で命を賭けているのは、庶民たちも同じであった。物売りたちは野盗の群れに囲まれて、身ぐるみ剥がされることもあった。金で雇われた雑兵たちは、もともと素性の定かではない者が多く、いつ何時こうした野盗に変身するかわからなかったのである。

Column 戦場の庶民

戦場には兵ばかりがいるわけではない。不幸にして戦場に居合わせてしまった民（たみ）は、野盗（やとう）と化した兵たちに身ぐるみ剥（は）がれたり、女であればかどわかされたり乱暴（乱妨（らんぼう））されたりした。

また、商人たちはたくましくも戦場をも稼（かせ）ぎ場（ば）として熱心に商いしており、そのバイタリティには恐れ入るばかりである。

イラストは、主に『大坂冬の陣図屏風（びょうぶ）』を基に、戦場に垣間（かいま）見えた庶民たちの様子を描いたものである。戦場という特別な空間にあっても、人々は普通に暮らし、あるいは欲望のままに行動した。安息（あんそく）と苛烈（かれつ）な現実が混在した戦場。それは、非日常的な空間であるとともに、日常生活の場でもあったのである。

酒を買う兵士

⬇煙草と同様、酒は陣中での緊張感を緩和させる。合戦の折、兵士たちに支給される兵糧米をめあてに、長滞陣では、酒などを売る物売りがこうした見世(みせ)を広げることもあった。

煙草売りと足軽

⬇慶長年間の初めに南蛮から渡来した煙草は、大名から庶民まで幅広く流行した。「大坂冬の陣図屏風」にも、長い滞陣生活の中で一時の憩いを求める足軽たちが描かれている。キセルは恐らく煙草屋のもので、客たちはその使用料込みで料金を支払っていた。

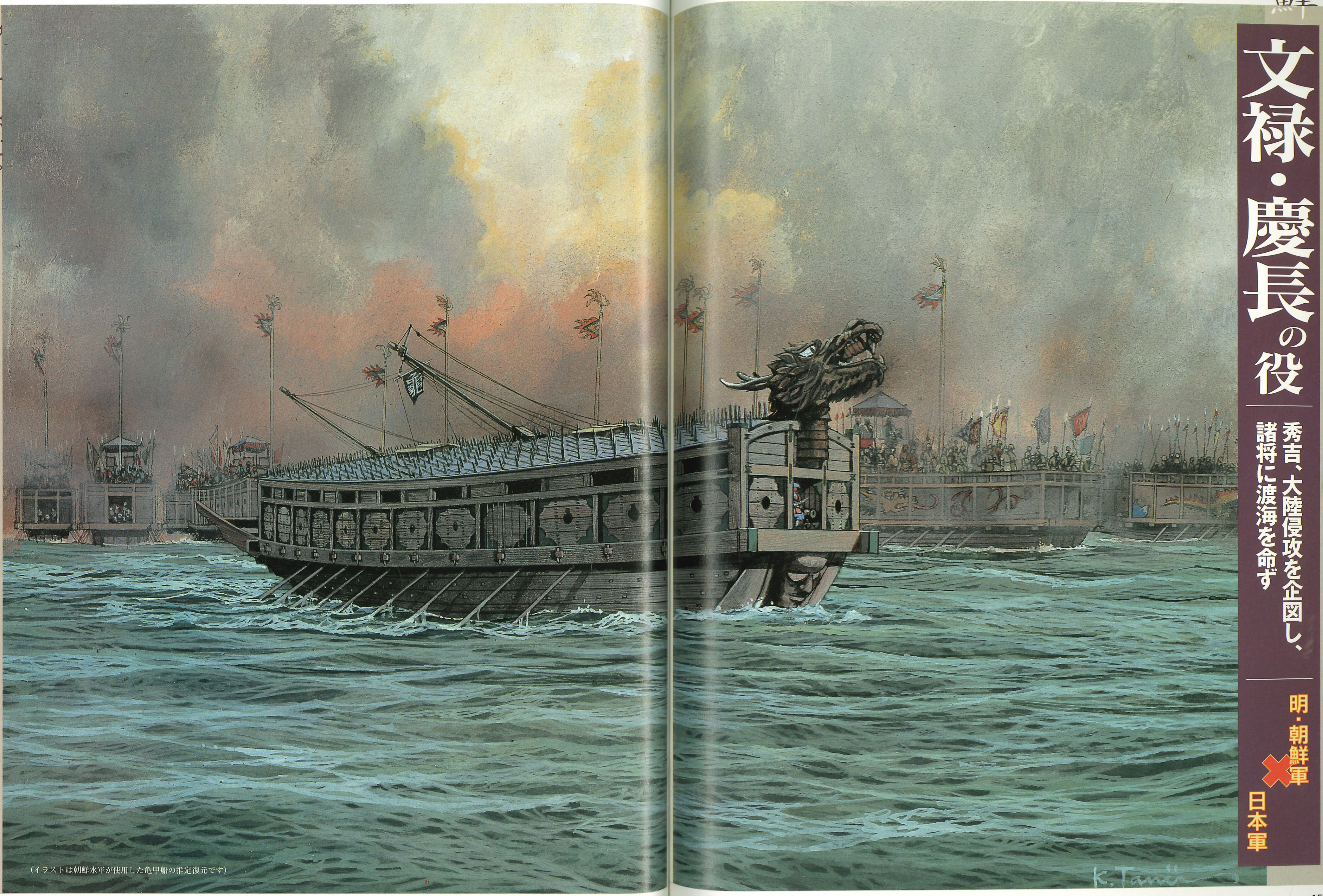
（説明文監修＝北川央・大阪城天守閣主任学芸員）

天正二十年四月／慶長二年一月 [1592]／[1597]▷朝鮮半島

文禄・慶長の役

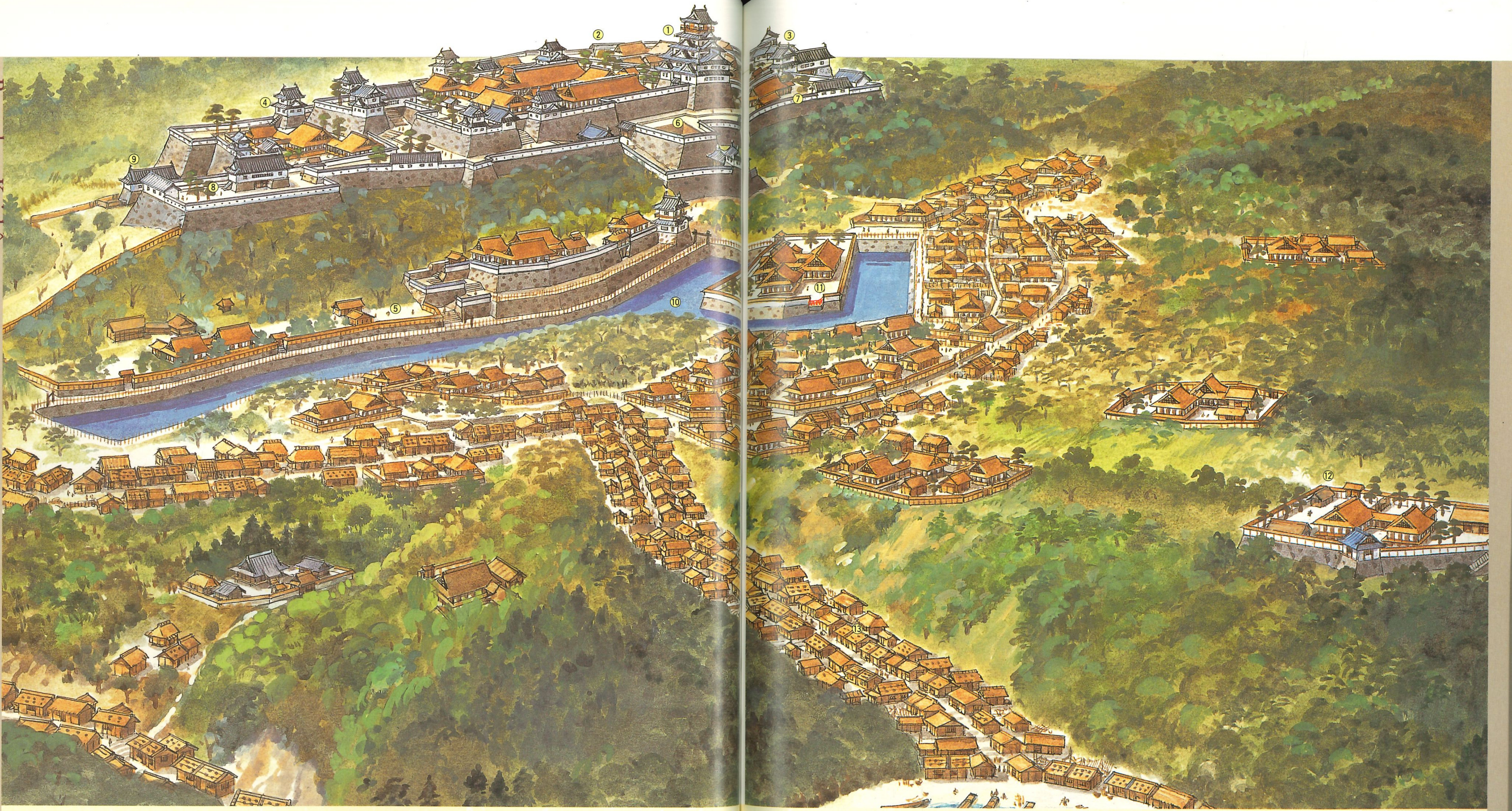
秀吉、大陸侵攻を企図し、諸将に渡海を命ず

明・朝鮮軍 ✕ 日本軍



（イラストは朝鮮水軍が使用した亀甲船の推定復元です）

（イラスト監修＝金 在瑾・国立ソウル大学名誉教授）



イラストは肥前名護屋城を東から望んで描く。この城は、文禄慶長の役の際に朝鮮出兵の基地として築造されたため、その性格から、城が本来備えているはずの防御機能はあまり考慮されていない。
（協力＝佐賀県教育委員会／肥前名護屋城博物館／㈲さんけい製作所）

①天守
②本丸
③二の丸
④三の丸
⑤山里丸
⑥水手曲輪
⑦遊撃丸
⑧東出丸
⑨大手口
⑩鯱鉾池
⑪台所丸
⑫徳川家康陣所
⑬城下町

現在知られるかぎりで、秀吉が最初に大陸侵攻のことを口にしたのは、天正十三年（一五八五）九月三日付で、家臣の一柳末安に宛てた手紙の中で、「秀吉、日本国は申すに及ばず、唐国迄仰せ付られ候心に候か」といっている部分である。

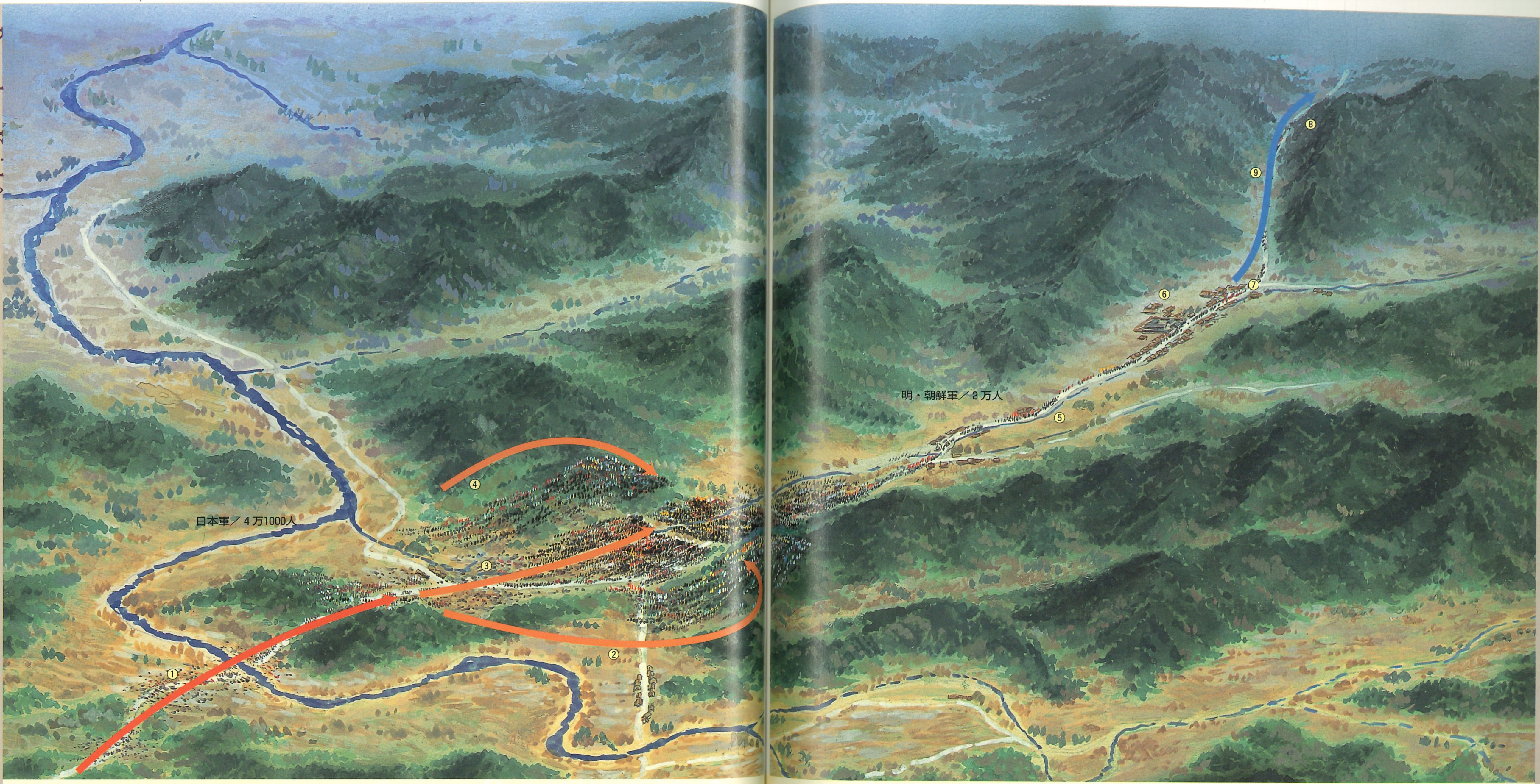
その少し前、秀吉は、関白に任官しており、まだ四国も九州も、もちろん、関東・東北も制圧していないが、日本全土を統一した暁には中国まで攻め入りたいという意向をもっていたことがわかる。

同十五年、九州を統一したとき、対馬の宗義智に命じて朝鮮との交渉にあたらせているところをみると、秀吉の意識の中に、「朝鮮は九州の延長線上」という思いがあったようにも思われる。

「唐入り」のための軍事基地として、肥前名護屋城の築城工事がはじめられたのが天正十九年であり、ついに、その翌年の天正二十年正月五日、秀吉は、小西行長をはじめ、九州・四国・中国の諸大名に出陣命令を下した。九軍に編成された軍勢は何と一五万八八〇〇人におよんでおり、三月はじめからつぎつぎに渡海していった。

四月十二日、小西行長・宗義智らの第一軍が兵船七百余艘で対馬大浦を発し、朝鮮の釜山浦に入り、翌十三日には上陸して釜山城を守っていた鄭撥を殺し、城を落としている。このあと、つぎつぎに上陸した秀吉軍は、三つの道に分かれて漢城に向かい、ついに五月三日には、第一軍および第二軍が国都漢城を占領している。

漢城陥落の報を耳にした秀吉は、早くも五月二十六日付で関白秀次に朱印状を与え、その中で、大陸占領後の計画を発表しているほどであった。その計画によれば、後陽成天皇を北京に迎え、秀次を明の関白にし、日本の関白には秀保か宇喜多秀家をすえたいとしている。常軌を逸した



行動であり計画であるが、占領地では急速な「日本化」が進められており、渡海した増田長盛を例にとれば、朝鮮の人びとの姓名を強制的に日本名に改めさせたり、髪形を日本風にさせており、また、安国寺恵瓊は、朝鮮の子どもたちに「いろは」を教えこんだりしていた。

秀吉軍が快進撃をしたのはそのころまでであった。戦線が朝鮮全土に広がりすぎたこと、兵糧が乏しくなりはじめたことに加え、朝鮮の民衆が抗戦しはじめたのである。そのため、秀吉軍は困難な状況におちいった。

決定的だったのは、七月九日、閑山島・安骨浦において、秀吉軍の水軍が、李舜臣率いる朝鮮水軍に大敗を喫し、その結果、海峡の制海権を奪われ、兵糧の補給がむずかしくなったことである。

しかも、それに追いうちをかけるように、九月からは、明の救援軍が鴨緑江を渡って朝鮮に入り、戦線はますます泥沼化の様相を呈しはじめた。

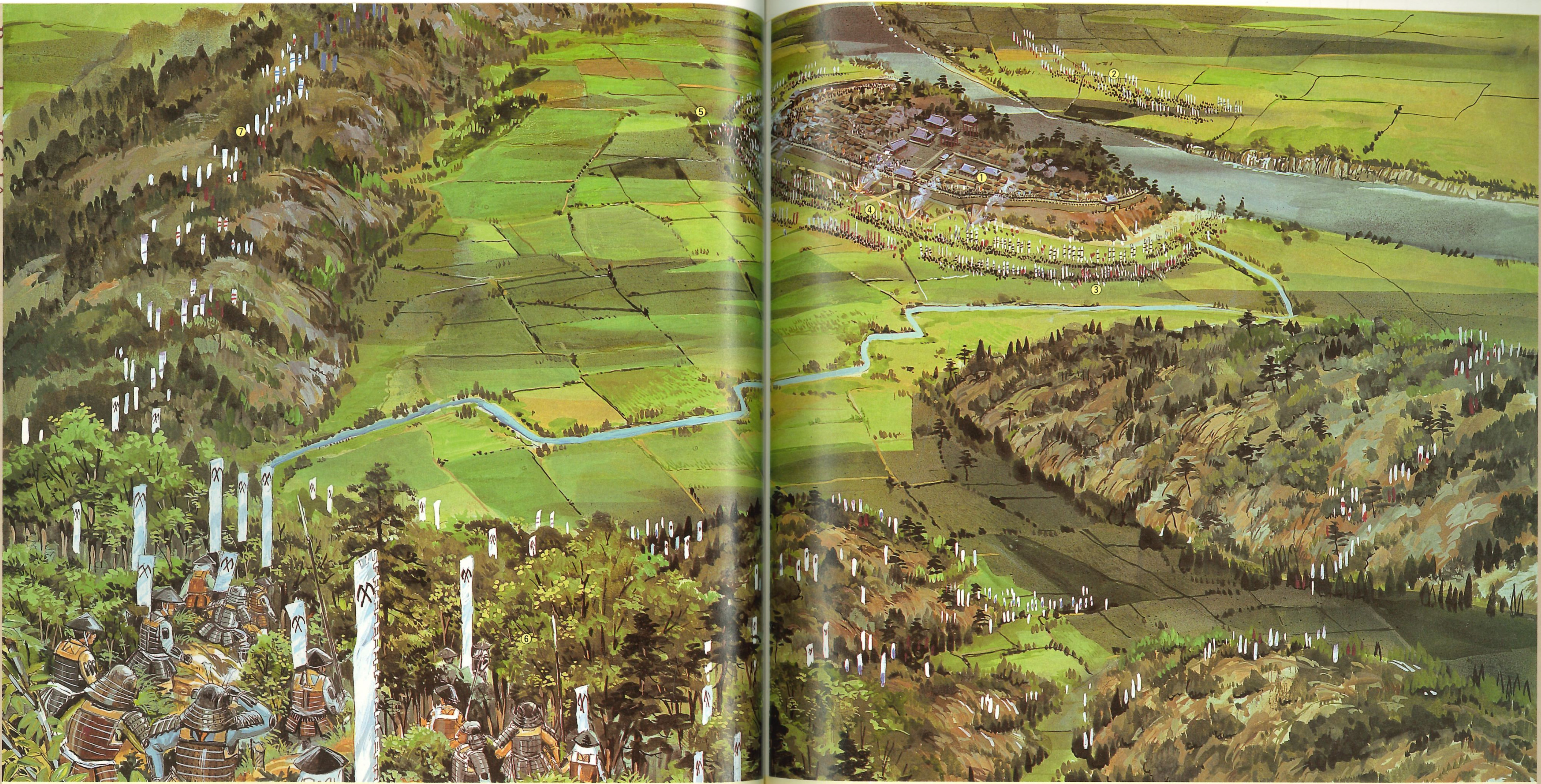
結局、翌文禄二年正月七日、明の李如松を総司令官とする大軍が平壌を包囲したため、小西行長らは平壌を捨て、漢城に兵力を集中している。そして、二十六日の碧蹄館の戦いで、小早川隆景の軍が明軍を破ったことで、ようやく和議の動きが出てきたのである。

講和交渉のための明の使節が名護屋に到着したのが五月十五日で、秀吉は和議の条件として七か条を示しており、ここに至って、戦いは自然休戦となった。ここまでを、日本では文禄の役、朝鮮では壬申倭乱とよんでいる。

慶長元年（一五九六）九月二日、秀吉は明からの正使楊方亨と副使沈惟敬を大坂城に饗応した。宴が終わって、秀吉が明皇帝からの誥勅を読ませたところ、「特に爾を封じて日本国王と為す」とあるだけで、秀吉側からさきに明に要求した七か条については何もふれられていなかったのである。秀吉は怒り、再び朝鮮への出兵が命令されることになった。ここからが第二次朝鮮侵略で、慶長の役、朝鮮側のいう丁酉倭乱である。

翌慶長二年二月、秀吉は朝鮮再出兵の陣立書を発表した。それによると、第一軍と第二軍は小西行長と加

イラストは文禄２年の碧蹄館の戦い。小早川軍の猛追にひるんだ明軍は、左右からも挟撃されて敗走した。
①日本軍侵攻路
②小早川秀包軍の動向
③小早川隆景軍の動向
④立花宗茂軍の動向
⑤高陽
⑥碧蹄館
⑦碧蹄里
⑧恵陰嶺
⑨明・朝鮮軍退路



藤清正が交代でつとめることとし、行長は慶尚道豆毛浦から、清正は慶尚道西生浦から入った。今度も総勢一四万一五〇〇という大軍であった。

文禄の役と慶長の役との大きなちがいは、鼻切り・耳切りに象徴的である。前述したように、文禄の役のときは、子どもたちに「いろは」を教えたり、「日本化」政策を併行させていたが、慶長の役のときは、すさまじいばかりの殺掠が押し進められた。討ち取った朝鮮人兵士や民衆の首のかわりに鼻や耳を切り、それを秀吉のもとに送っていたのである。

慶長の役の主要な戦いの一つとされているのが、その年十二月から翌三年正月にかけての蔚山城の戦いであった。ここには、加藤清正や浅野幸長らがいたが、そこを四万四〇〇〇もの明の大軍が攻めかかり、厳寒のときでもあり、水を断たれ、兵糧も乏しくなり、清正らも落城を覚悟したという。

まさに落城寸前に、毛利輝元らの救援隊が後詰にきたため、明軍も囲みを解いて退き、九死に一生を得ている。

朝鮮で秀吉軍が一進一退の苦戦を続けている最中の八月十八日、秀吉が死んだ。もっとも、秀吉が死んだというしらせは朝鮮で戦っている将兵のもとには届けられなかった。諸将が動揺し、士気を失えば、不測の事態になることが予想されたからである。

こうして、秀吉の喪を秘したまま、五大老・五奉行による停戦工作がはじめられることになった。正式に、停戦・撤退の命令が出されたのは、秀吉の死後一〇日たった八月二十八日のことで、その命令を携えた使者の徳永寿昌と宮本豊盛が釜山に到着したのは十月一日のことであった。

最終的に、その年の十一月二十日、島津義弘の軍勢が巨済島を離れ対馬に向かったことで、朝鮮から秀吉軍が完全に撤退し、戦いは終わっている。

（小和田哲男・静岡大学教授）

①晋州城
②吉川広家隊
③小西行長らの軍
④加藤清正らの軍
⑤宇喜多秀家らの軍
⑥小早川隆景らの軍
⑦毛利秀元隊

イラストは文禄２年の晋州城の戦い。その前年に攻略に向かい失敗した日本軍は再攻を試みた。攻城担当は、加藤清正・宇喜多秀家・小西行長らで、東・北・西の三方を約２万人で取り囲み、さらに南側包囲網も完成させ、７日をかけて落としている。
朝鮮側も7000の兵と５万余の庶民が、巨石・大木を落とし、熱湯を浴びせるなどの抵抗を試みたが、まともな武器もなくついに力尽きた。

慶長五年七月 [1600]▷宮城県

白石城攻略

関ヶ原の混乱に乗じ政宗、旧領を回復

伊達政宗 × 甘糟虎氏(上杉臣)

関ヶ原で東西両軍が大激突する前夜の慶長五年(一六〇〇)七月。各地ではすでに前哨戦が勃発していた。

東北の地では、伊達政宗が最初の戦火をあげた。徳川家康の上杉景勝討伐命令を受けて急ぎ大坂から北目城に帰還。七月二十一日、同城を出馬して、二十四日朝、白石城へ打ち寄せた。

白石は天正十九年(一五九一)豊臣秀吉の命で蒲生領となり、さらに慶長三年(一五九八)以来、上杉氏の支配下に置かれていたが、もとは伊達氏の本貫地。白石城攻略は旧領回復の意図をもこめた軍事作戦であった。

白石城の城主は、景勝の臣・甘粕虎氏。が、このとき虎氏は会津に出向いており、甥の登坂勝乃が守備していた。城を囲んだ政宗は陣場山に本陣を構える。白石城の真北、白石川をはさみ、城下を一望できる段丘だ。

攻城戦がはじまったのは午後二時。城の周りを巡見した政宗は、町からの攻撃を策し、屋代景頼に町屋、外曲輪、三の丸を焼き払わせたうえで、総攻撃を命じた。大手口に景頼、二の丸外帯曲輪に亘理定宗、西に片倉景綱、南に山岡重長という、水ももらさぬ包囲態勢である。

つるべ打ちの銃撃の後、伊達軍はどっと喚声をあげて突撃を開始。南の丸、中の丸、二の丸と次々と攻め落とし、夜半には本丸を除く城域を制圧、七百余もの首級を討ち取った。

降伏か徹底抗戦か。城内の論は二分したが、和平派の登坂勝乃らが強硬派の急先鋒・鹿子田右衛門を殺害して投降。ここにこの地は九年ぶりに伊達氏の有に帰することになるのである。

(工藤章興・作家)

慶長5年(1600)7月21日、仙台の北目城を発した①伊達軍は奥州街道を下り、②白石川をはさんで③白石城を一望できる陣場山に7月24日、本陣を構えた。城の周りを見廻った政宗は、まず④町屋、⑤外曲輪、⑥三の丸を焼き払ったうえで、総攻撃を命じる。⑦大手口に屋代景頼、⑧二の丸外帯曲輪に亘理定宗、⑨西に片倉景綱、⑩南に山岡重長という完璧な包囲態勢をとった。銃撃の後、喚声をあげながら突撃を開始し、夜半には本丸を除く城域を制圧してしまう。ここで白石城側に内訌が生じあっけなく落城。このあと政宗は、“100万石のお墨付き”をもらうのだが……。(イラストは天和3年〈1683〉に伊達綱村が幕府に提出した「白石城普請窺」絵図からの推定復元です)

伏見城炎上

慶長五年七月［1600］▷京都府

東軍決死の防衛！ついに激突した東西両軍

東軍（徳川方）×西軍（石田方）

守備兵の決死の抵抗の前に攻めあぐねていた西軍だったが、8月1日、小早川軍の一隊が松の丸・名護屋丸に侵入して火矢を放ち、本丸の月見櫓に火の手があがった。火は南へ広がり千畳敷、さらには天守にも燃え広がり、本丸は灰燼と化した。本丸陥落後も西の丸では夕方まで戦いが続いたが、ほどなく落城した。イラストは城西からの視点で、右手が南となる。炎上する①松の丸の奥に大蔵丸・弾正丸が位置し、遠くに醍醐山が望める。画面では②天守の裏側が名護屋丸にあたり、③大手門の奥に見える石垣の向こうが④西の丸で、⑤あたりが三成屋敷と考えられる。画面手前の構築物は大小名の伏見屋敷群である。

文禄元年（一五九二）、秀吉は伏見の指月に築城を命じた。この指月の伏見城は、秀吉の隠居城的な機能を有するものであった。ところが、この城は文禄四年の大地震で倒壊してしまったので、新たに木幡山（現・桃山丘陵）に縄張りし、翌日には築城工事を開始させた。創建された木幡の伏見城は、やがて秀吉政権下の政治の中心となっていく。それに伴って全国の大名が城下に屋敷を構え、伏見は巨大な都市となった。

城は木幡山に本丸を構え、西の丸・松の丸・名護屋丸・右衛門尉郭・治部少輔郭・三の丸が高石垣で築かれ、さらに外方に御花畠や山里丸などが設けられた巨大なものであった。城の南方には宇治川が流れ、対岸向島との間には豊後橋がかけられていた。向島には出城が築かれていたが、のちに家康が修築し、一時その居館として使われた。

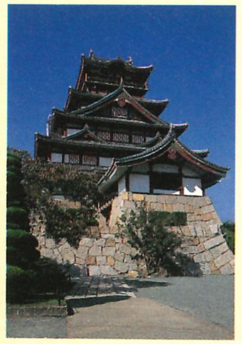
慶長三年（一五九八）、伏見城中で秀吉が没すると、秀頼は大坂へ移り、代わって家康が伏見城に入った。同五年六月、家康は上杉討伐の途につくと、伏見城の留守居を鳥居元忠に任じた。

この機に挙兵した西軍は、七月十九日、開城勧告を拒否した伏見城に対し、小早川秀秋・宇喜多秀家・島津惟新・毛利秀元ら四万の兵が総攻撃を開始した。守備兵は一八〇〇の兵であったが抵抗激しく、攻城戦は長期に及んだ。同月二十五日、小早川軍は松の丸を猛烈に攻撃し、内通を勧告する。江州永原の者がこれに内応し、火を放ち、塀を五〇間（約九〇メートル）破って逃亡したのはこのときのことである。

元忠は火を止め、畳で塀を修理したが、のち松の丸を放棄して本丸へ移った。だが、その後も西軍は猛攻を続け、天守をはじめ本丸は火の海に包まれて落城した。

関ヶ原合戦後、家康は伏見城を修築し、家光の将軍宣下までの間、畿内における徳川幕府の重要な城として存続させたのである。

（中井 均・米原町教育委員会）



▶現伏見城模擬天守

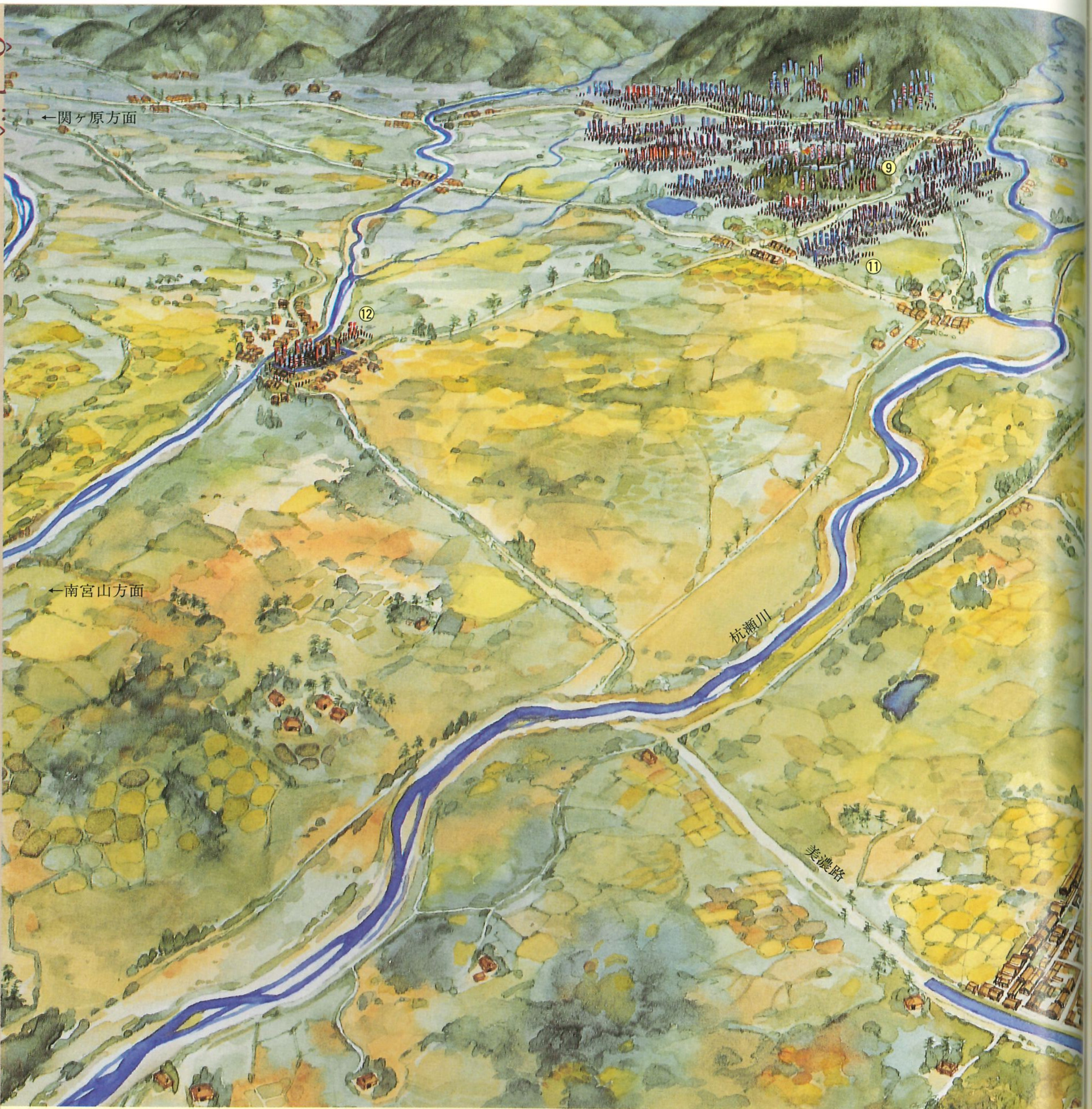
大垣城籠城

慶長五年八月～九月 [1600] ▷滋賀県

東軍迎撃構想の拠点　西美濃の要衝

東軍(徳川方)✕西軍(石田方)

この時期の大垣城は、すでに①天守をはじめ②本丸③二の丸ほか④三の丸あたりまでは築造されており、⑤内堀・⑥中堀の二重の堀、⑦外堀・⑧惣囲の堀で囲まれていたと思われる。イラストは大垣城南方から西北の岡山（⑨）を望んだ構図で、９月14日午後２時頃、島左近の隊（⑩）が東軍（⑪）を挑発すべく、杭瀬川付近に向かうさまを描く。⑫は西軍の武光忠棟の長松城だが、東軍の赤坂進出でいち早く撤退し、東軍の一柳監物が入城した。杭瀬川の戦いで東軍を軽く叩いた西軍は、しかし東軍が大坂へ軍を進めるとの情報に同日夜半、大垣城を出て関ヶ原へと向かった。大垣城には福島長堯が残って籠城、西軍の関ヶ原敗走後も東軍の攻撃をよく凌いだ。



大垣の地は西国と東国の境目である。西方には伊吹山系、東方には濃尾平野が広がっている。東西の関門として交通の要衝であり、低地ではあるが十六世紀前半には城郭が築かれていた。

大垣城の歴史が具体的になるのは西美濃三人衆の一人、氏家直元の頃からである。永禄六年（一五六三）には矢倉や惣囲が築かれている。なお、その頃の大垣城は本丸・二の丸を中心とした部分であったと考えられる。天正十六年（一五八八）には一柳直末が天守を造営し、この段階では三の丸の外郭までがおおよそできあがっていたと見られる。

大垣の地は揖斐川・杭瀬川の形成した扇状地と三角州の境界に位置する低地でもあり、このため幅の広い二重の堀や外堀、惣構の堀によって囲まれた大垣城は、さながら池に浮かぶ島状の城のようであった。

天正十八年には伊藤祐盛が入城、その五年後の文禄四年（一五九五）には再び天守造営の記録がある。これが昭和二十年（一九四五）の戦災で焼失した天守であったと考えられ、あながち津軽家本の「関ヶ原合戦図屏風」に描かれた大垣城天守も、信用できないものでもなさそうである。

さて、伏見落城直後の慶長五年（一六〇〇）八月九日、石田三成は佐和山城を出発し、翌十日に大垣城に入った。一方、東軍は岐阜城を攻め落とし、大垣城の西北、赤坂に集結した。これを見た三成は、島津惟新と豊久、小西行長、宇喜多秀家らに大垣入城を要請する。

九月十四日、江戸から出陣した家康が赤坂の岡山に本陣を置く。杭瀬川を挟み対峙する両軍。だが、家康は大垣城を避け、赤坂西方の関ヶ原盆地へと巧みに西軍を誘い出した。

このとき西軍が大垣周辺で決戦を強いればどうなったか。南宮山に布陣した毛利秀元や長宗我部盛親、安国寺恵瓊らの陣営からは関ヶ原が望めず、代わりに大垣城が一望できる。彼らは大垣城こそが主戦場になるものと思っていたのではないだろうか。

（中井 均・米原町教育委員会）

➡大垣城址に建つ復元天守。

信濃

慶長五年九月［1600］▷長野県

第二次上田合戦

秀忠軍を遅参せしめた昌幸の鬼謀

真田昌幸・幸村 × 徳川秀忠

江戸から西へ向かうには、東海道と中山道の二つのルートがある。慶長五年（一六〇〇）の関ヶ原合戦の際、家康の側についたいわゆる東軍は、大軍を同時期に移動させる必要から、軍を二手にわけてこのルートを分進させた。福島正則ら先遣隊が東海道を通り、家康の跡を継ぐと目されていた秀忠が率いる本隊は中山道ルートをとることになった。

同年九月二日、三万を超える兵力を率い、秀忠は小諸城に着陣した。主戦場へ向かうことが大前提であるため、秀忠はまず上田城の真田昌幸に投降勧告した。

一方昌幸は、兵の損耗を避けたい秀忠の弱みを最大限に利用した。投降する気配を見せつつ時日を稼ぎ、結局開城せず、秀忠を開戦に踏み切らせたのである。すでに貴重な時間を浪費している上、城内から徳川勢に悪罵が投げかけられ続けるに至って、秀忠は冷静な判断力を失った。

実際の戦闘は、あたかも第一次上田合戦と同じような経過をたどった。退却する真田勢を秀忠の軍が追撃しては手痛い反撃をくらう、といった状況が続き、上方が風雲急を告げる中、ついに秀忠は上田城攻略を諦めた。

秀忠が小諸を出立したのは九月十一日。関ヶ原での主決戦が行われた同月十五日夜半、秀忠はようやく関ヶ原の遥か手前、妻籠宿（長野県木曾郡南木曾町）にたどり着いた。昌幸・幸村父子の籠もる上田城攻略に時間をとられ過ぎてしまい、秀忠は主戦場に間に合わなかったのである。しかも上田城を陥落させることすらできず、この本末転倒ともいうべき失態に、当然ながら家康は激怒した。戦後、家康の許に伺候した秀忠に、家康はその怒りから面会を許さなかったほどだという。

徳川軍を二度までも撃破したことで真田の武名は不朽のものとなったが、主決戦で西軍が敗れたため、真田は敗将となった。東軍に属していた信幸の取りなしで死一等を減ぜられたものの、昌幸と幸村は九度山蟄居を余儀なくされてしまった。

慶長五年九月［1600］▷滋賀県

大津城攻落

西軍猛攻！焦土と化した近江の堅城

東軍（徳川方）✕西軍（石田方）

大津城は坂本城を廃して、天正十四年（一五八六）頃に築造されたと考えられる。琵琶湖の湖上権を掌握する目的が大きく、初代城主・浅野長吉は諸浦より船を集め、課役を免除した。これが著名な大津百艘船と呼ばれる船持仲間である。

城跡は現在その痕跡を地上に残していないが、織田信長段階に築かれた長浜城、坂本城、大溝城といった琵琶湖沿岸の諸城と同様、湖に突出して築かれた水城であった。江戸時代に描かれた町絵図や地名などから三重の堀によって囲まれていた「後ろ堅固の城」であったようである。いずれの堀も琵琶湖と直結しており、最奥部に位置する本丸は島状に湖中に突き出ていた。まさに浮城と呼べる構造の城であった。

慶長五年（一六〇〇）六月十八日、徳川家康は上洛を拒否した上杉景勝を会津に攻める途中、大津城に入城する。そののち、西軍の宇喜多秀家らは伏見城を総攻撃し、大津城へと兵を進めた。城主・京極高次は西軍の将として一旦加賀へ出兵するが、突然大津城へ帰城して籠城態勢を整えた。恐らく家康が立ち寄った際にできあがったシナリオだったのだろう。

高次は籠城のため兵糧米や塩、味噌などを城内の倉へ運び入れ、さらには京町口、尾花川口を掘割にして防御を固めた。九月六日には自ら大津の城下に火を放ち、荒野としてしまった。

城兵三〇〇〇の籠城に対し、西軍は毛利元康・立花宗茂らが一万五〇〇〇の兵で包囲し、長等山に大砲をすえて砲撃を加えた。もちろん臼砲であり、城内を焼くことはできなかったが、大砲での攻城戦に京の町衆は手弁当で見物に出かけたと記されている。

堅い守りに西軍は外堀を埋め、三の丸に攻め入り、ついに九月十四日には高野山の僧木食応其と新庄直忠が、和睦開城を申し入れ、八日間に及ぶ大津籠城戦が終わった。

（中井 均・米原町教育委員会）

名門京極氏が拠った大津城は背後を湖に守られた形で、①本丸を奥に抱え、②二の丸・③奥の二の丸・④三の丸・⑤伊予丸などの郭は、橋でつながれていた。イラスト右手の⑥浜町口、その手前の⑦京町口、中央手前の⑧三井寺口、さらに左手の⑨尾花川口には、それぞれの城下町としての町屋が形成されていたが、この籠城を前に焼かれてしまった。攻囲する西軍は、この堅城を攻落させるため、長等山麓に⑩大砲をすえて城内に撃ち込んだが、実際の効果としては、さほどでもなかったであろう。大津城は９月14日に和睦開城したが落城しなかったため、『井伊家年譜』によれば「目出度（めでたき）天守（てんしゅ）の由」、のちに井伊氏が築いた彦根城にその天守が移築されたという。

井伊の赤備え

徳川軍の精強部隊 木俣守勝旗本備え

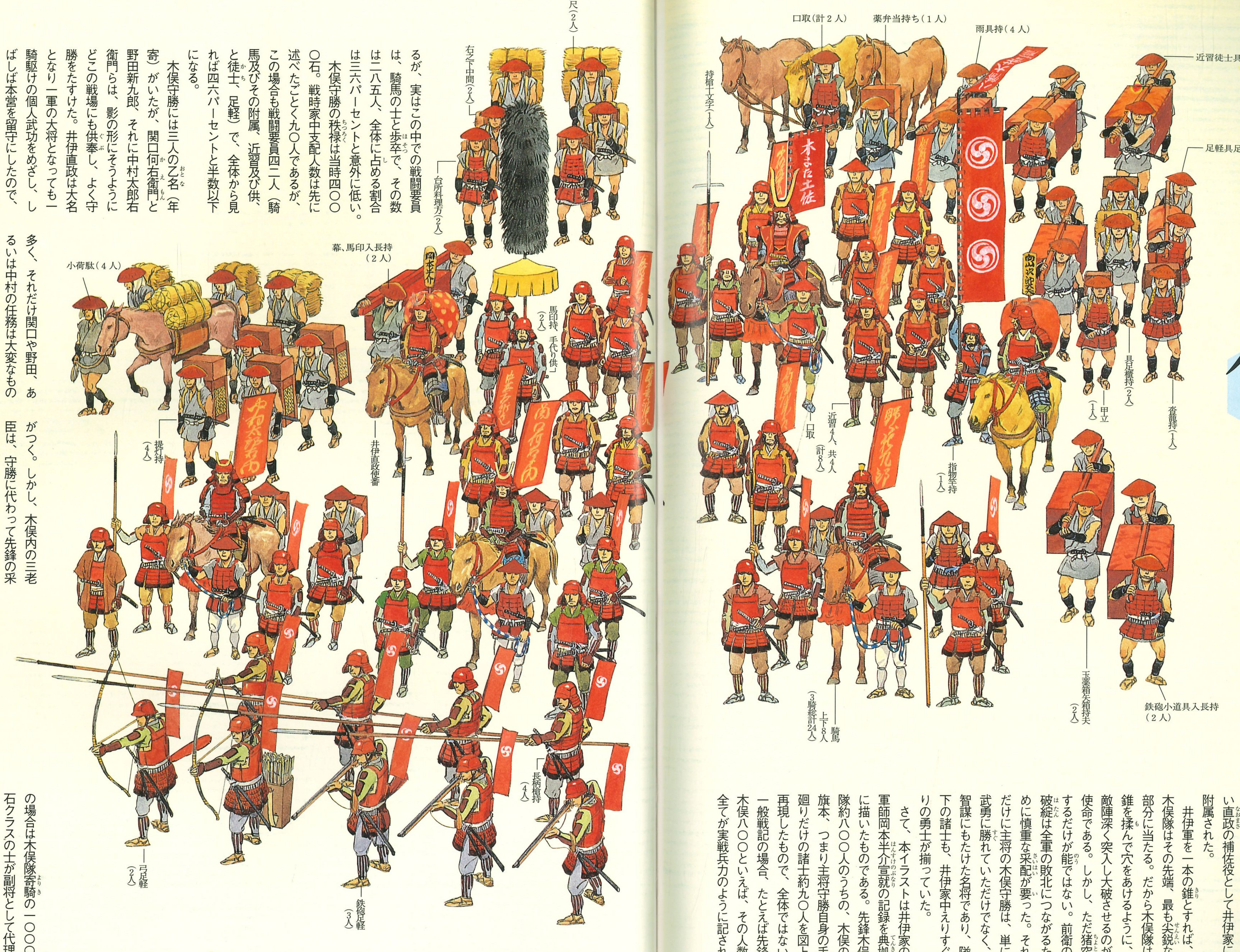
井伊軍の先手を預かる隊長木俣土佐守守勝はもと家康の直臣であった。一時期明智光秀の手に属したびたび殊功をたて、それが家康の耳に達して帰参、若い直政の補佐役として井伊家に附属された。

井伊軍を一本の錐とすれば、木俣隊はその先端、最も尖鋭な部分に当たる。だから木俣隊は錐を揉んで穴をあけるように、敵陣深く突入し大破させるのが使命である。しかし、ただ猪突するだけが能ではない。前衛の破綻は全軍の敗北につながるために慎重な采配が要った。それだけに主将の木俣守勝は、単に武勇に勝れていただけでなく、智謀にもたけた名将であり、隊下の諸士も、井伊家中えりすぐりの勇士が揃っていた。

さて、本イラストは井伊家の軍師岡本半介宣就の記録を典拠に描いたものである。先鋒木俣隊約八〇〇人のうちの、木俣の旗本、つまり主将守勝自身の手廻りだけの諸士約九〇人を図上に再現したもので、全体ではない。一般戦記の場合、たとえば先鋒木俣八〇〇といえば、その人数全てが実戦兵力のように記されるが、実はこの中での戦闘要員は、騎馬の士と歩卒で、その数は二八五人、全体に占める割合は三六パーセントと意外に低い。

木俣守勝の秩禄は当時四〇〇〇石。戦時家中支配人数は先に述べたごとく九〇人であるが、この場合も戦闘要員四二人（騎馬及びその附属、近習及び供、と徒士、足軽）で、全体から見れば四六パーセントと半数以下になる。

木俣守勝には三人の乙名（年寄）がいたが、関口何右衛門と野田新九郎、それに中村太郎右衛門らは、影の形にそうようにどこの戦場にも供奉し、よく守勝をたすけた。井伊直政は大名となり一軍の大将となっても一騎駆けの個人武功をめざし、しばしば本営を留守にしたので、守勝はその穴埋めの女房仕事が多く、それだけ関口や野田、あるいは中村の任務は大変なものであったろうことは容易に想像がつく。しかし、木俣内の三老臣は、守勝に代わって先鋒の采配を振るほどの資格はなく、その場合は木俣隊寄騎の一〇〇〇石クラスの士が副将として代理の指揮をとった。（中村達夫・歴史家）



慶長五年九月［1600］▷岐阜県

関ヶ原の戦い

馬蹄轟き、銃声満つ！天下分け目の大決戦！

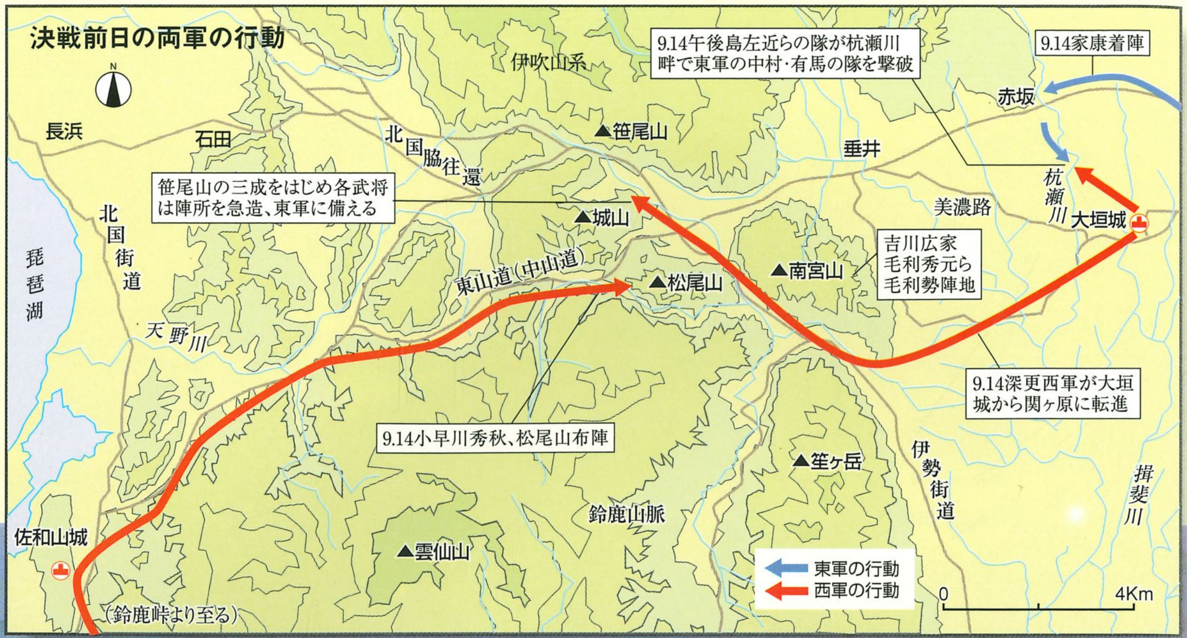
東軍（徳川方）✕西軍（石田方）

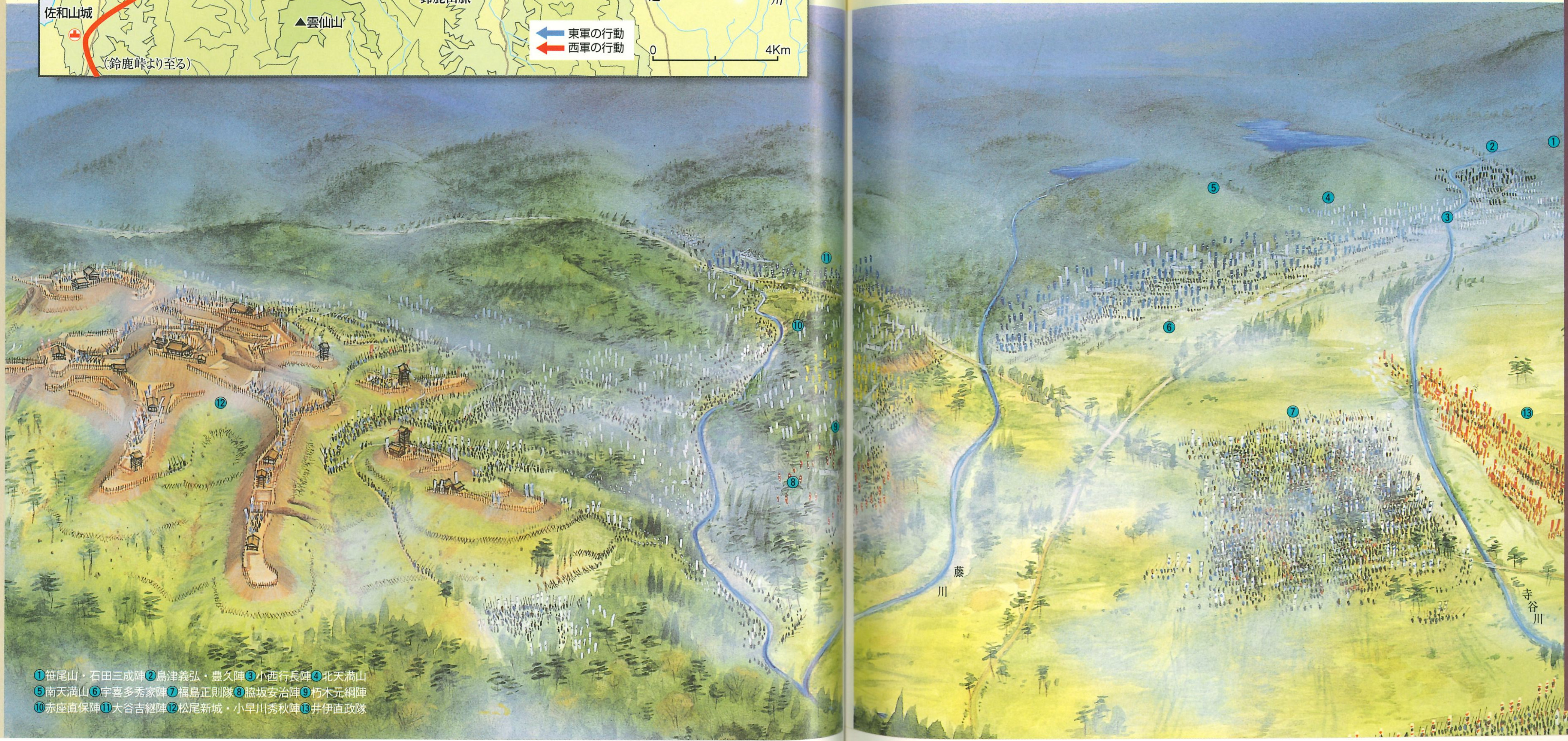
石田三成が、自分の婿である福原長堯に七五〇〇の兵をつけて大垣城に残し、自ら四万の大軍を率いて大垣城を出発し、関ヶ原に向かったのは、慶長五年（一六〇〇）九月十四日の午後七時ごろのことであった。この西軍主力部隊が関ヶ原に到着したころには、日付はかわり、合戦の日、すなわち九月十五日になっていた。午前一時ごろである。

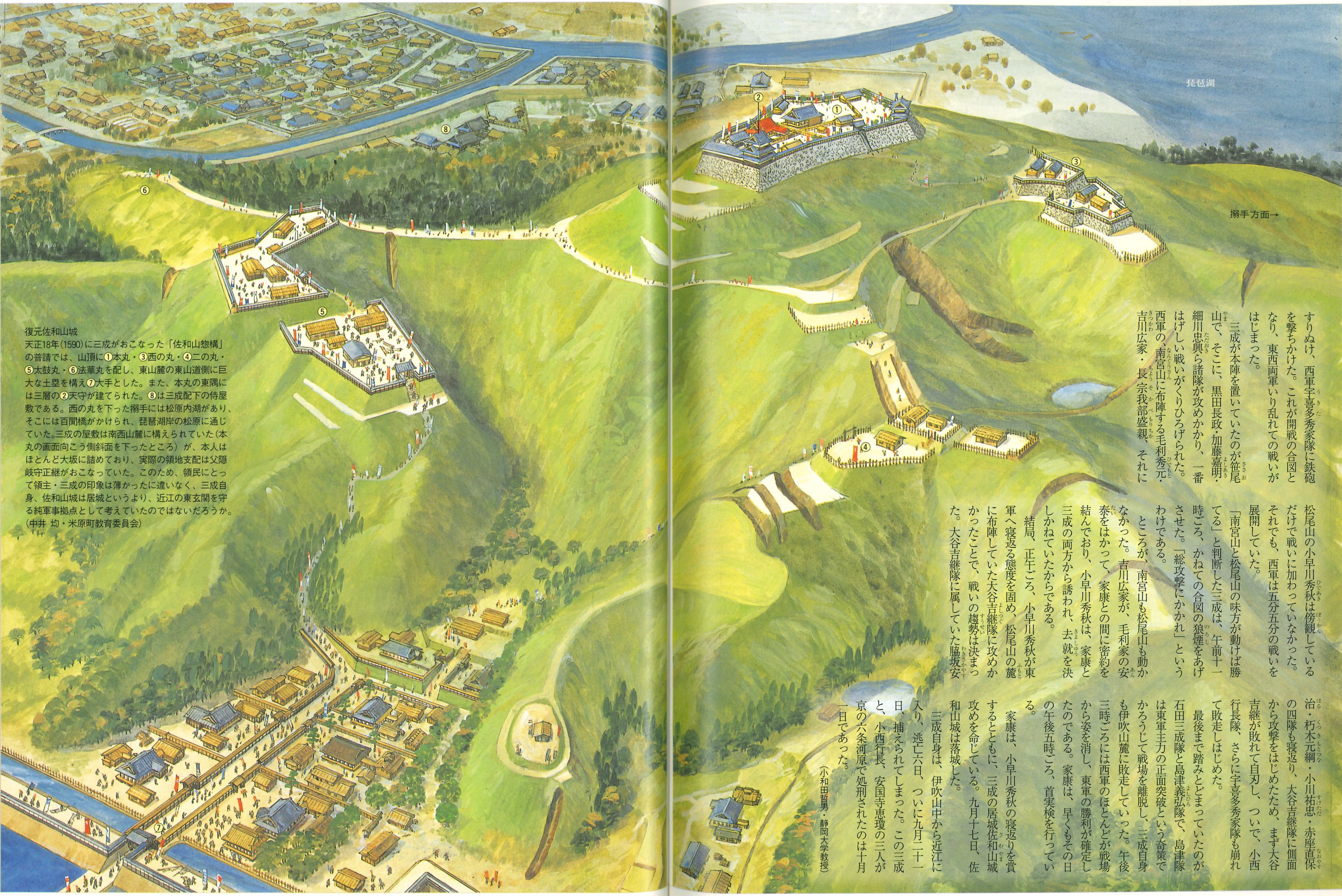
家康のもとに、西軍主力の関ヶ原移動の報が入ったのは午前二時ごろといわれている。大垣城を攻めるための本陣としていた岡山の陣所で就寝中だった家康は、その報を得て、東軍全軍の関ヶ原への移動を命じた。

西軍が関ヶ原への布陣を完了したのが午前四時ごろ、そして、六時ごろには東軍も関ヶ原に布陣を完了していた。西軍八万四〇〇〇、東軍七万四〇〇〇、合わせて一五万をこす大軍が関ヶ原を埋めつくした。

深くたれこめていた霧があがりはじめ、次第に視界が広がってきた午前八時、その日の先鋒をつとめるはずだった福島正則隊の横を、家康の四男松平忠吉を擁した井伊直政隊が







復元佐和山城
天正18年(1590)に三成がおこなった「佐和山惣構」の普請では、山頂に①本丸・③西の丸・④二の丸・⑤太鼓丸・⑥法華丸を配し、東山麓の東山道側に巨大な土塁を構え⑦大手とした。また、本丸の東隅には三層の②天守が建てられた。⑧は三成配下の侍屋敷である。西の丸を下った搦手には松原内湖があり、そこには百間橋がかけられ、琵琶湖岸の松原に通じていた。三成の屋敷は南西山麓に構えられていた（本丸の画面向こう側斜面を下ったところ）が、本人はほとんど大坂に詰めており、実際の領地支配は父隠岐守正継がおこなっていた。このため、領民にとって領主・三成の印象は薄かったに違いなく、三成自身、佐和山城は居城というより、近江の東玄関を守る純軍事拠点として考えていたのではないだろうか。（中井 均・米原町教育委員会）

すりぬけ、西軍宇喜多秀家隊に鉄砲を撃ちかけた。これが開戦の合図となり、東西両軍いり乱れての戦いがはじまった。

三成が本陣を置いていたのが笹尾山で、そこに、黒田長政・加藤嘉明・細川忠興ら諸隊が攻めかかり、一番はげしい戦いがくりひろげられた。

西軍の、南宮山に布陣する毛利秀元・吉川広家・長宗我部盛親、それに松尾山の小早川秀秋は傍観しているだけで戦いに加わっていなかった。それでも、西軍は五分五分の戦いを展開していた。

「南宮山と松尾山の味方が動けば勝てる」と判断した三成は、午前十一時ごろ、かねての合図の狼煙をあげさせた。「総攻撃にかかれ」というわけである。

ところが、南宮山も松尾山も動かなかった。吉川広家が、毛利家の安泰をはかって、家康との間に密約を結んでおり、小早川秀秋は、家康と三成の両方から誘われ、去就を決しかねていたからである。

結局、正午ごろ、小早川秀秋が東軍へ寝返る態度を固め、松尾山の麓に布陣していた大谷吉継隊に攻めかかったことで、戦いの趨勢は決まった。大谷吉継隊に属していた脇坂安治・朽木元綱・小川祐忠・赤座直保の四隊も寝返り、大谷吉継隊に側面から攻撃をはじめたため、まず大谷吉継が敗れて自刃し、ついで、小西行長隊、さらに宇喜多秀家隊も崩れて敗走しはじめた。

最後まで踏みとどまっていたのが石田三成隊と島津義弘隊で、島津隊は東軍主力の正面突破という奇策でかろうじて戦場を離脱し、三成自身も伊吹山麓に敗走していった。午後三時ごろには西軍のほとんどが戦場から姿を消し、東軍の勝利が確定したのである。家康は、早くもその日の午後五時ごろ、首実検を行っている。

家康は、小早川秀秋の寝返りを賞するとともに、三成の居城佐和山城攻めを命じている。九月十七日、佐和山城は落城した。

三成自身は、伊吹山中から近江に入り、逃亡六日、ついに九月二十一日、捕えられてしまった。この三成と、小西行長、安国寺恵瓊の三人が京の六条河原で処刑されたのは十月一日であった。

（小和田哲男・静岡大学教授）

出羽

慶長五年九月～十月［1600］▽山形県

長谷堂の戦い

奥羽をめぐる上杉・最上・伊達の神経戦

直江兼続（上杉臣）✕最上・伊達連合軍

長谷堂城は山形城の西南約七キロに位置する、比高差約一二〇メートルの独立丘陵にそびえる山城である。

西軍に与した上杉景勝の家老直江兼続の率いる大軍が、この城の北方約一キロの丘陵・菅沢山に陣を張ったのは慶長五年（一六〇〇）九月十五日。やがて直江方の鉄砲が火を噴き、二週間に及ぶ激戦が展開された。

最上義光二五万石に対して、上杉景勝は一二〇万石。彼我の軍事力の差は歴然であったが、上杉方の大軍を釘づけにした長谷堂城は、南北約五五メートル、東西約六〇メートルの主郭に向かって諸曲輪が求心的に配置され、さらに城山の中腹部と麓を堀が一周する、最上領内屈指の堅城であった。

最上義光の援軍要請に応えて、伊達政宗の派遣した軍勢が山形城下の東、小白川に到着したのは九月二十二日。ここに姉川の戦いを彷彿とさせる後詰決戦の布陣が敷かれることとなった。

だが奇妙なことに、最上・伊達軍、はたまた直江軍の主力部隊が、須川を渡って対岸の敵方に総攻撃をしかけることはなかった。両軍とも、多分に関ヶ原の戦いの帰趨を眺めていたのである。

義光の率いる本隊が須川を渡り、一斉に撤退する直江軍に怒濤のごとく攻めかかったのは、東軍勝利の報せが山形城に届いた翌日の十月一日のことであった。

（誉田慶信・岩手県立大学盛岡短期大学部助教授）

イラストは、東北における関ヶ原合戦、長谷堂城の戦いを描く。双方、相手の出方を窺う滞陣の中、上方での西軍敗走の報が伝わるや、西軍についた上杉方の直江兼続は同城の攻略を断念、撤退した。①長谷堂城主郭②長谷観音堂③観音坂口④湯田口⑤水堀⑥八幡崎口⑦帯曲輪⑧空堀⑨武家屋敷⑩町屋⑪本沢川⑫須川⑬最上軍主力⑭山形城⑮伊達軍⑯直江兼続本陣

Column 戦国の実相 9

大筒

豊臣方の戦意を砕く巨砲の「威力」

空前の大兵力が動員された大坂の陣は、また大筒の「威力」を満天下に知らしめた戦いでもあった。投入された大筒・鉄砲の質量ともに、まさしく日本の戦国最大の砲撃戦がここに展開されたのである。滞陣中、ときには数日間にわたって昼夜の別なく延々と砲撃が続けられたという例は、戦国時代においてはほかに見られない。

もっとも、この時代、炸裂弾は使用されておらず、攻城戦におけるこれらの砲の破壊力については疑問が残る。だが、大坂城の喉元ともいえる備前島に据えつけられた徳川方の砲が、籠城側に計り知れない心理的重圧を与えたことは想像に難くない。

備前島～大坂城天守の距離が約七〇〇メートル。当時の鉄砲の最大射程が五〇〇メートル前後だったことを考えれば、堅牢さを誇った大坂城といえども、泰然自若というわけにはいかなかったであろう。

事実、備前島から発射された一弾は、淀殿の居所の櫓を打ち崩し、大坂城に籠もる女房たちがパニックに陥ったといわれている。

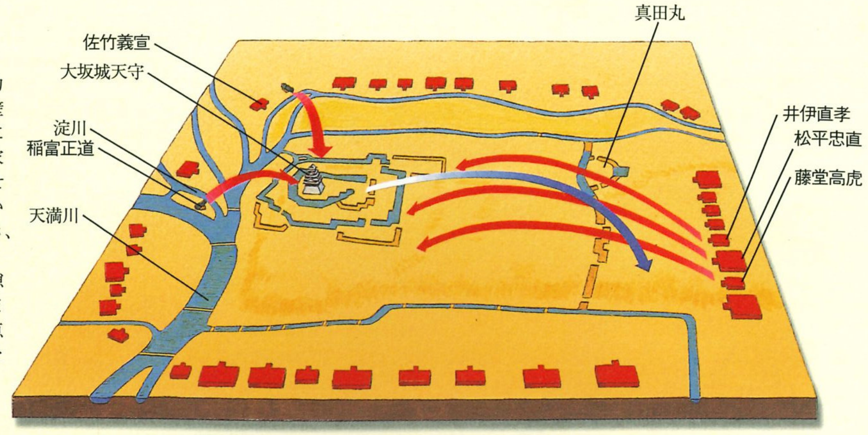
一方の豊臣方にも、佛狼機と呼ばれる大筒は存在した。しかし、これは徳川方が使用した大砲に比べて射程が短く、暴発することも多い欠陥砲であった。

大坂の陣で両軍が使用した大筒は、いわゆるカノンタイプに属する。カノン砲には砲口から弾丸を込める前装砲と後ろから装填する後装砲があったが、徳川方は前装式、豊臣方は佛狼機に代表される後装式の大筒であったようだ。

当時は前装砲の方が最新式、後装式が旧式であった。この違いが歴然たる勝敗の差となって表れたといえなくもない。強硬な主戦論を展開していた淀殿も、この大筒の威力の前には怯え、和議に応じることになったのだから。

大筒の「威力」を熟知していた家康が、大坂の陣以後、この利用技術と生産を凍結してしまったのも、うなずけるのである。

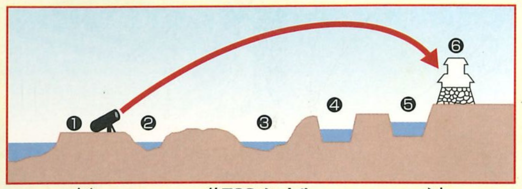
（千田嘉博・国立歴史民俗博物館考古研究部）



大筒は、本来その圧倒的破壊力を利用して、城郭都市や城の外壁を打ち崩し、突破口を開くために使われた。しかし大坂の陣での家康は、あくまでも講和を実現させるための脅迫手段として用いている。砲弾による破壊力はさておき、その発射音は凄まじいばかりで、「(京都の)朱雀辺へ聞コエ少モ隙無シ」と記録に残されている。また内通者により、砲撃の着弾地点などが確認できたことも、威力を増した原因であろう。

備前島～大坂城天守間の弾道

大筒の弾道は、空気抵抗のために完全な放物線にはならず、最高点に達したあと、強いカーブを描いて落下する。大坂の陣で使用された大筒の弾道は、図に描かれた弾道よりやや緩やかだったとも思われる。



円は芝辻砲の実寸口径(95ミリ)。ちなみに砲口部外径は327ミリ。

芝辻砲 (靖国神社遊就館蔵)

材質：鍛鉄／形式：前装火縄式／口径95ミリ

家康が堺の鉄砲鍛冶、芝辻理右衛門に命じて製造させた1貫500匁玉砲で、冬の陣で使用したとされる。口径から、使用可能の弾丸は最大90ミリ、重さ1貫100匁（約4.1キロ）ほどと推測されている。当時の一般的な火縄銃は6匁筒（弾丸重量約22.5グラム）だったことを思えば、この巨大な筒をハンマーで叩いて鍛造したこと自体、驚愕に値する。

円は佛狼機砲の実寸口径(95ミリ)。砲口部外径は264ミリ。

佛狼機(フランキ)砲 (靖国神社遊就館蔵)

材質：青銅／形式：後装式／口径95ミリ

16世紀のヨーロッパで盛んに造られた後装砲の一種。砲身上面の装飾などから、インドのゴアで鋳造されたと推定される。北九州に覇を唱えていた大友宗麟がポルトガルより入手、丹生島(臼杵)城に配備していたが、天正14年（1586）に島津義久の軍が豊後に侵入した折、奪取したと伝わる。別名を「国崩し」といい、恐らく豊臣方が使用した砲も同種であったと考えられる。

摂津

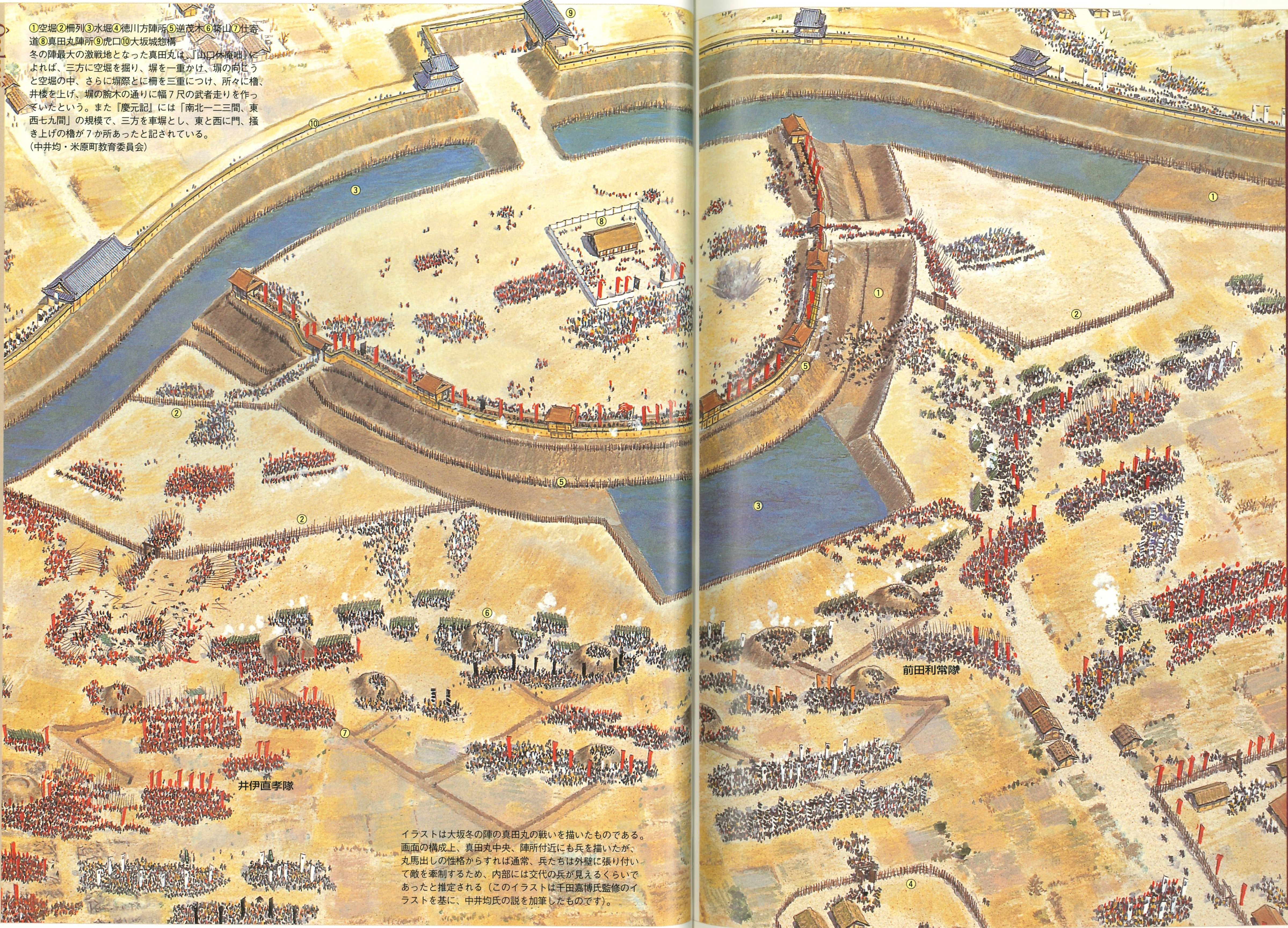
慶長十九年十一月〜十二月［1614］▽大阪府

大坂冬の陣

風雲急を告げる大坂城！戦国最大の攻城戦！

徳川家康・秀忠 ✖ 豊臣秀頼

イラスト監修・千田嘉博・中井均



①空堀②柵列③水堀④徳川方陣所⑤逆茂木⑥築山⑦仕寄道⑧真田丸陣所⑨虎口⑩大坂城惣構

冬の陣最大の激戦地となった真田丸は、『山口休庵咄』によれば、三方に空堀を掘り、塀を一重かけ、塀の向こうと空堀の中、さらに塀際とに柵を三重につけ、所々に櫓、井楼を上げ、塀の腕木の通りに幅7尺の武者走りを作っていたという。また『慶元記』には「南北一二三間、東西七九間」の規模で、三方を車塀とし、東と西に門、掻き上げの櫓が7か所あったと記されている。
（中井均・米原町教育委員会）

イラストは大坂冬の陣の真田丸の戦いを描いたものである。画面の構成上、真田丸中央、陣所付近にも兵を描いたが、丸馬出しの性格からすれば通常、兵たちは外壁に張り付いて敵を牽制するため、内部には交代の兵が見えるくらいであったと推定される（このイラストは千田嘉博氏監修のイラストを基に、中井均氏の説を加筆したものです）。

関ヶ原の戦いから三年たった慶長八年（一六〇三）、徳川家康は征夷大将軍となり、江戸に幕府を開いた。そして、そのわずか二年後、将軍職を子秀忠に譲っている。これは、「政権は徳川家が世襲する。豊臣家に戻すつもりはない」という大坂方に対する最後通牒の意味もあった。

そのまま、淀殿・秀頼母子が、徳川幕藩体制下の一大名となることを承知していれば、豊臣家そのものは存続したかもしれない。ところが、家康の提示する、秀頼の江戸参勤か淀殿の江戸への人質、または、秀頼が大坂を退去して国替に応ずるかという三つを三つとも拒否したことから、両者の戦いは必然的なものとなったのである。

直接の引き金になったのは、いわゆる方広寺鐘銘事件であった。秀吉の冥福を祈り、あわせて豊臣家の発展を祈念する目的で再建が進められた方広寺の鐘銘に対し、家康方が、「関東不吉の語がある」といって難くせをつけたのがそもそもの発端である。「国家安康」という語で家康を二つに切り、「君臣豊楽」という語は豊臣家のみが栄えると読めるというわけである。

ことここに至って大坂方も家康に対する戦いに立ち上がる決意をし、豊臣恩顧の大名や、関ヶ原の戦いで西軍に属したため、その後不遇の状態にあった浪人たちによびかけ、大坂城には、一二万とも一三万ともいう軍勢が集まった。

具体的な戦いになったのは慶長十九年（一六一四）十一月で、家康方、すなわち東軍には二〇万の大軍が動員されていた。

大坂方、すなわち西軍は、難攻不落といわれた大坂城に籠城して戦う戦法に出たが、はじめは城の外にも出て戦っていた。十一月二十六日の今福・鴫野の戦い、二十九日の野田・福島の戦いなどがそのことを物語っている。

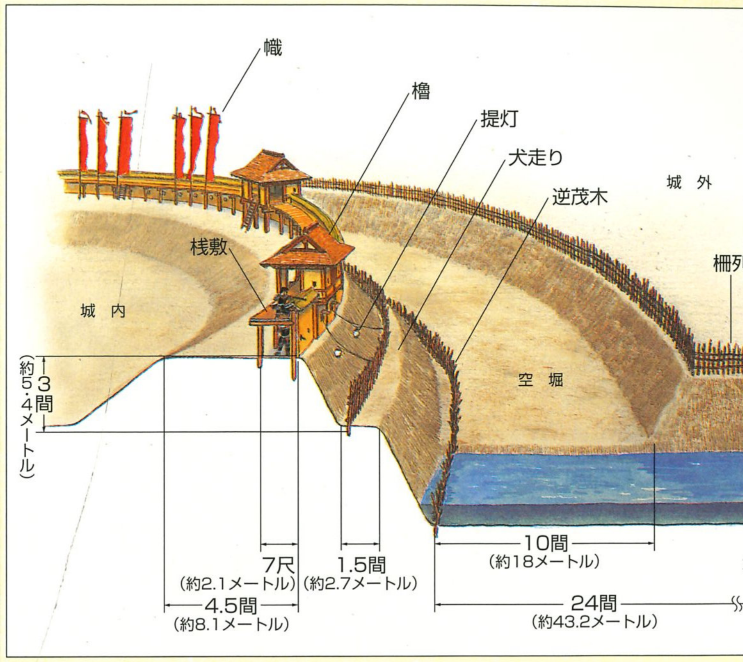
しかし、冬の陣で、何といっても特筆されるのは、真田幸村（正しくは信繁）が、大坂城の惣構のさらに外側に出っ張るように築いた真田丸を使っての戦いであろう。

真田丸の攻防戦は十二月四日にくりひろげられた。東軍の前田利常隊と松平忠直隊が真田丸の堀際まで接近し、攻めはじめたのである。このとき、幸村は、あらかじめ考えていた作戦の通り、しばらく防戦をせずに、前田隊・松平隊に攻めさせ、さらに接近し、真田丸の塀にとりかかったころあいをみて、側面から攻撃をした。そのため、前田隊・松平隊に多大な犠牲者が出て、東軍の完敗で終っている。

このころから、家康は大坂城を力攻めで落とすのはむずかしいと考えるようになり、いったん講和にもちこみ、大坂城の防御機能を奪った上でもう一度戦いをしかける作戦にきりかえている。

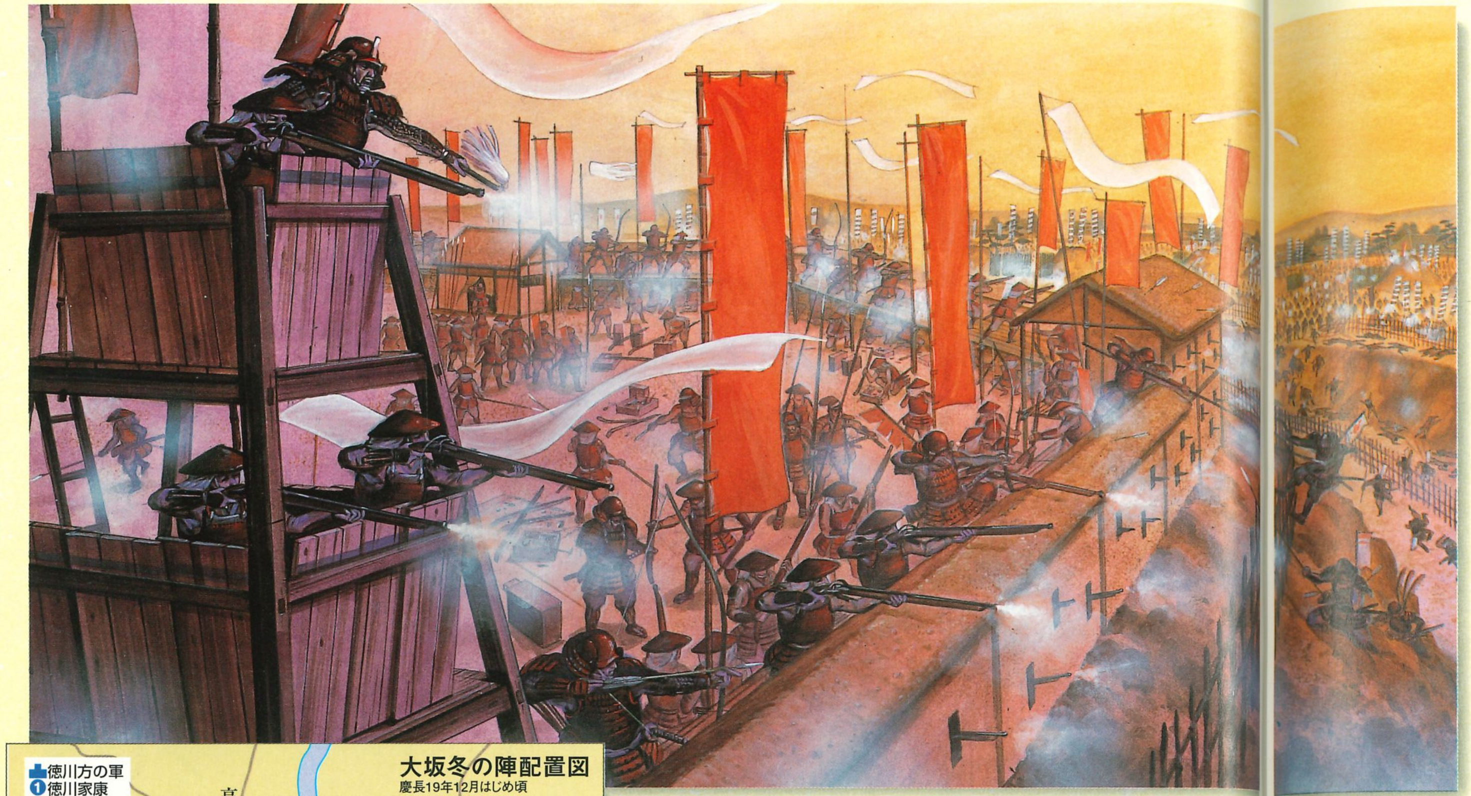
結局、十二月十九日に講和が成立し、大坂城は惣構はもちろん、三の丸、二の丸の堀が埋められ、本丸だけを残すことになったのである。翌年五月の大坂夏の陣は、難攻不落といわれた大坂城も本丸を残すだけで、そのため、戦いはわずか四日で、東軍徳川方の勝利に帰している。

（小和田哲男・静岡大学教授）

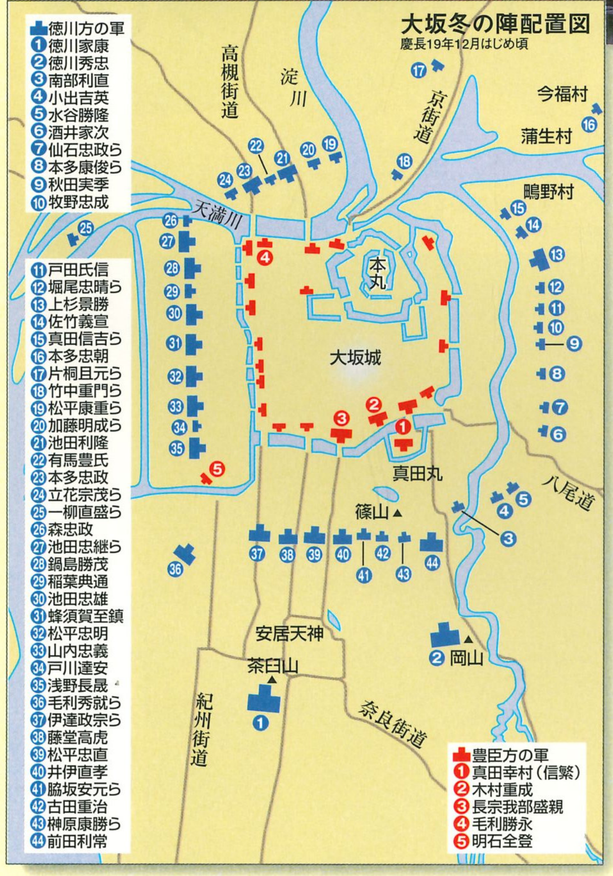


イラストは、真田丸の外辺部を中央付近で断面図化したものである。幅7尺の桟敷には外壁のみを持つ狭間塀が築かれ、城外の敵に向かって弓矢や鉄砲が射かけられた。この狭間塀は上下2段に区切られ、櫓と櫓の間を連結するようそれぞれに桟敷が設けられていた。この重層構造により、城外への射撃はいっそう効果をあげたと考えられる。堀の城内側斜面の途中に設けられたのは幅1間半の犬走りで、周囲には逆茂木が張り巡らされた。逆茂木は堀の最下部にも打ち込まれており、水堀にまで及んでいたという。最南部中央に位置する水堀は、空堀より一段低く穿たれており、その奥行は空堀の倍以上あったと推定される。なお、甲斐武田氏の影響下にあった幸村が、智嚢を絞って構築したこの真田丸の攻防には、のちに『甲陽軍鑑』を編んだ小幡景憲が東軍として参加している。彼が甲州流軍学の始祖となることを考えれば、この因縁は実に興味深い。（中井均・米原町教育委員会）

◀大坂城。冬の陣では惣構及び南の真田丸によって、難攻不落ぶりを遺憾なく発揮した（写真は昭和期）。



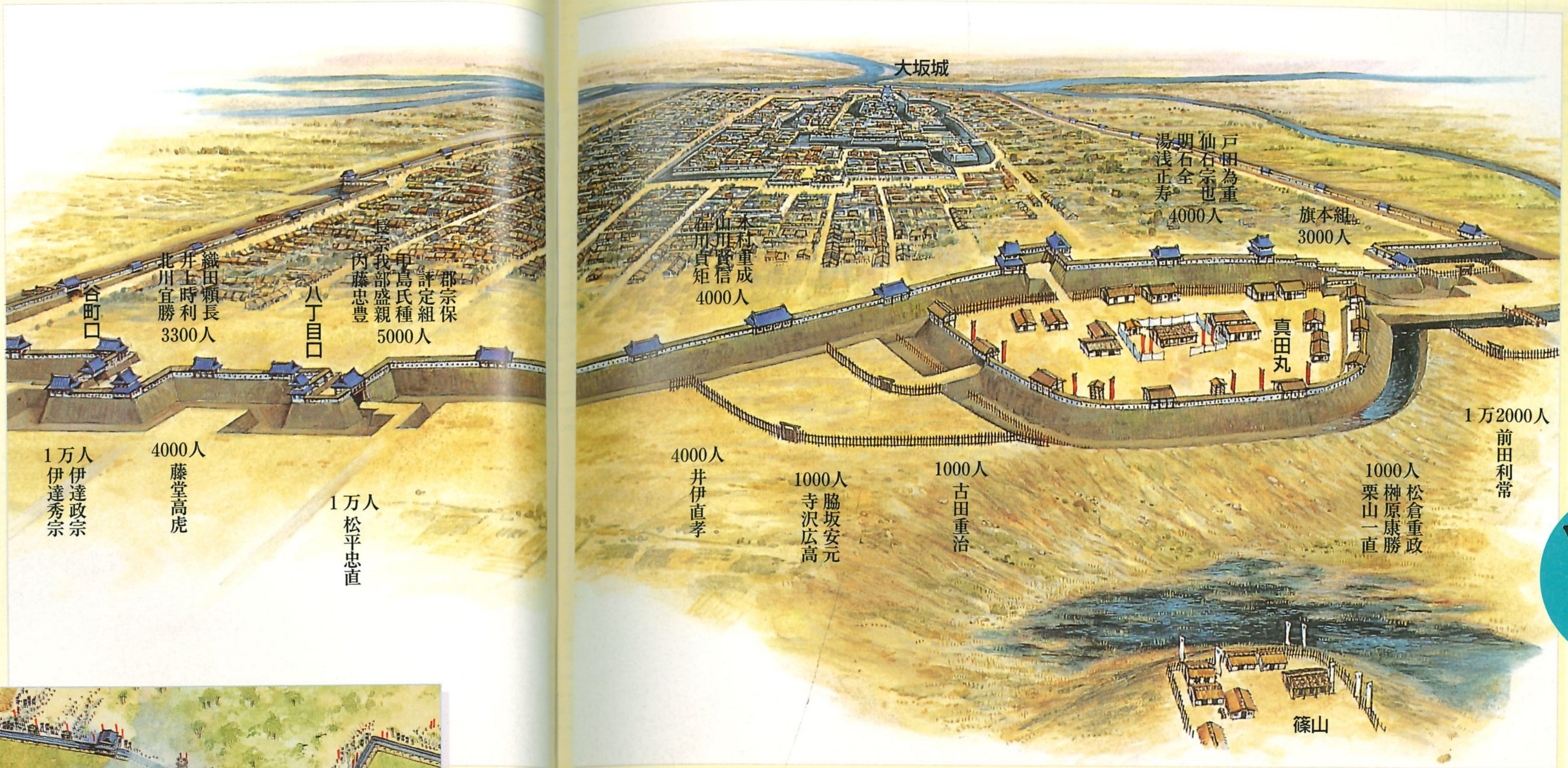
▲真田丸内部。前面に穿たれた空堀・水堀の奥行きは、恐らく鉄砲の有効射程が考慮されているはずのものであり、攻囲軍は容易に城域へ踏み入ることができなかった。



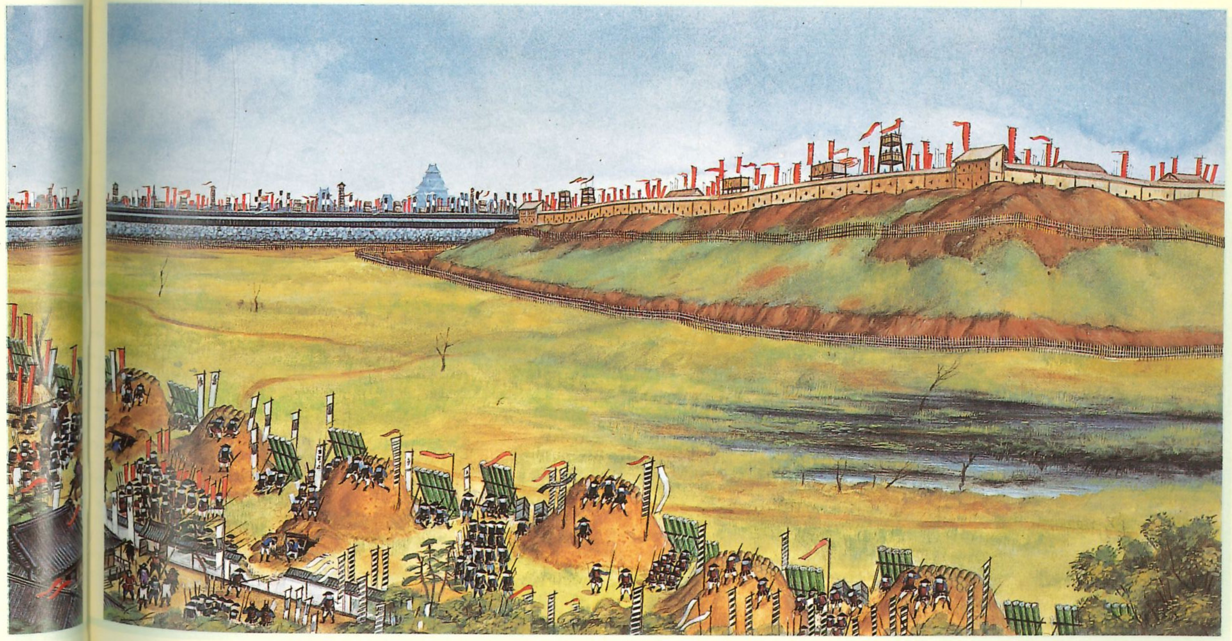
真田丸

徳川方諸将を苦しめた堅牢出丸の諸相

←大坂城南の上方から見た真田丸。前面の段差を強調する形で描いたもので、惣構えの形状については近年の地形実測調査を参考にして、堀を屈曲させているのが特徴である。



↓上のイラストと同方向からのもので、徳川方攻囲軍の目線を意識して、あえて構造物が見えない下方から真田丸と惣構えを描いてある。冬の陣の際、上杉景勝の近習が非番の日に前線を見物にきたところ、運悪く景勝が1人で巡見にきてしまい、見つかることを恐れた近習が竹束の外に身を隠した、という話が伝わるが、攻囲軍の前線はこのようなものだった。

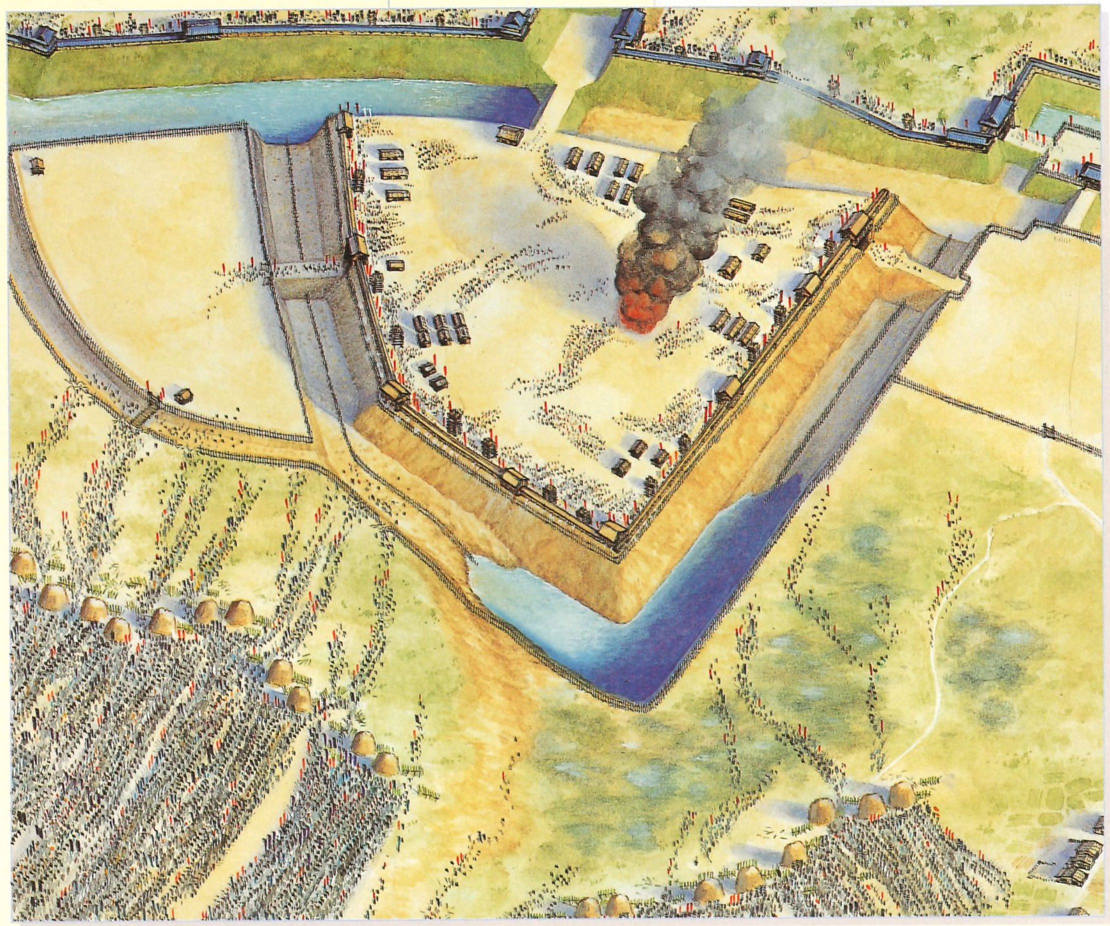


大坂冬の陣において最も光彩（こうさい）を放ったのは、真田幸村（ゆきむら）（信繁（のぶしげ））の築いた真田丸であろう。圧倒的な兵力を誇った徳川勢をさんざんに苦しめた出丸（でまる）。だが、その詳細は不明な部分も多い。

主な史料としては「大坂冬の陣図屏風（びょうぶ）」（東京国立博物館蔵）や「大坂真田出丸加賀（かが）衆挿（はい）ル様子図」（熊本大学附属図書館永青文庫蔵）、あるいは『僊台武鑑（せんだいぶかん）』所収の「大坂冬の陣配置図」などがある。だが、そもそもの外郭ラインですら、諸史料によって異なっている。

果たして、真田丸の実像はどのようなものだったのか。ここでは、イラスト化するにあたっての解釈も併せて記し、比較してみた。

↓下は『僊台武鑑』所収の「大坂冬の陣配置図」などをもとに再現したイラストで、特に外郭ラインは、同史料に描かれた形に沿って描いたものである。「大坂真田丸加賀衆挿ル様子図」に描かれた形状は丸馬出しだが、実際はどうだったのであろう。また、南前面の水部は「大坂冬の陣配置図」の「水あり」との記述を、雨水あるいは地下水の影響によるものと解釈して描いてある。その形状がいずれであったにせよ、真田丸が巨大な馬出しであったことは間違いなく、この出丸が徳川方に痛撃を与え続けたこともまた事実である。



大坂夏の陣

慶長二十年四月 [1615]▷大阪府

豊臣家滅亡！最大最後の戦国合戦!!

徳川家康・秀忠 × 豊臣秀頼

冬の陣の講和後、堀を埋められた大坂城は、もはや籠もるべき城ではなくなっていた。慶長二十年（一六一五）四月二十二日に始まった大坂夏の陣の段階では、豊臣方にとっての選択肢は、城外出撃しか残されていなかった。それでも微かな勝機を見出すため、真田幸村をはじめとする諸将は、迎撃予定地を、奈良街道を進軍する徳川方軍勢の出口、道明寺付近と定めた。

五月六日未明、迎撃軍先鋒は道明寺の半里ほど先にある国分村の隘路にて徳川勢をくい止めるべく、大坂城を出撃した。だが、垂れ込める濃霧で諸隊の進軍は大幅な齟齬を来す。先鋒隊二八〇〇を率いる後藤又兵衛が予定地点に到着したとき、眼前に広がっていたのは、国分村を埋め尽くす徳川方の大軍だった。

又兵衛は死を覚悟した。国分村手前の小松山に拠り、後続部隊未着のまま戦闘を開始したこの先鋒隊将兵にとって、すでに生への執着はない。文字通りの死闘を繰り広げた末、数に勝る徳川方に飲み込まれて又兵衛は討ち死にした。

この後、遅れて到着した三〇〇〇の幸村隊などの奮戦もあったが、誉田陵方向から進出した伊達勢や、中央から突出する松平忠明隊により、ついに西軍はこの地からの撤退を余儀なくされた（イラスト参照）。

この日、豊臣方の主だった武将のうち、木村重成、長宗我部盛親が八尾・若江で戦死した。豊臣方の敗勢は、もはや誰の目にも明らかだった。

だが、一人真田幸村のみは三〇〇〇の兵をもって伊達政宗率いる一万余の大軍を一蹴し、辛うじて全軍崩壊の危機を救った。この劣勢の中、翌五月七日の天王寺口での戦闘において、幸村は毛利勝永とともに徳川方に痛撃をあびせ、一時は家康本陣を大恐慌に陥らせてもいる。

だが、彼我の兵力差は懸絶しすぎていた。無尽蔵ともいえる徳川勢の兵力の前に、幸村の兵は疲労困憊し、茶臼山の陣を放棄してその背後の安居天神に退却した。幸村は、そこで討たれた。

徳川に与した細川忠興は、敵ながら武人としての幸村の奮戦を讃え、『細川家記』に記している。

「真田左衛門佐、合戦場に於て討死。古今これなき大手柄」

続々と敗報が伝わる中、夕刻、大坂城二の丸から火の手が上がり、大坂城は落城した。

摂津

元和六年［1620］▶大阪府

徳川大坂城工事着工

豊臣家の残影を払拭し幕府の威光を誇示

大坂落城の翌日(五月八日)、秀頼と淀殿母子は城内の山里曲輪で自害した。ここに、豊臣の時代は名実ともに終わりを告げた。その後は松平忠明が城を預かって戦後処理に当たった。

元和六年(一六二〇)から徳川幕府は、西国の諸大名に命じて大坂城を改築復旧させたが、工事は寛永七年(一六三〇)まで、あしかけ十年余の歳月を費やしただけあって、規模大きく、これまでにない偉容を整えることができた。

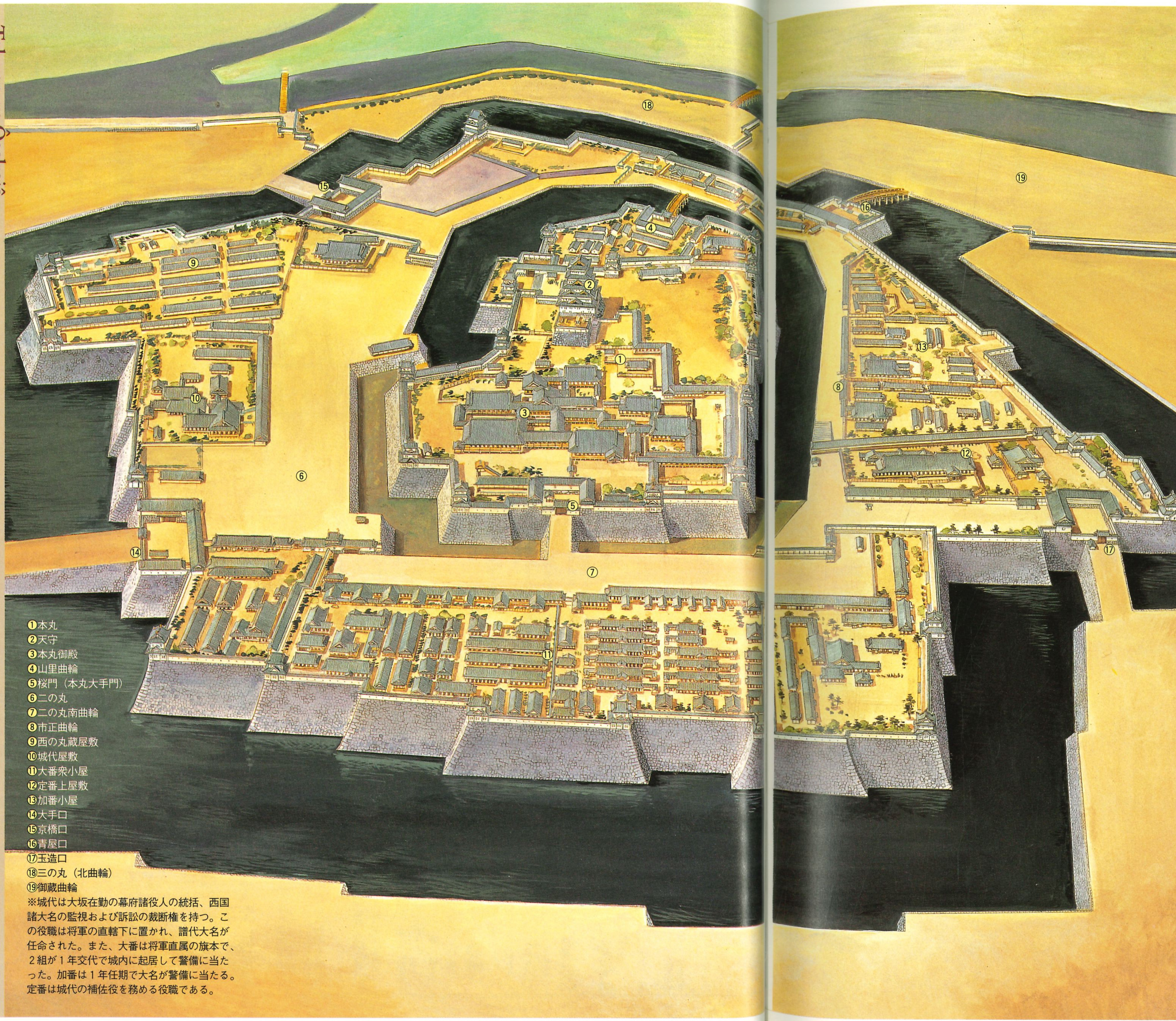
『高山公実録』に「大坂の故墟を改められ、池の深さ、石垣の高さ、旧時に増し……」と、秀吉築造のものを埋めて、その上に盛り土させてまで、旧に倍するほど縄張を全面的に改めたのである。

大坂夏の陣が止んでから一五年が経過した。上町台地上にそびえ立つ新たな形式の天守、それは群雄が覇権を夢みた時代が、もはや過去となりおおせたことを如実に示すものだった。

すなわち本丸には五重天守を中心に三重櫓一一棟、山里曲輪に二重櫓二棟を建てて、これらの周囲を長い多聞櫓が連続して取り巻き、壮大な本丸御殿が営まれた。二の丸には伏見三重櫓および二重櫓計一三棟を配備し、大手門、京橋門、玉造門、青屋門をそれぞれ枡形に囲って厳めしく構えた。そればかりか、石垣は巨石も含めて高く堅固に積まれ、二重に巡る水堀も幅広く深いものとなっている。

当時の土木・建築技術や美術工芸など最高水準の粋を集めて築造したもので、ひとえに幕府の威光を誇示するために存在した。

(松岡利郎・大阪府立堺聾学校教諭)



①本丸
②天守
③本丸御殿
④山里曲輪
⑤桜門（本丸大手門）
⑥二の丸
⑦二の丸南曲輪
⑧市正曲輪
⑨西の丸蔵屋敷
⑩城代屋敷
⑪大番衆小屋
⑫定番上屋敷
⑬加番小屋
⑭大手口
⑮京橋口
⑯青屋口
⑰玉造口
⑱三の丸（北曲輪）
⑲御蔵曲輪

※城代は大坂在勤の幕府諸役人の統括、西国諸大名の監視および訴訟の裁断権を持つ。この役職は将軍の直轄下に置かれ、譜代大名が任命された。また、大番は将軍直属の旗本で、２組が１年交代で城内に起居して警備に当たった。加番は１年任期で大名が警備に当たる。定番は城代の補佐役を務める役職である。

年表

西暦	年号・月	記事
1491	延徳3	北条早雲、足利茶々丸を伊豆堀越に攻めて自殺させる。
1492	明応元年	（7・19改元）
1494	3・10	扇ヶ谷上杉定正、武蔵高見で山内上杉顕定と対陣、陣中で病に倒れる。
1495	4	北条早雲、相模小田原城を襲い、奪う。
1496	5・5	日野富子没。
1497	6・3	大内義興、肥前に進攻。少弐氏の属城朝日城を攻略、次いで勢福寺城を囲む。
	6・9	蓮如、大坂本願寺を創建。
1501	文亀元年	（2・29改元）
1504	永正元年	（2・30改元）
	元・9	扇ヶ谷上杉朝良、今川氏親・北条早雲らの助けを得、山内上杉顕定を武蔵に破る。
1505	元・9	守護細川家で内乱起こる。
	2・4	山内上杉顕定、扇ヶ谷上杉朝良を河越城に囲む。朝良、敗れて江戸に隠居する。
1506	3・6	越前守護朝倉貞景・教景、一向衆門徒と九頭竜川にて戦い、これを破る。
	3・9	越後守護代長尾能景、一向衆門徒と越中般若野に戦い、敗死する。
1507	4・8	上杉房能、長尾為景に敗死。
1510	7・6	上杉顕定、長尾為景に敗れ、死す。
1512	9・8	北条早雲、相模岡崎城に三浦義同を襲い、敗走させる。
1513	10・6	蝦夷の軍兵、蛎崎光広の松前大館城攻略。
	10・8	上杉朝興の部将太田資康、相模三浦にて北条早雲と戦い、敗死する。
1516	13・7	北条早雲、三浦義同・義意父子を相模新井城に攻め殺す。三浦氏滅亡。
1517	永正14・2	大隅吉田位清、守護島津忠隆に背くも、忠隆に敗れる。
	14・3	甲斐の武田信虎の兵、今川氏親領の勝山城を落とす。
	14・8	駿河守護今川氏親、尾張守護斯波義達と争い、これを破る。
	14・10	毛利元就、武田元繁と戦い、破る。
1519	16・12	大内義興、石見・安芸で尼子経久と交戦。
1520	17・6	陸奥伊達稙宗と芦名盛滋、出羽最上義守を攻める。
	17・7	日向伊東尹祐、北郷忠相を都城に攻める。
	17・8	大隅肝付兼興、島津忠朝の部将平山近久を串良城に攻めるも、撃退される。
	17・10	浦上村宗、宇喜多能家と協同し、美作岩屋城を救援、赤松党の小寺則元を討つ。
	17・12	長尾為景、越中新庄城攻落。神保慶宗らを斬る。
1521	大永元年	（8・23改元）
	元・8	関東管領上杉憲房、上杉朝興を破る。
	元・8	島津忠朝、肝付兼興の属城大隅鹿屋城を攻める。
1522	2・2	大内義興、安芸で尼子経久属城を攻める。
	2・7	近江六角定頼、蒲生秀紀を日野城に攻め、これを逐う。
1523	3・3	阿蘇惟豊、菊池武包の小代山城を攻める。
	3・8	肝付兼興、新納忠勝と図って、島津忠朝を日向櫛間城に包囲する。
1524	4・1	江戸合戦。北条氏綱、上杉朝興を破って江戸城を攻め取る。
	4・5	龍造寺家兼、大内義興と通じた肥前千葉胤勝を攻め、これを破る。
1524	大永4・8	毛利元就、大内義隆の陣を襲い、破る。
1525	5・1	北条氏綱、上杉朝興の部将太田資頼と武蔵岩槻城で戦い、これを逐う。
	5・7	近江六角定頼、浅井亮政の小谷城を攻撃。
	5・8	大内義興の部将陶興房、尼子経久配下の兵と安芸志荘に戦う。
1526	6・7	大内義興及び大友義鑑の兵、尼子経久軍と安芸府中で戦う。
	6・7	武田信虎軍、北条氏綱軍と駿河梨木平で戦い、これを撃破する。
	6・12	下野宇都宮忠綱、下野結城政朝と戦い、宇都宮城を奪う。
	6・12	三好政長、堺で将軍足利義晴の兵と戦う。
1527	7・9	三好元長、伊丹元扶を伊丹城に攻める。
1528	享禄元年	（8・20改元）
	元・9	武田信虎、信濃諏訪頼満と境川で戦う。
1530	3・7	毛利元就、尼子経久と安芸山県に戦う。
	3・8	大内義隆の将杉興連の肥前侵入に対し、少弐資元の将龍造寺胤久が田手畷で破る。
1532	天文元年	（7・29改元）
1533	2・11	陶興房、筑前秋月で大友義鑑軍に敗れる。
1534	3・4	安房里見義堯、北条氏綱より援兵を受けて一族の里見義豊と戦い、自刃させる。
	3・7	勢場ヶ原の戦い。大友義鑑、豊後に侵入してきた大内義隆の軍と争う。
	3	龍造寺家兼・家門父子、大内義隆将陶興房を肥前三津山に急襲、興房敗走。
	3・12	尼子経久の子塩冶興久、経久に敗れ、備後に逃れる。
1535	4・3	毛利元就、備後多賀山城を攻め、これを奪う。

西暦	年号・月	記事
1535	天文4・7	北条氏綱、今川氏輝の要請に応え、対武田信虎戦を支援し、信虎を破る。
	4・12	三河松平清康、織田信秀との交戦中、家臣に尾張森山にて殺される。
1536	5・12	武田信虎・晴信父子、平賀成瀬を攻め、信濃海野口城を奪う。
1538	7・10	第一次国府台合戦。北条氏綱・氏康、足利義明・里見義堯を下総国府台に破る。
1539	8・7	北条氏綱、駿河領内に侵入して今川義元を破る。
1540	9・6	織田信秀、三河安祥城を奪取。松平長家ら将兵戦死。
1541	10・6	武田信玄、韮崎に小笠原長時・諏訪頼重を破る。
1542	11・7	武田信玄、信濃上原・桑原両城を落とし、諏訪氏を滅ぼす。
	11・8	織田信秀、三河小豆坂にて今川義元と戦い、これを破る。
	11・10	村上義清と小笠原長時、信濃大門峠で武田信玄に敗れる。
1544	13	織田信秀、美濃稲葉城に斎藤利政を攻めるも、朝倉教景の援兵に阻止される。
1546	15・4	河越の戦い。足利晴氏・上杉憲政・同朝定、武蔵河越城を囲むも、北条氏康に敗れる。
1548	17・2	伊達晴宗、相馬顕胤を陸奥中村に破る。
1553	22・8	武田信玄、村上義清を越後へ逐う。
	22・8	第一回川中島の戦い。
1554	23・5	信長、清須城に進出。
1555	24・10	厳島の戦い。毛利元就、陶晴賢を安芸厳島に破り、晴賢を自害せしめる。
1555	弘治元年	（10・23改元）
1556	2・3	毛利元就と吉川元春、尼子晴久を石見銀山に破る。
	2・4	斎藤道三、美濃長良川畔で子義龍に敗死する。
1557	弘治3・4	毛利元就、大内義長を討ち、防長二州を平定する。
	3・8	第三回川中島の戦い。上杉謙信、武田信玄と信濃上野原に戦う。
1558	永禄元年	（2・28改元）
1560	3・5	桶狭間の戦い。信長、今川義元を尾張で討つ。
1561	4・3	上杉謙信、北条氏康を小田原城に攻めるもかなわず、兵を退く。
	4・9	第四回川中島合戦。上杉謙信、信濃八幡原で武田信玄と戦う。
	4・9	龍造寺隆信、神代勝利を肥前川上に破る。
	4・10	大友宗麟、毛利方の門司城を攻める。
1563	6・1	長宗我部元親、本山茂辰を土佐朝倉城に攻める。
	6・6	龍造寺隆信、有馬晴純を破る。
	6・10	毛利元就、尼子領の出雲白鹿城を攻略。
1564	7・4	毛利元就、出雲洗骸より富田城を包囲。
1565	8・5	三好三人衆と松永久秀、将軍足利義輝を弑殺する。
1566	9・11	毛利元就、尼子義久の富田城を攻落する。
1567	10・7	大友宗麟の将戸次鑑連、高橋鑑種の筑前岩屋城を攻め落とす。
1568	11・7	大友宗麟、立花鑑載を攻め、殺す。
	11・8	毛利元就、大友宗麟と豊前海上に争う。
	11・12	長宗我部元親、本山将監の瓜生野城を攻落する。
1569	12・5	島津義久、菱刈隆秋・相良義陽と戦い、これらを破る。
	12・7	尼子勝久、毛利領の月山富田城を襲う。
	12・8	長宗我部元親、安芸国虎を安芸城で破り、自刃させる。
	12・10	三増峠の戦い。武田信玄、相模三増峠で北条氏邦・氏照らを破る。
	12・11	大友宗麟、高橋鑑種の筑前宝満山城攻略。
1570	永禄13・2	毛利輝元、尼子勝久の部将山中幸盛を出雲布部に破る。
	13・3	今山合戦。大友宗麟、肥前進入、龍造寺隆信と戦う。
1570	元亀元年	（4・23改元）
	元・4	信長、越前手筒山を攻めて落とすも、浅井長政の離反を察知、撤退する。
	元・6	信長・家康、浅井長政・朝倉景健と近江姉川に戦い、これを破る。
1571	2・4	武田信玄、三河吉田城を攻め家康軍と二連木に戦う。
	2・9	信長、比叡山延暦寺を焼き討ちする。
1572	3・12	家康、武田信玄と遠江三方ヶ原に戦い、大敗する。
1573	天正元年	（7・28改元）
	元・7	信長、足利義昭を山城槙島城に降す。
	元・8	信長、越前一乗谷を攻め、朝倉義景を自刃させる。
	元・9	浅井久政・長政父子を近江小谷城に攻囲し、浅井父子自刃。
	元・9	家康、三河長篠城を陥れる。
	元・11	信長、三好義継を河内若江城に攻め殺す。
	元・12	松永久秀、大和多聞山城で信長軍を迎撃つも降伏。
1574	2・5	武田勝頼、徳川領高天神城を落とす。
	2・7	信長、伊勢長島一向一揆鎮圧に出陣。
1575	3・4	信長、三好康長を河内高島城に攻め殺す。
	3・5	織田・徳川連合軍、三河長篠で武田勝頼を破る。
	3・8	信長、越前一向一揆を攻める。
	3・11	織田信忠、武田家重臣秋山信友を美濃岩村城に囲み、殺す。
1576	4・4	信長、摂津大坂本願寺を攻撃。
	4・5	信長軍、一向衆門徒と摂津野田・福島で戦う。

年表

西暦	年号・月	記事
1576	天正4・4	信長、摂津大坂本願寺を囲む。
	4・7	第一次木津川合戦。織田水軍、摂津木津川口で毛利水軍に敗れる。
1577	5・2	信長、紀伊根来・雑賀一向衆門徒を討つ。
	5・8	武田勝頼、遠江横須賀に出陣。家康・信康父子、これを退ける。
	5・9	手取川の戦い。上杉軍、織田軍を破る。
	5・10	織田信忠、大和信貴山城を攻める。松永久秀自害。
1578	6・3	家康の軍、武田領の遠江小山城を攻める。
	6・6	信長、九鬼義隆に鉄船を造らしめ、紀伊雑賀の水軍を雑賀浦で撃破する。
	6・7	織田信忠、羽柴秀吉らを率い、播磨神吉城を攻めて落とす。
	6・7	毛利軍、尼子勝久の上月城攻落。尼子滅亡。
	6・11	第二次木津川合戦。織田水軍と九鬼義隆、摂津木津川口に毛利水軍と戦い、これを破る。
	6・11	荒木村重、信長に背き、有岡城攻め。
	6・11	高城川(耳川)合戦。島津義久、大友軍を日向高城にて破る。
1579	7・7	秀吉、別所領内の摂津丹生山城を攻落。
	7・8	明智光秀、丹波宇津城・鬼城を落とす。
	7・8	明智光秀、丹波黒井城を攻め、赤井直照を降す。
1580	8・1	秀吉、播磨三木城攻略。別所長治自殺。
1581	9・3	家康、武田領高天神城を奪取。
	9・9	織田信雄、伊賀を平定。
	9・10	秀吉、因幡鳥取城を包囲。吉川経家自刃。
1582	10・3	秀吉、淡路を平定する。
1582	天正10・3	信長と家康の軍、甲斐に侵攻。勝頼、天目山にて自害し、武田家滅ぶ。
	10・5	秀吉、清水宗治を備中高松城に包囲。
	10・6	本能寺の変。信長と信忠、京に滞在中、明智光秀に殺される。
	10・6	山崎の戦い。秀吉、山城国山崎で明智光秀を破る。
	10・6	清洲会議。秀吉が事実上の信長後継者となり、畿内を手中にする。
	10・8	中富川の戦い。長宗我部元親、阿波勝瑞城に三好存保を破る。元親、阿波制圧。
1583	11	春、秀吉、伊勢亀山城を攻め、敵対する滝川一益を降す。一益は西国へ逃亡。
	11・4	賤ヶ岳の戦い。秀吉、近江賤ヶ岳で柴田勝家を破り、北ノ庄で自刃せしめる。
1584	12・3	沖田畷の戦い。龍造寺隆信、肥前島原で島津軍と戦い、敗死する。
	12・4	小牧・長久手の戦い。秀吉、尾張小牧山を中心に、織田信雄・徳川家康と対峙。
	12・6	長宗我部元親、讃岐十河城を攻落、三好氏を讃岐より追って讃岐を制圧。
1585	13・3	秀吉、和泉を攻略、紀伊の根来・雑賀衆を降す。
	13・7	四国遠征。秀吉、長宗我部元親を降す。元親、土佐一国を安堵される。
	13・8	佐々成政、秀吉に降る。
	13・閏8	第一次上田合戦。真田昌幸、徳川軍を破る。
	13・11	人取橋の戦い。伊達政宗、佐竹・芦名氏らの連合軍と戦う。
1586	14・7	島津軍、筑前岩屋城を攻め落とす。高橋紹運戦死。
1586	天正14・10	丹生島城攻防戦。大友軍、島津軍を丹生島城で退ける。
1587	15・5	秀吉、九州派兵。島津義久を降す。
1589	17・6	摺上原の戦い。伊達政宗、芦名氏を討つ。
1590	18・7	秀吉、北条氏を小田原に包囲。氏直は高野山蟄居、氏政・氏照は自刃。
1592	20・2	秀吉、諸将に朝鮮出兵を命ず。(文禄の役)
1592	文禄元年	(12・8改元)
1593	2・4	朝鮮侵攻の件、和議なる。
1596	5・9	再び諸将に朝鮮出兵を命ず。(慶長の役)
1596	慶長元年	(10・27改元)
1598	3・8	秀吉死没(63)。
1600	5・6	家康、会津上杉景勝討伐を号す。
	5・7	白石城攻略。伊達政宗、甘糟虎氏を破り、旧領を回復。
	5・7	石田三成ら西軍挙兵。
	5・9	第二次上田合戦。真田昌幸・幸村父子、上田城に徳川秀忠軍を釘付けにする。
	5・9	関ヶ原の戦い。東軍勝利。三成ら梟首。
		長谷堂の戦い。直江兼続、最上領長谷堂城で最上・伊達軍と対峙する。
1614	19・11	大坂冬の陣。
	19・12	豊臣と徳川、和議なる。
1615	20・4	大坂夏の陣。5月大坂落城。秀頼・淀殿自刃。豊臣家滅ぶ。
1615	元和元年	(7・13改元)
1616	2・4	徳川家康死没(75)。

参考:『戦国合戦年表』(二木謙一著・新人物往来社)
『角川日本史辞典』(角川書店)
『標準日本史年表』(吉川弘文館)
『織田信長家臣人名辞典』(谷口克広著・吉川弘文館)
『戦略戦術兵器事典②日本戦国編』(小社刊)
『歴史群像シリーズ』各刊(小社刊)ほか

執筆者・監修者・編集協力・イラストレーター

青木豊明(福井県立一乗谷朝倉氏史跡資料館館長)
秋田裕毅(郷土史家)
跡部 信(大阪城天守閣学芸員)
伊澤昭二(歴史研究家)
石井謙治(日本海事史学会会長)
大山 格(歴史研究家)
岡澤由往(長野市史編纂委員)
小野正敏(国立歴史民族博物館教授)
小長谷正治(伊丹市教育委員会)
小和田哲男(静岡大学教授)
兼康保明(滋賀県民俗学会理事)
桐野作人(作家)
菊田 徹(臼杵市教育委員会社会教育課文化係主査)
北川 央(大阪城天守閣主任学芸員)
工藤章興(作家)
小泉 功(川越市文化財保護審議委員会会長)
下村 效(元国学院大学栃木短期大学教授)
下山治久(歴史家)
鈴木眞哉(歴史研究家)
千田嘉博(国立歴史民族博物館考古研究部)

善端 直(七尾市教育委員会)
高橋延年(三河城郭史談会会長)
高橋康夫(京都大学教授)
谷口克広(港南中学教諭)
辻林 浩(和歌山県教育庁文化財課)
中井 均(米原市教育委員会)
中田正光(城郭研究家)
中村達夫(歴史家)
仁木 宏(大阪市立大学助教授)
広谷喜重郎(土佐史研究家)
本田 昇(鳴門市教育委員会)
誉田慶信(岩手県立大学盛岡短期大学助教授)
松岡利郎(大阪府立堺聾学校教諭)
水澤幸一(新潟県中条町教育委員会)
宮上茂隆(元建築史家/建築家)
森 俊男(筑波大学体育科学系助教授)
森本 繁(作家)
矢野東鐵雄(山香町文化財調査委員長)
吉田 豊(堺市博物館学芸員)

上田市立博物館
川越市教育委員会
佐賀県教育委員会
佐賀県立名護屋城博物館
碧水社
七尾市教育委員会
*
安久津和巳
板垣真誠
伊藤展安
大川 明
大塚洋一郎
香川元太郎
谷井健三
竹林舎建築研究所
藤井康文

歴史群像シリーズ特別編集
決定版　図説・戦国合戦集

２００１年６月１日第１刷発行
２００８年２月１日第５刷発行
発行人／大沢広彰
編集長／太丸伸章
印刷所／大日本印刷株式会社
発行所／株式会社　学習研究社
〒１４５-８５０２　東京都大田区上池台４-40-５
表紙・本文装丁／田中広子
編集協力／菊地のぶお

この本に関するお問い合わせは
次のところへお願いいたします。
文書／〒１４６-８５０２　東京都大田区仲池上１-17-15
学研第２ビル　お客様センター
「歴史群像シリーズ特別編集　図説・戦国合戦集」係
電話／記事内容については、
編集部直通０３-５４４７-２３１６
ご注文・不良品についてのお問い合わせは、
雑誌販売室０３-５４９６-０６３７
その他のお問い合わせは、
お客様センター０３-３７２６-８１２４

歴史群像ホームページhttp://www.gakken.co.jp/rekigun/index.html

©ＧＡＫＫＥＮ　禁・無断転載